

生誕一五〇年記念図録

橋本景岳先生の生涯

保存



生誕一五〇年記念特別展

# 橋本景岳先生の生涯

福井市立郷土歴史博物館編

御恵の露を仰きていやましに涙こぼる、死出の旅人

松平春嶽公作、橋本景岳先生を悼む歌（万延元年九月四日）

こまつるき三十年を過ぎし面影を目の前に見るここ地こそすれ

松平春嶽公作、橋本景岳先生を偲ぶ歌（明治二十二年十一月）

目次

凡 例 ..... 5  
解 説 ..... 7

一、少年時代 ..... 137  
二、大阪遊学時代 ..... 143  
三、在藩医師時代・江戸遊学時代 ..... 148  
四、明道館時代 ..... 156  
五、国事奔走時代 ..... 160  
六、幽囚時代及び最期 ..... 175

講演録

橋本景岳先生の生涯 ..... 185  
皇学館大学助教授 伴 五十嗣郎氏

橋本景岳先生の思想と識見

皇学館大学教授 荒川久寿男氏 ..... 190  
啓 発 録 ..... 201



## 凡 例

一、本図録は、二十六歳で安政の大獄に惜しき生涯を終えた、幕末の先覚橋本景岳先生の生誕一五〇年を記念し、その遥かに時代を超えた人物・学問・識見を紹介するため、先生の遺品・遺墨を中心とする関係資料の中から、一三四件二二三点を選り編集したものである。

一、収録資料は、景岳先生の生涯を「少年時代」「大阪遊学時代」「在藩医師時代・江戸遊学時代」「明道館時代」「国事奔走時代」「幽囚時代及び最期」の六期に分類し、解説してある。図版の部分には、いちいちその六期の項目を標記していないが、この分類の順に掲載してある。

一、解説の部分には、右六期の分類それぞれのはじめに、各期の略伝と年表を付載してある。

一、収載資料名に付した番号は、図版・解説に共通している。図版を鑑賞しながら、同一番号の解説を併読していただければ幸いである。

一、巻末には、昭和五十九年十月七日、景岳先生墓前祭の日、橋本左内先生奉賛会の主宰で、先生の御墓所近く福井市勤労青少年ホーム講堂に於て開催された「橋本景岳先生生誕一五〇年記念講演会」（講師 皇学館大学教授 荒川久寿男氏・皇学館大学助教 伴 五十嗣郎氏）の講演筆記録と、景岳先生の代表的遺稿『啓発録』の全文を収めた。

一、巻頭の松平春嶽公の弔歌二首は、本書に収録した二件の資料「<sup>⑧②</sup>松平春嶽書状 万延元年九月四日付 松平茂昭宛・<sup>⑧③</sup>松平春嶽、鴻雪爪筆 景岳祭文」より引用したものである。

（表紙の波濤模様は、景岳先生が松平春嶽公から拝領した、<sup>⑧④</sup>躍鯉模様蒔絵硯箱よりとったものである。）



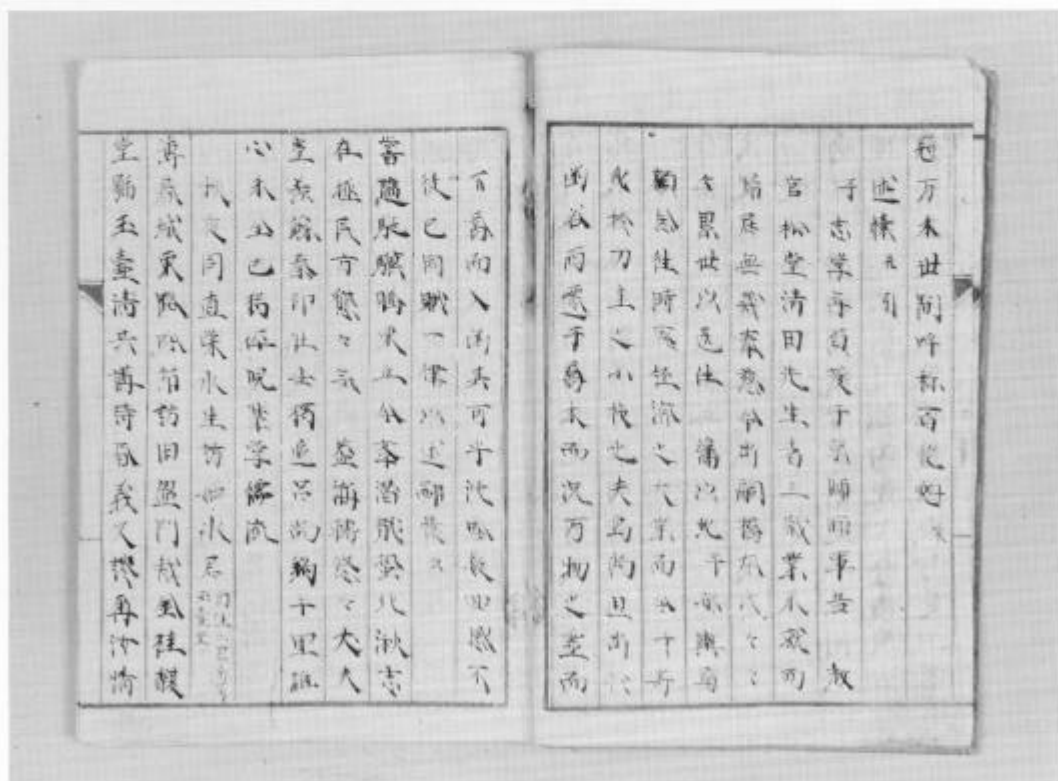
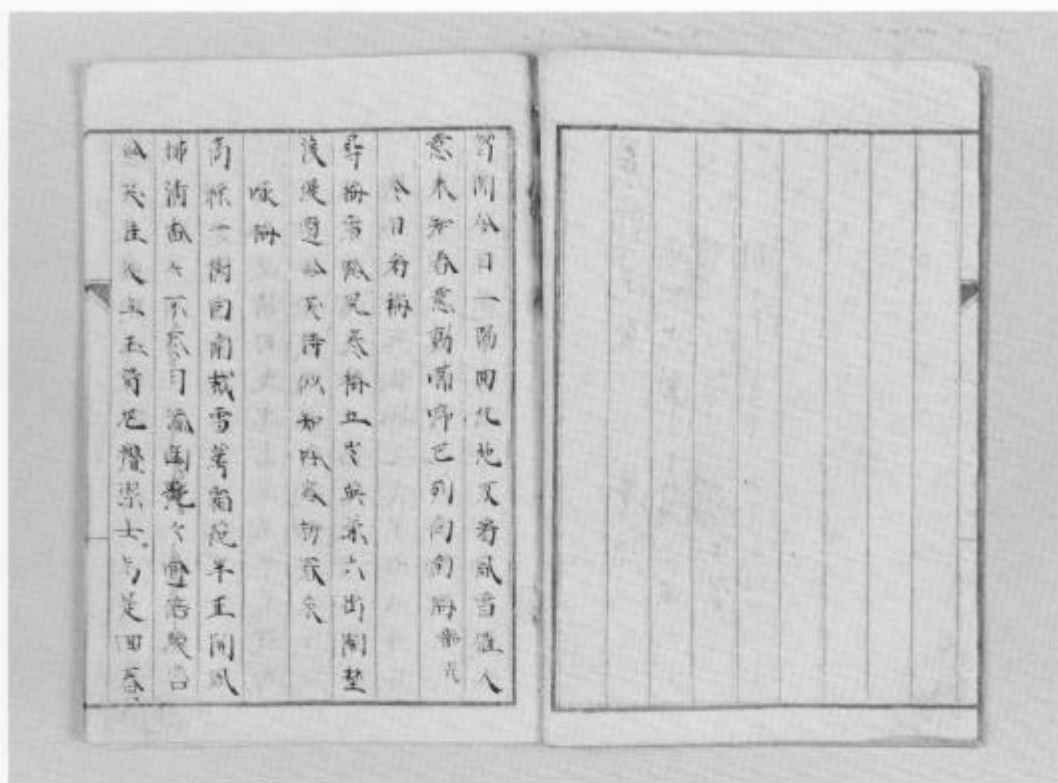
⑩ 島田墨仙筆 橋本景岳先生肖像画

橋本長綱書状  
四月十五日  
此の書状は、橋本長綱が、  
向方へ送られたものである。  
内容は、長綱の自叙傳的な  
ものである。長綱は、  
幼少より武芸に秀でて、  
父の死後、家督を継ぎ、  
武官として活躍した。  
この書状には、長綱の  
自らの経歴や、現在の  
心境などが記されている。  
書体は、流麗な草書で、  
筆力も非常に強い。  
全体的に、長綱の豪傑  
ぶりがよく表れている。

橋本長綱書状  
四月十五日  
此の書状は、橋本長綱が、  
向方へ送られたものである。  
内容は、長綱の自叙傳的な  
ものである。長綱は、  
幼少より武芸に秀でて、  
父の死後、家督を継ぎ、  
武官として活躍した。  
この書状には、長綱の  
自らの経歴や、現在の  
心境などが記されている。  
書体は、流麗な草書で、  
筆力も非常に強い。  
全体的に、長綱の豪傑  
ぶりがよく表れている。

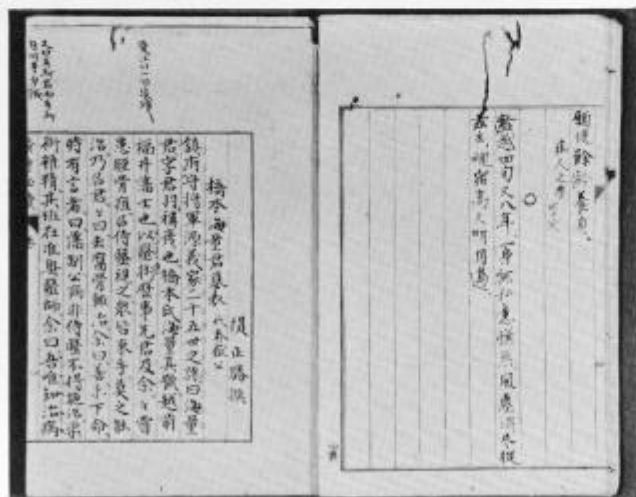
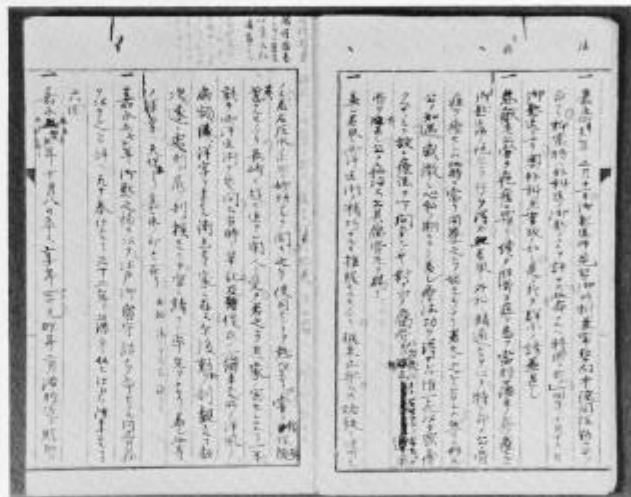
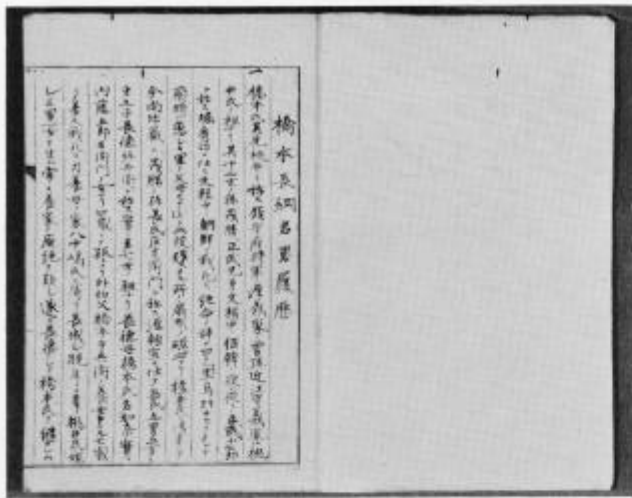
① 橋本長綱書状





③ 橋本景岳筆「涵海遺稿」





④「長綱先生履歷并墓表」

存忠亮明正之心  
養廣大恢廣之氣

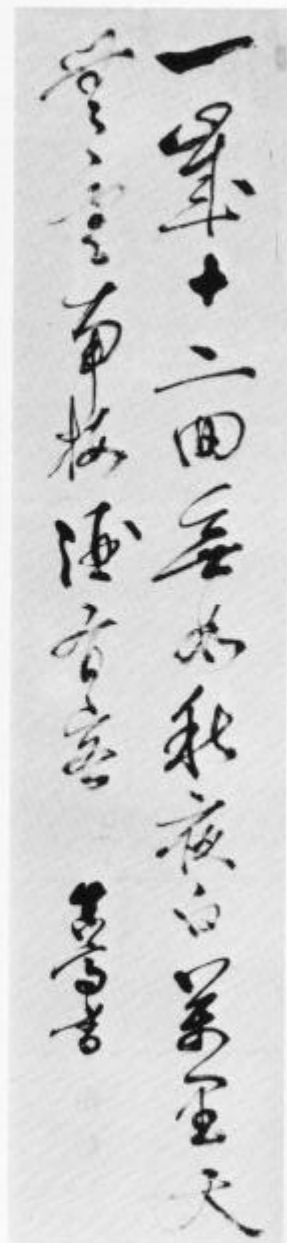
⑥ 橋本景岳筆「忠亮明正云々」の書幅



⑤ 橋本景岳幼時所用 五七桐紋付上下



⑧ 鳥田雪谷筆「桜花群禽」の図



⑦ 高野真齋筆「一葉十二回無如秋夜白雲々」の詩幅

春来春去幾春々更數今春四十  
 春珍重小江戸梅枝清香不倍  
 昔年春  
 丁未新年試筆 景岳主人

⑨ 吉田東篁筆「春来春去幾春々云々」の詩

⑩ 吉田東篁書狀紙文

景岳賢契

御内用親披

口 上

蒙 叟

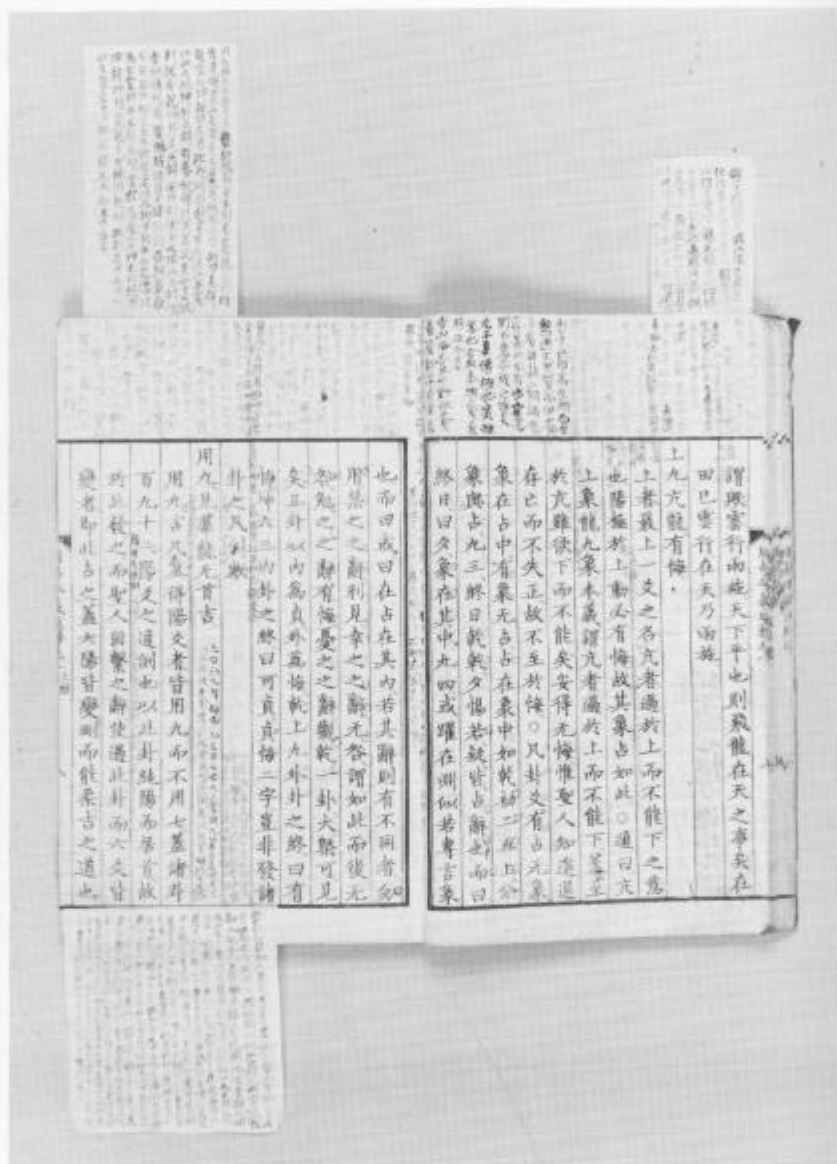
彌御安全被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御道中<sub>一</sub>候様專禱。扱昨日申殘候。若御道中尾藩井中泉等に御立寄も候は<sub>レ</sub>二賢へ<sub>一</sub>宜御致意奉<sub>レ</sub>願候。何所も同じ今度の一件に付ては、手も足も出申間敷と奉<sub>レ</sub>存候。夫に付昨日江戸表より相廻候書付之表、京都并御三家始向々達案候事と存候一件、是非御家へも相廻候筈、益にはならず共、賣て跡の少しこわり丈は付置度、尤臨機之御所置に至ては、預め期する處にあらず。何分<sup>(一)</sup>御之彌増の御立志を御周旋奉<sub>レ</sub>祈御座候。以上。

八月六日

追て水府公は別紙の通り御座候。以上。

景岳賢契  
 口上  
 彌御安全被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御道中<sub>一</sub>候様專禱。扱昨日申殘候。若御道中尾藩井中泉等に御立寄も候は<sub>レ</sub>二賢へ<sub>一</sub>宜御致意奉<sub>レ</sub>願候。何所も同じ今度の一件に付ては、手も足も出申間敷と奉<sub>レ</sub>存候。夫に付昨日江戸表より相廻候書付之表、京都并御三家始向々達案候事と存候一件、是非御家へも相廻候筈、益にはならず共、賣て跡の少しこわり丈は付置度、尤臨機之御所置に至ては、預め期する處にあらず。何分<sup>(一)</sup>御之彌増の御立志を御周旋奉<sub>レ</sub>祈御座候。以上。

⑩ 吉田東篁書狀 橋本景岳宛



⑪ 矢島立軒手沢本『周易本義通釈』



⑫ 松平春嶽書状 矢島立軒宛

余以不肖之身侍渡リ命せられ帝鑑  
 因説  
 御親談十父君講釋侍  
 大前「近來  
 白土上願精因治  
 御學日ニ増進正等歡杯に至リ不  
 堪折  
 御問不顧萬他奉對答ニ余侍遠近  
 勤若スコレ余ノカキテ汝クニ奉金  
 敬示スリ恩ナリコレ余汝ニ謝ス  
 不宣  
 嘉平月十四日  
 正三位行大守別當兼侍校源  
 慶永  
 矢島剛

授  
 矢島剛  
 四、昭進部辨、我々をドク  
 へリンを以て其のふくむし、歩  
 規分り、其のふくむし、歩  
 外務卿ニ呈す、卿より予ニ授らる、予これ  
 を受けて大学ニ示す、其後此ベルリン事、  
 余ノ警橋邸ニ入来り、大監始官  
 員相揃尋問す、其後加藤大学  
 大丞洋学ヲ能ク、心博臣候ヲ、ベルリン之旅寓ニ遣して  
 尚又訊問す、尚ベルリン加藤へ一通之  
 見込書を送ル、其見込書為寫候間、  
 汝迄廻投せり、始メ外務卿へ呈す  
 規則書ハ、たしか廻候様存候、廻不申候ハ、  
 見セ可申候、否成迄可申越候、学  
 事多忙、書ハ不尽言要  
 用而已二候也  
 正月廿三日 大学別當兼  
 侍読 慶永  
 親筆

授 矢島剛

旧冬独逸ドイツフロレンス北部聯邦書記官ドクトル  
 ベルリンは頗学者也、我皇国之学校  
 規則ヲ建んことを知りて、一通之見込書ヲ  
 外務卿ニ呈す、卿より予ニ授らる、予これ  
 を受けて大学ニ示す、其後此ベルリン事、  
 余ノ警橋邸ニ入来り、大監始官  
 員相揃尋問す、其後加藤大学  
 大丞洋学ヲ能ク、心博臣候ヲ、ベルリン之旅寓ニ遣して  
 尚又訊問す、尚ベルリン加藤へ一通之  
 見込書を送ル、其見込書為寫候間、  
 汝迄廻投せり、始メ外務卿へ呈す  
 規則書ハ、たしか廻候様存候、廻不申候ハ、  
 見セ可申候、否成迄可申越候、学  
 事多忙、書ハ不尽言要  
 用而已二候也  
 正月廿三日 大学別當兼  
 侍読 慶永  
 親筆

啓發録叙

十法年前、余と楊伯綱、從東堂田初推為、前門下、今雖辨何儘之、去古要、抑、旨、禪、當、世、事、在中、或有感憤、激昂、投、袂、在、前、者、蓋、慨、學、問、事業、強、其、效、而、不、適、於、世、務、也、伯、綱、皆、年、才、十、五、六、半、骨、翹、之、體、點、一、書、生、也、俯、首、領、盤、會、蓋、不、敢、發、一言、未、嘗、怪、之、其、後、伯、綱、西、游、告、撰、方、學、藝、幸、有、前、而、洋、之、余、乃、仿、伯、綱、叩、其、所、學、務、碼、沈、實、其、出、於、交、白、言、擊、乎、時、有、志、交、余、既、為、其、其、進、而、言、願、信

啓發録  
去推心

推心トハヲサナ心ト云事ニテ俗ニイフワラビシキコト也、葉菜ノ類ノイマタ熟セサルヲモ推トイフ推トハスヘテ水ツサキ處アリテ物ノ熟シテ旨キ味ノナキヲ申也何ニヨラス推トイフコトヲ離レヌ間ハ物ノ成リ揚ル事ナキナリ人ニ在テハ竹馬、鷲、鷹、打毬ノ遊ヒウ好ミ、或ハ石ヲ投ケ蟲ヲ捕フ

振氣

居リ候モノニテ候故ニ余推心ヲ去ルツモツテ士ノ道ニ入ル始ト存候ナリ  
振氣  
氣トハ人ニ負ヌ心立アリテ耻辱ノコトヲ無念ニ思フ處ヨリ起ル意氣、段ノ事也、振トハ折角自分ト心ヲトメテ振ニ振起シ心ノナマリ油斷セラヌ様ニ致ヌ義ナリ、此氣ハ生アル者ニハ三ナル者ニテ禽獸ニサヘコレアリテ禽獸ニテモ甚シク氣ノ立タル

立志

志トハ心ノユク所ニシテ我コ、ロノ向ヒ趣キ候處ヲイフ侍ニ生テ忠孝ノ心ナキ者ハナシ、忠孝ノ心有、之候テ我君ハ御大事ニテ我親ハ大切ナル者ト申事、聊ニテモ合点ユキ候ヘハ必ス我身ヲ愛重シテ何トソ找コソ弓馬文學ノ道ニ達シ、古代ノ聖賢君子英雄豪傑、カソ相成、君ノ御為ヲ勤キ、天下國家ノ御利益ニモ相成候、大業ヲ起シ、親ノ

勉學

ノ吾身ヲ省察シテ其不及ヲ勉ム其進ムヲ  
樂居候事肝要ニシテ志既ニ立候時ハ學ヲ  
勉ムル事ナケレハ志彌フトク遠ク成ラズ  
シテ動モスレハ聰明ハ前時ヨリ減シ道徳  
ハ初ノ心ニ漸ル様ニ成行モノニテ候  
學トハナラフト申事ニテ總テヨキ人スゲ  
レタル人ノ善キ行ヒ善キ事業ヲ述付シテ  
習ヒ參ルライフ故ニ忠義孝行ノ事ヲ見テ

擇交友

交友ハ吾連朋友ノ事ニテ擇トハスクリ出  
ス意ナリ吾同門同里ノ人同輩ノ人皆ト  
交ケレ候ヘハ何レモ大切ニスヘシ乍去其  
中ニ損友益友アリ候ヘハ則擇ト申ス事肝  
要ナリ損友ハ吾々得タル道ヲ以テ其人ノ  
不正ノ事ヲ矯直シ可達益友ハ吾ヨリ親ヲ  
長メ事ヲ詢リ常ニ兄弟ノ如クスヘシ世ノ  
中ニ益友ホト難有難得者ハナク候間一人

右啓書叙距今十許年前金六  
子祀也予之雅尚也願者世價  
概々奮且厲反有今日所及也臣  
偶獲存賞獲之因所寫下本吾友  
友子東及弟持好以為銘茲沈吟  
呼十年前既如彼而今日世則  
自十年前之後其將何如矣後  
究問不昧起飛丁巳皇月景  
岳紀歲時年二十又四

送橋本弘道遊浪華序

予自謂今人所以志學而不及古人者至其義不一而失之跡進者最為多矣蓋志可遠且大而不可以銳焉學可勉以勵而不可以急焉急則難久銳則易沮若夫遠且大然勉以勵則不然也易而不儻難而不怠不為名利之擾不為譽歎之害魁々循々日就月將遂極正大高明之域而後已矣此古人之所以大過人而後世之所以不及也如今人則其始視之容易自謂古人易其耳內不量其力豫等好言高或至半高視闊步有舉一世以下視之而一旦至之難之地則志氣消沮無復所振名利皆欲投時交攻遂并其所學舉以失之矣是予為學者每所深戒其歸進也橋本弘道本藩侍臣某君之適子幼而穎悟甚焉止殆若成人而好書不倦最勤其業旁能詩文去歲初遊予門予一見識其不凡命之以所曾聞師友者自是專用力於源洛諸賢之遺書頗識其大義矣今茲欲辭其親西遊浪華蓋至以其業其

倦最勤其業旁能詩文去歲初遊予門予一見識其不凡命之以所曾聞師友者自是專用力於源洛諸賢之遺書頗識其大義矣今茲欲辭其親西遊浪華蓋至以其業其志亦將有以所大為焉嗚乎弘道可謂其志遠且大其學勉以勵者也然予竊以為浪華天下都會率皆膏粱子弟輕俠凡流其磨子者固亦生復不少善守其志而不失之者百無一二也今弘道立其間內勿存養之功外率少壯之氣苟欲以言語文字之間而遠其彼輩進取之功至朋友間學其必有所大難處者生於其間無於是乎進不得其志退而無所守名利皆欲亦將投隙而攻之也夫如是則其欲執其志以能終其所學不亦難乎是予所以不能不為弘道憂也固書予每所以道諸學者以為是行之箴也

吉田東齋士百萬士行甫未定稿

⑭ 吉田東齋筆「送橋本弘道遊浪華序」





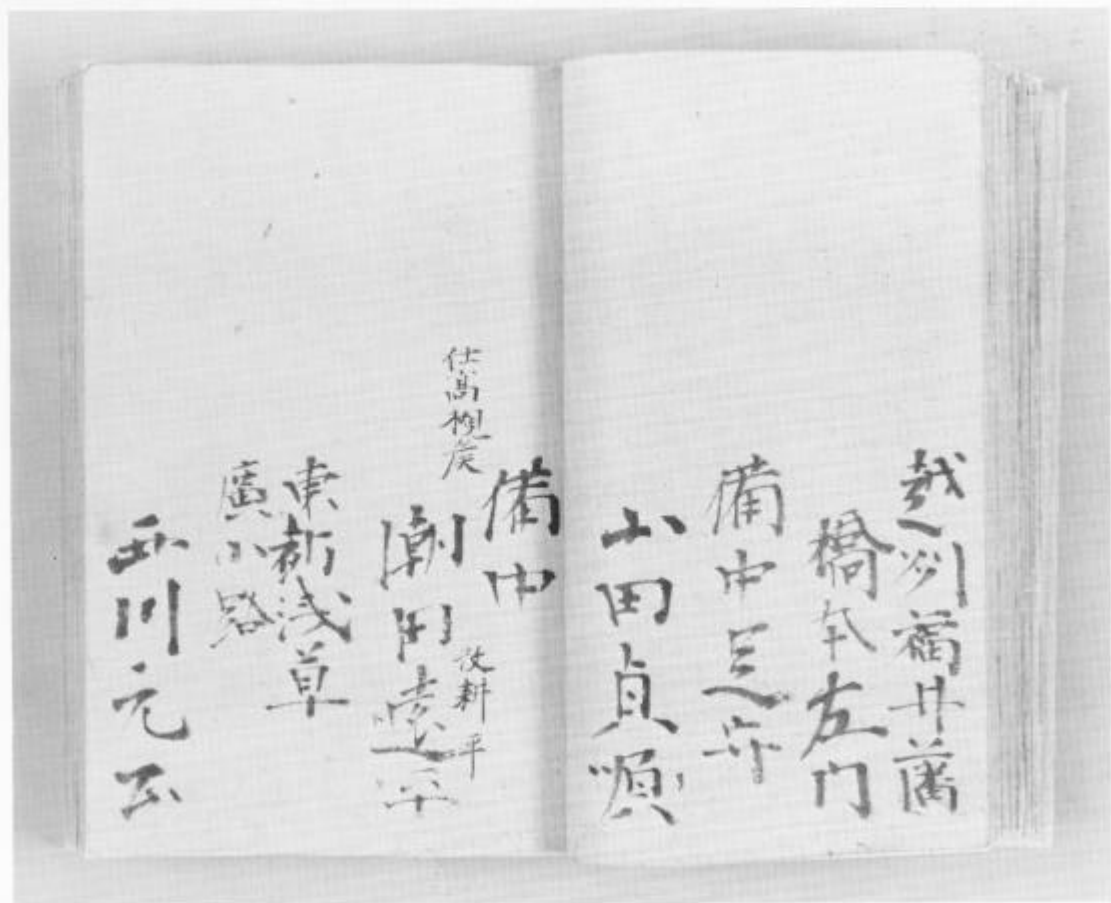
嘉永元年巳酉秋和蘭商船之外科醫モシニキ様  
 牛痘苗を持送り長崎ニ小児之種ト云キ都牛痘  
 種法ハ根柢ト云キナリ前 越前侯御殿 此痘  
 ハ國家ニ送ル人ト云キ社思左 公志、内願立  
 唐土ナリ牛苗を取寄テキ侍留置原良米、奈  
 良米を以てモ呼、飛通河頓川四段モ、社仲台並  
 二章、モシニキ持送り、之ニ依テ四章在リ、已ニ種ト  
 稱日御新式之變送リ、是并我ハ良米ハ以テ  
 余心ニモトト云、之ニ依テ種ト云キ、此種ニ関テハ  
 有リ并我自家ノ良米ニ意取ル見、下苗一、良米ニ  
 扶式遺訓 卷之 一通通齊藏  
 事書候也。注進寸之ニ依テ良米早速上京ト云、此  
 新河ニ一筆を設ケ都下ノ見、試ミ下ニ二月方、此  
 於テ日御新式御方洪庵方人下今モ先、大和屋傳  
 志米、古手所、於テ大和屋傳志米、於テ貸取傳志  
 之を種痘所ニ送リ、至キ同年十月晦日、小児を推考  
 上京ト云、良米、本苗を以テ、所用ノ痘苗取、此  
 一、送キ、義者、種苗所用意、以テ、之、至、セ、ハ  
 而全方、之、上、月、七、日、改、テ、一、痘、見、を、推、考、同、伴、之、  
 下、板、一、之、を、共、共、テ、是、大、坂、牛、痘、種、法、ハ、最、初、ナリ、  
 是、種、苗、を、種、最、初、ノ、三人、皆、良、米、也、折、又、を、立、テ、是、是、仁

後勤、之、以、テ、没、後、日、人、代、之、之、を、嗣、キ、首、氏、ハ、衣  
 子、主、税、之、を、嗣、キ、長、高、ハ、将、森、介、侯、是、代、也、  
 後、藏、新、介、兩、人、ハ、嗣、子、不、キ、以、テ、能、才、林、元、蒸、ハ、最、初  
 ナリ、補、助、ト、シ、勤、功、冬、冬、故、ニ、成、年、之、冬、社、中、ニ、到、付、故、  
 今、在、左、方、所、社、中、候、方、洪、庵、日、御、主、税、山、田、令、江  
 松、平、俊、平、林、元、蒸、補、助、高、安、丹、山、日、御、昇、青、山  
 輩、亦、節、を、派、方、大、和、屋、傳、志、御、言、此、清、之、介、方、各、自、重  
 善、而、雪、月、候、御、候、其、實、若、シ、時、ニ、當、テ、ハ、燻、キ、米、錢  
 を、賣、セ、リ、モ、方、之、ト、シ、モ、更、ニ、錢、以、利、を、私、ニ、テ、  
 在、ク、改、メ、漢、之、ト、シ、テ、勉、強、セ、リ、今、茲、ニ、十、有、二、年、其、勤  
 功、後、テ、今、日、ハ、大、成、を、得、ル、之、至、キ、  
 越、前、侯、以、恩、徳、ト、良、米、昇、式、以、厚、惠、を、忘、ル、  
 社、中、各、家、ハ、若、シ、考、思、リ、  
 仁、術、以、本、意、を、失、リ、任、身、良、志、を、嗣、  
 之、角  
 嘉永元年庚申十月朔創成之日  
 緒方洪庵謹録之

⑩ 緒方洪庵筆「大坂除痘館記」



①⑨ 岳飛筆「至宝」石摺の扁額



①⑧ 適々齋塾姓名録

笠原良策白

一、半井・市川兩君へ御面會の節、宜敷御傳可被下候。

一、中根君へ外國より御取寄に相成度藥品類及び棉花・綿羊等の目録差出し置申候。其内棉花は已に被裁候て大樹に相成有之候諸侯方有之、先年何時にても其樹被進度旨上に直々御應對有之候由、當夏頃島田近江殿より承り申候。此段御側向にて御序に御内調被下度段、御傳可被下候。

一、同君へ紅花の種子相願置候。何卒早々御廻し被下度、九月上旬が下種之時節に御座候。

一、水野玖多御跡より參り可申、此者萬端宜敷相願候。

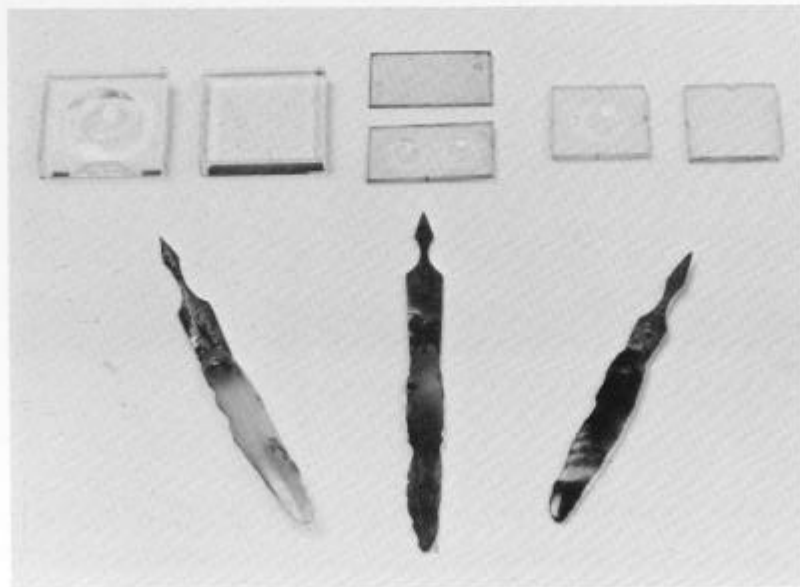
一、御約束之蒲公英エキス少々相製申候。御試用可被下候。

八月五日

○唐船申上書付、  
○勝麟太郎殿手紙、  
右御殘し可被下候。

⑳ 笠原白翁書状 橋本景岳宛

笠原良策白



㉑ 笠原白翁所用 種痘針・蕃苗器

◎每旦奉禮大少二柱神像

嘉永三年三月

# 牛痘鑑法

稽閱尚書記

◎終歲耽讀東西萬邦方書

## 牛痘鑑法序

牛痘解除痘毒之良法也其博行于天下也必矣然以其術似易易恐初學之徒不諳鑑法不知禁戒漫然施之後未員寬此法也故不顧固陋遽作此書以示同好只余不慣漢文且以事出于倉卒不免

神皇正統記之誤者幸正之

嘉永三年春正月良辰

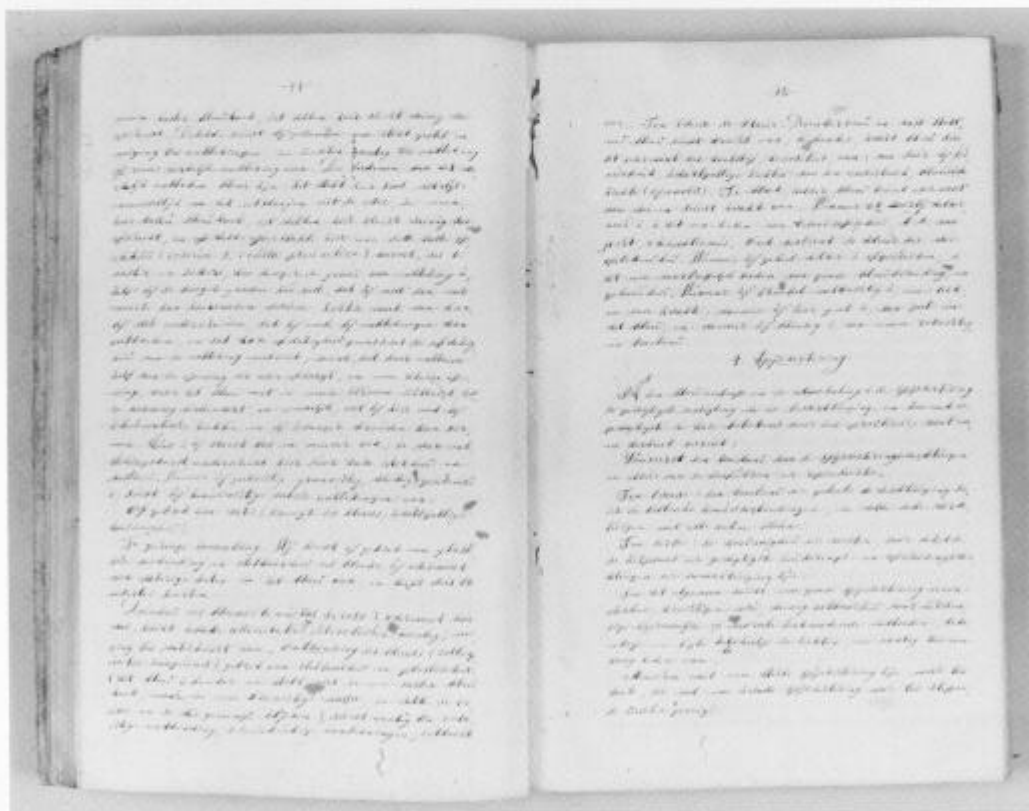
越前 笠原良策識

## 牛痘鑿法

越前國曾根郡 齋藤 笠原良策識

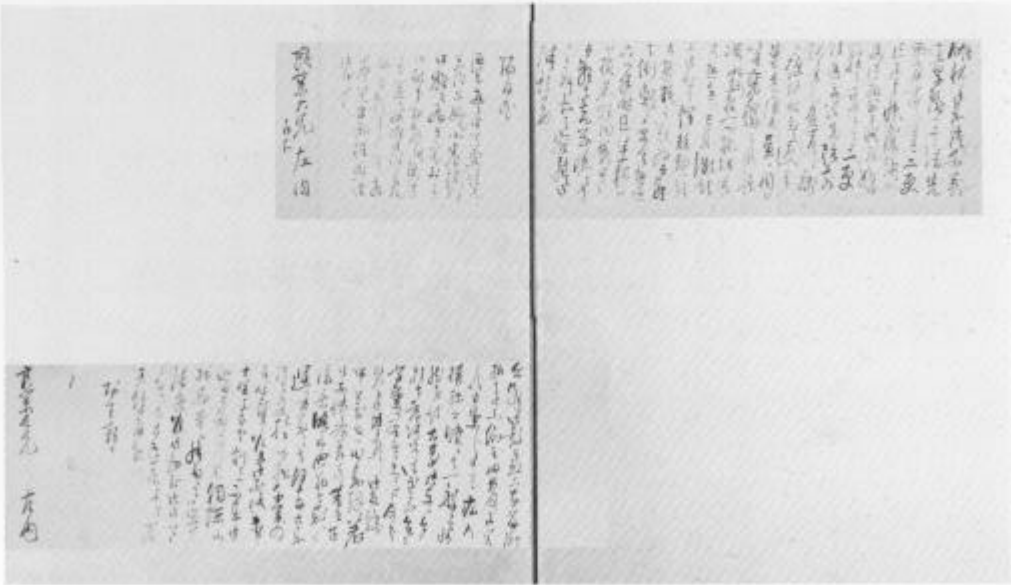
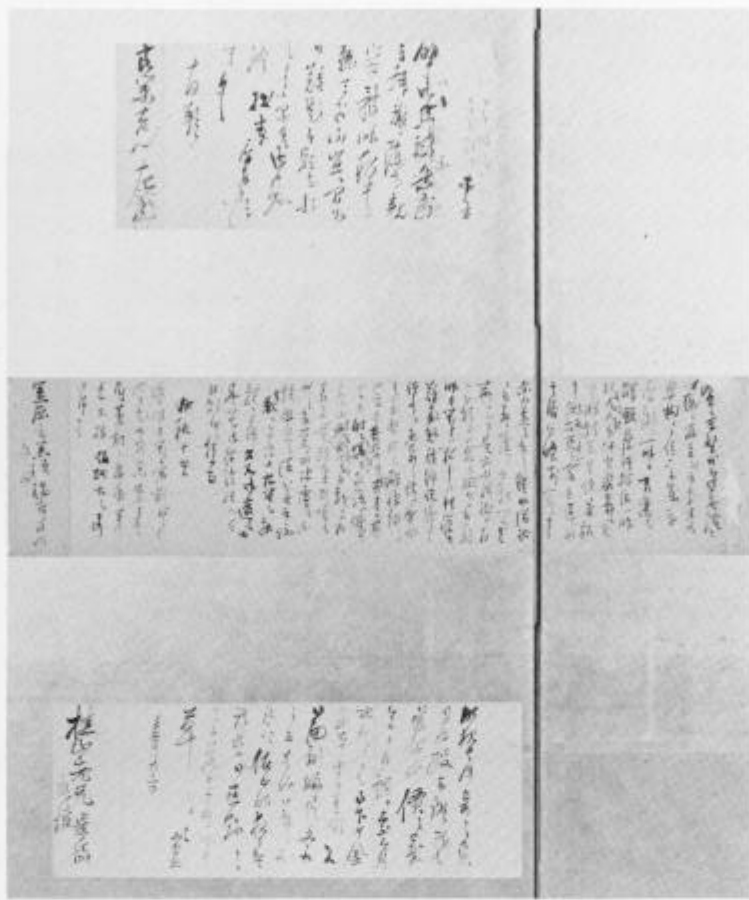
起原  
牛痘一曰伯神一名安永二年壬辰獨以嗣國元正就  
斯底煙列覽氏之發明也其記元一十七百六十九  
年其地二於予一書之刊行也予雖年七十後早知元正  
一十七百九十八年〇一奉 英厄利非國別地也  
為十七百九十九年 英厄利非國別地也  
歐羅巴亞氏之從跡之ヲ試之亦一書之  
二十有七之ヲ世之公ニセリ 諸君如欲知此書者  
先見此書之末所載之書名也

② 笠原白翁著「牛痘鑑法」草稿



②4 笠原白翁所蔵『扶氏經驗遺訓』蘭文写本





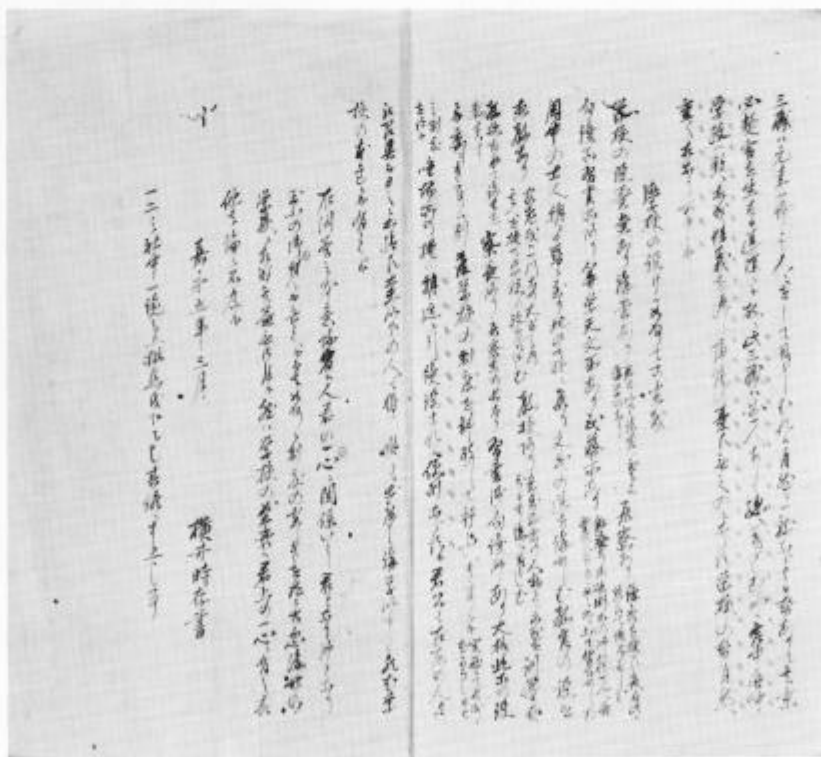
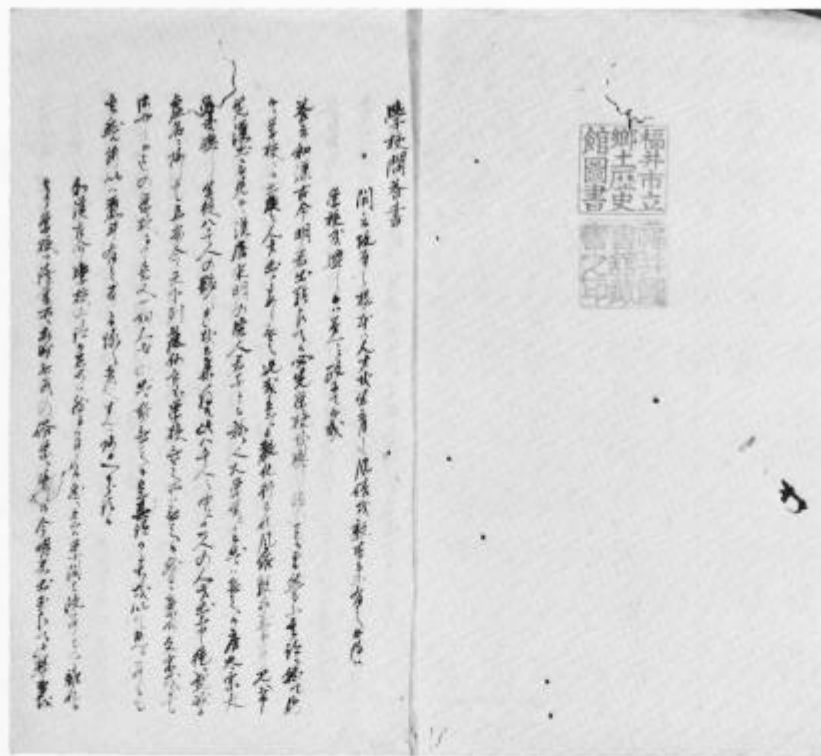
②橘本景岳書狀貼交ぜ屏風 笠原白翁宛

㊦ 梅田雲浜筆「宿雲散洲云々」の詩幅

宿雲散洲快曉月明  
 村塢高樹臨清池風  
 驚鳥之夜來雨子心  
 道無事偶此成賓主  
 雲濱

㊧ 横井小楠筆「試看天地間事云々」の書幅

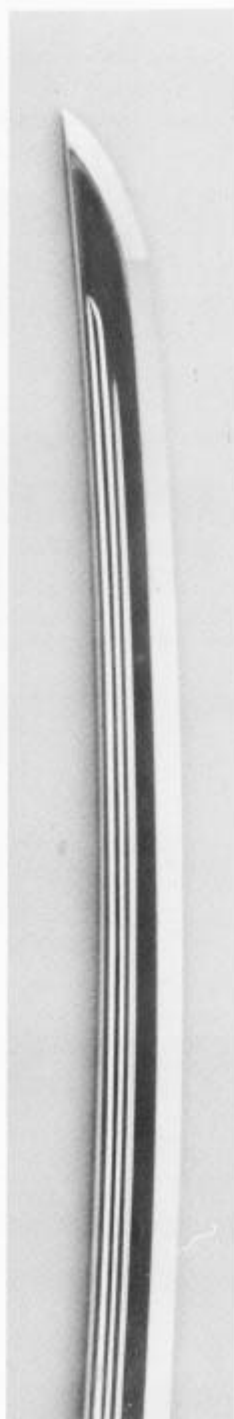
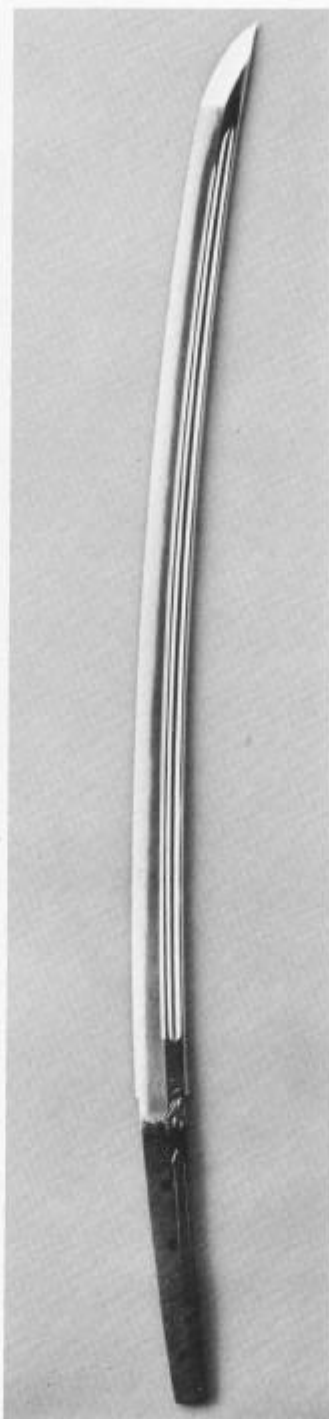
試看天地間事  
 可乎是萬事之一  
 定之理如  
 易以變子常  
 大塚正望曰  
 汝有  
 字之真至言也  
 横井小楠書



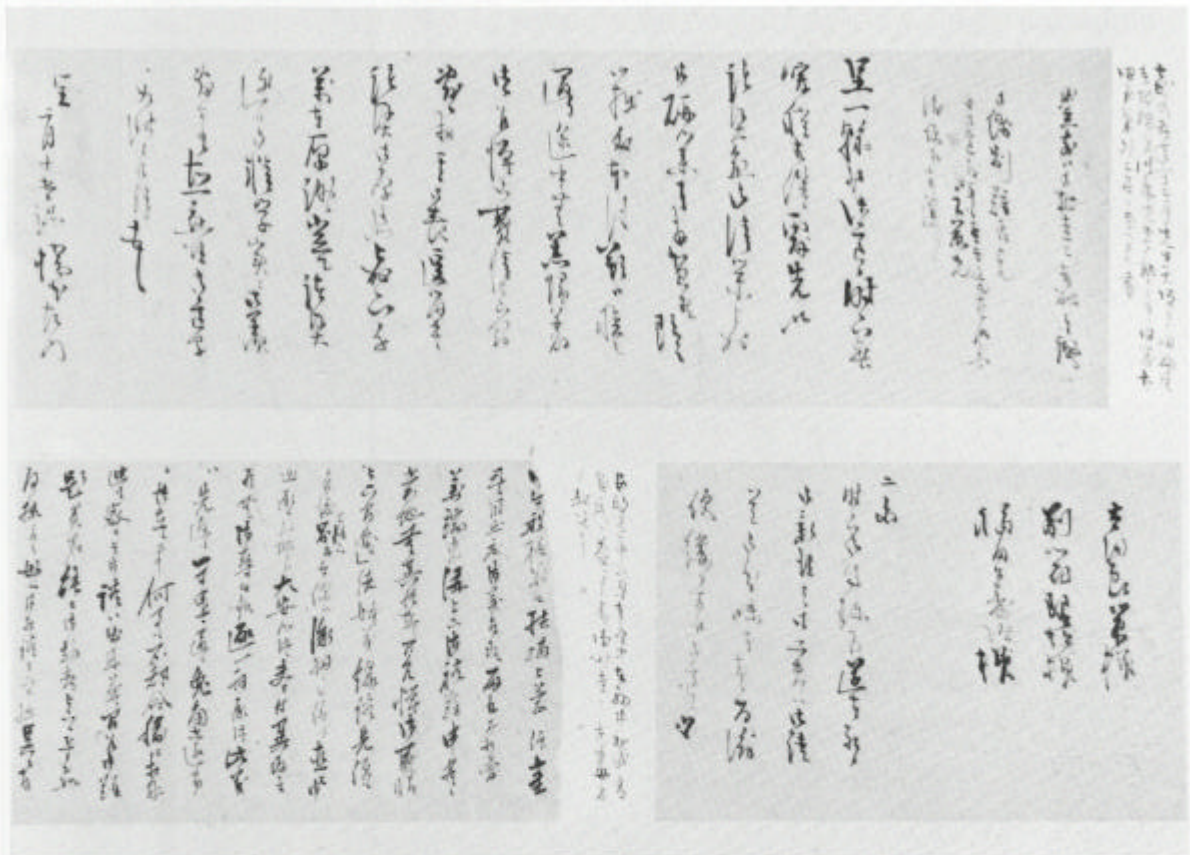
② 横井小楠著「学校問答書」写本

中納言秀康卿越前御入部之年、御家老永見右衛門尉に老万石之御加増御礼として代々相伝之刀を奉獻す。宰相忠昌卿之御差料と成り御代々御相伝、文久元年八月十五日春嶽老公由来を述べ給て、御手から給りしもの也。

小楠謹識



⑳ 横井小楠所用 刀 (無銘)



② 橋本景岳書状 太田良策ほか宛

出立前者御馳走に相成奉レ謝候。御饞別難有奉レ存候。得二御意一度事も有レ之候得共、後便に相譲り候。

左 内 白

良 策 兄

呈二一輪二得二御意一候。時下春暖稍相催候處、先以諸賢愈御清榮被レ成二御研業、奉二拜賀一候。隨て小拙儀本月朔日積之通り途中無レ恙歸省仕候。乍レ憚御費情被レ下問敷候。扱其御表逗留中、諸賢御厚懇被二成下、千萬奉二厚謝一候。定て諸賢逐日御精學實に御羨敷奉レ存候。右一應得二御意一、早々如レ此に御座候。頓首。

橋本 左内

閏二月十五日認

太田 良 策 様

別 府 録 松 様

福 田 久 壽 次 様

二白、時下御自珍爲レ道奉レ祈候。御新得之御工夫も御座候はゞ、御分味奉レ希候。尚後便續々可レ得二御意一候。以上。



# 松子為食蒲根可服

⑩ 橋本景岳筆「松子為食云々」の書幅

一、市村與八郎殿武藝上達之由、此表齋藤<sup>(新太郎)</sup>にても随分宜評判有<sup>レ</sup>之候。塚谷・鰐淵も不<sup>二</sup>相變<sup>一</sup>出精被<sup>レ</sup>致候様子、此兩人も逐々上達可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之、貴丈等行々扶助を被<sup>レ</sup>得候儀、何共欣然之至に候。

一、海苔相達、夫々へ御遣し被<sup>レ</sup>成候由、致<sup>二</sup>承知<sup>一</sup>候。

一、吉田先生御老母之儀、先便半井氏<sup>(仲庵)</sup>よりも様子申参り候。何分にも早速治癒之程待居候。

一、魚住・眞下<sup>(宗三)</sup>兩人至て健に相暮候。兩人共宜申出候。

一、去る六日元服之由、目出度奉<sup>レ</sup>存候。已後は益御身の行肅整に相成候様祈居候。十五以上は大人之數に加り候事故、一般氣象御立替へ可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候。

一、論語・通鑑輪講有<sup>レ</sup>之候由、何分折角御研究可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候。經史共に有用之書に候得ば、徹底御習熟可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候。

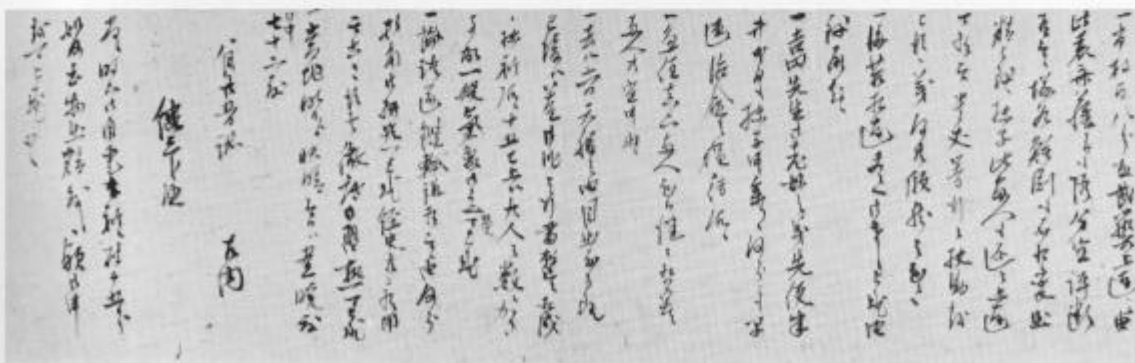
一、當地昨日より快晴、今日は晝暖度日中七十二度。

八月廿五日認

繩 三 郎 殿

尚々時下御自愛奉<sup>レ</sup>祈候。<sup>(弟綱維)</sup>破魔五郎如何、書物出精致し候歟、御申越可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候。以上。

左 内



⑪ 橋本景岳書状 弟繩三郎（橋本綱維）宛





十世... 同上一古書

在... 同上一古書

在... 同上一古書

在... 同上一古書

②橋本景岳書狀 中根雪江宛



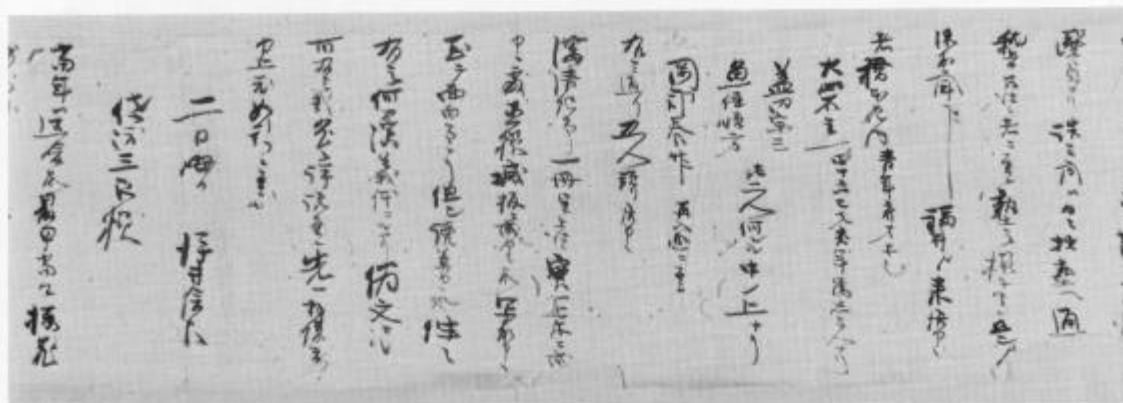




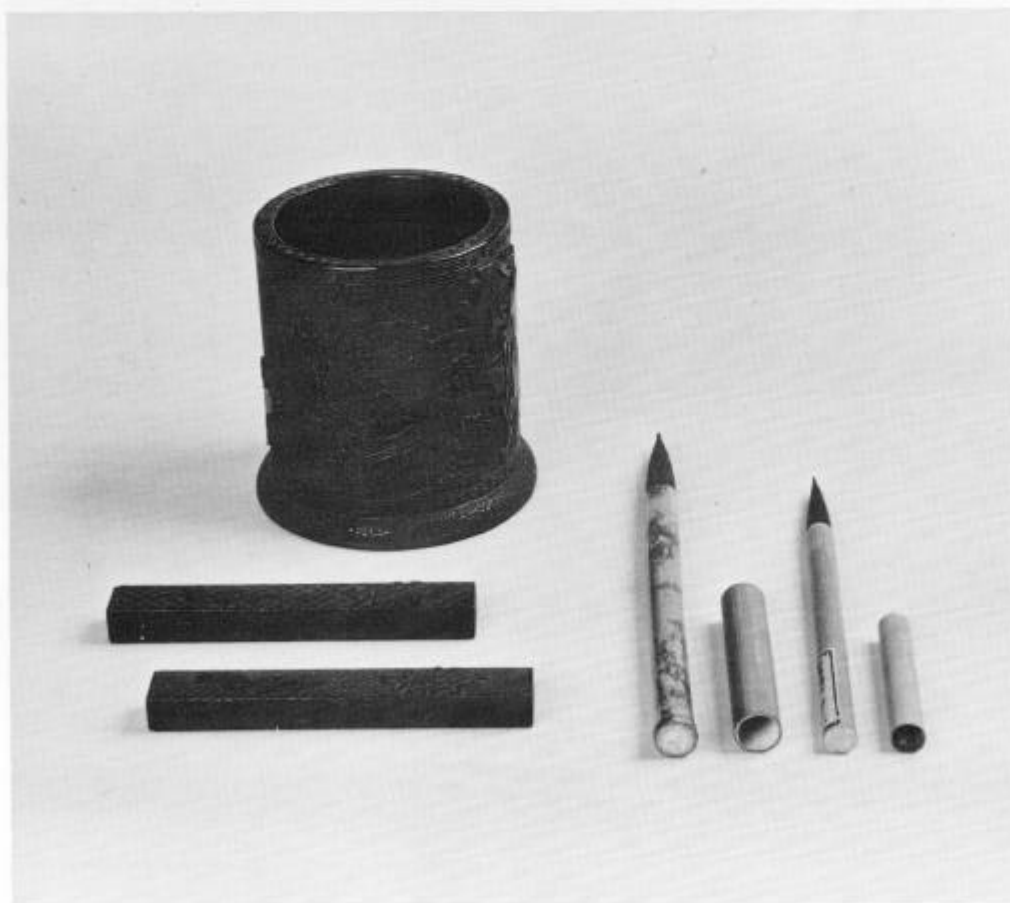
⑤ 坪井信良書状 佐渡三良宛

拙塾近来大二賑敷相成、内生斗  
 二十三人ニ及申候、就中今度福井  
 藩中橋本左内与申者来リ申候、  
 年甫テ二十一才頗ル沈才篤厚、  
 誠ニ頼母敷人物、国公ニも殊之外  
 秘藏之才子ニテ、小子迄別段  
 心附教授可致与之命も御坐候、  
 先年大坂ニテ纔一年才之修  
 行ナレトモ、当時拙塾頭栗山玄孝  
 与頗ル頡頏、無程飛揚之事  
 与珍喜仕候、小子も年来逢人  
 千百人、如斯人ハ初而ナリ  
 実ニ可畏可羨一俊才ニ御坐候、  
 先ハ当用斗指急キ念々如斯  
 ニ御坐候、以上、  
 四月一日 坪井信良  
 佐渡三良様





⑮ 坪井信良書状 佐渡三良宛



⑯ 堆黒筆立・同文鎮・唐筆



五月二十一日 午後五時 杉田 成樹  
 橋本 景岳宛  
 五月二十一日 午後五時 杉田 成樹  
 杉田 成樹 謹啓

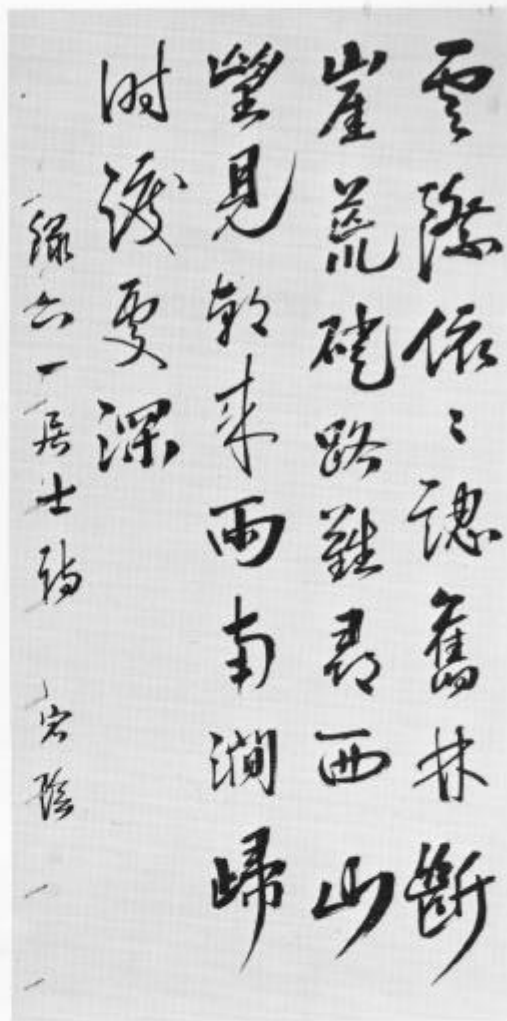
五月二十一日  
 杉田 成樹 謹啓  
 五月二十一日  
 杉田 成樹 謹啓  
 杉田 成樹 謹啓  
 杉田 成樹 謹啓

五月二十一日 午後五時 杉田 成樹  
 橋本 景岳宛  
 五月二十一日 午後五時 杉田 成樹  
 杉田 成樹 謹啓

⑤ 杉田成樹書状 橋本景岳宛



③⑨ 塩谷右陰筆「雲際依々云々」の詩幅



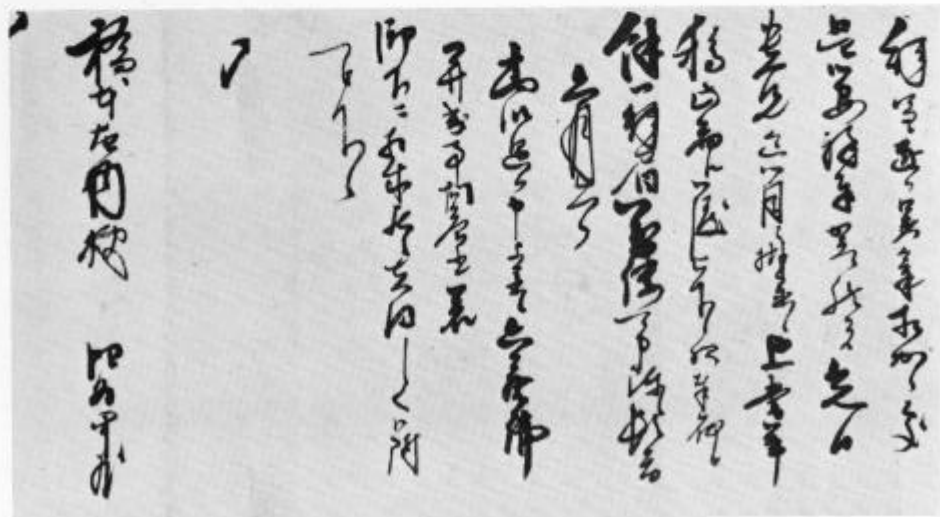
拝呈。逐日暑氣相加候處、益御安祥奉賀候。然者先日貴兄迄御目二掛置候上書草稿、此者江御渡被下候様奉希候。餘ハ拝眉万縷可申述候。頓首。

六月六日

尚以、過日申上置候「六芸論」并「夷事問答書」、若御下二相成居候者、同じく御附可被下候。

橋本左内様

塩谷甲藏



④⑩ 塩谷右陰書状 橋本景岳宛

道理良心肝忠義  
 填骨髓直談必お  
 死生にたな 東湖筆

④ 藤田東湖筆「道理良心肝云々」の書幅

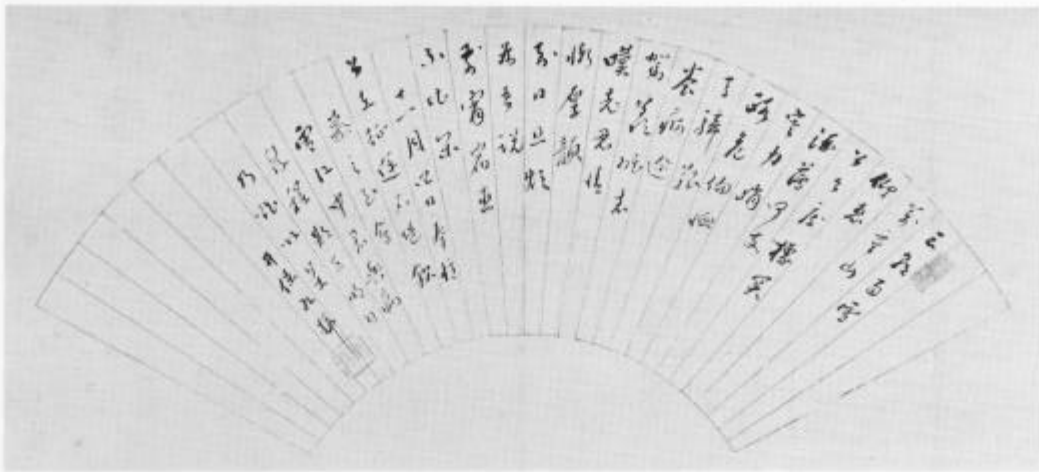
道理良心を貫き 忠義骨髓を填む  
 直に須らく 死生の間に談笑すべし

天啓元年... 橋本景岳筆「回天詩史」の幅

⑤ 橋本景岳筆「回天詩史」の幅

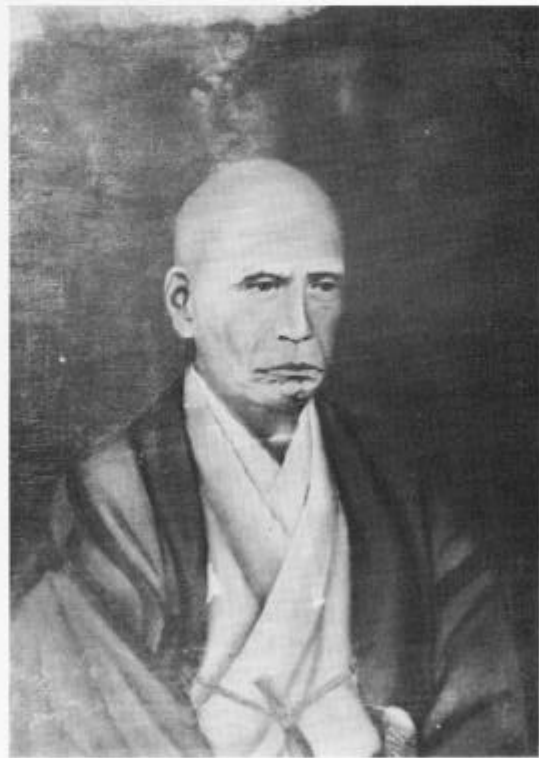




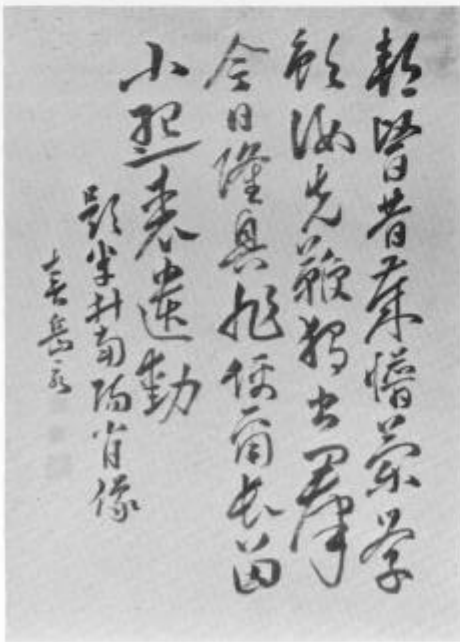


④半井仲庵筆 中根雪江を送る詩

邦医昔歳惜「蘭学」  
 顧汝先鞭独出「群」  
 今日隆興非「偶爾」  
 長留「小照」表「遺勲」  
 題半井南陽肖像  
 春嶽永



⑤半井仲庵油彩肖像画並に  
 松平春嶽画賛





送 南陽父執還鄉  
 短嶽長亭聚泣、遙望  
 越山夫一方、殘日孤雲  
 添寒恨、落花流水斷人  
 腸、別處刀圭、勞故挽之  
 年、詩酒共商量、衣冠  
 訂來期、約此別何、孫旌  
 故鄉  
 依盤濃扇、元鳩曉不阻  
 先生、孤公、鮎、筍、星、殘  
 羅、嗟、深、林、月、黑、馬、蕭  
 蕭、化、年、再、會、知、何、處、今  
 日、相、逢、誰、一、留、此、地、猶  
 餘、同、友、在、夢、魂、真、脈、海  
 山、遙

昏知生 稿身紀拜稿

⑩橋本景岳筆「送半井南陽歸鄉詩」の幅

南陽父執の還鄉を送る。

短嶽長亭路冠々たり、遙に越山を望

む天の一方。殘日孤雲客恨を添へ、

落花流水人の腸を斷つ。幾度か刀圭

故挽を勞し、三年詩酒共に商量す。

衣を牽いて還訂す來期の約、此別何

ぞ故郷に殊ならん。

信樽濃扇兀として鳩曉、阻まず先生

歸去の纏を。荒羅星殘して難嗟々、

深林月黒うして馬蕭々。化年再會知

る何れの處ぞ、今日相逢うて話す一

宵。此地猶同友を餘して在り、夢魂

眠ふ莫かれ海山の遙かなるを。

昏知生 橋本紀拜稿

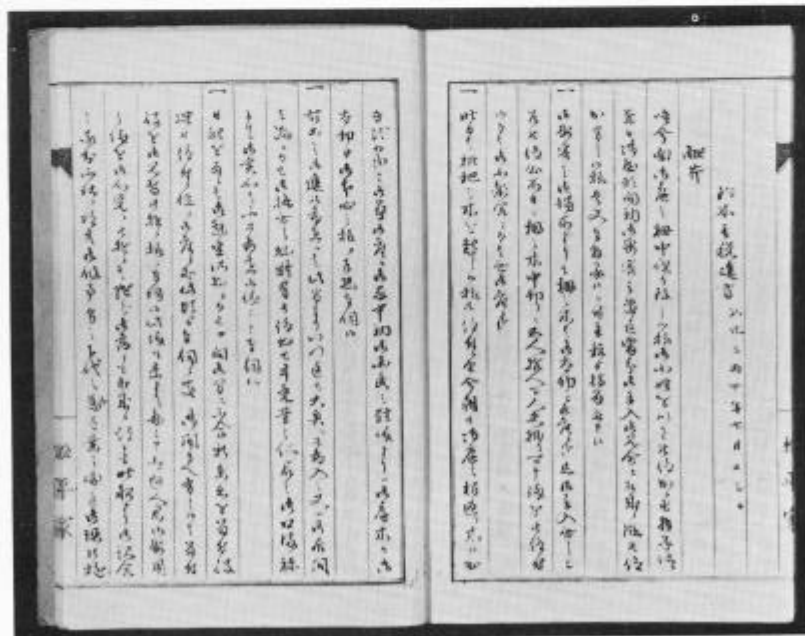
平本領主松平主税  
 此紙係之松平領主  
 之領主  
 平本領主松平主税

平本領主松平主税  
 此紙係之松平領主  
 之領主  
 平本領主松平主税

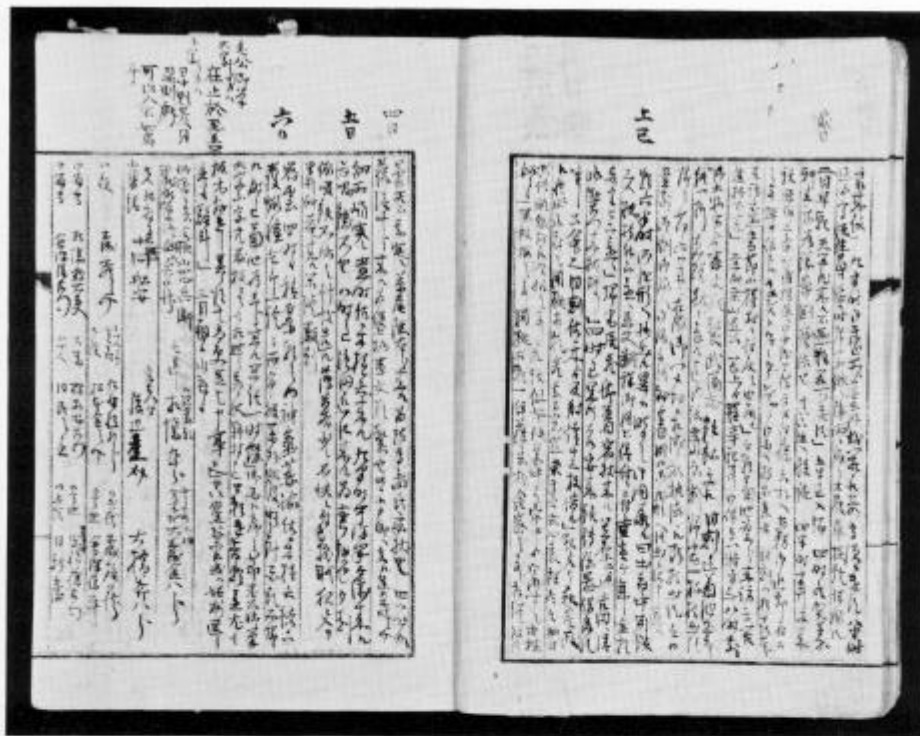
④ 鈴木主税書状 平本作野右衛門（平学）宛



④ 鈴木主税油彩肖像画



④ 鈴木主税建言書 松平春嶽宛

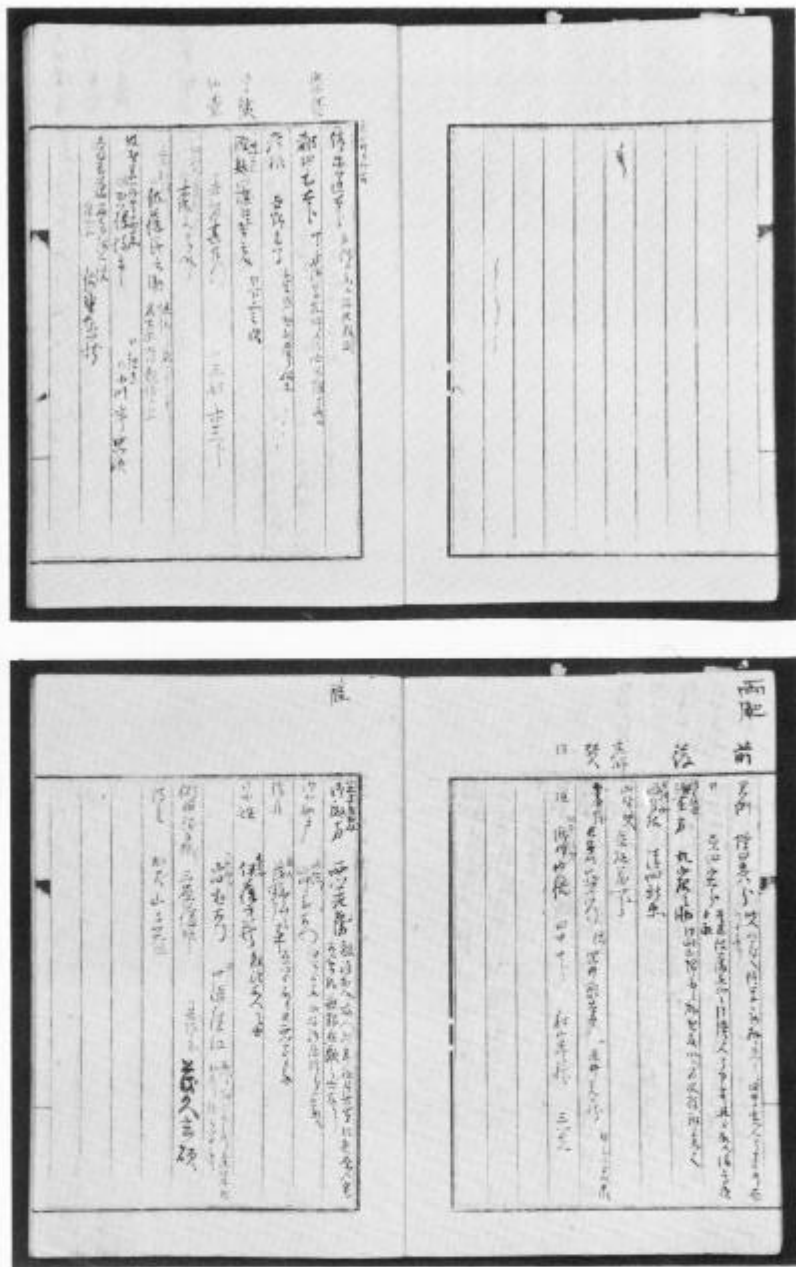


⑤ 橋本景岳筆「安政丙辰二月日録」

貳日 二日早朝天竺屋来ル、不レ遇、瓶箱一ツ房す。五半過入湯、四時有  
 賀義軒来訪、為レ議ニ鼻淵療法一也。真下生ハ授読、四半時半井子来話、  
 要件三條、加藤・榎並ヘ御小屋可レ借旨、並伊藤玄朴ヘ書籍御返却ニ付テ  
 の事。坪井信良キエンスト・ウオールデンブック御国ヘ持不レ參旨。同剋  
 八杉喜太郎来訪、不レ遇、当節小棟村ニ住居之由承ル。今朝菊池為三郎来  
 訪之筈、違約不レ来。昼時桑山退公。君上より羅辛記事御借被レ下特旨也。  
 八時前、御書物方より事文類聚・武備志鈔録受取。同剋過、菊池為三郎  
 紙一折惠贈、夜ニ至ル迄内話、桑山夕刻帰宅一杯指出す。帰之節六ツ過  
 二相成御門メ切ニ相成候故、執法江斷指出す。今日昼前御側御用人御用  
 手紙到着、明日御屋形ヘ羅出候様申来ル。

( 中 略 )

五日 細雨、峭寒、昼時佐々木権六来ル、九半時中沢半兵衛来ル、為ニ吸  
 鐵石一也。八時過、島田近江来ル、為ニ彎鐵一也。夕剋做ニ吸鐵石法ニ之什  
 を造ル。薄暮少々不快ニ付就眠、夜ニ入り半井仲菴来ル、閑談數剋。



② 橋本景岳筆「安政丙辰二月日録」

「安政丙辰二月日録」中の一節

諸藩の有司を畫留めた箇所に  
長野主馬(主膳)・西郷吉兵衛  
(隆盛)のことを、次のように  
記してある。

「彦根

長野主馬

国学者勢州産之様子」

「薩 芝上屋敷 西郷吉兵衛

鯨島正人友人、卯年極

月廿七日始於二原八宅

相会す。燕趙悲歌之士  
なり。」





土石區別

トク一名石トテル至塔此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也  
 ナハト此層也

八里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千  
 凡里子十里半為分一度二千

⑤橋本春岳筆記帳類「景岳先生手帳」

甲申二十一年春正月岸后土尊早元世宗時改以肆歲  
 景岳筆記史文之遺教之用其刑必年故改年上致也蓋明也世宗  
 王叔文上謂世宗上制刑之記

公篇之與之五古余注六鯨海者海魚也大有長  
 千里小者數十丈其鱗曰龍大者亦長千里眼  
 如明月味似淡香壯國傳於楚秦鯨魚經華  
 鐘以海岸中有大魚名鯨又有歌名滿宇

景岳筆記兩集  
 史學日涉

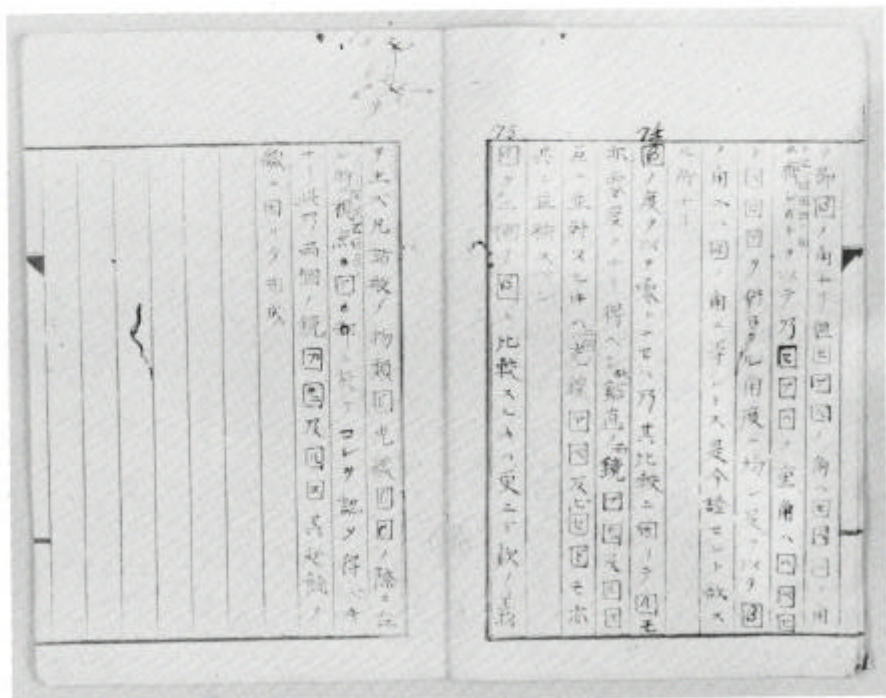
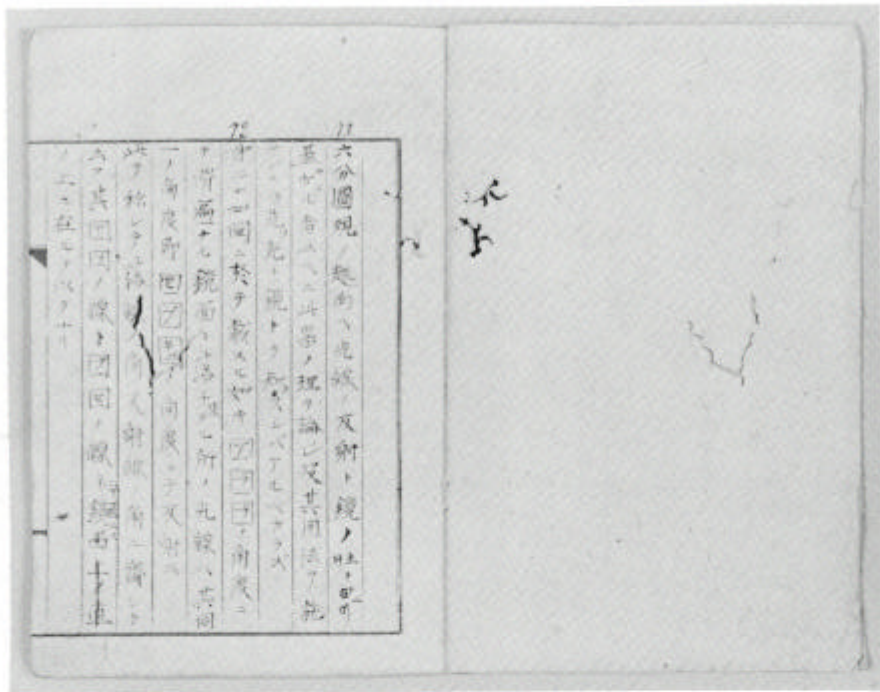
⑤ 橋本景岳筆記帳類「史學日涉」

甘切  
 六月晦日脩狀  
 六月晦日脩狀事其未尚矣其法此竹  
 片為空櫃其中可容人脩狀之人口嚼呢  
 證翰躬而出入櫃中凡三匝為不燒其  
 故或詢其情識之士亦莫有知者也耦謂  
 是奉報之習依耳一日偶讀全唐詩六  
 中宗春幸梨春園竝渭水祇除則賜  
 細柳園辟惡予拍子而善曰所謂竹籠

亦知折之國遺法也蓋中夏古法既然消  
 滅而咸存乎百代一王之國不獨禦事之  
 殞而而已月餘月餘事始行于天武帝之時全大在  
 載於史刻所以致隆焉見櫻樓舊記の所記國處

木偶人謂之維初不解其義而性曰芝芻  
 靈之句誤添後耳文昌雜錄云唐歲時所  
 物三月三日則有錢人矣台所謂維即錢  
 人之遺制而其義取句靈更有疑焉法此

⑤ 橋本景岳筆記帳類「子集日涉」



⑤ 橋本景岳筆「容安訳稿」



急流中底の柱、即ち是れ大丈夫の心



⑤ 橋本景岳所用 桐製本箱

(蓋裏)

君恩山よりも重く命は毛よりも軽し、  
 主家を興復する是れ素情、  
 已に大仇を斬り臣が願遂げたり、  
 恨むらくは臣が輩をして、  
 忠名を得せしめたるを、  
 右大石良雄を詠ず 景岳主人紀書

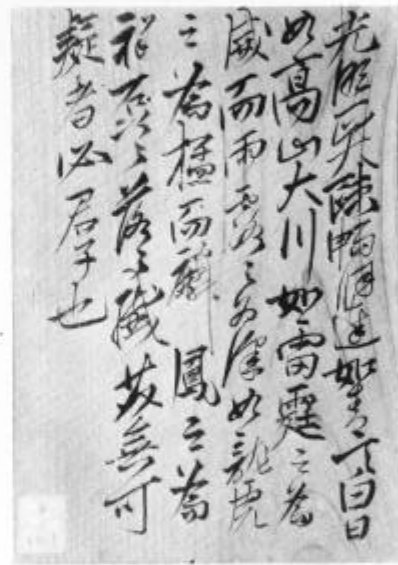
「集義」



「積理」

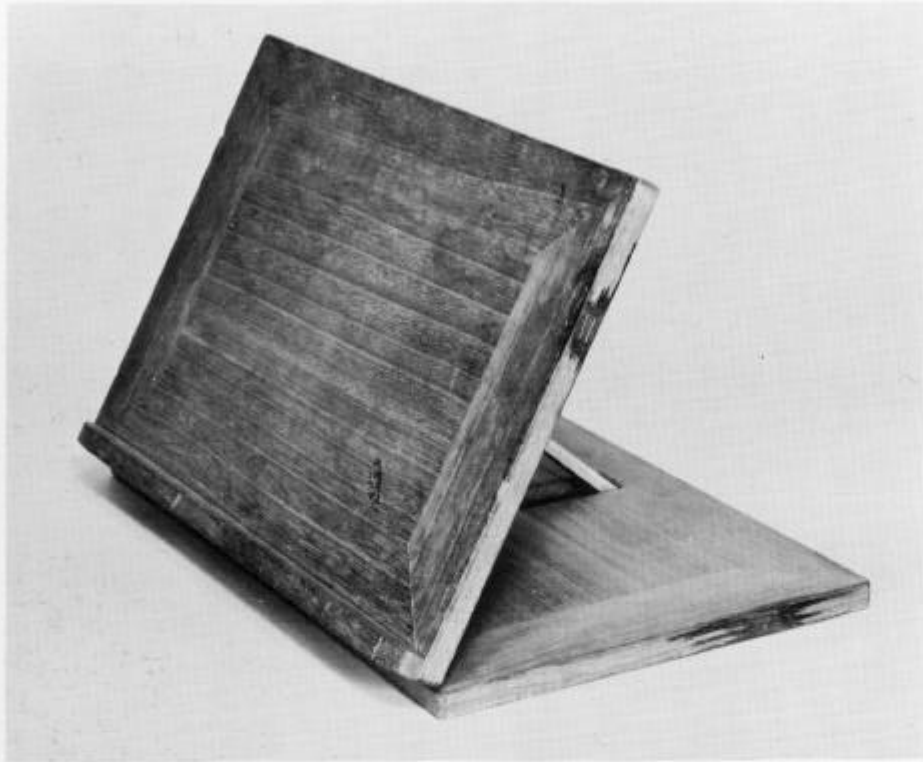


⑤ 橋本景岳所用 桐製書物挾板 はまもと



光明正大疎暢洞達なること青天白日の如く、高山大川の如く、雷霆の威たり雨露の澤たるが如く、龍虎の猛たり麟鳳の祥たるが如く、磊々落落纖芥も疑ふ可き無き者は必ず君子なり。

心正しうして後事理む可く、理明らかにして後心正しうす可く、學を講じて後理明らかす可し。



⑤⑤ 橋本景岳所用 桐製書見台



⑤⑥ 橋本景岳所用 大硯





明道館諸役者名簿

⑤ 橋本景岳筆「明道館諸役者名簿」

|    |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 總收 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 |
|    | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 |
|    | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 |
|    | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 |
|    | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 | 山崎平藏 |

|    |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 子監 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 |
|    | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 |
|    | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 |
|    | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 |
|    | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 | 長谷部三平 |

⑤ 橋本景岳筆 学制に関する意見劄子

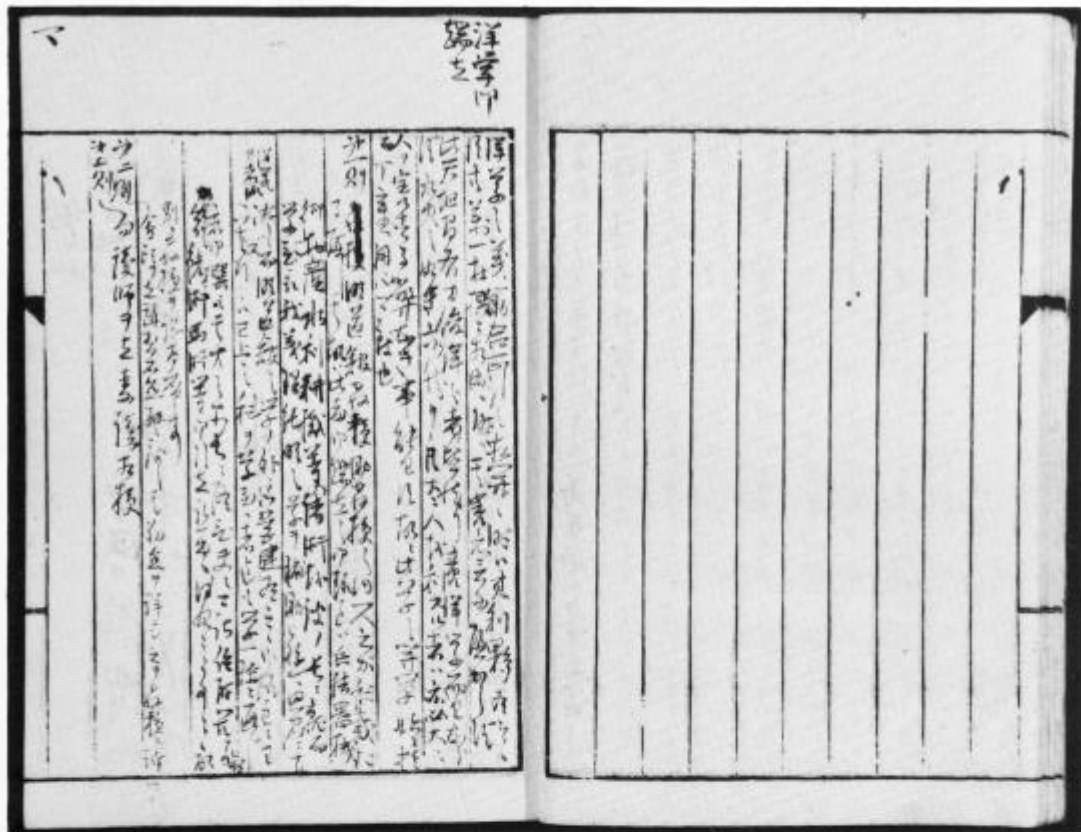


面諛遁辭に長じ、古人之所謂郷愿なるものに陥り、中々安心して可二倚頼一者にては無二御座一候。其に引替へ、豪放磊落・跌宕不羈・純正剛毅・果烈狷介之性質こそ、末頼母しく被レ思候。併し此等の人物は、生來人に傑出致居候者故、自分に恃む處ありて、人に就き人に屈し不レ申、動もすれば庸人を輕蔑し、衆論に抵觸する患御座候者にて、即自レ古英雄豪傑之人毎度危禍に出遇候は、畢竟此に根さし候事に御座候。右様之性質に御座候故、兎角節を折り、書を讀、理を講する等の事は好不レ申、學問は厭棄致しやすくして度外に放擲候弊も往々有レ之候得共、如何に豪放・磊落・剛毅・狷介なれば逆、道理に熟せず學術に明ならずしては、大節義・大機略を具へ、大作用・大處置を仕出來し候義、甚以無二覺束一奉レ存候。此等之人物を誘導して、之心折せしめ之に學を爲レ積、藝術を鑿磨爲レ致候てこそ、國家の御有用にも相成、學問の光も顯れ可レ申奉レ存候。左なくして局々猥瑣之人物に小廉・曲謹文教込み候は、小人の腹赤なる上に、表飾之道具を爲レ添候迄にて、外に益もなき義、學問と申者は世に在る方、結局害と相成可レ申候。私に相考候に、當今之御仕掛にては、何れ行くくは御家中之子弟輩一統、學校へ罷出、學はさる者なき勢に相運可レ申候。左すれば、多勢之中には自然右様傑出之人物も可レ有レ之候。萬一右様之人物幸に有レ之候ても、方今之學校にては急度其材を爲レ成候見込無二御座一候。其譯は、教官靈活眼・大規模無レ之故、大才を看破する事能はざる弊あり。又人を取に、細行小事を苛督して、其大處を忽略する弊あり。又己に同じき者を好み異論異見あるものを嫌ふ弊あり。此三弊除かざる内は、逆も傑出之人材を心服せしめ、我より治鎔致し候事は出來不レ申、凡そ人を識にも教るにも仕立揚候にも、己の分量丈にて、英雄ならば英雄を知り、聖賢ならば聖賢を知り可レ申、斗筭之人にて、英雄聖賢を知りて、之を仕立揚候事は勿論無レ之善に御座候。只今學校の有様にては、非常の材有レ之候は、我より彼を看破して之を籠絡し、之を心服せしめて、之を薰陶すること出來不レ申、却て彼より我を見すかし候て、侮慢不遜之振舞等品により相始可レ申候。

又古來より迂儒之陋見にて、兎角技藝を卑視して、之を力修する者を譏嘲致候。是誠に蒙昧不通の論に御座候。聖人之道と申も、畢竟人倫日用の外には無し之候へば、物外之道にてはなし、物外の道ならねば、事を離れ候事は無し之苦にて、所詮、道は却て技よりして進入候者と愚考仕居候。然るに己の不能拙劣を掩ふ爲、徒に空理之談を喜び、著實の技藝を嫌候は、可レ笑の至に御座候。自レ古聖賢の無能なる者一も有レ之候様相見不レ申候。聖賢と申は多能にして、能を頼まず、能に伐らず、技藝を修めて、技藝に局せず、技藝の中に於て妙理の存する所を知り、衆藝の要一致に湊會する處に覺有レ之人と被レ考申候。然處、當今之教官右等の處に心附不レ申候哉、目今御端立之兵科を始として、其他の諸科共に一向念頭に掛け不レ申、却て吾道之累とも可レ相成一存候哉、夫々へ人材等御配り被レ成候事など館内の妨にも相成候様心得、何となく愚考仕居候鹽梅に被レ察申候。此等は固陋之最上、笑止の至に御座候。萬一御家中一統に空理之論毫髪を折ち候程、精微に入候共、身に覺えたる實藝なく、盡く有髮禪の如き士のみに相成候は、軍讓は誰か當り可レ申哉。會計は誰、農田・水利は誰、製械・開物は誰に託し可レ申哉。國家を治候には、色々の道具無くては修り不レ申事、猶一家にしても、様々の器什なくしては生命の保續出來不レ申に同し。此等之事さへ心附不レ申、吾學に大關係之治事之諸科をも、慢看放過し置き、何を以て治國平天下の業を爲し、何を以て政教一致文武不岐之御誂相果し候見詰に御座候哉、甚覺來なき義と奉レ存候。

將又人材を得候は、唯教育薰陶之上に有レ之のみならず、又其材を取りて其長を爲レ展、併せて傍人をして觀感憤起せしめ、汚下に安んぜざらしむるの術、亦肝要と奉レ存候。若徒に人材を造成するに規々として、之を取り之を用ゆる道、知らざる時は、人材下に淹滯するの患有るのみならず、遂に造成の縁も塞り可レ申候得は、選舉之道も豫め講明致し置度奉レ存候。此等も固より上の御著目肝要とは乍レ申、人々の小長・微能迄、逐一上聽に達し候者にも無し之候へは、教官たる者目擊透視して、其材其能を不レ捨置一推舉可レ致事當務に可レ有御座一候。何れ大業を成し候には、一藝一材も捨置申理は無し之苦に御座候。若し微能なり進捨置候は、中人以下之者過半自ら望を絶ち、侍を失ひ、自棄に安んじ、人材の生する道進邁仕候事不レ些べく奉レ存候。微能・小長は儲置、選舉之大體を立置候事、尤も大切之義と奉レ存候。此大體一定致し候は、教育の道も趨向區々とならずして、教ゆる者學ふ者、共に其目的一に歸し可レ申候。此大體定まらずして、徒に教導に勞し候は、足を知らずして履を作る同前に御座候得ば、選舉の大體を豫め心得居可レ申事、此亦教官の當務なる義と奉レ存候。

⑤⑨ 橋本景岳筆 学制に関する意見劄子



⑥ 橋本景岳筆 洋書習学所設立に関する布令草稿

洋學御端立

洋學之義筋合正しく相開候時ハ、其利夥有レ之候得共、萬一杜撰ニ相成候時ハ、其害亦言ふへからず。此天地間有力俊偉之者皆然リ。當洋學而已ならず、水火之如き亦然リ。凡大二人を利スル者ハ、亦必大二人ヲ害する弊なき事能はず。故に此學の開闢始ニ於て丁重用心可レ致也。

第一則

明道館教授助教之内一人之が總裁たるべし。其故ハ此度御端立之御趣意ハ、兵法・器械術・物産・水利・耕織等の諸術を、彼ノ長ニ就て學び取、我義理純明之學ヲ補助被レ遊候思召ニて、決して明道館之學ノ外ニ洋學と申者ニ派御營建有レ之候趣意ニは候はず、行々ハ已上之科を學び候者迄も、學一經にノ通じ候者御撰ミ、其方の所長ニ隨ひ、夫々可レ被レ仰付一筈に候間、全く今日銃術・馬術等御引立被レ成候ト同様之事ニ候故、別ニ教授ヲ設け不レ申事。

第二則

會頭ヲ立、講習不レ怠様ニ致し、其勤怠ヲ詳ニシ、之ヲ教授ニ訴フ。

第三則

句讀師ヲ立、素讀相授。



算學は人世必用の一科にして、即ち古より六藝の一に加へ、  
 皇國の舊き御制度にも既に學科に被一立置一候程之必須肝要なる學  
 術に有レ之候。凡て國用を辨するの基本、民生に便するの根元、賦  
 税を均ふし、錢穀を使ひ、冗費を除き、遺利を認め、量入制出  
 の政を立、施予借貸等、其宜しきを得るに至る迄、盡く算術の力  
 に頼らすと云ふ事なきは勿論なり。其上天文・曆象・日月・星辰  
 の運行を稽へ、律量・度衡の分寸を定め、及び物の遠近・高低を  
 測量し、其方圓・曲直を規準して、煩銃射彈の用を達し、土木經  
 營の工を利する等、亦算術に資らざる事を得ず。右に就て相考候  
 へば、算術は總て諸學科に交渉して其扶助羽翼となり候者にて、  
 諸學をして其實用を達せしめ候場合に於ては、缺くへからざる學  
 科に付、今度右の御目的を以て算科御端立に相成候義に有レ之候  
 間、何分實用急務を専ら致し、以上の御趣意に相叶候様、相心得  
 取立可レ申旨掛りの者へ可レ被一申聞一候。

算學は人世必用の一科にして、即ち古より六藝の一に加へ、  
 皇國の舊き御制度にも既に學科に被一立置一候程之必須肝要なる學  
 術に有レ之候。凡て國用を辨するの基本、民生に便するの根元、賦  
 税を均ふし、錢穀を使ひ、冗費を除き、遺利を認め、量入制出  
 の政を立、施予借貸等、其宜しきを得るに至る迄、盡く算術の力  
 に頼らすと云ふ事なきは勿論なり。其上天文・曆象・日月・星辰  
 の運行を稽へ、律量・度衡の分寸を定め、及び物の遠近・高低を  
 測量し、其方圓・曲直を規準して、煩銃射彈の用を達し、土木經  
 營の工を利する等、亦算術に資らざる事を得ず。右に就て相考候  
 へば、算術は總て諸學科に交渉して其扶助羽翼となり候者にて、  
 諸學をして其實用を達せしめ候場合に於ては、缺くへからざる學  
 科に付、今度右の御目的を以て算科御端立に相成候義に有レ之候  
 間、何分實用急務を専ら致し、以上の御趣意に相叶候様、相心得  
 取立可レ申旨掛りの者へ可レ被一申聞一候。

⑥1 橋本景岳筆 明道館中に算科局を設くべき意見書





他國修業被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候者 定額三人扶持。

修業口出精之者は、半年或は一年程御見届之上、師家取扱等の義も、定額の外にて、御手當可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候。大器御造成之御見込を以て十五歳以下之者へ、修業仰付られ候節は、定額二人扶持と御定に相成、師家取扱等之儀は、別に御手當被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>然哉。

右修業被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>の者、修行底に係り候無<sub>レ</sub>據入費書籍買入、器械製作等、願出候は、御評議の上無利息拜借、又は御買上等に可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>候哉。

當人十分之器には無<sub>レ</sub>之共、年若にも有<sub>レ</sub>之、家道も富有に有<sub>レ</sub>之、折角修業致候は、行末御用にも可<sub>二</sub>相立<sub>一</sub>、此表に罷在候ては種々指支有<sub>レ</sub>之、格別出精致兼候者、御内御移り等を以て修行罷出候者、修業中別段御手當には及可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申哉。

但し修業中格別出精或は致<sub>二</sub>上達<sub>一</sub>候者は、其節別段の御評議を以て、金五兩或は二人扶持位可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下<sub>一</sub>哉。

修行願出候者 定額壹人半扶持。

當人平生の藝術所業心得方等御吟味の上、御見込御座候者には、願被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候上にて、其人相當之一技取調、右練習等被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、別段爲<sub>二</sub>御手當金二三兩五兩位被<sub>レ</sub>下可<sub>レ</sub>然哉。且又右取調候に付、無<sub>レ</sub>據入費願出候は、御評議の上、無利息拜借、又は物に寄り其品御買上等可<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>哉。

右御札之處、平生不<sub>レ</sub>宜者に御座候て、修業罷在候趣意柄も、眩と致し不<sub>レ</sub>申者は、定額も被<sub>レ</sub>下候に及不<sub>レ</sub>申候事。

但し修業中逐々改心致<sub>二</sub>勲勵<sub>一</sub>候は、其時に至り定額丈被<sub>レ</sub>下可<sub>レ</sub>然哉。右の外、非常の材御仕立之義は、自ら非常の御處置可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、強ち定格に拘り難<sub>レ</sub>申奉<sub>レ</sub>存候。

既に右様修業中之御世話有<sub>レ</sub>之義御座候は、歸國之上御督察之儀、可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>肝要<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>存候。二年大比して其德行道藝を考候は周禮之定法、三考して其有効無効を賞罰致候は唐虞の成憲にて、人を用ゐる人を使ふには、考効課督の方尤も大切と奉<sub>レ</sub>存候。





|        |    |          |    |
|--------|----|----------|----|
| 西洋事情外篇 | 三冊 | 英國志      | 一冊 |
| 同次篇    | 二冊 | 和蘭王兵李校校書 | 一冊 |
| 戰地必要   | 六冊 | 博物新編     | 五冊 |
| 理学提要   | 六冊 | 萬國公法     | 四冊 |
| 西洋經濟小學 | 二冊 |          |    |

|          |    |         |     |
|----------|----|---------|-----|
| 本朝諸士百家紀  | 十冊 | 爆銃提綱    | 一冊  |
| 印典       | 一冊 | 步兵運動軌範  | 四冊  |
| 墨池編      | 五冊 | 細倉記     | 五冊  |
| 北條五代記    | 五冊 | 爆銃使用規範  | 二冊  |
| 如前步操軌範五編 | 五冊 | 北越春月山船記 | 十四冊 |

其意不在書 事機教先赴  
先據函谷関 先塞成阜略

⑤ 橋本景岳筆「其意不在書云々」の詩幅

其意不在書 事機教先赴  
先據函谷関 先塞成阜略

孤月暗明雲有罪  
扁舟來去水無心

⑥ 橋本景岳筆「孤月暗明云々」の書幅

孤月暗明雲有罪  
扁舟來去水無心

暗鳴則山岳崩頽云々

⑥7 橋本景岳筆「暗鳴則山岳崩頽云々」の書幅

掩門深坐坐煙深日暮風帶雲來坐  
 無得飲無色 閑心一待上林秋  
 三本封好字 好字法年二月十日  
 半生落魄 觀字 山東 寄友人 閑遠 又 行 汝 羅  
 萬居 一事 臥 看 星 斗 滿 秋 空

⑥8 橋本景岳筆「半生落魄云々」の詩・頼三樹三郎筆「掩門深坐云々」の詩貼交ぜの幅

(橋本景岳詩)

半生落魄して山東に客たり、嘗め尽す人間の達又窮、浴し罷んで閑居  
 一事無し、臥して看る星斗の秋空に満つるを

夢回へり燭燼きて茅齊寂たり、喜んで見る氷輪の老槐に宿るを、幽興  
 窓を開いて句を推すこと久し、坐ろに恐る露気の衰骸を襲ふを

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and written in a cursive style.

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and written in a cursive style. At the bottom, there is a signature and a date: 村田氏宛 (To Mr. Murata) and 永享 (Eiyou).

⑥ 橋本景岳書状 村田氏宛 (いわゆる「日露同盟論」の書翰)



④ 橋本景岳「日露同盟」の書状抄録

書籍二冊相廻し申し候。これは復齋へ、包物は宿へ願上げ奉り候。相替らず復君・長谷へは宜しく願ひ奉り候。

本月十一日発の御翰相達し、嚴寒の節に御座候処、先づ以て恐悦し奉り候。随つて拝賀し奉り候。次に御休情下さるべく候。井上・埴原着の由云々拝承。助教仰付けらるの一条、これ亦拝承。外塾へ出張の事、これ又拝承。何れもおおひ御都合宜しかるべしと同慶し奉り候。今便は殊の外取込み候間、一々詳答仕らず候。

( 中 略 )

さて又去る十三日夕、亜米利加使節申立並に應對書和解二通御渡しに相成り候。直ちに拝見仰せ付けられ、例に依り事理分明。その内英夷とは段々内談もこれ有る塩梅、且は虚喝も御座有るべく候へども、何分一々我が弊に中り候処、恐るべし恐るべし。この義は実に神州の御大事、今度彼の二個条御許しに相成り候と、即ち御国体変遷の姿に候。さりながら只今と相成り候て、鎖国独立致すべからざるは、固より識者に於ては瞭然にこれ有るべく候へば、固より拒絶相成らざるは論を俟たず候へ

ども、唯如何せん、廟堂上の小児輩、とてもその辺の咄出来候者一人もなし。

( 中 略 )

当今の勢ひ、日本の事務、国内の御処置と、外蕃御待遇との二件に帰すべく存じ奉り候。外蕃御待遇に付きては、海外の事情第一に御推察これ有り度く候。方今の勢ひは、行々は五大洲一図に同盟国に相成り、盟主相立て候ひて四方の干戈相休み申すべく相運び候はんと存じ奉り候。右盟主は先づ英・魯の内にこれ有るべく候。英は慍悍貧欲、魯は沈鷲嚴整、何れ後には魯へ人望帰すべく存じ奉り候。

さて日本はとても独立相叶ひ難く候。独立に致し候には、山丹・満洲の辺・朝鮮国を併せ、且亜墨利加洲、或ひは印度地内に領を持たずしては、とても望みの如くならず候。これは当今は甚だ六ヶ敷候。その訳は、印度は西洋に領され、山丹辺は魯国にて手を付掛け居り候。その上、今は力足らず、とても西洋諸国の兵に敵対して、比年連戦は覺束無く候間、かへつて今の内同盟国に相成り然るべく候。

然る処、亜国その外諸国は交り置き候も苦しからず候へども、英・魯は両雄並び立たざる国故、甚だ以て扱ひかね申し候。そ

の意は既に「ハルレス」口上にも歴然、その上近來争鬪の迹にて明白に御座候。これに依り、後日英より魯を伐つ先手を頼み候か、又は蝦夷・箱館借し呉れ候旨願ひ出づべく候。その時、断然英を断り候か、又は従ひ候か、定策これ有るべき事。

小拙は是非魯に従ひ度く存じ奉り候。その訳は、魯は信あり、隣境なり、且魯と我れとは唇齒の國、我れ魯に従ひ候はば、魯我れを徳とすべく候。さすれば、英怒り我れを伐つべし、これ我が願ひなり。我れ孤立にて西洋同盟の諸國に敵対は致し難く、魯の後援有れば、たとひ敗るるも皆滅に至らざるは了然に候。然れば、この一戦、我が弱を強に轉じ、危を安に変じ候大機關に御座候て、これより我が日本も眞の強國に相成るべく候。その上、その戦争までには、是非魯國並びに亞國より人を倩ひて、我が國の大改革始め、水軍陸戦とも精勵致さすべしと存じ奉り候。

さて右様魯の親昵を得候には、所謂報じ難きの恩これ無くしては相濟まず候。魯國へ我れより使節を以て和親を乞ひ候積り、その段には種々心算これ有り候へども、筆にては述べ難く候。

さて魯に國を託し候までに、外より擾亂致され候ては相成らず候故、それまでは何分重墨利加を頼ひつけ、英夷の跋扈強梁等は成るだけ拒み貫ひ候事。これ亦色々工夫も御座候へども、

何も応答言辭の間になくしては、口にも述べ難く存じ奉り候事。これに依り交易、ミニストル指置の二ヶ条相許し、その中交易は矢張り官府交易に致し度く候間、勝手交易は相断り申し度く候事。阿片並に借地の事は断り、港は堺・神奈川・箱館・長崎の四個所位に極め置き申し度き事。何分亞を一ヶの東藩と見、西洋を我が所屬と思ひ、魯を兄弟唇齒となし、近國を掠略する事、緊要第一と存じ奉り候。

さて、右様大變革相始め候に就きては、内地の御処置、これまでの旧套にては相濟まず、第一建儲、第二我が公・水老公・薩公位を国内事務宰相の專權にして、肥前公を外国事務宰相の專權にし、それに川路・永井・岩瀬位を指添へ、その外天下有名達識の士を御儒者と申す名目にて、陪臣処士に拘はらず撰挙致し、これも右專權の宰相に派別に致し付け置き、尾張・因州を京師の守護に、その指添に彦根・戸田位、蝦夷へは伊達・遠州・土州侯位相遣し、その外小名有志の向を挙用候はば、今の勢ひにても随分一芝居出来候はんかと存じ奉り候。

その上魯西亜・亞墨利加より、諸藝術の師範役五十人ばかり借り受け、諸國に學術稽古所相起し、物産の道を手広に始め、内地の乞児雲介の類に頭を立て、相應の賄遣し蝦夷へ遣し、山海の營致させ、往來は重に海路より致し候はば、蝦夷も忽ち開

壘相成るべく、航海術も直ちに熟すべく存じ奉り候。因りて一句を吟じ申し候。

人間自ら適用の土有り 天下何ぞ為すべきの時無からん

(人間自有適用土、天下何無可為時)

嗚呼これ等の事、夢にも見難く存じ奉り候。その中、薩の事は御不同意にもこれ有るべく候へども、これは小拙大いに所見これ有る事に御座候。畢竟日本国中を一家と見候上は、小嫌猜疑には拘るべからざるは、勿論に御座候。

昨日も川路の咄聞き候処、これも右までの見は承らず候へども、何分日本に於て遠大の処置これ無くしては相濟まず、就きては魯と和親を結び、且建儲を致し、根本を固め候腹はこれ有る塩梅に御座候。さりながら、全く風波を恐れ居り候由、その内。実に難決なる咄どもこれ有り、計らずも感慨落涙仕り候、何分この後何等の辺へ落付き申すべきや、頓と計られず、実に志士憤慨すべきの秋に御座候。

因州・土州二候には、容易ならざる御感慨、土州などは御国政一変の御思召候由、この間中、我が君上と頻りに御高論御座候。小拙も蔭ながら周旋仕り、折角我が君を正鵠に仕り掛け申し候。これ聊か賤臣の微忠にて、これにて何卒御英果御憤悱の御覚相立ち、已後如何様の大事落ち来り候とも、御踏堪らへ出

来候やう致し度き心得に御座候。

( 中 略 )

この節は西城やら、亜墨利加やら、一橋公の御講究やら、列侯の御研究やらにて、御暇これ無く候。小拙も分外取込み候故、ここに閑筆仕り候。

十一月廿八日

景鄂

懸堂兄

再伸、御国は雪も少く候由、この表は異常の暖気、この間は日々降雨、寒暖計四十七八度、五十度位に御座候。以上

皇國の尊き万国無比は、主上天日嗣に在らせられ、臣子も亦諸神の胤を辱  
 くるは勿論、風俗は淳美、士大夫忠義に厚く、廉恥を尚び、農商は實実に  
 して上を尊び法を守り、下に不軌を謀り法憲に触るの民鮮く、上に軀を捨て  
 節を守るの人多きよりして、政令法度寛大嚴肅にして、各その職を務め、そ  
 の業に安んじ、且、土地の膏腴万邦に卓越して物産饒多、金石草木より魚貝  
 禽獸に至るまで、給足せざるものなくして、今日まで衣食飽暖に暮らし来り  
 候は、実に皇國に生れずんば叶はざる義にて、これ等尽く天恩に関係仕り候  
 事と有難く存じ奉り候。

一、さて、これまで外寇これ無き義は、固より天神地祇、冥々の中に御加護在  
 らせられ候義は申すまでもなく、かの弘安の度、北条時宗元兵二十万（通例十  
 万と申し唱へ候へども、実は兵數一十万のよし、十万と申すは、元人大敗を諱むで  
 の言に御座有るべく候。）を靈しにし、文祿の度、豊臣秀吉朝鮮八道を蹂躪仕  
 り候義、異國までも伝聞仕り、格別の武威贊稱仕り居り候様子も相聞こえ、  
 この二挙は頗る皇國尚武の御稜威を耀かすに足る事に御座候へども、今日ま  
 で外患なきは、全くこれに限り候やうに心得候は、固陋の偏見と存じ奉り候。  
 元来、皇國の形勢は、四方大海を以て際りとし、所謂天嶮の國にて、かの秦  
 始・漢武の勇鷲驍武の者あり候ても、かつて毫髪も手指相成らざる位の事に  
 御座候。

⑦ 橋本景岳筆 三條実万への呈書控（部分）

皇國の尊き万国無比は、主上天日嗣に在らせられ、臣子も亦諸神の胤を辱  
 くるは勿論、風俗は淳美、士大夫忠義に厚く、廉恥を尚び、農商は實実に  
 して上を尊び法を守り、下に不軌を謀り法憲に触るの民鮮く、上に軀を捨て  
 節を守るの人多きよりして、政令法度寛大嚴肅にして、各その職を務め、そ  
 の業に安んじ、且、土地の膏腴万邦に卓越して物産饒多、金石草木より魚貝  
 禽獸に至るまで、給足せざるものなくして、今日まで衣食飽暖に暮らし来り  
 候は、実に皇國に生れずんば叶はざる義にて、これ等尽く天恩に関係仕り候  
 事と有難く存じ奉り候。

一、さて、これまで外寇これ無き義は、固より天神地祇、冥々の中に御加護在  
 らせられ候義は申すまでもなく、かの弘安の度、北条時宗元兵二十万（通例十  
 万と申し唱へ候へども、実は兵數一十万のよし、十万と申すは、元人大敗を諱むで  
 の言に御座有るべく候。）を靈しにし、文祿の度、豊臣秀吉朝鮮八道を蹂躪仕  
 り候義、異國までも伝聞仕り、格別の武威贊稱仕り居り候様子も相聞こえ、  
 この二挙は頗る皇國尚武の御稜威を耀かすに足る事に御座候へども、今日ま  
 で外患なきは、全くこれに限り候やうに心得候は、固陋の偏見と存じ奉り候。  
 元来、皇國の形勢は、四方大海を以て際りとし、所謂天嶮の國にて、かの秦  
 始・漢武の勇鷲驍武の者あり候ても、かつて毫髪も手指相成らざる位の事に  
 御座候。







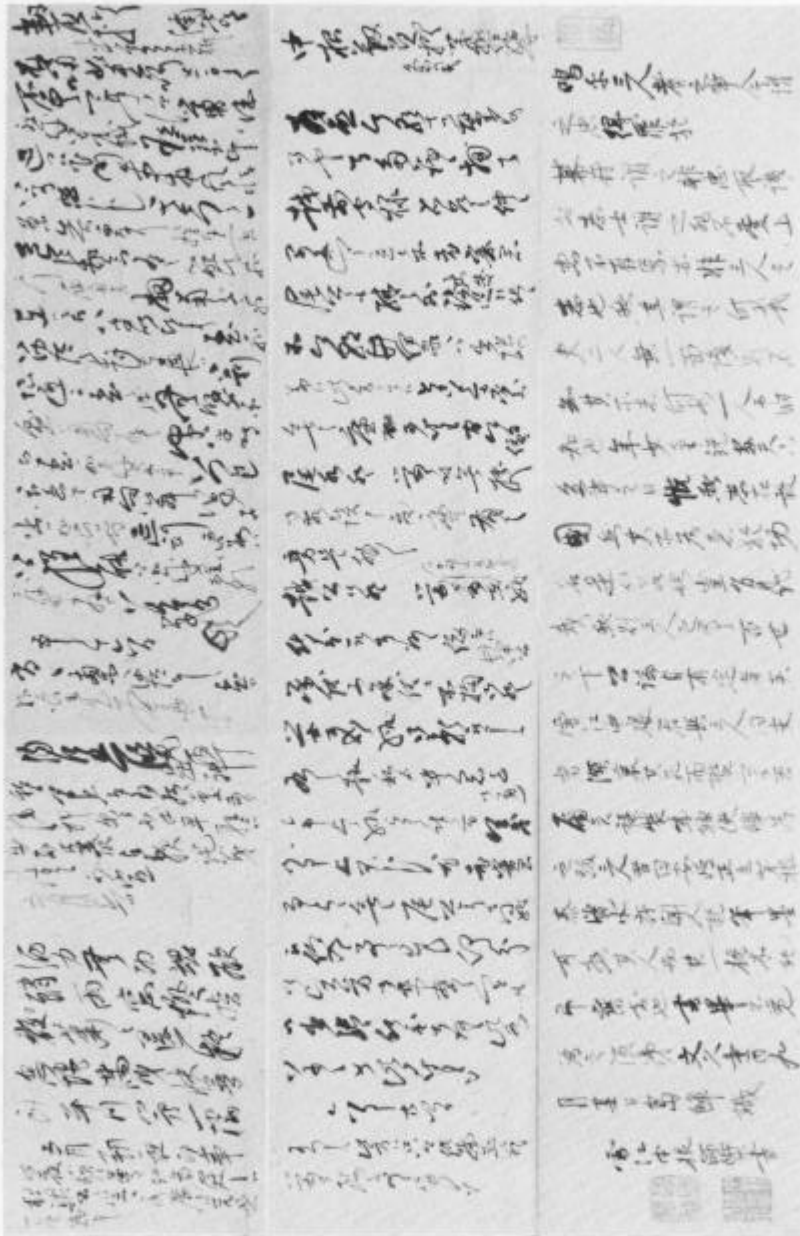
以別緒得御意候。愈御清安奉拝賀候。然者当月五日之  
 義者、其翌六日大早着之上既二御承知と奉存候。其節倉  
 皇錯傳一筆も不呈多罪御用捨可被下候。扱衰世之習無致  
 方八不及申義二御座候へ共、如何相考候而も臣子之情痛  
 嘆二堪兼、誠二血涙之至、両兄二も定而不容易御憤懣と  
 奉推察候。小拙扱は最早志氣銷沮仕、豪釐も世二望なく  
 存居申候。此後八何分二も再御枉冤之清弁奉折候外なく  
 と八奉存候へ共泥々滞々の廟堂有（註）振力可申與者も見当  
 不申誠二君子道隋、小人道長之秋と深慨嘆仕居候。尚委  
 細八村田様分御聞取、今後之御工夫能々御研究被下、小  
 拙之心得等も御注意被成下候様万祈仕候。拭涕書之。  
 七月十五日  
 両兄  
 池

八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日  
 八月廿五日

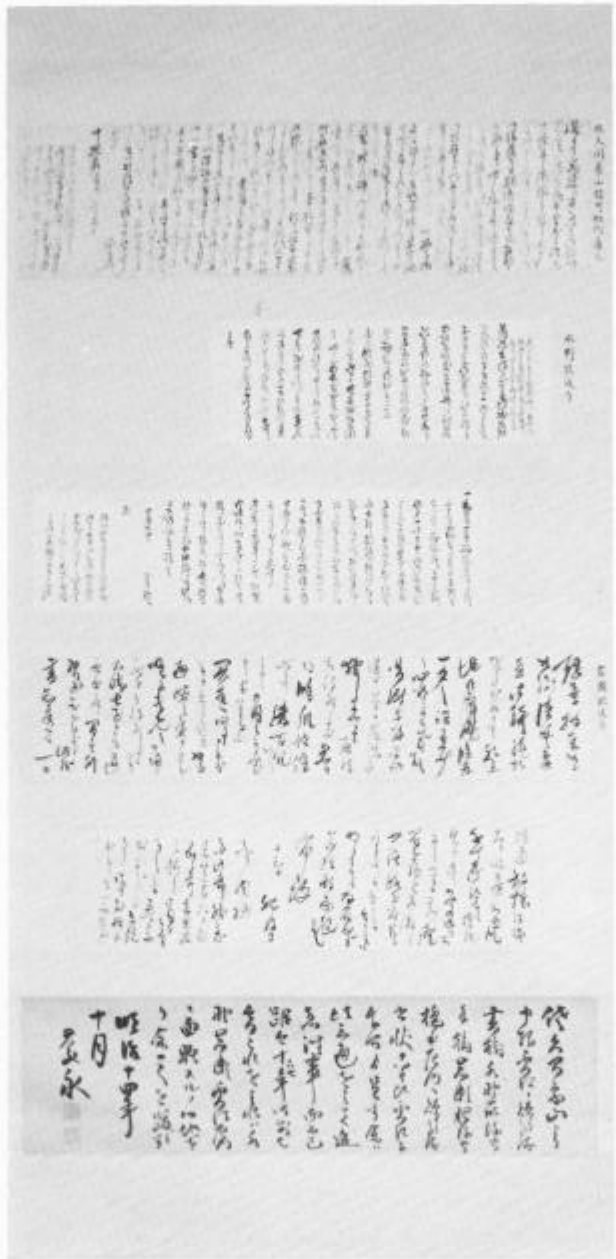
一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

⑦ 橋本景岳書状 榊原幸八・伊藤友四郎宛



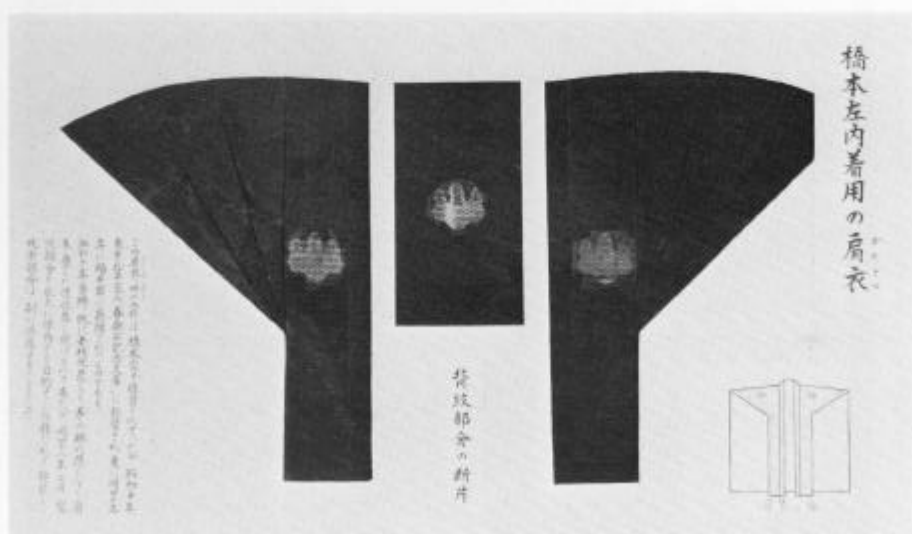
⑦③ 「三友遺墨」 橋本景岳・安島帶刀・茅ノ根伊予介書状  
並に中根雪江筆貼交ぜの幅



⑦④ 「三英遺墨」 佐久間象山・水野忠徳・岩瀬忠震書状  
 並に松平春嶽跋文貼交ぜの幅



⑦⑤ 橋本景岳拝領 葵紋付長上下・同半上下



⑦⑤ 橋本景岳所用 夏用肩衣

①⑦ 松平春嶽筆「我無才略云々」の詩幅

我無才畧承考奇常融象  
 從所算人多渾如言道妙凡  
 雷晴雨驟期未偶作  
 春嶽

我に才略無く我に奇無し。常に衆言を聴きて宜しき所に  
 従ふ。人事渾て天道の妙の如し。風雷晴雨豫め期し難し。

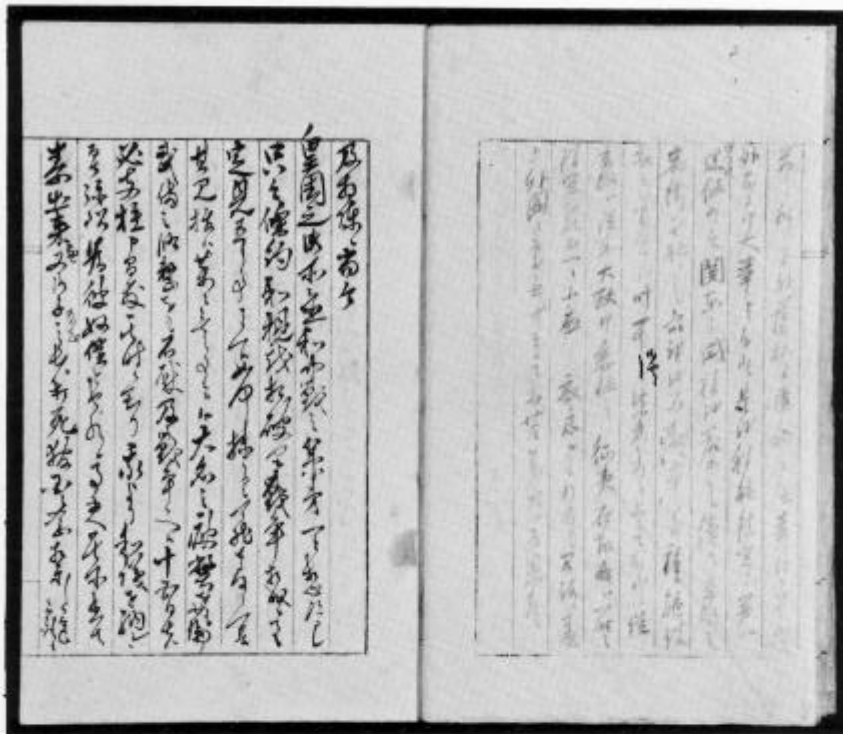
右偶作 春 嶽

①⑧ 松平春嶽筆「時勢急務策」  
 橋本景岳・中根雪江朱筆添削

時勢急務策  
 松平春嶽  
 橋本景岳・中根雪江朱筆添削

時勢急務策  
 松平春嶽  
 橋本景岳・中根雪江朱筆添削

⑧ 松平春嶽筆「時勢急務策」  
橋本景岳・中根雪江米筆添削



節ニ至り、外藩杯より遠勅之廉責付候ハ、以之外なる御大事と奉レ存候。是を程能鎮定候ニ者、第一賢明之建儲有レ之、関東之威權を蔽ニシ、統て京師之宿衛を杜にし、衆望を為レ厭候事等、種々施設無レ之候半而者不レ叶事御座候。此策被レ行候上ならハ、從ニ京師一者從來大政御委任之征夷府故、或者一時之權宜を以て、一々不レ應ニ歎慮一とも、行末之見詰ニ基き外国御所置杯有之候而も、不レ苦儀歎と奉ニ愚考一候。

及ニ拝陳一候。当今皇国之御所置、和而戰之策第一と相心得申候只今條約和親を相破り戰爭相成候ても、定見有レ之事ニ候ハ、如何様ニ而も可レ然奉レ存候ハ共、其見抜ハ萬々無レ之事ニ而、諸大名之疲弊をも不レ論、武備之修整をも不レ厭、及ニ戰爭一候ハ、十五日者必支柱申間敷、其時ニ至り我より和議を納レ候而者、弥以為レ彼奴僕とせられ候事ゆへ、其所置者素出来兼、又臣子有志之者打死報国之念相示し候而已ニ御座候。



英旨不レ堪ニ惶懼ニ盡嗽畢、三四奉ニ欽讀ニ候處、爲ニ天下ニ  
 御痛心被レ爲レ在候。御誠意、蕩然御文字ニ發露仕、誠以難レ有奉レ存候。  
 是非、特命奉ニ承諾、明日は疾ク罷越可レ奉ニ申上ニ、苦ニ御座候得共、聊所  
 懷も御座候ニ付、乍ニ恐惶ニ犯ニ萬死ニ之罪拜陳仕候。川路義ハ御承知も  
 被レ爲レ在候老練圓熟之者にして、假令奉レ含ニ英旨ニ候とも、一知半面  
 之者ニ其胸臆を全然吐露シ不レ可レ仕、何れ雙方其才其識洞解不レ仕迄は、  
 充分之懇語相發候とも、中々不レ可レ信と奉ニ愚考ニ候。左候ハ使、命  
 奉レ蒙候も、明日一回にては不ニ相濟、且巧辭寄託して禍を人に嫁候ハ、  
 此老姦狡猾之伎倆ニ御座候へは、既に川路に御内託被レ爲レ在候上、自然  
 此事在然相成候ハ、彼必其由誰に存し某に在り候扨適辭可ニ申出ニ候。  
 其期ニ至り我若シ瞭若一嘆發シ候ハ、毎事盡ク彼の術中ニ陥り、使乎  
 の任に相當不レ仕様奉ニ存上ニ候。扨其程迄ニ八面手を籠候事、今日之御  
 模様にてハ至極難事ニ御座候。此邊ハ過日來鞠負へも篤申談置候義ニ御  
 座候へば、定て既に奉レ違ニ御聽ニ候半と奉レ存候。(中略) 微臣紀  
 之如き者、既ニ前件之如き重任に不レ堪、且臣紀の所見正に如レ右所陳ニ  
 御座候間、何卒此、御一條は、臣紀に賢る者に被レ命候様、萬々奉ニ愚  
 願ニ候。

② 橋本景岳書状 松平春嶽宛 (川路左衛門尉説得の使命を拝辞する書状)



⑧ 橋本景岳筆 川路左衛門尉に初対面応答書

初、取次富塚順作罷出候故、今日報負可罷出一答之處、指掛無レ據用事出來、依て急々小子へ使命相當り、かく遅刻相成失敬の趣申込候。「只今退出、暫御控可レ被レ下候」直ちに對面。表座敷鴨居より第三疊目に占レ席、做々然として「何用にて御出候哉」と申。傍人有レ之候故、「寡君の密命に候間、御用にも不指支候はば左右御遠奉レ願候。其上にて可申上」と申。承諾。因て謹て御狀箱を兩手に捧げ、「御直書に候」と申。「聊直書に候哉」と申。推戴、小刀にて封を切、合印を改、拜誦。「諸々御美事なる御字面々々々」と稱贊。「儲、被レ御含一候次第は如何。」因進レ席曰、「此一條は、全く執事を天下之賢者有識と被レ存、過日於二營中一厚御頼被レ申候義の、從來御打明し無レ之は、全く執事は御頼の有無に不レ拘、御盡力は勿論と被レ存ての事に候。乍レ去餘りの遷延、不レ堪ニ焦思、乍レ辛爾、過日の次第。然處果して言下に御同意、益御同志の事明知、實に爲レ宗家一被レ悦候。儲、此一事件は四五年來の心配に候へ共、既往は説に無レ詮候。昨年に到候ては、墨使も登營に相成候位、夷蠻の情狀殆んど一變。就ては本朝も此迄の御體制にては難レ濟に付、寡君存にては、外向何分西洋の如く航海通商を専らにし、法律嚴整に取調、富饒の基を開、物産を起し、技藝を勵し、器械を研製し、兵制も大概彼に倣ひ被レ申度候得共、御國內の御大體は何地迄も宗祖の御舊制を概括して、建國の御大體を基礎と被レ致度御見込に候。尤此に至候ては、毫も外國の風習には難レ從、斷々御特見にて尊嚴の御國法御變無レ之様致度被レ存候。然處、外向の處置は漸々諸有司御心配にて、聊御趣向も相立可レ申候へ共、舊弊一洗して、國體は益尊嚴を極るに到候ては、第一將軍家自ら万機を躬し、源頭の活水滾々汨々流出來らざして、何ぞ諸有司切の力に相叶可レ申哉。



⑧松平春誠書状残片 橋本景岳宛（景岳の川路左衛門尉説得に際しての御書下）

川路の義音深く

（橋本景岳）（国家之御為入存居候）

得共、彼人鎖密門

熟二而厳しく形跡を

避く気味有之義

致洞察居候、若

此二件二付、容忍可待時

云々様之語氣有之候ハ者、

彼之実心にハ無之候間、

痛く弁折いたし

彼之実心秘藏、推而

詰問可申者也、

此義只今心付候故、書下々

遺之、

左内へ

廿六日之發御今日四日相達觀坡、  
 先以弥清宇珍重存候、次我等、夫  
 人、安并諸郎清全降意可給候、  
 (中略)  
 從是而も今日はくく<sup>と</sup>と相考候処、  
 我等者今日蒙寛典身二餘り雖有奉  
 存候へ共、唯々歎息不便落涙存候者  
 景岳二面、今日二至り候而者、乍家来  
 も景岳へ面皮次第も無之、辺外  
 へ無之、雪江杯者丈夫故たしも  
 宜候へ共、景岳之靈へ対し無申訳  
 次第二存候、依之午内々百疋も  
 宜候間、極内々金兵衛へ被仰間、  
 何となく興ノ番へ金兵衛の金子為  
 差出、金兵衛<sup>と</sup>十兵衛へ相渡、十  
 兵衛か花ても菓子ても買求候而何  
 となく景岳へ之位牌へ手向遣し度  
 候、表向いふと色々めんとう可有  
 之候間、足下方内々十兵衛へ御咄  
 有之、可然御頼申候、姑息かハ不  
 知候へ共、落涙之情美無止次第之  
 寸意ハ、御明察有之度候、  
 御思の露を仰きていやましに  
 涙こぼる、死出の旅人  
 今日之吹聴状と此書状とハ、内々  
 雪江へも御見七可被下候、一寸添  
 書早々不一、  
 (下略)

⑧松平春嶽書状  
 松平茂昭宛

廿六日之發御今日四日相達觀坡、  
 先以弥清宇珍重存候、次我等、夫  
 人、安并諸郎清全降意可給候、  
 (中略)  
 從是而も今日はくく<sup>と</sup>と相考候処、  
 我等者今日蒙寛典身二餘り雖有奉  
 存候へ共、唯々歎息不便落涙存候者  
 景岳二面、今日二至り候而者、乍家来  
 も景岳へ面皮次第も無之、辺外  
 へ無之、雪江杯者丈夫故たしも  
 宜候へ共、景岳之靈へ対し無申訳  
 次第二存候、依之午内々百疋も  
 宜候間、極内々金兵衛へ被仰間、  
 何となく興ノ番へ金兵衛の金子為  
 差出、金兵衛<sup>と</sup>十兵衛へ相渡、十  
 兵衛か花ても菓子ても買求候而何  
 となく景岳へ之位牌へ手向遣し度  
 候、表向いふと色々めんとう可有  
 之候間、足下方内々十兵衛へ御咄  
 有之、可然御頼申候、姑息かハ不  
 知候へ共、落涙之情美無止次第之  
 寸意ハ、御明察有之度候、  
 御思の露を仰きていやましに  
 涙こぼる、死出の旅人  
 今日之吹聴状と此書状とハ、内々  
 雪江へも御見七可被下候、一寸添  
 書早々不一、  
 (下略)

⑧③ 類

山陽筆 「橋北橋南云々」の詩幅

(橋本景岳より主君松平春嶽へ呈上の幅)

橋北橋南花影層  
 醉緒出沒水分明  
 隔水招招呼迭慶  
 山陽外史

橋北橋南花影層 醉緒出沒水分明

前汀認得旧相識 隔水招招呼迭慶

山陽外史



⑧④ 躍鯉模様蒔絵硯箱

嚴科を蒙り候は  
 覚悟の處、  
 今更驚駭せず、  
 是迄の忠誠  
 日月を貫き候は感  
 服、万々家臣  
 の罪を蒙り候に及ばずは  
 國家の幸甚に候、  
 我におゐて喜ぶところ、  
 高いよいよ任重く候間、  
 後來のところ申し談ず義も、  
 これ有るべく  
 愕然のあまり卒尔  
 の義これ有り候ては  
 我を見捨て候也

⑧松平春嶽筆 橋本景岳に賜う書

(一) 橋本  
 中将 戊午七月五日夜

左内

嚴科を蒙り候は  
 覚悟の處、  
 今更驚駭せず、  
 是迄の忠誠  
 日月を貫き候は感  
 服、万々家臣  
 の罪を蒙り候に及ばずは  
 國家の幸甚に候、  
 我におゐて喜ぶところ、  
 高いよいよ任重く候間、  
 後來のところ申し談ず義も、  
 これ有るべく

戊午初秋五日、吾が春嶽  
 公故ありて致仕の命を蒙  
 る。是の日、公物を親臣  
 五人賜ひ、以て之を勞獎  
 す。而して臣紀も亦た与  
 る。感恩の余り、一絶を  
 賦して以て謝し奉る。  
 龍門より墜落して龍に成らず。  
 僅に藻間に伏して唳鳴を試む。  
 この意蚕に明主に逢うて悟る。  
 賜恩の羅鯉心の懣きを慰む。

戊午初秋五日吾  
 春嶽公有故蒙致仕  
 命是日  
 公賜物親臣五人以勞  
 并之而臣紀亦共為感  
 恩之餘賦一絶以奉謝  
 龍門墜落不成龍  
 僅伏藻間試唳鳴  
 此意蚕逢  
 明主悟賜  
 息羅鯉慰心痛

⑧橋本景岳筆 「龍門墜落云々」の詩稿



⑤ 中根雪江筆 「虎児初生氣食牛云々」の詩幅

虎児初生氣食牛何物小  
大説剛柔日本元是彈  
丸地威服支那四百州

法正三月餘餘未産怒言似於  
在洲望軒至雲空の心也

雪江  
宣仁漢文

虎児初て生れ氣牛を食ふ、何ぞ小大を將  
て剛柔を説かん、日本元是れ彈丸の地、  
威服す支那四百州、



春岳手形

朝夕にこれをなかめてわか前に  
居るか如くに汝（いま）し思へよ

⑧ 松平春嶽手形並に惜別の和歌幅



⑨ 中根雪江所用 岩鷲時絵印籠  
(福井十四代藩主松平齊承より拝領)

用典も亦... 中根雪江書状 橋本景岳宛  
 御安慮可被成候。投賢兄御出府の義も存外に恰好御決議に相成、欣  
 幸不レ置候。(中略) 權六も歸北、追々造艦の儀も相決候哉。餘り石で  
 手を話候様成論に不レ相成、英氣不レ挫程にて手下し相成候様祈居候。  
 此表講武所海軍の儀も十九日より御開發に相成申候。屹度致候教授も  
 無レ之様子、無覺東ニ次第。乍レ併、猶又驚と探案致度と心懸申候。  
 墨國官吏も愈江戸へ被ニ召呼ニ候事に御決定にて、當月二日評定一座へ  
 被ニ仰出ニも有レ之、最早不レ違事と相見へ申候。今日は水老公被レ爲  
 召、御登營有レ之、御相談歎と思の外、御懇の御上意の上、御手自御差  
 之御臨指御拜領、御内願之通り、海防掛り御軍制掛り御免被ニ仰出ニ候  
 由。墨の登城等に付ても、六ヶ敷蛇び隠居を、上手に取除け候事と相  
 見へ申候。唯々面白からぬ事斗。嗚呼々々形勢中々不レ可ニ挽回ニ事と  
 相成申候。何分積ニ於内、有志に結び候より外は無レ之、何分謀主の來  
 着のみ相待居申候。(中略) エーランド一部三百十五匁にて、五部相  
 廻り申候。心地能安直にて大慶致候。何か蘭船五隻入津、御注文品夥  
 敷船載之由、致ニ風聞ニ候。石炭も愈々好品出候由、夢の様被レ思申  
 候。權六愈蒸氣機關奮勵究極不レ致候半ては相濟不レ申候。他異條も無  
 レ之、無レ程面晤と聞筆申候。時下御自玉所ニ專請ニ御座候。恐々頓首。

御安慮可被成候。投賢兄御出府の義も存外に恰好御決議に相成、欣  
 幸不レ置候。(中略) 權六も歸北、追々造艦の儀も相決候哉。餘り石で  
 手を話候様成論に不レ相成、英氣不レ挫程にて手下し相成候様祈居候。  
 此表講武所海軍の儀も十九日より御開發に相成申候。屹度致候教授も  
 無レ之様子、無覺東ニ次第。乍レ併、猶又驚と探案致度と心懸申候。  
 墨國官吏も愈江戸へ被ニ召呼ニ候事に御決定にて、當月二日評定一座へ  
 被ニ仰出ニも有レ之、最早不レ違事と相見へ申候。今日は水老公被レ爲  
 召、御登營有レ之、御相談歎と思の外、御懇の御上意の上、御手自御差  
 之御臨指御拜領、御内願之通り、海防掛り御軍制掛り御免被ニ仰出ニ候  
 由。墨の登城等に付ても、六ヶ敷蛇び隠居を、上手に取除け候事と相  
 見へ申候。唯々面白からぬ事斗。嗚呼々々形勢中々不レ可ニ挽回ニ事と  
 相成申候。何分積ニ於内、有志に結び候より外は無レ之、何分謀主の來  
 着のみ相待居申候。(中略) エーランド一部三百十五匁にて、五部相  
 廻り申候。心地能安直にて大慶致候。何か蘭船五隻入津、御注文品夥  
 敷船載之由、致ニ風聞ニ候。石炭も愈々好品出候由、夢の様被レ思申  
 候。權六愈蒸氣機關奮勵究極不レ致候半ては相濟不レ申候。他異條も無  
 レ之、無レ程面晤と聞筆申候。時下御自玉所ニ專請ニ御座候。恐々頓首。

⑧ 中根雪江書状 橋本景岳宛

本月十一日之華帖拜誦、先以奉ニ恐悅ニ候。隨而珍重。此表令弟益勉勵  
 御安慮可被成候。投賢兄御出府の義も存外に恰好御決議に相成、欣  
 幸不レ置候。(中略) 權六も歸北、追々造艦の儀も相決候哉。餘り石で  
 手を話候様成論に不レ相成、英氣不レ挫程にて手下し相成候様祈居候。  
 此表講武所海軍の儀も十九日より御開發に相成申候。屹度致候教授も  
 無レ之様子、無覺東ニ次第。乍レ併、猶又驚と探案致度と心懸申候。  
 墨國官吏も愈江戸へ被ニ召呼ニ候事に御決定にて、當月二日評定一座へ  
 被ニ仰出ニも有レ之、最早不レ違事と相見へ申候。今日は水老公被レ爲  
 召、御登營有レ之、御相談歎と思の外、御懇の御上意の上、御手自御差  
 之御臨指御拜領、御内願之通り、海防掛り御軍制掛り御免被ニ仰出ニ候  
 由。墨の登城等に付ても、六ヶ敷蛇び隠居を、上手に取除け候事と相  
 見へ申候。唯々面白からぬ事斗。嗚呼々々形勢中々不レ可ニ挽回ニ事と  
 相成申候。何分積ニ於内、有志に結び候より外は無レ之、何分謀主の來  
 着のみ相待居申候。(中略) エーランド一部三百十五匁にて、五部相  
 廻り申候。心地能安直にて大慶致候。何か蘭船五隻入津、御注文品夥  
 敷船載之由、致ニ風聞ニ候。石炭も愈々好品出候由、夢の様被レ思申  
 候。權六愈蒸氣機關奮勵究極不レ致候半ては相濟不レ申候。他異條も無  
 レ之、無レ程面晤と聞筆申候。時下御自玉所ニ專請ニ御座候。恐々頓首。

七月廿三日夜

雪江

景岳老兄

貴書拜見仕候。先以「奉」恐悦候。(中略)次に館中諸士依舊。扱先日蒙養局御裁處に付人心肅然。扱又去月廿六日何も遠慮御免被レ成候に付、爾後追々出勤仕候所、(前田・徳山)前徳輩坦懐平心疑惑も無し之様子にて相勤申候。執政邊會讀輪講等の節、無「怠慢」御出席、七日杯は大に議論有し之候。○蒙養局之事委曲被レ仰下「御尤至極、是は先書既に申上候へば御再答不仕候。○文典の事承知仕候。○今度諸家中文武詰被レ仰付候に付ては、「武道初心集」「迪藝編」五部づつ好便次第御廻し被レ下候様奉レ頼候。書籍の事、當年は此表にては成丈御買上げに不「相成」様被レ仰下候故、乍「早速」右御面倒御托申上候。右御安着御歎、且「二」申上候。餘は別紙に委細申上候。謹白。

重 陽

景 岳 老 兄

氏 壽 拜

二白。(本多)復君・釣谷學校諸子へ御傳書の趣夫々申達候處、尚又宜申上候様囑有し之候。(友四郎)伊藤氏も吳々宜申上候様申出候。(中略)中参政君へ今便呈書仕度心底に御座候所、認め候間無し之失禮仕候間、乍憚宜□傳言可レ被レ下候。以上。

常日如華一福井城女今着廣多情  
情秋右澤向其榮之一卷用書五世  
明 是日取收及之務光義 慈集

⑧村田氏寿筆 「当日繁華福井城云々」の詩幅

貴書拜見仕候。先以「奉」恐悦候。(中略)次に館中諸士依舊。扱先日蒙養局御裁處に付人心肅然。扱又去月廿六日何も遠慮御免被レ成候に付、爾後追々出勤仕候所、(前田・徳山)前徳輩坦懐平心疑惑も無し之様子にて相勤申候。執政邊會讀輪講等の節、無「怠慢」御出席、七日杯は大に議論有し之候。○蒙養局之事委曲被レ仰下「御尤至極、是は先書既に申上候へば御再答不仕候。○文典の事承知仕候。○今度諸家中文武詰被レ仰付候に付ては、「武道初心集」「迪藝編」五部づつ好便次第御廻し被レ下候様奉レ頼候。書籍の事、當年は此表にては成丈御買上げに不「相成」様被レ仰下候故、乍「早速」右御面倒御托申上候。右御安着御歎、且「二」申上候。餘は別紙に委細申上候。謹白。

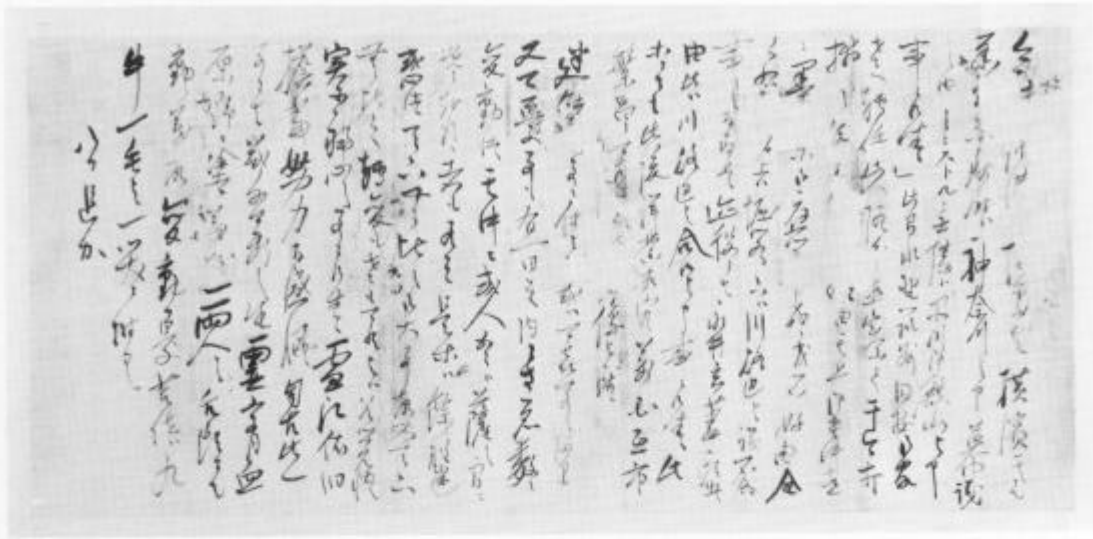
重 陽

景 岳 老 兄

氏 壽 拜

二白。(本多)復君・釣谷學校諸子へ御傳書の趣夫々申達候處、尚又宜申上候様囑有し之候。(友四郎)伊藤氏も吳々宜申上候様申出候。(中略)中参政君へ今便呈書仕度心底に御座候所、認め候間無し之失禮仕候間、乍憚宜□傳言可レ被レ下候。以上。

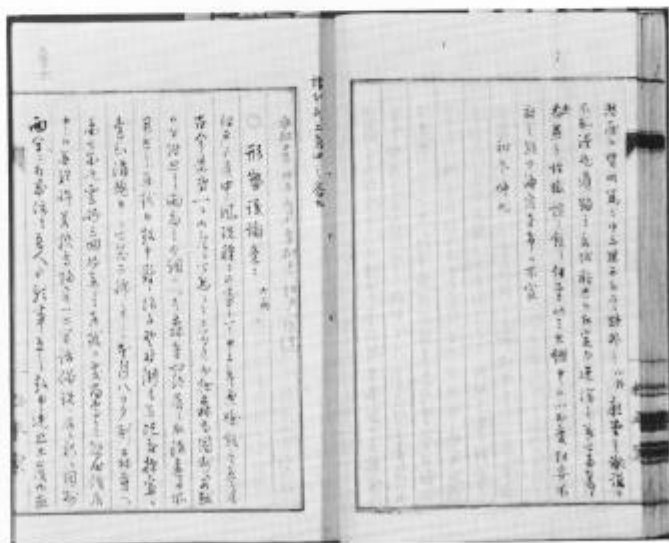
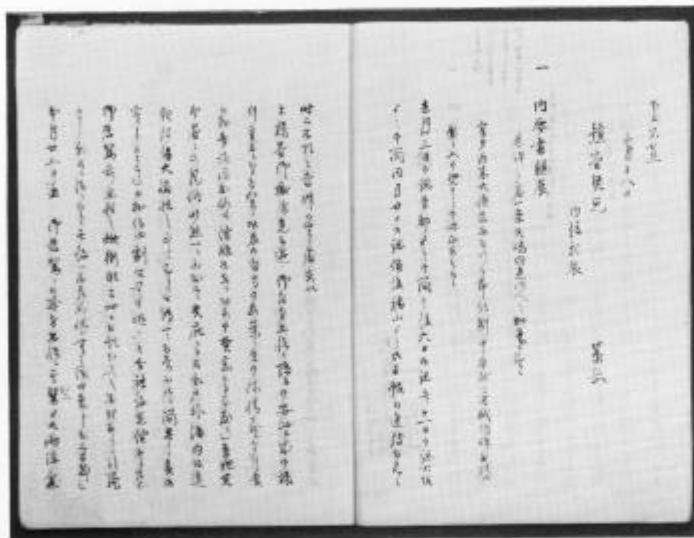
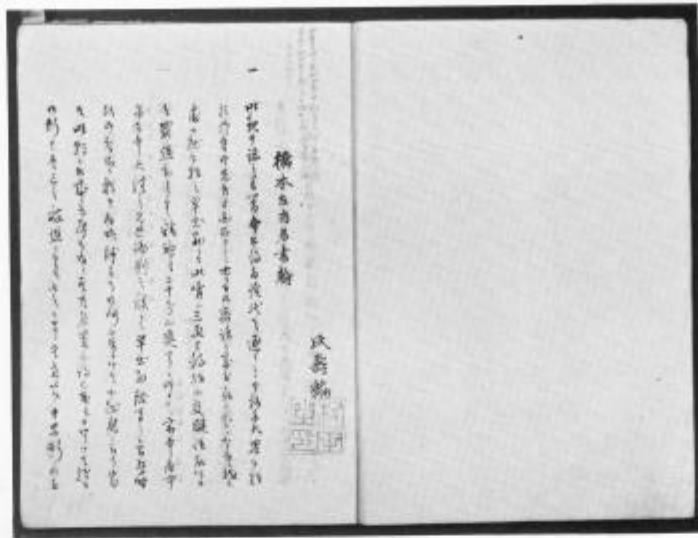
⑨村田氏寿書状 橋本景岳宛



① 橋本景岳書狀添書 村田氏寿宛



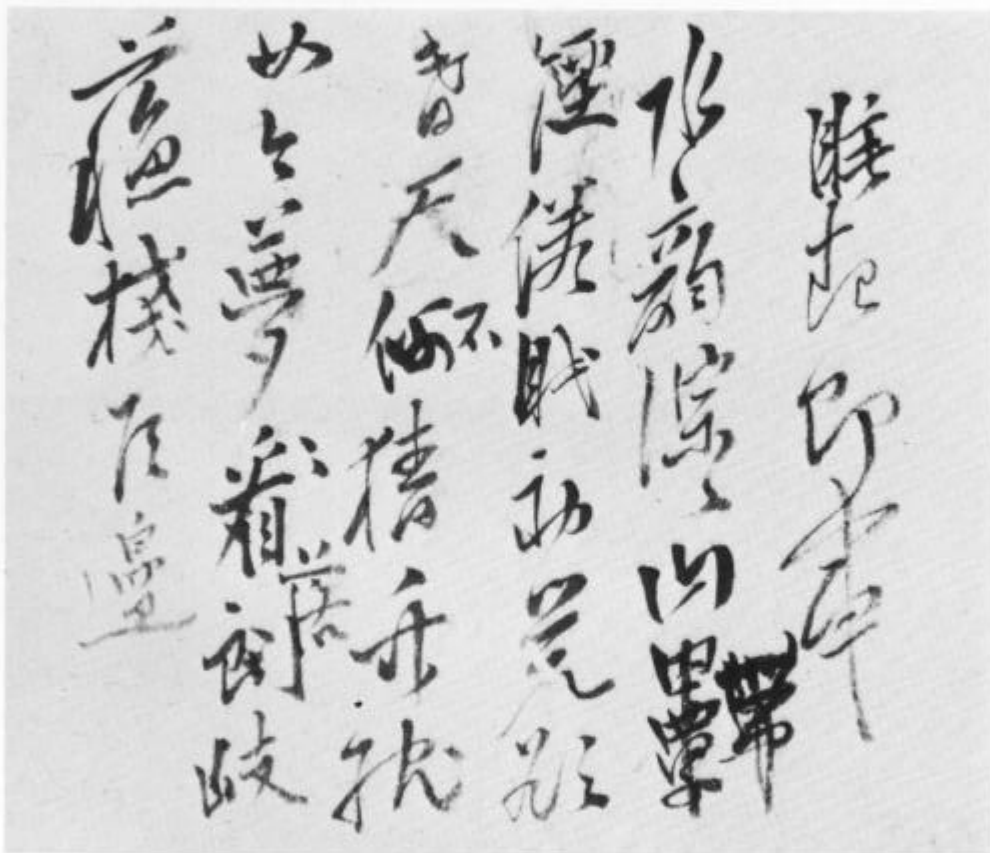
② 村田氏寿編 「景岳君書翰録」



② 村田氏寿編 「景岳君書翰録」







④橋本景岳筆「睡夜即事」の詩稿

To Gonroku  
 from his friend,  
 Van Reed.

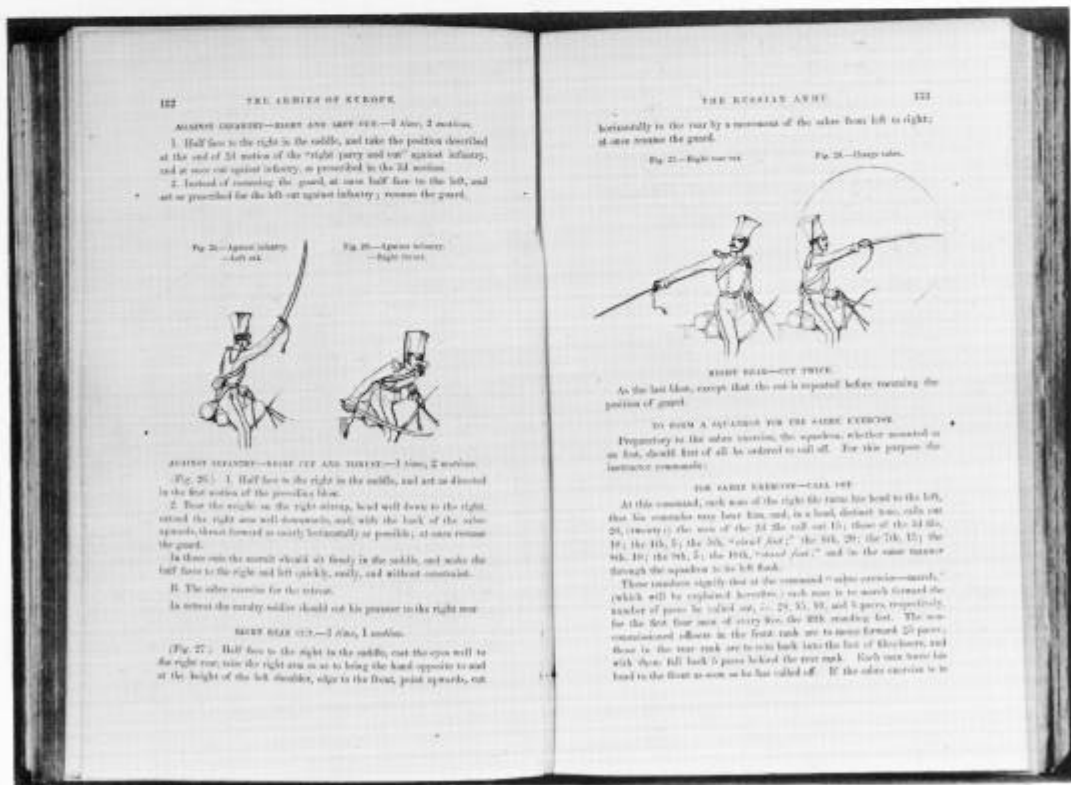
Kanagawa  
 July 4<sup>th</sup> 1866

To Gonroku  
 from his friend,  
 Van Reed.

Kanagawa.

July 4th. 1866.

(ヴァン・リード献辞)



⑨佐々木長淳手沢本 「THE ARMIES OF EUROPE」

⑨ 橋本景岳筆「一代儒宗云々」の詩

佐々木長淳筆「油断大敵」の画貼交ぜの幅

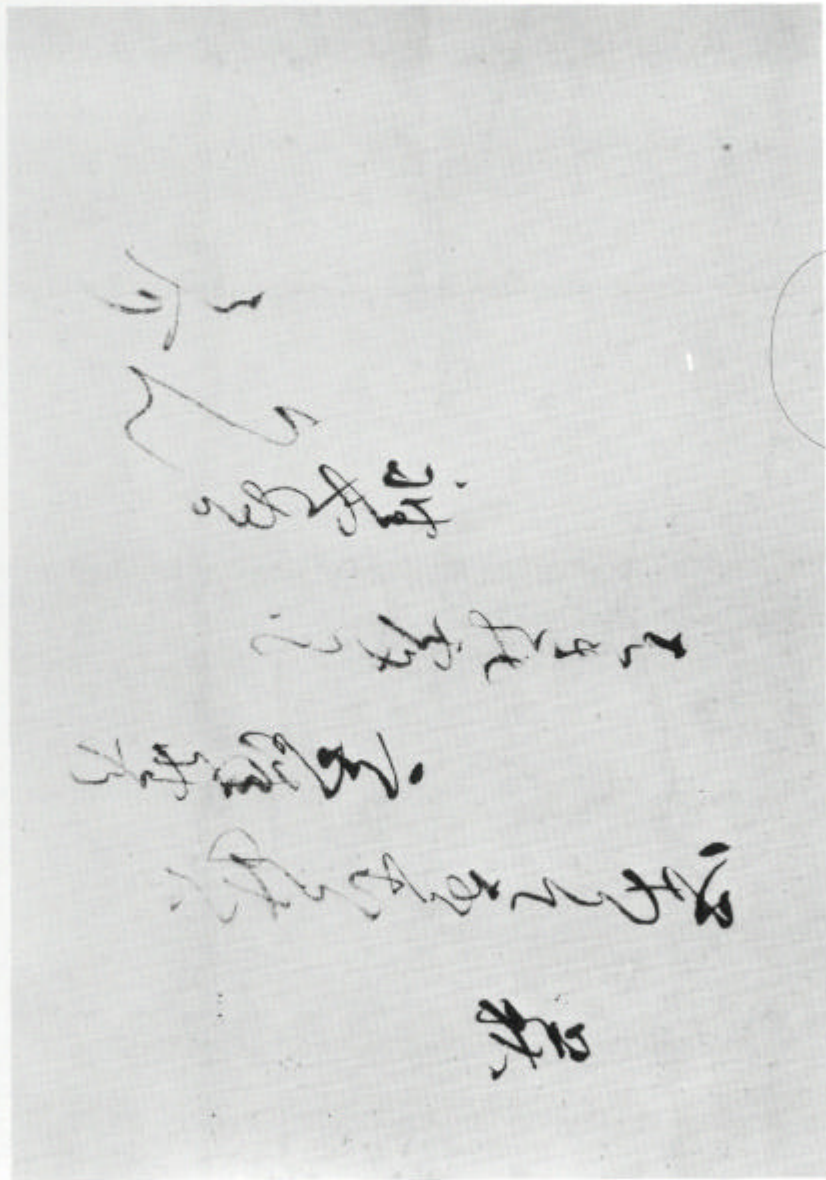
遊某の壁  
一代儒宗不群云々  
如鬼如仙如天  
六腑而皆長快活  
某氏



某氏の壁に題す

一代の儒宗書を解せず只愁ふ  
媚寵技倆の疎なるを我もと天  
下魁奇の客長鉄弾せんと欲す  
るは魚の爲ならず

橋本紀拜草



①7 近藤了介筆 和歌の幅









⑨ 橋本景岳書状 近藤了介宛

本月十二日立の御手帖、同十八日相達致<sub>二</sub>披見<sub>一</sub>候。如<sub>二</sub>御示<sub>一</sub>梅天日々濛々の氣候御座候處、先以<sub>二</sub>君上益御機嫌克被<sub>一</sub>遊<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>恐悅<sub>一</sub>候。(中略)

一、小子儀過日引取候後は先萬事都合不<sub>レ</sub>惡、まだ<sub>二</sub>皇國之御威靈も不<sub>レ</sub>落<sub>レ</sub>地と奉<sub>レ</sub>存、深喜居候處、近來上田閣老御大老邊邪説相始、正論直言之者被<sub>二</sub>忌嫌<sub>一</sub>候て、既に過日土岐丹波・川路左衛門・鶴殿民部杯、有志之御役人追々轉役被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、御時節柄不相當之事に候て、一統惶驚仕候。何れ岩瀬杯も不<sub>レ</sub>遠御役も可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御免<sub>一</sub>杯風説も有<sub>レ</sub>之候位。其上西城之事も種々の説起り、中々一橋公を建候様の儀難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、實に殘念之至りに候。御大老杯は専ら南紀主張之由、此も御賢明かも不<sub>レ</sub>知候得共、何分御幼稚之事にて、指當り將軍家御名代と申も御六ヶ布は目前の事、夫れさへ推て、己の便利を計り西城に可<sub>レ</sub>致杯企候爲體、笑止之事、萬々御推察可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

○此仕合故<sub>二</sub>君公御都合も甚惡相成、誠に困居候。君公には何分幕府之御爲深く被<sub>二</sub>思召<sub>一</sub>、西城は一橋公に可<sub>レ</sub>止旨御申立有<sub>レ</sub>之候故、閣老杯も迷惑に被<sub>レ</sub>存候様子に御座候。當年御藩府に相成候は何故か頓んと相分り不<sub>レ</sub>申、此は何ぞ閣老に御考可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之儀かと被<sub>レ</sub>存候。乍<sub>レ</sub>去只今之勢にては、閣老にも却て<sub>二</sub>君公之御藩府は御困り可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>と被<sub>レ</sub>思候。三國(大學)よりも又閣老に御詣被<sub>レ</sub>成候杯申參り候由。此は全列藩より申通候者有<sub>レ</sub>之に相違なし、夫は阿・尾之内と被<sub>レ</sub>察候。阿・尾之<sub>二</sub>公は只今にては、

叡慮さへ相立候へば、幕府之義は御構不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成と被<sub>レ</sub>申御論。君公は何地迄も幕府を見捨候ては不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>と申御論にて、萬事幕府之御爲御計り被<sub>レ</sub>成候故、<sub>二</sub>公とは大に御議論有<sub>レ</sub>之候事にて、定て此<sub>二</sub>藩よりは惡口可<sub>二</sub>申參<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>存候。併し閣老之惡み候事は、<sub>二</sub>公よりも、我公を惡み居るに相違なし。御建白杯も既に諸家よりは出候て、皆和親交易之論と申事、在府之御方には皆申立等相濟候得共、唯我公御一人は未だ御見詰不<sub>二</sub>相立<sub>一</sub>との御見にて、御建白無<sub>レ</sub>之位。此にても閣老に媚諂候とは餘り無識之論、不<sub>レ</sub>堪<sub>二</sub>立腹<sub>一</sub>候。御序に此段<sub>二</sub>三國へも御傳言可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>下<sub>一</sub>候。

(中略)

○西城の事不<sub>レ</sub>行候而は萬事不<sub>二</sub>先行<sub>一</sub>、殊に於<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>御内命も被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候事故、何分一橋公に無<sub>レ</sub>之候ては不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候處、右堀田と上田との争より、堀は橋(一橋)、上は紀(紀州)と申説相立、大に六ヶ、布運に相成居申候。其上此節は<sub>二</sub>我公迄をも疑始め候鹽梅(此も天下の爲め一橋公を御す、め被<sub>レ</sub>成候得共、矢張田安公の御好みにて有<sub>レ</sub>之と申説のよし)、誠に兒戲同然、嘆息之至に御座候。上之<sub>二</sub>印より此邊迄は三國へも森寺へも傳々御囁じ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候。成堀田と上田との事、西城の事は能く御話可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候。

(中略)

右當便大略得<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>候迄如<sub>レ</sub>斯。尚期<sub>二</sub>後信之時<sub>一</sub>候。不宣。五月廿三日  
再伸。時中萬々御保養專祈罷在候。小子も去月十八日別紙之通、結構蒙<sub>レ</sub>仰、冥加至極難<sub>レ</sub>有仕合に奉<sub>レ</sub>存候。以上。

◎西郷隆盛筆 「世上毀譽軽似塵云々」の詩幅



世上の毀譽<sup>きよ</sup>軽<sup>かろ</sup>きこと塵<sup>ちり</sup>に似たり（塵より  
軽ろし。昭前<sup>しょうぜん</sup>の百事<sup>ひじ</sup>偽<sup>いつはり</sup>か真<sup>まこと</sup>か。追思<sup>おぼえ</sup>す孤島<sup>こしま</sup>  
幽囚<sup>ゆうきゅう</sup>の楽<sup>らく</sup>。今人<sup>いまじん</sup>に在らずして古人<sup>こじん</sup>に在り。

橋本先生 御返  
 二白、御風呂敷御返却仕候。其節八段々御教  
 先日ハ御出掛之所江罷出、甚以御邪魔仕候。其節八段々御教  
 示被<sub>レ</sub>成下、別而難<sub>レ</sub>有御厚禮申上候。早速手を付申候得共、  
 何分女相手之事故急速運兼、殘心此事ニ御座候。就而者明後  
 日迄ニ返事相成候儀、些六ヶ敷込入仕合御座候。若哉御發足  
 相延候ハ、何卒御洩被<sub>レ</sub>下度奉<sub>レ</sub>合掌一候。將又先度差上置候  
 婦人狀彼方江差返し呉候様承候間、御返却之所奉<sub>レ</sub>願候。○  
 御臺様御方之儀ハ決て御異議不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候事ハ、分而被<sub>レ</sub>仰  
 立一被<sub>レ</sub>下候而も定而御差障之儀ハ無<sub>レ</sub>御座、弊廷分差遣候小  
 の島も、つほね幾嶋江引合候故詰ニ思ひ極め居候儀ニ御座候。  
 乍し恐も後宮之御方ハ、寡君方分如何様共折合を付候様可<sub>レ</sub>取  
 計一との儀も、被<sub>レ</sub>仰立一被<sub>レ</sub>下候而者如何ニ有<sub>レ</sub>御座ニ哉、其  
 邊之處宜敷御賢慮奉<sub>レ</sub>願候。返事参り次第早々爲<sub>レ</sub>御知<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申  
 上<sub>レ</sub>候間、兩日之處無<sub>レ</sub>覺束<sub>レ</sub>御座候ニ付、御含<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>相成一  
 儀と此旨乍<sub>レ</sub>殘念<sub>レ</sub>手之廻兼候故、御申上置候。尚拜肩に奉<sub>レ</sub>  
 陳謝<sub>レ</sub>候得共、其由荒々如<sub>レ</sub>此御座候。頓首。  
 正月十九日

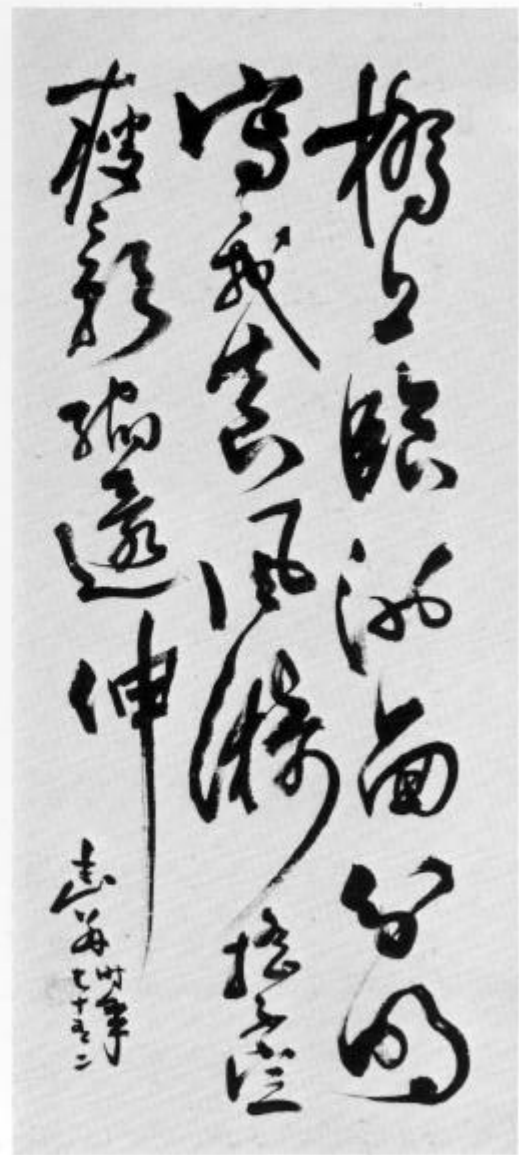
西郷隆盛書状 橋本景岳宛

西郷隆盛の書状の一部分  
 御返却之所奉<sub>レ</sub>願候。○  
 御臺様御方之儀ハ決て御異議不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候事ハ、分而被<sub>レ</sub>仰  
 立一被<sub>レ</sub>下候而も定而御差障之儀ハ無<sub>レ</sub>御座、弊廷分差遣候小  
 の島も、つほね幾嶋江引合候故詰ニ思ひ極め居候儀ニ御座候。  
 乍し恐も後宮之御方ハ、寡君方分如何様共折合を付候様可<sub>レ</sub>取  
 計一との儀も、被<sub>レ</sub>仰立一被<sub>レ</sub>下候而者如何ニ有<sub>レ</sub>御座ニ哉、其  
 邊之處宜敷御賢慮奉<sub>レ</sub>願候。返事参り次第早々爲<sub>レ</sub>御知<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申  
 上<sub>レ</sub>候間、兩日之處無<sub>レ</sub>覺束<sub>レ</sub>御座候ニ付、御含<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>相成一  
 儀と此旨乍<sub>レ</sub>殘念<sub>レ</sub>手之廻兼候故、御申上置候。尚拜肩に奉<sub>レ</sub>  
 陳謝<sub>レ</sub>候得共、其由荒々如<sub>レ</sub>此御座候。頓首。  
 正月十九日

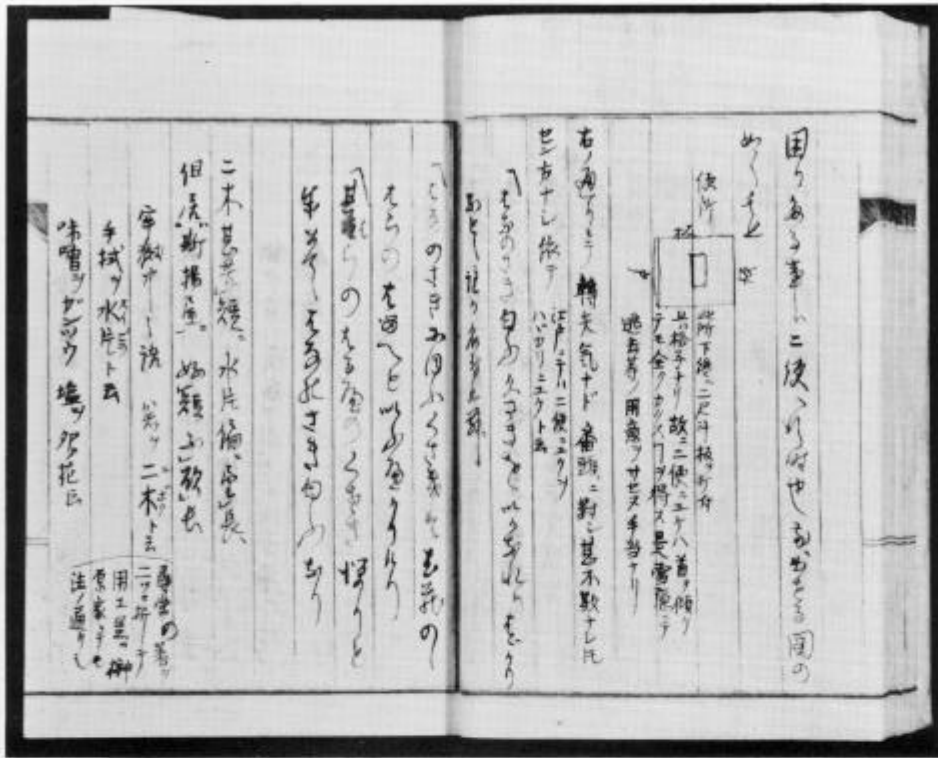
橋本先生

要詞 御直披

西郷拜



◎三國幽眠筆 「橋上臨湖面云々」の詩幅



② 二国幽眠筆 『笑草』 原本





④二国幽默筆『笑草』原本並に刊本



海航誰も任只舟  
 碧翁知五州何謂  
 遠里示一男兒

漢詩云  
 漢書云

⑩ 岩瀬忠震筆 「海航誰自任云々」の詩幅

予の海航... 漢書云... 漢詩云... 漢書云... 漢詩云...

⑪ 岩瀬忠震書状 橋本景岳宛

御文通類は總て速に丙丁を願候。貴翰も直に悉く投火候。

拜見。本日は領事官應接、只今歸宅の所に御座候。彼方より條約下案差出し、大意は承候得共、先亞條約之姿にて、又其内を増刪有之候ものに御座候。逆も承届難き事も有之下關開港、實地、其外にも甚當方の都合に可二相成一相聞へ、却て彼之術計を施し候事も有之、尤一端之話のみ故、間違等も可有之候。右書面直に翻譯申付置候間、其上ならでは分りかね申候。いか様の事有之候とも、是は必押付け可申と被し存候。

○明日は又々亞使應接の積り、此方銳意に談候事は、連日も恐れ不申候得共、拙談を彼是論じ候は、困苦之至り、御憐察可給候。○時事只々痛慨死中求レ活を願候のみ。略々拜復。

念 七

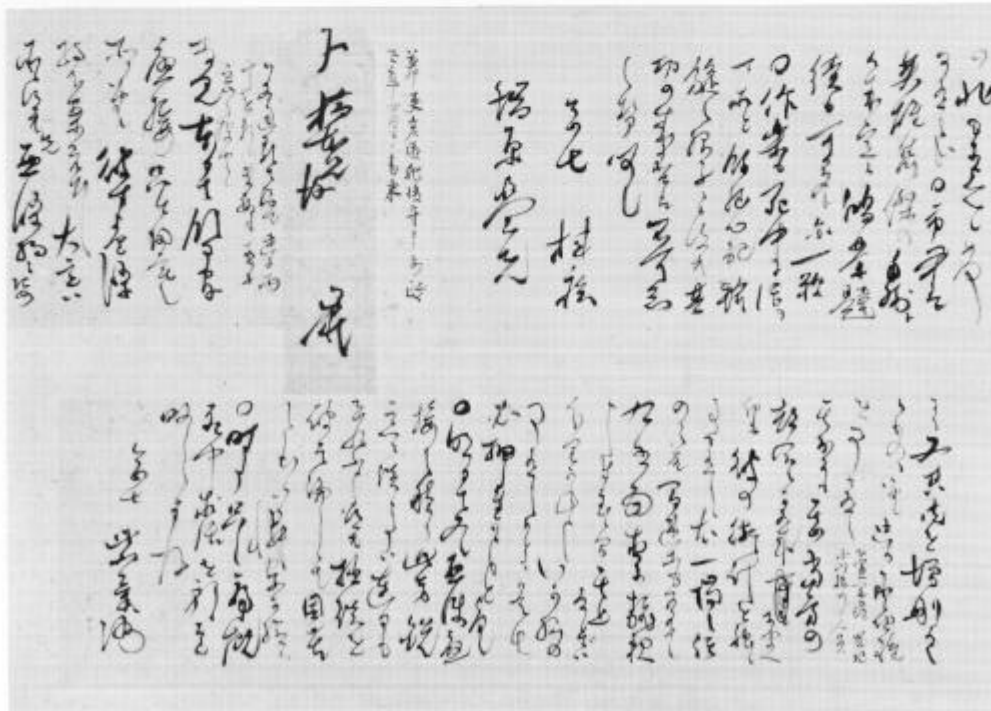
紫 氣 洲

(伊藤侯)宇之御都合は明日御報し被し下候趣承知。○(土岐丹波守)土丹も先出動致し候。○今

朝御斷云々、遺憾に候。○辭の字輕忽に致し難く、御安事被し下間敷候。○歎息一事も、一線には繋り居り候哉に被し存候。且急速に御決着には相成間敷かと推考候。○今日彦公へ餘程の激論を發し申置候。(井伊神忠)

此際に至り候ては唯々攪二英雄之心一を第一と奉し存候。萬々の一念不レ爲に至り候共、有志固結候は、亦興業之秋も候はん。能々御考置可レ被し下候。此節は別て嫌疑世界と相成誠に困入候。

通 時



岩瀬忠震書状 橋本景岳宛





入梅後閑寂下氣其心是也...  
 中根雪江宛  
 平岡円四郎書状

⑩平岡円四郎書状 橋本景岳宛

雪江天 柱内  
 田宮弥太郎書状

⑪田宮弥太郎書状 中根雪江宛



⑩ 橋本景岳筆 「雪中松柏愈々青々云々」の詩幅

雪中松柏愈々青々、  
扶植綱常在此行天久矣。  
禮勝潔人間何獨伯夷清義高便覺生植捨  
礼重方知死甚輕南八男兒終不屈皇天上  
帝眼分明

戊午之冬錄橋本紀

雪中の松柏愈々青々、綱常を扶植するはこの行に在り。天下久しう禮勝が潔無し、

人間何ぞ独り伯夷のみ清からん。義高うして便ち覺る、生の捨つるに堪ふるを、

礼重うして方に知る死の甚だ輕きを。南八男兒終に屈せず、皇天上帝眼分明。

戊午の冬録す

橋本紀

⑩橋本景岳筆 「常山之髮侍中之血云々」の詩幅

常山之髮侍中之血日月霜光山河改色  
生為名臣死多列星

戊午仲秋病間書呈  
脩溪堂兄

景岳記

常山の髮侍中の血、日月光を霜み山河色を改む。

生きては名臣と為り、死しては列星と為らん。

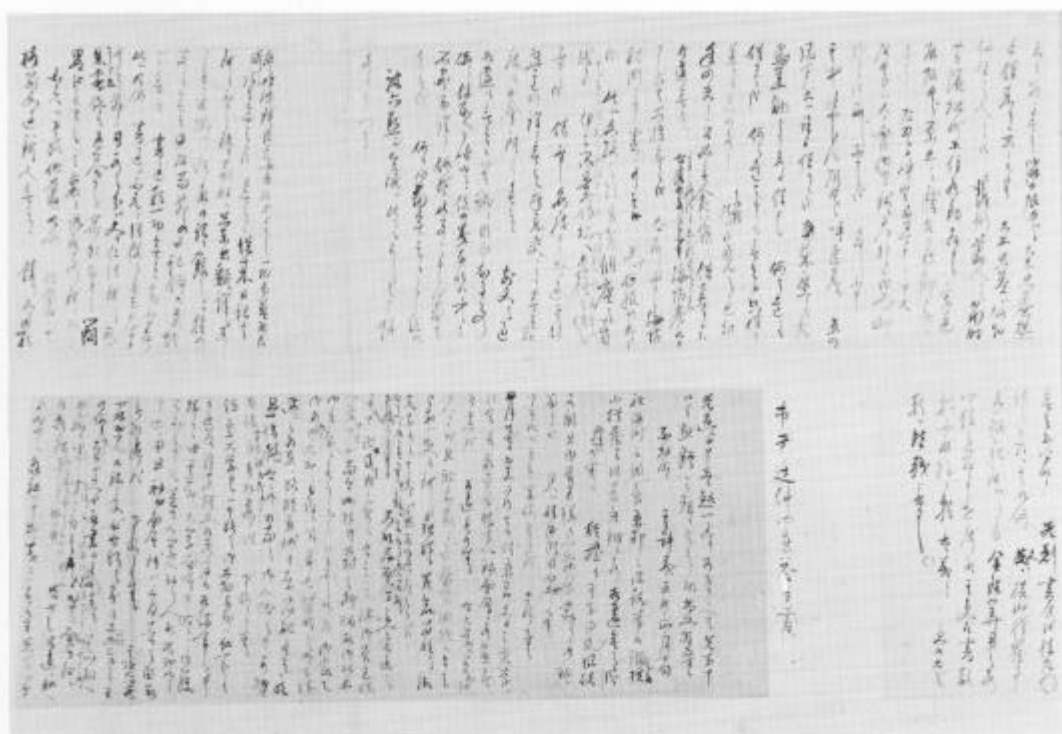
戊午仲秋病間、書して脩溪堂兄に呈す

景岳記

⑪橋本景岳筆 「青山断處塔層々云々」の詩幅

青山断處塔層々  
隔岸人家喚  
喚着江上秋風晚  
來急西真

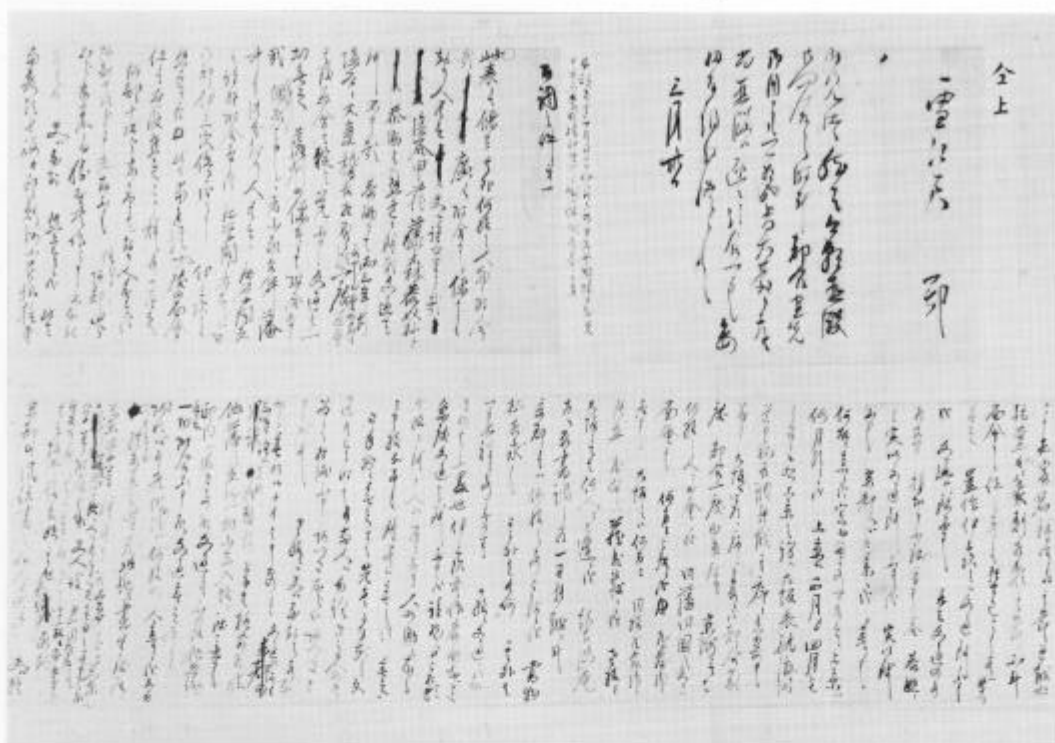
青山断ゆる處塔層々、岸を隔てて人家喚べば  
喚へんと欲す。江上の秋風晚來急なり、爲めに  
鐘鼓を傳へて西興に到る。



⑩ 橋本景岳筆 幕吏の審問に対する応答次第書

(幕吏の質問には「吏」、景岳の応答には「左」の字を補ってある。)

吏「逐々吟味致候得共書付等無レ之、一切分兼候故相尋申候。日記は無レ之哉」  
 左「無レ之候。從來日記は致し不レ申、誠に當時は蘭書綴譯之事に重に取掛り居  
 候故、日記に録し候程之事も無レ之故當節の日記體のもの頓んと無レ之」。吏「書  
 面類一切無レ之甚不審に候、此は如何」、  
 「書面は國元に同役とても無レ之、タマ  
 サカ有レ之候節は、用事之分は夫々書狀に付紙致し、或はうら書朱書位にて返  
 答申候。宿狀などは簡略を主とし、其裏に認返事致し申候」。吏「國元は左様、  
 他藩は如何」。他藩へは格別文通致候人無レ之候。吏「どうも餘り文通類無レ  
 之不審に候、先刻書付を孫左衛門へ託し被レ行候は如何」。夫は横山猶藏と申  
 者過日病死致し候に付、金銀算用之事近々郷信之節申遣度候故、其受取書散亂  
 不レ致様に頓置候義に候。受取書之類は皆殘置申候」。



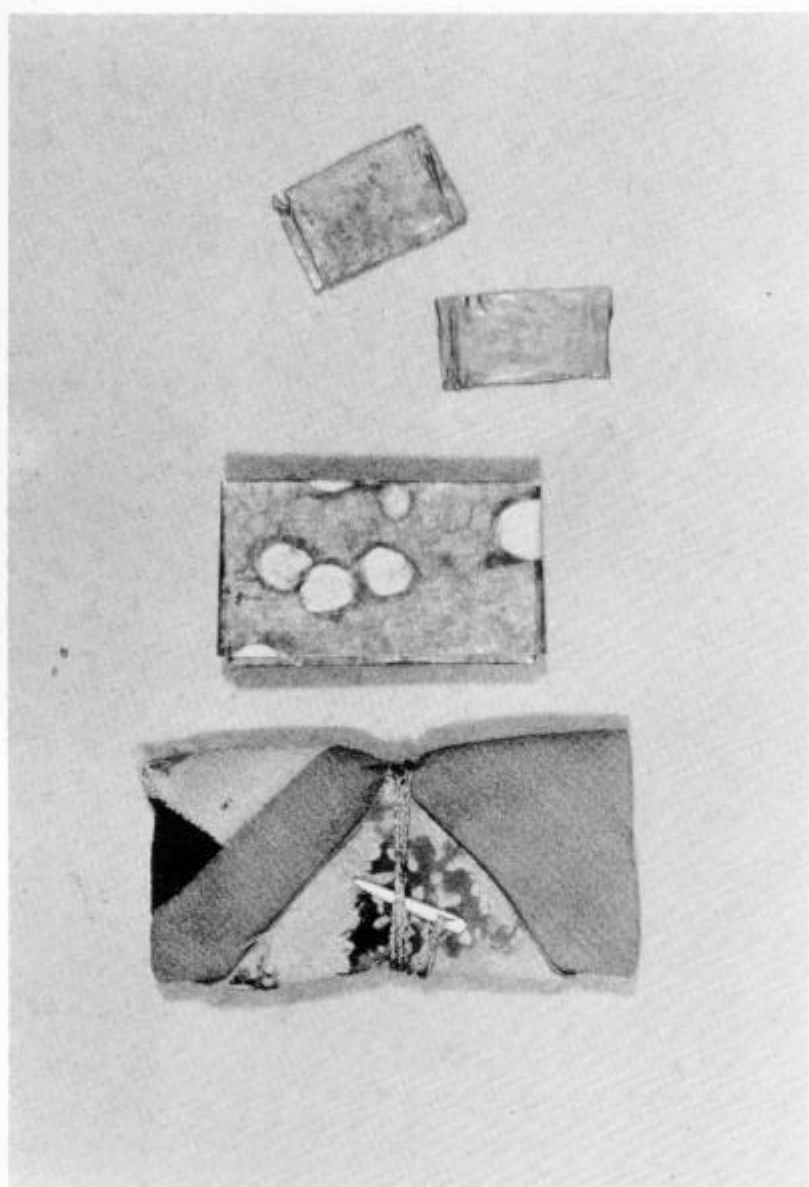
⑩橋本景岳筆 幕吏の審問に対する応答次第書

吏「此表にて儒者其外何様の人物に附合候哉」。「廣く附合申候。儒者も知り人有レ之」。吏「夫は誰等に候哉」。「<sup>〔谷隱〕</sup>塩谷甲藏・<sup>〔玄庵〕</sup>藤森恭助抔に候。吏「恭助とは懇意に致候哉、文通は致し不レ申候哉」。「恭助には兩三年前塩谷に文章稽古相習候頃、何やらん會の節一度面會其後再會は眩と覺不レ申、文通は一切無レ之」。

吏「薩州之儒者には附合不レ申哉」。「薩州にて儒者と申候者不レ承、乍レ併藩中には随分知人有レ之候。吏「致「學問」候志にて誰ぞ附合不レ申哉」。「致「學問」候者ならば日下部伊三次位に候」と申。吏「伊三次とは懇意に候哉」。「此當春頃一二度の面會位にて、別段懇意と申程之事は無レ之。吏「阿部十次郎家來には知人無レ之哉」。「阿部十次郎と申者存不レ申候。傍より吏「阿部四郎五郎家來にて勝野豐作と申者承知無レ之哉」。「夫は承知。吏「懇意候哉」。「此は當夏頃長崎より印刻師小曾根乾堂と申者寄宿致居候に付、其節罷越右乾堂に篆刻相頼、其節不レ計面會申候位の事にて、懇意と申事は決て無レ之。吏「豐作伊三次と文通致し不レ申哉」。「文通は致不レ申候。再三文通の事相尋、推切て不レ致旨申答。吏「恭助には實以て文通致し不レ申哉」。「實以致し不レ申候。吏「京都へは被レ參候哉」。「參り申候。吏「何故に參り候哉、定而用事可有レ之候、上京は何月頃に候哉」。「上京は正月より四月頃迄之間に候。右上京之譯は、大坂へは航海術道具抔取調罷越、其序に立寄申候義に候。吏「大坂へ被レ行候序に被レ寄候哉、都合幾度」。「都合二度出京致し申候。吏「京都にては何様の人に出會候哉」。「同藩同國の者には面會申候。吏「何方に被レ居候哉」。「屋敷内に居申候」。

(下略)





⑩拜領 麝香包み



内々拜啓仕候。先以 奉ニ恐悦ニ候。隨而奉レ賀候。然者私義昨日揚  
 屋入被ニ仰付ニ、誠以驚惑之至御推察可レ被レ下候。乍レ去諸事都合宜、  
 是迄同所に被レ居候人々格別親切に被ニ致具ハ、何も指支ハ無ニ御座ニ候  
 間、此處は聊御安心可レ被レ下候。扱右ニ付甚奉ニ申上ニ兼候義ニハ候  
 得共、同所には從來の定めも有レ之、新參に而は諸事困難之事のミ之  
 由ニ候へ共、私義ハ格別之取成しに相成候事に候故、右にハ金子指  
 出不レ申候半而ハ、行々只今の取扱ニハ不ニ相成ニ由、勝野杯も態々  
 教へ具候間、何卒今日此者へ十五圓カ又は十二圓ほど位御勘辨出來  
 候丈御渡し被レ下候様奉ニ希上ニ候。尤右様爲し置候へは、已後極内  
 丈も被ニ指上ニ候て、萬端都合宜御座候事ニ御座候。此後モ如何之  
 次第ニ相運候哉ハ不レ被レ計候へ共、矢張此迄之御尋のミにて只重々  
 私身之上へ負候様相成候事に御座候。唯々兩邸御靜謐之處奉ニ專祈  
 居候。兼々御世話被レ下候方へ宜御申可レ被レ下候。右爲レ可レ得ニ御  
 意ニ草々如レ此ニ御座候。已上。  
 十月三日  
 甚 十 郎 様  
 勘 藏 様  
 甚十郎様先年御召遣之者此中ニ居候故、夫ヲ使ニいたし申候ニ付  
 認申候。御覽後ハ必御火中奉レ願候。

⑩ 橋本景岳獄中よりの密書 (某写) 瀧勘藏・石原甚十郎宛

(裏書)

「多喜様 鄂」

此書御受取之上、御返事に不レ及。唯受取之證物御遣可レ被レ下候。

昨日金子拾五儲落手、誠に御蔭にて難レ有奉レ存候。私義ハ先格別申

分も無ニ御座ニ候得共、食事出来兼困居申候。 (前通ニ御書口置五郎) 綱・辰兄へも宜、御兩

人共已後ハ彌増御憤發御勸御座候様奉ニ願上ニ候。私義口書ハ過日既

ニ相濟候事故、此後ハ唯公裁を奉レ待候のミに御座候。併し御先代様

御明白も不ニ立得、徒ニ上を犯候事取計ヒ致候事ニ陥り候條、何共

奉レ對ニ「主家」無ニ申譯一次第御座候。此處萬々御憐察可ニ成下ニ候。

國許へも何卒よろしく御申遣被レ下候様與々奉ニ願上ニ候。元來一己

之物數奇にて出来候事とは違る候間、此丈ハ於ニ國許一も少しく明ら

め具候様仕度奉レ存候。心中兎や角存居候事も御座候得共、今日ニ

到り候事何も申上候申斐無ニ御座ニ候故附ニ黙々ニ候。不宣。

與々御懇ニ被ニ成下ニ候御方へ宜御傳言御謝辭可レ被ニ仰下ニ候。

十月四日

尚々朝夕寒威催候間折角御加養奉ニ禮上ニ候。



⑩ 橋本景岳獄中よりの密書 (某写) 瀧勘藏・石原甚十郎宛

曾聽英壽詩  
 何限恨不使  
 帆飄空平  
 不於落軒  
 昂正氣  
 家聞言夫  
 君膽生毛  
 直氣一  
 胸飲  
 多誠夕  
 批統  
 頻睨  
 日布刀

右人當て君の詩を傳へて云ふ。「昨夜太平の海、快風布帆を馳す」と故に轉結及ぶ。  
 磊落軒昂意氣豪なり、聞くならく夫君膽毛を生ずと、想ひ看る痛飲京城の夕、腕を扼して頻りに睨す日本刀。

曾て英壽を聽いて鄙情を慰む、君を要して久しく同盟を訂せんと欲す。

碧翁の狡弄何んぞ恨を限らん。春帆をして太平を颯せしめざりしを。

右人當て君の詩を傳へて云ふ。「昨夜太平の海、快風布帆を馳す」と故に轉結及ぶ。

磊落軒昂意氣豪なり、聞くならく夫君膽毛を生ずと、想ひ看る痛飲京城の夕、腕を扼して頻りに睨す日本刀。

橋本景岳筆

⑩ 橋本景岳筆 獄中で吉田松陰へ送る詩 同包紙

越前橋本左門書

無名氏

適意偶抄

秋東夜抄  
 野桃念天竹羅短溪却自梅沙水清  
 八木秋江江北路天教看盡竹西山  
 花曾織面身仍好鳥不知名舞自呼  
 六羊余山岡山海細而蘇花三斷重  
 入名

于蓋日不至八長、野梅春入秋  
 海門溪中、明瓦、世家、秋  
 秋秋、身、遠、遠、身、東、由、對、  
 秋、秋、知、入、恩、街、折、你、詩、類、  
 紫、李、黃、瓜、村、路、有、鳥、抄、白、馬、道、不、涼、  
 天、外、黑、風、吹、海、亞、浙、東、龍、而、遊、來、  
 五、空、金、堂、餘、漢、七、桃、花、浪、火、炎、入、  
 西、風、初、作、十、夕、涼、喜、見、新、橙、透、甲、梅、  
 注、善、愛、心、驚、昂、物、參、歸、病、眼、秋、花、  
 洲、上、青、山、翠、竹、堆、綠、蕪、苑、佳、我、  
 王、教、教、我、抽、身、石、雲、水、光、乎、此、眼、來、  
 寂、思、眠、粉、粉、晚、照、你、骨、寒、疎、物、秋、  
 留、中、以、記、以、人、面、口、不、能、言、三、寸、首、  
 江、事、過、年、如、昨、日、此、身、未、死、何、苦、

⑩ 橋本景岳筆 幽囚中の筆記帳類

「適意偶抄」

# 鈴箱雜錄

七幸

仰敵軍 及び敵軍 用井北者、根勢能歩兵の  
クアチルカス、ハルカス、歩兵即歩兵用銃  
ノ代、ハルカス、歩兵用銃、ハルカス、  
歩兵ハ其區、其衝撃、突入、内、歩兵、  
法、非常ノ能、其、然、兵、兵、  
北、歩、及、敵、ノ、景、況、望、ヲ、何、ル、  
其、用、ハ、大、ク、三、五、九、歩、兵、用、  
ハ、大、ク、三、五、九、歩、兵、用、  
其、用、ハ、大、ク、三、五、九、歩、兵、用、

其、用、ハ、大、ク、三、五、九、歩、兵、用、  
其、用、ハ、大、ク、三、五、九、歩、兵、用、

劉永先督好華歌此節分  
英雄壯義死亦義此為節分  
八上回遠六別食了平保  
何酒島子成平涉能一過  
五月念四 莊園

⑧橋本景岳筆 幽囚中の筆記帳類

「鈴箱雜錄」







告文

正二位松平慶永謹告

故景岳橋本綱紀之靈鳥免

駿奔二十一年ノ正忌ニ値フヨ以テ

第綱常之邸ニ到リ祭典ニ會ス

追感往事ヲ哀慕ノ情曷ッ過シ

聊奠榭及菓子君カ先生ヲ

輔賛スルノ恩惠ニ報答スルノ寸誠

ヲ表ス君靈アアラハ尚クハ

饗食ヨ

明治十二年十月七日

二十一年ノ正忌ニ値フヨ以テ

祭典ニ會ス

追感往事ヲ哀慕ノ情曷ッ過シ

聊奠榭及菓子君カ先生ヲ

◎松平春嶽筆 景岳祭祭文

維  
 明治十八年十一月  
 廿二日芝紅葉館ニ  
 於テ橋本綱紀ノ為ニ  
 有志者相謀リテ住  
 小塚原ニ建設スル  
 紀念碑ノ落成ヲ君  
 ノ靈代ニ告ケ奉ルノ祭  
 奠ヲ執行スル其弟  
 綱常ヨリ招呼ヲ受ケ  
 祭場ニ會ス熟惟ニ

君首リテ竭勤  
 王報國ノ忠誠惟信  
 惟義洵ニ臣子ノ標  
 準ナリ不幸ニシテ疾  
 謝世ニ十七年特ニ本  
 年六月十一日紀念碑  
 建設被  
 聞食金百円下レ賜  
 ハ旨送宮内省被傳  
 勅命君勤王報國  
 ノ偉功始メテ明ノ白

君榮譽譽ヲ輝君ハ  
 於地下感泣スヘシ曰王  
 慶永感佩  
 聖代無以 恩典隆  
 テ紀念碑建設美  
 奉ヲ喜做ス實ニ悲喜  
 交至ニ追慕往事ヲ  
 情曷ソ堪ニ聊代甚  
 辭愚詠ヲ以君有靈  
 尚歎幸  
 因乃之先 丁未年卯  
 寅ノ日 法代ノ之

信々多民  
 皇是乃出為 丁未年  
 卯之代 丁未年  
 之始 石碑  
 乃乃形 丁未年  
 乃乃名 丁未年  
 乃乃名 丁未年  
 東昭宮 皇統  
 丁未年 秀隆公  
 十四代  
 正二位 勳三等  
 松平 景岳 公

◎松平春嶽筆 景岳祭祭文

明倫彙編  
 禮典典考  
 卷一百一十一  
 十一月念五日  
 夜挑燈園  
 春山  
 藝園遺草

停杯陶然視物莫孤雲帶雨入烟霏

晴月

明月中時空悠悠不可親  
 妾女被妬忌賢士通沈淪  
 由來快心事中途輟為乞  
 慈慈婢娟春元寧夏珍  
 因墨衣趨階忘依約光  
 趁人甘沐尚撰知百傷  
 與一真俗史誇周旋迂  
 儒於輪和尙幕任僕侶  
 優擬結紳若是清高  
 容肯身以專斯我有  
 員俗累落托苦孤貧  
 只箇一樽酒樂若飲  
 瀟屑當時非不識  
 未若今宵馴從以訂  
 盡約招訪互主賓  
 我懷已如飲親味  
 君所抽

古人重忠信今人重媠  
 古人不可見盡牛背失  
 時判水火得勢為漆膠  
 恃以深窓影依不忍拋  
 若紅懸古人願以古道交

道山熊澤先生手前真蹟款

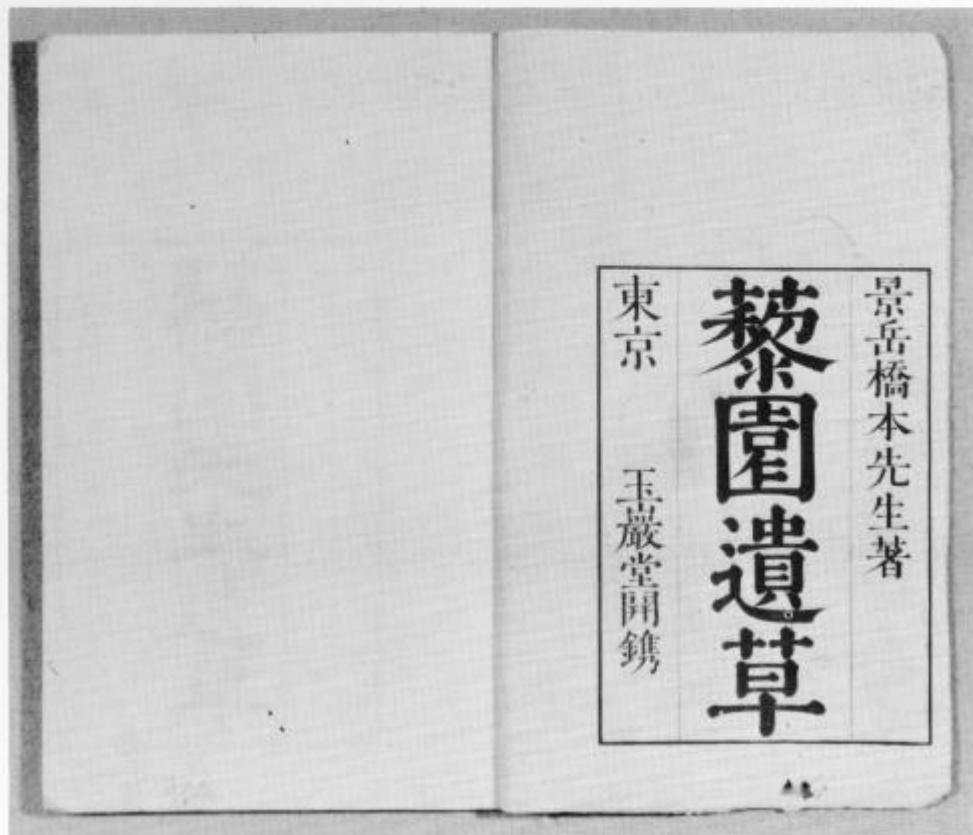
練翁咬尾好習人  
 醫倒令人及古人  
 不嘗獨有母  
 且贊其才許桂輪  
 自徒无如鶴  
 靈武藝林如雲又如雨  
 一枝健筆

論文

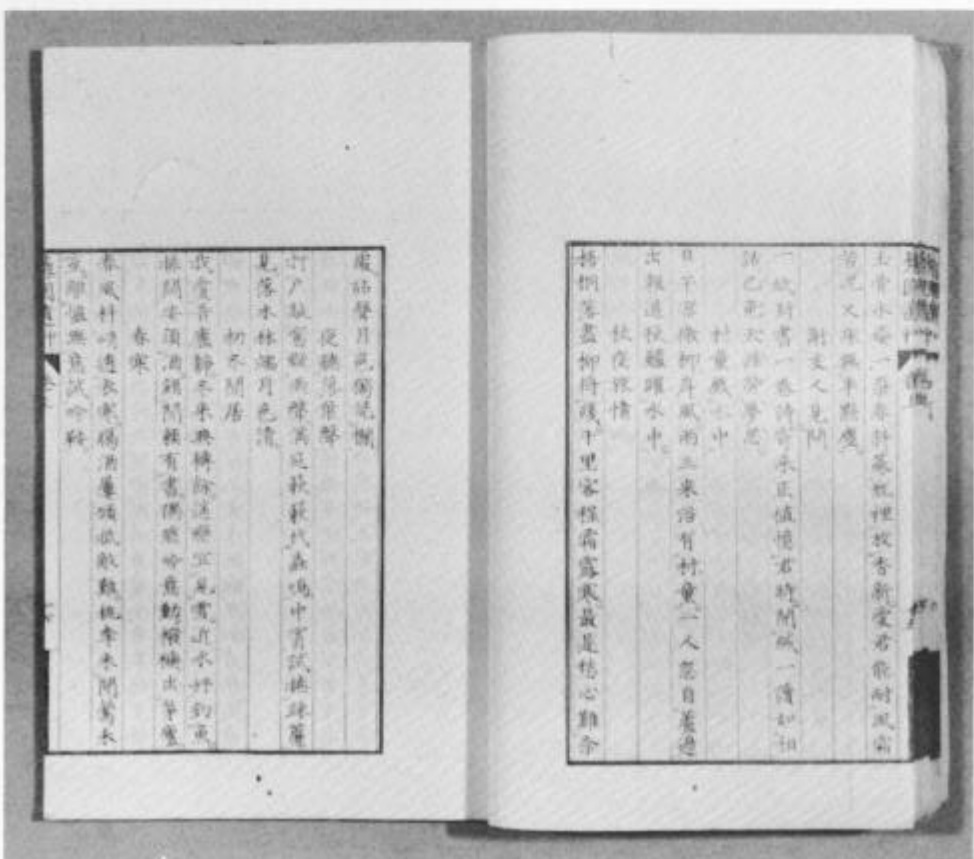
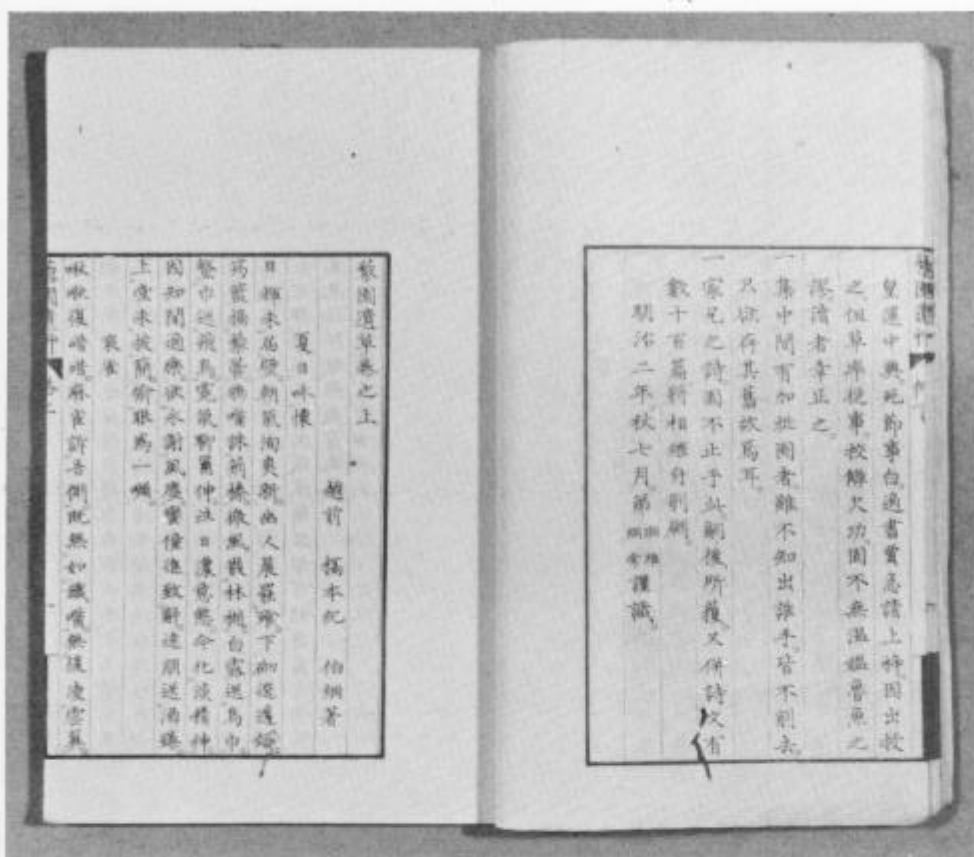
孤精化處  
 女半度蒙虎皮  
 秦鏡一照下  
 妖魅無所施  
 古

藜園遺草  
 引撰  
 併書表  
 候間相渡候  
 村田巳三郎  
 加藤所左  
 衛門江可  
 通傳候事  
 十月十三日  
 香田成

②松平春嶽筆 「藜園遺草」引、並に題辭引渡通知書



③「藜園遺草」初版本





# 夢物語

中根雪江著並筆  
橋本左内傳

## 橋本左内傳

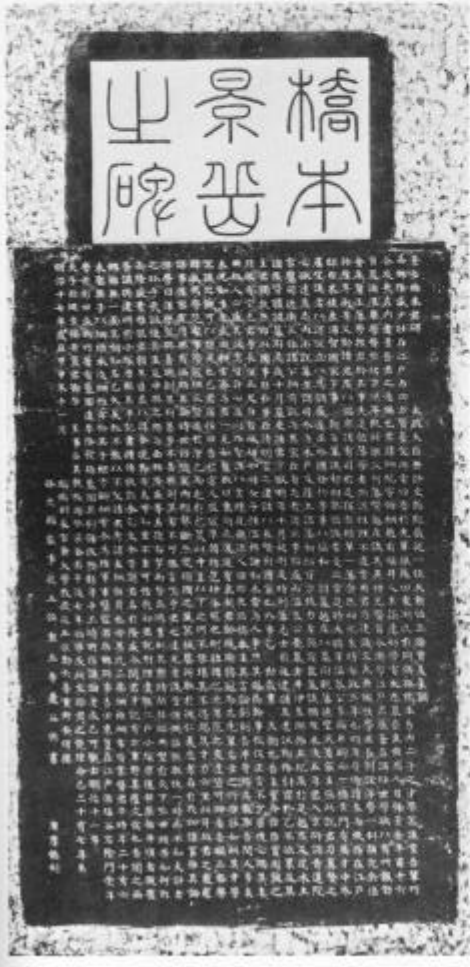
橋本左内傳 字伯然 世居 業 生而 讀書 爲 鉅 師 師 上 之 白 誓 願 爲 師 志 氣 慷 慨 壯 氣 莫 與 之 敵 於 人 能 十 五 六 歲 三 十 七 歲 懷 才 學 動 手 必 揮 志 氣 遠 志 先 成 人 也 志 氣 同 常 於 聲 刺 於 數 其 術 學 之 垂 成 爲 人 稱 及 自 少 學 於 早 文 公 子 亦 好 於 漢 中 有 志 長 師 事 之 後 生 之 業 亦 稱 傳 傳 清 長 爲 出 入 學 術 大 道 年 八 十 又 入 於 藝 師 匠 師 之 門 居 公 其 異 材 情 乃 三 十 七 年 定 惜 山 匠 師 脫 離 離 離



西... 碑... 刻... 石... 額... 橋... 本... 景... 岳... 之... 碑... 碑... 文... 原... 本...

西... 碑... 刻... 石... 額... 橋... 本... 景... 岳... 之... 碑... 碑... 文... 原... 本...

② 「橋本景岳之碑」 碑文原本



③ 「橋本景岳之碑」 石摺の額

鬼神泣壯烈

慶喜

⑩ 徳川慶喜筆「鬼神泣壯烈」の書幅

曝骨刑場吾不及存心社稷  
典君同追懷往事感何限落  
木秋風苦雨中

後學伊藤博文

吊橋本景嶽先生墓

⑪ 伊藤博文筆「吊橋本景嶽先生墓」の詩幅

謹啓 茲以所借貴之  
 祭名若須法極過  
 日家者七是五四  
 祭一祭自依舊所  
 慈篤之修所學禮  
 自致細長七般持  
 省自煎茶上產物  
 進呈此後存自若所  
 厚初之通急無表不  
 向新意輕少耻入  
 灰物共此五品進呈止  
 於而心為 之 之 之 青  
 志不遇之免出外  
 拜甘之新物美之  
 給 勿 之 物 等  
 八月廿日 綱常  
 中根元基  
 傳史

② 橋本綱常書狀 中根雪江宛



③ 佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画

橋本左内小傳

家臣橋本左内名綱字伯綱野萊園後取諱長翁福至自稱櫻花齋輝樓天保五年甲子三月十日  
 生于福井治下堂整術父名長綱稱舟也以譽其業母某清大行李信譽之也綱地為人譽誠可身好  
 學後隨師古田澤實請習經史及長德派有去志苦讀過帳人而溫辨讀和未嘗與人相爭年十六  
 然四身學備悉未見其缺之見不知就大都名家而到是智識也永二年五月後某某浪濤尋蹤方  
 某學而得整術四年事世間父疾歸五年壬子十月父没十一月綱地罷室判警署告退九年十月三日  
 至江戸入村田成術之門成術書一辭以自修後德地日收致致致不以僅以一月奉業成術警署其  
 致致亦其書以何之辨論如法無育一辭致致致致致致致致致致致致致致致致致致致致致致致致  
 至江戸留學德師三年而原本得國會諸君與文武忠學所以綱地充騎軍監實業是梅井宗海津傳  
 門人皆讚其理蓋於世遠綱地是之好論者洋務則除其除學管長大慶四年七月綱地於江戸命  
 情諸美各與德師為自義永十五國侯非彼彼彼表來通傳天下多事物險險然而游軍至定公老嗣於是  
 各藩有志之徒相與招議以一稿策門有英才而中外屈望也故久以爲將軍王以爲方國德術及金川  
 阿彌等事宜各家其謀之無事而綱地之理者是之將綱地其後其後其後其後其後其後其後其後其後  
 書綱地子結交盡力周旋其成其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後  
 派以立祀伊御五年改年六月綱地入京即進其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後  
 實為二傳皆實後 刻命一付之七月將軍家定公竟他任御入極職其後其後其後其後其後其後其後其後  
 各師十月二日在幕吏執名乘預綱地之宅收文稿及前時書去其聖綱地賦在堂中石名別傳廳令  
 整綱地印其法何款回八年十月二日下獄七日處刑於年二十六月後其後其後其後其後其後其後其後其後  
 之在獄中賦詩曰苦克難洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗洗  
 六年七月學近藤元善感泣多天新大旁者以竹土室保時正氣欺羞如其倫不可見也綱地有兄弟九  
 人一婦其適齊江藩水山氏二弟綱地經常皆賢醫天長壽醫皆天所著也其後其後其後其後其後其後  
 是也一妻適於宮長其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後  
 小傳余展就之在心徵抄也 通其夫鳴也綱地多其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後其後  
 亦可稱其後  
 則治八年五月二十一日

正二位源慶承撰



⑩ 佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画、並に松平春嶽筆「橋本左内小伝」の幅





⑬ 橋本景岳座像



⑭ 富岡永洗筆 橋本景岳肖像画（木版画）

解

說

生誕一五〇年記念図録

橋本景岳先生の生涯 解説

第一 少年時代

橋本景岳先生は、天保五年（一八三四）三月十一日、福井城下常盤町（現在の春山二丁目）で生まれた。名を綱紀、通称を左内、景岳のほか藜園・容安などと号した。

父長綱（通称彦也）は福井藩の奥外科医で、和歌山の華岡青洲に学んで名医の評判高かったが、常に長剣を腰にし武人としての心がけも厚く、景岳先生に深い影響を与えた。母は坂井郡箕浦（現、福井市養町）の太行寺住職の女で、名を梅尾といい、先生ら子女を厳格に訓育したことで知られる。

景岳先生は、幼年期より学問を好み、十歳にして漢籍『三國志』を通読し、ほぼその意味を解して周囲を驚嘆さすなど、早くから俊逸の才を発揮した。また、縁戚にあたる藩の剣術師範鰐淵氏等に入門して、武術の修練にも怠りなく、宋の岳飛將軍を景慕して、自ら景岳と号したのは、十二歳の時であった。

その頃より、藩の医学校濟世館で漢方医術を学び、父の診療を手伝いはじめた。そして、多くの逸材を育成した崎門学者吉田東篁に入門して、本格的な学問研鑽を開始したのも、十二歳（一説に十五歳）の時である。

こうして成長するにしがたい、世の中のさまを歎き、経世済民（世を治め人々を救うこと）の壮志を抱くようになった。

そうした、少年時代から他に超越していた人物見識は、嘉永元年（一八四八）十五歳時の著書として有名な『啓発録』に、あますところなく述べられている。

| 年代 | 西暦 | 年齢 | 事蹟  |
|----|----|----|---|
| 天保 | 五  | 一  | ○三月十一日、福井城下常盤町（現、春山二丁目）に生まれる。                 |
|    | 七  | 三  | ○この前後、天保の大飢饉。                                 |
|    | 九  | 五  | ○一月、松平春嶽福井一六代藩主に就任。                           |
|    | 一一 | 七  | ○この年から藩医舟岡周齋等について漢学を、藩祐筆小林弥十郎等について書を学ぶ。       |
|    | 一二 | 八  | ○四月五日、弟綱維生まれる。                                |
|    | 一四 | 一〇 | ○この年から藩の儒学者高野真齋に入門する。                         |
| 弘化 | 元  | 一一 | ○『三國史』を通読し、ほぼその意味を理解する。○福井藩、藩政の大改革に着手する。      |
|    | 二  | 一二 | ○八月、オランダ国王、幕府に開国を進言。                          |
|    | 二  | 一二 | ○六月二〇日、弟綱常生まれる。                               |
|    | 五  | 一五 | ○この年、藩の医学校濟世館に入學。また、剣術を鰐淵幸広に、柔術を久野猪兵衛に、画を島田雪谷 |

|                       |                       |        |  |
|-----------------------|-----------------------|--------|--|
| 嘉永                    | 三<br>一<br>八<br>四<br>六 | 一<br>三 | に学ぶ。○宋の岳飛を慕い、景岳と号す。○吉田東篁に入門（一説に一五歳の時）。<br>○二月、孝明天皇即位される。<br>○『啓発録』を著わす。○この頃より、開国を迫る外国船の来航が相次ぐ。 |
| 元<br>一<br>八<br>四<br>八 | 一<br>五                |        |  |

① 橋本長綱書状

一通

福井市 加藤二一氏寄託  
年不詳四月十五日付。夫人梅尾・長男景岳宛。

〔橋本長綱〕

通称彦也、海量・発陳堂主人などと号した。景岳（綱紀）・綱維・綱常兄弟の実父。文化二年（一八〇五）福井藩医田代家に生まれ、同藩医橋本家の養子となる。文政十二年（一八二九）和歌山の華岡青洲や京都の賀川満定などに師事して、外科・産科・内科の各医術を学んだ。何事も藩外修行を蔑視する風潮のあつた当時の福井から、他国へ遊学したのは長綱が最初であつたと伝えられる。天保四年（一八三三）奥外科医に任ぜられてからも医学研究を怠らず、西洋医術に強い関心を持って、自宅に長崎の蘭方医猪俣瑞英を招いて指導を受けたり、率先して人体解剖を行ったりした。その結果、藩内一級の外科医となり、藩主松平春嶽の信任を得て、嘉永四年（一八五二）御匙医師奥外科兼帯にまで昇進したが、翌五年十月四十八歳で病歿した。

② 橋本梅尾書状

一通

福井市 加藤二一氏寄託  
年不詳九月二十五日付。長男景岳宛。

〔橋本梅尾〕

福井藩医橋本長綱の妻で、景岳・綱維・綱常の実母。越前国坂井郡箕浦（現福井市蓑町）の真宗大行寺住職小林静境の娘。長綱との間に七男二女（三人は夭折）をもうけた。日蓮宗であつた橋本家に嫁するに当り、実家の宗旨である真宗信仰を続けることを条件づけたと伝えられるように、極めて強い意志を持ち、子女をも厳しく訓育した。景岳も常々、父より母の方が恐ろしいと友人に語り、深い敬愛の念をもって孝養を尽した。

安政元年（一八五四）六月、景岳が江戸遊学中に福井の実家が類焼した時、周囲が景岳を呼び戻して後事を相談するようすすめたのに対して、景岳には何も知らせず女手一つで家を再建し、その学業をまっとうさせるなど、多くの逸話が残されている。明治十五年、六十九歳で歿した。

③ 橋本景岳筆「涵海遺稿」

一冊

福井県松岡町 伊藤文雄氏蔵

景岳が父長綱(嘉永五年<sup>一八三二</sup>歿。法名涵海院)の詩稿をあとめ、浄写したものである。嘉永六年、景岳が二十歳の時にまとめた「先考遺稿」の序には、「思<sup>二</sup>先考<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>復見<sup>一</sup>。猶可<sup>レ</sup>見者。其詩文耳。(中略)今探<sup>二</sup>其遺篋<sup>一</sup>。得<sup>二</sup>詩若干首文若干篇<sup>一</sup>。紀(景岳)俱<sup>二</sup>其久而或散佚<sup>一</sup>也。集録以爲<sup>二</sup>一卷<sup>一</sup>。」とあつて、景岳が父を偲ぶ唯一のものとして、その遺稿類(詩文)を集録して一卷にまとめ、散佚を防いだことが見えてくる。恐らく、「涵海遺稿」はその一部であろう。

父の長綱は、福井藩における蘭方医師の嚆矢ともいわれるが、こうした詩歌にも深い素養があつた。『長綱先生履歴并墓表』には、「梅花ヲ愛シ自ラ庭園ニ培養セリ、又詩ヲ好ム、遺稿頗ル多シ」と見え、文人として一面をのぞかせている。

④「長綱先生履歴并墓表」

一冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

景岳の父、長綱を知る上の根本史料である。「橋本長綱君略履歴」、堤正勝撰「橋本海量君墓表」、岡部養竹筆「長綱の逸事」を一冊に合本したもので、隨所に景岳の末弟綱常の書入れがある。

これによつて、長綱の学問・ひととなりを知り得るのみでなく、景岳がその人格形成の上で、父から受けた多大の影響をもうかがうことができる。

⑤橋本景岳幼時所用 五七桐紋付上下

一着

本館蔵

幼年期の橋本景岳が着用したもので、五または七歳の男児が初めて袴を着ける袴着の儀式に用いたものと伝えられる。なお、この上下は、景岳の姪にあたる政子(弟綱常の娘)の嫁ぎ先、奥野家に伝来した。

⑥橋本景岳筆 「忠亮明正云々」の書幅

一幅

福井県松岡町 伊藤文雄氏蔵

七歳より藩の祐筆小林弥十郎に書を学んだ景岳が、十歳頃その影響下に書いたものと推定される。弥十郎は文徵明(明)の人。江戸時代の唐様書道に大きな影響を与えた)の書風を慕い、子弟にはつとめて大字を書かせた人であつたという。

この書幅の所蔵者伊藤文雄氏の曾祖父亘は、少年の頃橋本家の学僕(下男として働きながら勉強する者)となり、景岳の幼時、その傳役(おもり役)をしたという。この書幅は、そうした縁故により、維新後、橋本家から分与されたもので、景岳の弟綱常の識語が附随している。

⑦高野真齋筆 「一歳十二回無如秋夜白云々」の詩幅

一幅

〔高野真齋〕

名は進、通称半右衛門、真齋と号した。天明八年(一七八八)福井藩士広部家に生まれ、享和三年(一八〇三)福井藩譜代の儒官高野春華の養子となつて家を継いだ。藩の儒者を勤めると共に、書院番や近習に列せられて、少年期の藩主松平春嶽に儒学を教えた。安政二年(一八五五)藩校明道館設立と共に、教官の長である教授に任命され、藩内子弟の教育に従事した。橋本景岳も八歳の時、真齋に入門して、儒学の

手ほどきを受けた。

⑧ 島田雪谷筆 「桜花群禽」の図

一幅  
本館蔵

〔島田雪谷〕

橋本景岳が十二歳ごろ絵を学んだ幕末福井の代表的画人。

名を広意、通称を範左衛門または多可摩、北面に雪谷、南面に青涯の号を用いた。文政十一年（一八二八）福井藩士の家に生まれる。槍・剣・銃の武術に通じ、絵画のほか書道にも才能を顕した。はじめ岩尾雪峯に、のち長州の南宋画家欄西涯に学び、南北二派の画技を兼修した。藩主松平春嶽らの知遇を受け、その画塾は遠近の門人千名を数えたという。明治十七年（一八八四）五十七歳で歿したが、わが国の幕末から明治の画壇を語る上で欠くことのない出来ない評価を受けている。

国定教科書にも採用され、もつとも一般的な「橋本景岳肖像画」を画いた島田墨仙は、その子である。

⑨ 吉田東篁筆 「春来春去幾春々々々」の詩幅

一幅  
福井市春嶽公記念文庫蔵

春来春去幾春々、更数今春四十

春珍重小簷旧梅樹清香百倍

昔年春、

丁未新年試筆 蒙齋主人

春来り、春去り幾春々。更に数ふ今春四十春。

珍重す 小簷の旧梅樹。清香百倍、昔年の春。

丁未新年試筆 蒙齋主人

〔吉田東篁〕

福井藩の儒学者。名は篤、通称悌蔵、東篁・蒙齋などと号した。文化五年（一八〇八）土居方小杖の者などと呼ばれた藩士中最下層の吉田家に生まれたが、藩儒前田雲洞や在京の藩儒清田丹蔵に入門して刻苦勉励し、特に京都の鈴木撫泉に私淑して浅見綱齋の遺化を受け、ついに崎門学者として大成した。はじめ私塾を開いて多くの門人を育成し、社会実用の学であると同時に、机上で終らず学び得たところを実践せよとする、その学風は一時期福井藩を風靡する勢を見せた。

橋本景岳も十二歳（一説に十五歳）の時、東篁に入門し、東篁をして「その居止ほとんど成人のごとし」と感歎せしめる天分を示し、『啓発録』には、東篁の影響が強く読みとれる。また、景岳のほか由利公正・日下部太郎など、優能な人材が門下から輩出した。明治八年（一八七五）六十八歳で歿した。

⑩ 吉田東篁書状 橋本景岳宛

一通  
福井市春嶽公記念文庫蔵

安政四年（一八五七）八月六日付の書状で、橋本景岳が召命に応じ江戸へ出発する前日にあたる。この中で東篁は、景岳に課せられる任務が、容易ならざるものであることを述べ、主君松平春嶽の輔導に全力を傾注するよう申し送っている。

⑪ 矢島立軒手沢本 『周易本義通釈』

七冊  
本館蔵

本書は、元の延祐三年（一二二六）、胡炳文が著述した周易



の註釋書を、享和二年（一八〇二）我が国で刊行したものである。

もと福井藩儒矢島立軒の蔵書で、立軒と弟平格の手で極めて詳細な書入れが行われており、当時の学者の熱心な書物講読の有様が知られる。平格の子轍の由緒書には、立軒が他の蔵書とは区別してこの書を大切にすることが記されていて、いかに心血を注いだ朱註であったかがしのばれる。

〔矢島立軒〕

名は剛また暉、通称を恕介といった。文政九年（一八二六）福井藩士矢島家に生まれ、はじめ藩の儒者吉田東寧に学んで才識を発揮した。安政元年（一八五四）藩から江戸遊学を許され、安積良齋の門に入つて研鑽を積み、安政三年四月藩校明道館講師に任ぜられ、ついで同幹事、助教（教授に次ぐ教官中の高位）へと昇進した。維新後は福井藩教育界の第一人者となり、明治二年（一八六九）明道館文学教授、翌三年明新館一等教授に就任して、中央の教育行政の変動を考慮しながら、福井の教育を改革した。同四年四十六歳で歿す。

橋本景岳とは、吉田東寧門生時代からの友人で、相前後して明道館に勤務するなど、たがいに学才を認めあう仲であった。立軒が寄せた『啓発録』序文は、友人景岳の風姿や気質を活写して余りある。

⑫松平春嶽書状 明治二年嘉平月（十二月）十四日・同三年正月二十三日付。矢島立軒宛。

本館蔵

福井藩儒矢島立軒は、維新後も福井にあって、藩校明新館

を新時代に即応しうるものに改革するため、種々苦心を重ねていた。一方松平春嶽は、明治二年（一八六九）八月、大学別当兼侍読に任ぜられ、わが国最高の教育機関である大学（今の東京帝国大学）の基礎がためと運営のため、日夜非常な努力をばらつていた。

ここに示した春嶽の書状類は、明治二年から三年にかけて、大学別当及び侍読（天皇に御学問を進講する役）在任中の春嶽が、それまでの自己に対する立軒の教導を感謝し、東京における教育制度改革の最新資料を、参考として送付した際のものなどである。

〔明治三年正月二十三日付書状積文〕

授

矢島 剛

旧冬独逸北部聯邦書記官ドクトル

ベルリンは頗る学者也、我皇国之学校

規則ヲ建んことを知りて、一通之見込書ヲ

外務卿ニ呈す、卿より予ニ授らる、予これ

を受けて大学ニ示す、其後加藤大学

大丞（洋字ヲ能ク、心傳居候）ヲ、ベルリン之旅寓ニ遣して

尚又訊問す、尚ベルリン加藤へ一通之

見込書を送ル、其見込書為写候間、

汝迄廻投せり、始メ外務卿へ呈す

規則書ハ、たしか廻候様存候、廻不申候ハ

見セ可申候、否成迄可申越候、学

事多忙、書ハ不尽言要用而已ニ候也、

正月廿三日 大学別当兼

侍読 慶永

親筆

⑬御物『啓発録』

『啓発録』は、嘉永元年（一八四八）、橋本景岳が十五歳（満十四歳）の時、その所懐を記したものである。偉人英傑の伝記を読み、古人の言行・節義を学んで、深く感奮興起した景岳が、自己の規範として、また自らを鞭撻せんがために書いたもので、景岳の一生は、本書を出発点として、展開されたと言つて差支えない。

古来、十五歳の少年にして、かゝる大文章を草したものは、ほとんどその類例を見ず、景岳を考える上で、極めて重要な史料である。

これは、景岳自筆原本の写真版で、その跋文（あとがき）によると、景岳二十四歳の時（安政四年<sup>五七</sup>五月）、たまたま筐底から発見した旧稿（原本）を自ら浄書し、門弟の溝口辰五郎（後の加藤斌）と、実弟琢磨（後の橋本綱常）に与えたものである。矢島立軒（先生と同時期の藩儒で）互に推重しあつた友人）がこれを見て感歎し、これに叙文を加えた。景岳はそれを喜び、自ら右の叙文を写して原本の首に加えると共に、その間の事情を記して跋文を撰し、これを原本の奥に付加した。従つて本書は、本文が景岳十五歳の筆であつて、叙・跋が共に景岳二十四歳の筆である。

のち、これが田中光顕伯爵（土佐藩士、宮内大臣）の手に移り、同氏より宮内省に献納され、御物として今日に至つてゐる。

なお、「啓発」の二字は、『論語』述而篇に見える孔子のこ  
とば「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず」よりとつたも  
のである。

第二 大阪遊学時代

「大都の名家」に師事して、一層知識を深めたいものと、中央への遊学を希望するようになった景岳先生は、もともと西洋医学に関心の高かった父長綱の許しを得て、嘉永二年（一八四九）十六歳の冬、大阪へ留学し、当時関西を代表する蘭学者として著名であった緒方洪庵の適々齋塾に入門した。

適塾に十九歳の春まで在学した先生は、激しい勉強に明け暮れ、めきめきとその才能を発揮し、師洪庵をして「池中の蛟龍」（水中で龍となる機会を待っているもの）なりと嘆賞せしめた。夜中、そつと塾を抜け出し、天満橋下の乞食を診療した逸話も有名である。

適塾で、蘭文読解の実力を身につけたことにより、先生は西欧の情報を直接吸収し、世界的な視野をもつ優れた識見を形成できたのである。

また、この大阪遊学中、先生は梅田雲浜・横井小楠らに会い、その思想や学識に触れて、自己を錬成している。

| 年代   | 西暦   | 年齢 | 事蹟   |
|------|------|----|--|
| 嘉永 二 | 一八四九 | 一六 | ○冬、大阪に遊学、緒方洪庵の適々齋塾に入門して、蘭学を学ぶ。藩主春嶽より成績優秀の褒賞を受ける。○福井藩、海防施設の充実に努力。○笠原白翁、福井での種痘に成功。 |
| 四    | 一八五一 | 一八 | ○梅田雲浜・横井小楠に会い意見  |

|   |      |    |                |
|---|------|----|----------------|
| 五 | 一八五二 | 一九 | ○閏二月一日、大阪より帰国。 |
|---|------|----|----------------|

⑭ 吉田東篁筆 「送橋本弘道遊浪華序」

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵  
嘉永二年（一八四九）冬、十六歳の橋本景岳は、大きな勉強意欲に燃えて大阪遊学の途にのぼり、緒方洪庵の適々齋塾に入塾して、蘭学研鑽を開始した。福井の恩師吉田東篁は、景岳の出發に際し、特にこの送序を贈って餞とした。東篁・景岳の師弟関係を示す代表的な史料である。

⑮緒方洪庵書状

一通  
本館蔵

安政五年（一八五七）五月二十五日付で、福井の笠原白翁に宛てた書状である。洪庵は、嘉永二年（一八四九）十一月、白翁から分苗を受けて、道修町五丁目に大阪除痘所を開設し、種痘普及に努力していた。安政五年四月に至って、その大阪除痘所が、わが国最初の官許を得、大阪での種痘は洪庵の主宰する除痘所一箇所に限られることとなった。この書状は、洪庵がその喜びを白翁に報じ、先年分苗依頼の援助を感謝したものである。

〔緒方洪庵〕

足守藩士佐伯惟因の子として文化七年（一八一〇）に生まれ、名を章あきらとつけた。二十一歳で江戸へ出、坪井信道・宇田川玄眞に蘭学を学び、蘭方医を志した。二十七歳の時長崎に下り、蘭医ニーマンに師事して研鑽を積み、天保九年（一八三八）大阪で蘭学塾（適々齋塾）を開設した。ここで二十五年の長きにわたり、医師として活動しながら多くの青年を訓育し、東の杉田成卿・西の緒方洪庵と並び称されるに至った。その門下からは、大村益次郎・福沢諭吉・大島圭介・長与専齋など、多くの俊英が輩出している。

文久二年（一八六二）幕府に召されて江戸へ出、奥医師兼西洋医学所頭取に任ぜられたが、翌年五十四歳で病歿した。著書・訳書に「扶氏経験遺訓」「病学通論」「虎狼痢治準」など多数がある。

蘭医学に志した橋本景岳は、嘉永二年（一八四九）十六歳で洪庵に入門し、適塾で三年を過ごした。景岳の逸材である

ことを見抜いた洪庵は、景岳を「池中の蛟龍」（池中にひそんで、龍となる機会を待っているもの）と絶賛したという。

⑯緒方洪庵筆「大坂除痘館記」

一通  
本館蔵

嘉永二年（一八四九）十一月、福井の笠原白翁より分苗を受け、道修町五丁目に除痘所を開設した緒方洪庵は、牛痘種痘を信じない漢方医等の悪質な誹謗中傷に会い、再三絶苗の危機に見舞われるなど、非常な辛苦を克服しながら、種痘普及を推進した。その甲斐あって、安政五年（一八五八）四月には、主宰する除痘所が官許を得、万延元年（一八六〇）十月には、その規模を拡大して、尼崎町に新館を開設した。

「大坂除痘館記」は、尼崎町新除痘館開設の日、それまで十年に及んだ種痘活動の経過を、洪庵自ら筆録したものである。

⑰緒方洪庵訳述「扶氏経験遺訓」

二二卷

大野市 岩治勇一氏蔵  
本書は、緒方洪庵の代表的訳著で、幕末日本の医学界にきわめて大きな影響を及ぼしたものである。

原書は、十九世紀初頭の著名な医学者、ベルリン大学教授のフーフェランド（一七六四～一八三六）が、数十年にわたる臨床経験を基礎に書いたもので、蘭人ハーヘマンがオランダ語に翻訳したものが、わが国にも伝えられた。洪庵は、天保十三年（一八四二）その全巻の重訳を終えていたが、幕府の出版許可がおりず、実際に刊行されはじめたのは、安政五

年（一八五八）であったという。

⑱ 適々齋塾姓名録

一冊

天保十五年（一八四四）春より元治元年（一八六四）七月に至る、大阪緒方洪庵の適々齋塾の塾生名簿で、入塾年月日、出身地、姓名などが記されている。この間の入塾者は六三六名にのぼり、出身地はほとんど全国に及んでいる。その内、越前出身者は二五名を数え、橋本景岳はその九番目にあたる。現在、本書の原本は日本学士院の所有となっている。

⑲ 岳飛筆 「至宝」石摺の扁額

一額

福井市春嶽公記念文庫蔵

嘉永二年から五年（一八四九～一八五二）にかけて、大阪緒方洪庵の適塾で蘭学を学んでいた橋本景岳が、患家であったある書店の主人から譲り受け、愛蔵した品である。「景岳」という号は、「岳飛を景慕する」との意味を込め、少年時代自ら称したものであった。南宋の若き將軍岳飛の一生と、橋本景岳の生涯を考え合わせる時、この小額は貴重な意味を有している。

〔岳飛〕

南宋初期（一二世紀中葉）の將軍。当時宋は国の半分に当る淮河以北を、満洲に勃興した金に占領され、その回復が人々の悲願であった。岳飛は若くして兵を率い、国土奪回のため北に東に勇戦し、金軍を圧倒して旧都開封の間近かまで進出した。しかし、金と通じた秦檜のため無実の罪に陥れられ、三十九歳で獄死した。獄中、奸臣との妥協を一切拒否し、皇

帝への忠誠と国土の回復という信念を貫き通した。学識深く兵法に精通し、書にすぐれ、質素廉潔の武人として有名である。

橋本景岳は、少年期より岳飛を模範とし、十二歳の時、岳飛を景慕する意味から景岳と号したという。景岳が、岳飛のような人物にならんと志したことは、非常に重要である。

⑳ 笠原白翁書状 安政四年八月五日付 橋本景岳宛

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政四年八月五日付の書状で、召命により江戸へ発足することの決まった景岳に、江戸での薬品等の調達を依頼したものである。

〔笠原白翁〕

名は眞言、通称良策、白翁のほかに桂山・桂窓などと号した。文化六年（一八〇九）足羽郡深見村（現福井市深見町）に生まれ、藩の医学所済世館で漢方を、さらに江戸の磯野公道に入門して古医方を修め、福井城下で開業した。しかし、三十歳を過ぎてより西洋医術に志し、天保十一年（二八四〇）京都の日野鼎哉に入門して、本格的な蘭学研鑽を開始し、帰国後大いに蘭方を首唱して、福井に於ける初期蘭学界の代表者と目されるに至った。また、弘化三年（一八四六）以降、師鼎哉と協力して牛痘苗の輸入を計画し、藩主松平春嶽の理解と援助を得て、嘉永二年（一八四九）冬、福井で最初の種痘に成功、わが国種痘史上に不朽の功績をのこした。一方で白翁は、飛騨高山の田中大秀の門人となって、国学に関しても深い造詣を有し、無批判な西欧崇拜を戒める独特の学問観

を有していた。生涯を医術の発展に捧げ尽し、明治十三年（一八八〇）七十二歳で歿した。

橋本景岳は、一〇代の頃、大阪遊学時代より白翁を先輩として尊重し、福井の蘭学振興のため、同志として互いに協力しあっている。

②① 笠原白翁所用 種痘針・蕃苗器

九点  
本館蔵

②② 笠原白翁著 「牛痘鑑法」草稿

一冊  
本館蔵

「牛痘鑑法」は、出版に至らなかった白翁の著述で、当時の医師を対象に、種痘後天然痘に対する免疫が確実に生じたか否かを鑑定する重用性を説いたものである。

白翁は、福井における「蘭社の棟梁」と称される程に、洋学、特に蘭法医学の研鑽につとめたが、一方では国学についても深い造詣を持っていて、洋学の優秀性を認めても決して西洋崇拜におちいることがなかった。

この「牛痘鑑法」の扉部分にも、白翁の学問観を示す「毎旦奉三礼大少二柱神像」「終歲耽三読東西万邦之書」の連句があげられ、白翁が広く海外の書物を読んで新知識を吸収すると同時に、毎朝祭壇を礼拝して日本人としての自覚を日々新にする必要を痛感していたことが知られる。

②③ 橋本景岳書状貼交ぜ屏風 嘉永五年十月一日付ほか

九通  
福井市 某氏蔵

②④ 笠原白翁所蔵 『扶氏経験遺訓』蘭文写本

四綴  
本館蔵

十九世紀初頭のベルリン大学教授フーフェランドの著書『扶氏経験遺訓』は、世界各国語に翻訳され、医学者達の間にも広く流布した。日本でも、緒方洪庵の訳本などが、部分的に写され早くよりひろめられた。笠原白翁も、そうした訳本を入手し研鑽を続けていたが、できるだけ原書に近いものを入手せんとし、嘉永四年（一八五二）大阪適塾在学中の橋本景岳に、その斡旋を依頼した。

この蘭文写本は、嘉永四年六月より同六年四月にかけて、はじめ景岳が、景岳退塾後は笠原健蔵（白翁の実弟で適塾生）が、白翁との仲立ちをして、加賀出身の適塾生山本清仲に筆写させたものである。随所に紅紙の細片を貼付けた「不審紙」が見られ、白翁の熱心な研学ぶりを物語っている。

②⑤ 梅田雲浜筆 「宿雲散洲云々」の詩幅

一幅  
宝塚市 長谷部俊吉氏寄託

〔梅田雲浜〕

幕末の小浜藩士。崎門派の儒者で、志士として知られる。通称源次郎、名は定朝、雲浜のほか湖南・東鳩などと号した。

嘉永元年（一八五二）、公然と幕府を批判した国事建言をし、藩を追放され浪人となる。その後は京都へ在任し、崎門派の学塾で講義し、尊王攘夷論を唱えて在京志士を指導した。將軍継嗣問題では一橋派に属し、井伊直弼を排斥して、一橋慶喜の擁立に努力し、青蓮院宮尊融親王の知遇をうけて、幕府改造の意見書を出し、「戊午の密勅」降下の起因を作った。



安政大獄に際し、第一に捕えられ、安政六年（一八五九）四十五歳の時、幽囚中の屋敷で病歿した。漢詩文をよくし、「妻は病床にふし、子は飯に泣く云々」の有名な詩で知られる。嘉永四年大阪に遊学していた十八歳の橋本景岳は、京都に雲浜を訪ねて、その憂国の談論に接し、雲浜もまた、福井来遊の節、景岳を訪ねている。

②⑥横井小楠筆 「試看天地間事云々」の書幅 一幅

福井市 土田耕司氏寄託  
〔横井小楠〕

熊本藩士。通称平四郎、名は時存、小楠のほか沼山・畏齋などと号した。幼年より学問を好み、藩校時習館に学んで才識を發揮し、二十九歳のときその居寮長に就任した。のち江戸に遊学し、藤田東湖と交わって水戸学の影響を受け、松崎慊堂の門下となって研鑽をつんだ。帰国後、自藩の藩政改革にのりだしたが失敗、諸国遊歴の旅に出て見聞を広め、各地の有志と会見して意見を交換し、講筵を開いて名声を得た。

松平春嶽に招かれて、安政五年（一八五八）より福井藩の政治顧問となり、藩校明道館の講義をしつつ、開国通商と殖産興業による富国強兵策を提唱、橋本景岳歿後の藩政改革を指導した。文久二年（一八六二）、春嶽の政事総裁職就任とともに、江戸にあって活動し、その幕政改革に協力して、幕府首脳の注目をあつめるに至った。しかし、友人の暗殺事件に関係して、土道忘却の責任を問われ、いったん福井へ逃げたが、翌三年中根雪江と対立して失脚し、熊本に退隠した。

明治元年（一八六八）王政復古とともに、新政府の召命を

受け、徴士参与として再び京都での活動を開始したが、翌三年耶蘇教化共和論者と見なされ、六十一歳で暗殺された。景岳は、大阪適塾在学中、小楠に面会してその論談を聞き、一時熊本遊学を希望した。

②⑦横井小楠著 「学校問答書」写本 一綴

本館蔵

嘉永五年（一八五三）福井藩内では、学校を創設しようとする気運が高まり同藩士有志は、熊本の横井小楠に学校の制度について意見を乞うた。これに答えるべく著したのが、この書である。

②⑧横井小楠所用 刀（無銘） 一振

芦屋市 横井和子氏寄託

文久元年（一八六一）四月、江戸に上って靈岸嶋邸幽居中の松平春嶽に進講した横井小楠が、江戸を去るに当って春嶽より拝領した刀である。もと福井藩老永見家の重宝で、永見家から三代藩主松平忠昌に献納された。鞘上に、小楠の筆で左の由緒書が記されている。

中納言秀康卿越前御入部之年、御家老永見右衛門尉に彦万石之御加増、御礼として代々相伝之刀を奉獻す。宰相忠昌卿之御差料と成り、御代々御相伝、文久元年八月十五日春嶽老公由来を述べ給て、御手から給りしもの也。

小楠謹識

②⑨橋本景岳書状 嘉永五年閏二月十五日付 太田良策ほか宛

嘉永二年十六歳の時、緒方洪庵の適々齋塾に入学し、蘭学研鑽につとめていた景岳は、嘉永五年（一八五二）閏二月一日、父長綱の病のため学業半ばで帰国を余儀なくされた。この書状は、帰国直後、適々齋塾に残る友人太田良策ほかに宛てたもので、彼等がなお学問を続けられることをうらやみ、新たに得た知識があれば教えて欲しい旨したためたものである。勉学意欲に燃えながら修学を断念せざるを得なかった、十九歳の景岳の心情をよく伝えている。

### 第三 在藩医師時代・江戸遊学時代

嘉永五年（一八五二）十一月、父の跡を継いで藩医の列に加えられた十九歳の景岳先生は、大阪で学んだ最新の知識と技術を駆使して、外科医としての活動を開始した。先生は、医師としても見事な診療ぶりで人々の目をみはらせたが、再び中央へ遊学して、より一層学問を深めたいとの熱望を断ち切れず、安政元年（一八五四）、ついに江戸遊学の許可を得た。

同年三月、江戸へ上つた二十一歳の先生は、まず坪井信良に、次いで杉田成卿（成卿）に入門して蘭学を学び、あわせて塩谷岩陰らに師事して漢学を学んだ。江戸の諸名家は、こぞって先生の才能と学識を賞揚し、先生の学問も医学の研鑽にとどまらず、極めて広範囲に及んだ。

翌安政二年夏、藩命により一旦帰国した先生は、異例の大抜擢を受けて、書院番に列せられた。藩主松平春嶽や中根雪江・鈴木主税らが、先生のすぐれた才識を知って、その力を十二分に發揮させようとしたからである。

間もなく、諸藩の学制調査などを命ぜられて江戸へ戻った先生は、さらに学究に努めた。その洋学に対する関心も、蘭学ばかりでなく英学にも注がれ、海外の情勢を的確に把握して、抜群の世界的視野を形成していった。

先生はまた、二度にわたる江戸遊学中、水戸の藤田東湖・安島帯刀、薩摩の西郷隆盛など、諸藩の碩学・有志と次第に親交を結び、多くの知己を得ると共に、自己を磨き大いに見聞を広めた。

| 年代 | 西暦        | 年齢 | 事蹟   |
|----|-----------|----|--|
| 嘉永 | 五<br>一八五二 | 一九 | ○閏二月一日、大阪より帰国。<br>○三月、横井小楠福井藩に『学校問答書』を呈上。○八月、オランダ商館長、明年の米艦渡来を予告。<br>○一〇月八日、父長綱病歿。十一月、家督を相続し藩医に列す(二五石五人扶持)。   |
| 安政 | 元<br>一八五四 | 二二 | ○六月三日、米使ペリー浦賀へ来航。○同二日、徳川家定一三代將軍に就任(一〇月宣下)。○八月、松平春嶽、老中阿部正弘に將軍後継者問題を説く。○この年、医療に従事し、笠原白翁・半井仲庵らと蘭学研究会を開催する。<br>○正月、ペリー再渡来。三月、日米和親条約締結。○二月八日、吉田東篁母の乳癌を手術。○同二二日、江戸遊学へ出発。○三月五日、江戸到着。坪井信良・杉田成卿に蘭学を、塩谷岩陰に漢学を学ぶ。<br>信良・成卿ら、景岳の才能に驚嘆する。○六月、福井大火、自宅類焼す。母梅尾、景岳に知らせず独力で再建す。○八月、日英和親条 |

|  |           |    |   |
|--|-----------|----|---|
|  | 二<br>一八五五 | 二二 | 約、一二月、日露和親条約を締結。<br>○この年、少しずつ他藩士と交わり、意見を交換し見聞を広める。<br>○六月、藤田東湖に会い意見を聞く。○同月、福井藩校明道館開校。<br>○七月末、藩命により帰国。<br>○一〇月、医師の職席から書院番に抜擢される。○同月、江戸安政の大地震。藤田東湖圧死。○一二月、再び江戸へ上り、鈴木主税の役宅へ同居、研鑽を続ける。○同月、西郷隆盛・水戸藩士安島帯刀・同菊池為三郎らと対面、交流をはじめめる。 |
|  | 三<br>一八五六 | 二三 | ○正月、福井藩、藩医に漢・蘭兼学を命ず。○二月一〇日、鈴木主税病歿。景岳この日まで主税の看護に全力を尽す。○同一九日、杉田成卿より『濟生三方』の校訂を依頼さる。また、英語辞書を使用しはじめ。○三月、武田耕雲齋と対面。耕雲齋、景岳を藤田東湖の再来と讃嘆する。○四月、中根雪江の帰国の命に対し、国是・藩是を論じて、江戸滞留を希望す。<br>○六月一四日、福井帰着。                                      |

③⑩ 橋本景岳筆 「松子為食云々」の書幅 一幅 福井市 加藤二一氏寄託

梁の元帝が、劉智に与えた書の中に「松子為餐、蒲根是服」とあるから、それを引用したものであろうか。書風から見ると安政初年頃の筆と推定されている。もと橋本家の所蔵であった。

福井市春嶽公記念文庫蔵

③⑪ 橋本景岳書状 安政元年八月二十五日付 弟縄三郎（橋本綱維）宛 一通 福井市春嶽公記念文庫蔵

〔橋本綱維〕

福井藩医橋本長綱の子として天保十二年（一八四二）に生まれる。景岳の弟にあたる。通称は彦也。幼年期より武芸を好み、兄同様英才として知られる。兄景岳や弟綱常が医学を志したのに対して、洋式航海術に志を立て、江戸の江川坦庵などに学んだが、景岳の刑死後藩命により医学修業に転じ、元治元年（一八六四）以降、長崎に遊学して研鑽を積んだ。

会津征討に従軍医として参戦し、弟綱常とともに野戦における組織的医療活動を見事に展開し、他藩の医師を驚かせた。明治四年陸軍に入り、軍医として西南戦役に従軍、台湾蕃地病院長・征討軍団病院長・大阪鎮台病院長などを歴任、大いに将来を囑望され、一等軍医正まで昇進したが、同十一年、三十八歳で急逝した。

四月九日付書状は、景岳が先輩として推服した鈴木主税の墓表を、主君松平春嶽に揮毫してもらいたいという、当時としては異例のことを実現すべく、雪江にとりなした依頼したもの。また四月二十六日付の書状は、在藩の中根雪江が、その後の藩の大方針を協議する会議の席に、景岳を参加させようとして、江戸遊学中の景岳に帰国を促したのに答えた書状である。この中で景岳は堂々と国是を論じ、藩用のいかによっては帰国に応ぜぬ旨を、「例の議論のみに日を暮し、後はいたづらに嘆息に尽し候事に候はば、（中略）帰北などは中々つかまつらず」と、厳しい語調で書き送っている。

当時、このような藩命に接すれば、重臣でも直ちに帰国するのが普通であったから、この書状を見た在藩の重臣達は、景岳の意気と大膽に驚嘆したという。

③⑫ 橋本景岳筆 西洋事情の書付 安政二・三年頃 一紙 福井市春嶽公記念文庫蔵

当時一級の蘭文読解力を有し、世界情勢を的確に把握していた橋本景岳が、西洋諸国の国情を記したものである。大體、和蘭（オランダ）を標準にして書かれ、政治・教育制度などに触れている。恐らく、藩の重臣に示し、その目を開かせ覚悟をせまったものと思われ、安政二・三年頃の筆と推定されている。

③⑬ 橋本景岳書状 安政三年四月九日・同二十六日付 中根雪江宛 二一通

③⑭ 橋本景岳筆 蘭書治鐵学の訳文 安政二・三年頃 一紙 福井市春嶽公記念文庫蔵

幼な友達であり、親戚でもあった福井藩士佐々木長淳の依頼に応じて、蘭書の治鐵法（鉄を精製する法）についての記事を翻訳したものである。長淳は福井藩の製造局頭取として、銃砲や洋式船の製造に当り、景岳とともに、蘭学研究に熱意を燃した人であったから、こうした蘭書の訳出を依頼したのもと思われる。この訳文は安政二・三年頃、景岳が江戸に遊学中のものと推定され、景岳の語学力と、広範で深厚な学識を窺い知ることができる。

③⑤ 坪井信良書状 安政元年四月一日・同二年二月三十日付  
佐渡三良宛

高岡市 佐渡養順氏蔵  
二通

幕末一級の蘭方医として知られた坪井信良が、江戸から高岡の実兄佐渡三良に宛てたもので、書中、この時二十一・二歳の門人橋本景岳に関する人物評が含まれていて、きわめて貴重である。

すなわち、四月一日付のものには、「年甫<sup>まだ</sup>二十一才、頗ル沈才篤厚、誠ニ頼母敷人物、(中略) 実ニ可<sup>レ</sup>畏可<sup>レ</sup>羨一俊才ニ御座候」など見え、二月三十日付のものには、

福井より来居申候者

橋本左内青年奇才子也、

大岩主一四十六才、老年篤志之人ナリ、

益田宗三

魚住順方

此二人何レモ中ノ上ナリ

と記されている。

この評価は、嘉永五年（一八五二）、父の長逝により大阪の

蘭学者緒方洪庵の適塾を辞して家督を相続、藩医の列に加えられ、間もなくその俊敏を認められて、安政元年二月、藩命により江戸に遊学、坪井信良に学び、更に杉田成卿に入門して研鑽を深めていた頃の橋本景岳に対するものであるが、当時一流の学者が客観的視野から与えた公正な評定として、第一等の史料価値を有している。

〔坪井信良〕

越中高岡の婦人科売薬の旧家として知られる佐渡養順家に生まれる。幼名を末三郎、のち良益と称し、号は椋里・初白と名乗った。

天保十一年（一八四〇）十八歳の時、京都・大坂に遊学、小石元瑞に師事して医学を学んだ。次いで江戸へ赴き、蘭医坪井信道に入門、信道の長女米子をめとって、信道の養子となり、坪井姓を称して名を信良と改め一家を創立した。その後広瀬旭荘について漢学を修め、再び大坂へ上って緒方洪庵の適塾に学んだ。嘉永元年（一八四八）養父信道の病歿とともに江戸へ帰り家業を継ぎ、嘉永六年福井藩に召抱えられ、松平春嶽の侍医を拝命した。安政三年（一八五八）濟世館教授として一度来福したが、翌年再び江戸に帰り、在江戸のまま福井藩に十年間つかえ、元治元年（一八六四）には、幕府の奥医師に抜擢された。

維新後は、わが国最初の医学雑誌（明治七年創刊）を発行、その廃刊後は翻訳と著述に従事して、同三十七年（一九〇四）八十二歳で歿した。

橋本景岳は、安政元年（一八五四）江戸に遊学して、まず信良に入門した。信良は、即座に景岳の非凡さを見抜き、実

兄宛の書状に「実に可<sup>おそろ</sup>畏<sup>おそ</sup>可<sup>うら</sup>羨<sup>む</sup>一俊才に御座候」と、その感嘆ぶりを記している。

③⑥ 堆黒筆立・同文鎮・唐筆

高岡市 佐渡養順氏蔵  
坪井信良が、松平春嶽より拝領の品。

③⑦ 杉田成卿書状 安政二年七月二十日・同三年四月二日付  
橋本景岳宛

〔杉田成卿〕

名は信、梅里・風来散人と号した。杉田家は、代々江戸定府の小浜藩医で、玄白の孫にあたる。天保七年（一八三六）二十歳の時、坪井信道に蘭医学を学び、名倉五三郎・三次堀専次郎について蘭学を学んだ。弘化元年（一八四四）幕命によりオランダ国語の親書の翻訳を担当し、蘭文読解の第一人者とみなされるに至った。翌年家を継ぎ、小浜藩主の侍医となり、安政三年（一八五六）には、幕府蕃書調所の教授に推挙され、同六年（一八五九）四十三歳で歿した。

③⑧ 杉田成卿蘭文原稿

二通  
福井市春嶽公記念文庫蔵

③⑨ 塩谷右陰筆 「雲際依々云々」の詩幅

一幅  
福井市春嶽公記念文庫蔵  
〔塩谷右陰〕

名は世弘、通称は甲蔵、右陰は号である。文化六年（一八〇九）江戸に生まれ、十六歳で幕府の学問所「昌平黌」に入学した。松崎謙堂を師として刻苦勉励し、昌平黌随一の英才と称されるに至る。はじめ天保の改革で有名な浜松藩主水野忠邦の儒官となり、のち幕府儒官に昇進して昌平黌の教官となり、慶応三年（一八六七）五十八歳で歿した。  
安政元年（一八五四）江戸へ遊学した橋本景岳は、蘭学研鑽の一方、右陰に師事して漢学修業も怠らなかつた。

④⑩ 塩谷右陰書状 安政五年六月六日付 橋本景岳宛

一通  
福井市春嶽公記念文庫蔵

④⑪ 藤田東湖筆 「道理貫心肝云々」の書幅

福井市 熊谷太三郎氏寄託  
福井藩医半井家旧蔵。伝えによると、水戸の儒学者藤田東湖が江戸で病気に罹った時、半井仲庵の治療によって治癒したことから、その返礼として贈られたものという。

「道理貫心肝云々」は、蘇東坡（宋の著名な詩人）が李公擇に与えた書中に見える語で、東湖が自作の「回天詩史」に引用するなど、深く心を引かれていた一節である。

〔藤田東湖〕

水戸藩士藤田幽谷の子として生まれる。名は彪、通称虎之助のち誠之進、東湖と号した。幼年より英才として知られ、家督相続後、藩主後嗣問題で徳川齊昭を擁立し奔走した。水戸学派の儒者として、その才識を発揮する一方、齊昭の側近として藩政改革を推進、すぐれた政治的手腕を示した。齊昭



の失脚後一時閑居したが、ペリー来航後、再び齊昭を補佐して活躍、諸国の有司から絶大な信望を得た。安政二年（一八五五）江戸の大地震に遭遇して、五十歳で圧死した。

橋本景岳は、安政一・二年江戸遊学中に東湖に会い、海防問題等につき意見を聞いている。東湖は一目で景岳の逸材を知り、福井の鈴木主税にその抜擢を建言したという。

④② 橋本景岳筆 「回天詩史」の幅

一幅

福井市 熊谷太三郎氏寄託  
福井藩医半井仲庵が、水戸の藤田東湖から診察の札に贈与された、「道理貫心肝忠義墳骨髄云々」という十九大字の出品などを景岳に質問したのに対し、景岳がその出典に関係深い東湖の「回天詩史」の一節を、特に記して仲庵に与えたものである。

「回天詩史」は、弘化元年（一八四四）東湖が徳川齊昭から處罰を受け幽居中に、往時を追懐して詠じた詩で、一句毎に当時の事実を記してある。機密に属する部分が多く、他見を許さなかったが、景岳は密かにこれを入手し、東湖が蘇東坡（宋の文豪）の「道理貫心肝忠義墳骨髄云々」の語に心服していた所以を知って、「回天詩史」中の「猶餘忠義墳骨髄」の一節だけを書いて、仲庵に送ったのである。

④③ 藤田東湖書状 年不詳二月十五日付 中根雪江宛

一通

越葵文庫蔵

④④ 半井仲庵筆 中根雪江を送る詩

一幅

〔半井仲庵〕

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井藩医。名は保、通称を元仲・仲庵といい、南陽・晩春と号した。藩医の重鎮として十六代藩主松平春嶽の信任厚く、才能ある若い医師を数多く見出し、これを援助育成して、幕末福井の医学水準を、全国有数のものに高めた功労者である。仲庵自身は漢方医として出発したが、友人の蘭方医笠原白翁の影響で、四十歳を過ぎてから西洋医学に志し、研鑽努力の結果、周囲の青年蘭方医達を驚嘆させる程の原書読解力を身に付け、福井の蘭方医学興隆の基礎を築いた。明治四年（一八七二）十二月、大阪に病氣治療のため旅行中、六十歳で歿した。

笠原白翁の紹介で、他の福井藩重臣にさきがけて景岳を知り、その才学を見抜いて、抜擢に尽力した。

④⑤ 半井仲庵油彩肖像画、並びに松平春嶽筆画賛

二点

福井県医師会寄託

福井藩医半井仲庵の歿後三年を経た明治七年（一八七四）十二月、当時台湾蕃地病院長であった橋本綱維（景岳の弟）等、福井医学校関係者十三名の発起によって、山田シゲアキが描いたものである。これには、別に松平春嶽の賛文が付されており、福井藩における蘭学興隆の基礎を築いた仲庵を称えている。その賛文は、左のとおりである。

邦醫 昔歲 蘭学に嗜し 顧みるに汝先鞭して独り群を出づ 今日の隆興 偶爾に非ず 長く小照に留めて遺勲を表せん。

10と=7月

半井南陽の肖像に題す 春岳永

④6 橋本景岳筆 「送半井南陽帰郷詩」の幅 一幅

福井県金津町 島崎豊子氏寄託

④7 鈴木主税書状 年不詳九月二十一日・十二月二十一日付

平本作野右衛門(平学)宛 二通 本館蔵

〔鈴木主税〕

名は重栄、通称主税、鑿城などと号した。文化十一年(一八二四)福井藩士海福正敬の子として生まれ、同藩鈴木長恒の養子となる。幼年より学問を好み、その英才ぶりは、早くより藩内の評判となった。

天保十三年(一八四二)十六代藩主春嶽の時、社寺奉行となり、のち町奉行に転じて善政をしいた。この間、城下木田の町民が、その仁政を深く感謝し、生前より世直神社を創建して神と仰いだことは有名である。この神祠は今日も旧一里塚のあたり福井市みのり二丁目に現存し崇敬をあつめている。

弘化三年(一八四五)以降、側向頭取・側締役などに任じて年少の藩主春嶽を補佐し、嘉永六年(一八五三)黒船の来航を知るや奮然として、江戸に赴き、藩政の機密に参与し、国事に奔走することとなった。諸藩有為の士と広く交わり、意見を交換して、自藩の進路を誤らせず、学事・財政・兵備等すぐれた建策をして藩政の一新をはかった。俊秀橋本景岳を見いだし春嶽に推挙したのも主税である。安政三年(一八五八)江戸常磐橋藩邸内で景岳に見とられつつ、四十三歳で

歿した。

生前、水戸の藤田東湖は「今や真に豪傑と称すべき者、天下に鈴木主税・西郷吉之助(隆盛)あるのみ」と評し、肥後藩家老長岡監物は「学術正大にして徳義智識備はるは重栄に如くはなし、余最も重栄に服す」と評している。

④8 鈴木主税建言書 弘化三年七月二十三日付 松平春嶽宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵  
維新後、村田氏寿の編纂した「慶永公名臣献言録」に収録されているもので、十九歳の主君の行状を厳しく諫めている。

④9 鈴木主税油彩肖像画 一額 越葵文庫蔵

⑤0 橋本景岳筆 「安政丙辰二日日録」 一冊 福井市春嶽公記念文庫蔵

安政三年(一八五六、丙辰の年)、景岳二十三歳の時、江戸遊学中の日記で、二月二十七日から五月二十九日に至る間が記録されている。この年二月十日、信頼する鈴木主税が病歿し、三月十六日、藩主松平春嶽が帰国した後、景岳は江戸に留まって、漢・蘭学の研究を続けると共に、諸藩の有志と積極的に交って、時局の把握に努めていた。  
記事は、はなはだ簡略であり、隠語や略語が多く明瞭を欠くが、この時期の景岳の動静を知る上で重要な史料である。

⑤1 橋本景岳筆記帳類 安政元年より同三年頃 四冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

「読書筆記」

橋本景岳が読破した書籍の要点を抄録したり、読後感を書留めたもの。これにより景岳の精読した書物が、和漢洋の別を問わず、多分野にわたり、きわめて広範なものであったことがよく知られる。

「景岳先生手帳」

橋本景岳が日常携帯した手帳と思われる。第一頁に「Ver-samelina vanonderscheidene Dingen」（諸事彙纂の意）とあって、蘭語文法・洋式兵学・和漢洋の度量衡など、種々の事柄につき、覚書風に書留めてある。

「史学日涉」

「子集日涉」「読書筆記」などと同様、江戸遊学中の景岳の筆記帳で、和漢の史書の技書を中心としている。

「子集日涉」

表紙右肩に景岳の自筆で「安政二丙辰四月創筆」（安政二丙辰は安政三丙辰の誤りであろう）、左肩に「子集日涉」と記されている。安政三年（一八五六）江戸遊学中の筆記帳で、自己の論説や、諸書の抜萃が主となっている。

⑤2 橋本景岳筆 「容安訳稿」 安政二・三年頃 一冊

福井県松岡町 伊藤文雄氏蔵

景岳は、江戸遊学中、医術ばかりでなく、広範な蘭学の研究に没頭し、次第に理化学一般・洋式兵学に関心を示し、力を傾注するに至った。この「容安訳稿」は、安政元年から

三年（一八五四～六）にかけて、江戸において二種の蘭書を翻訳したものの一部で、内容は鏡面における光線の反射や、天体の月についての記述である。これによって景岳のすぐれた語学力や旺盛な知識欲の一端を知ることができる。

なお、容安とは、景岳晩年の別号である。

第四 明道館時代

江戸で研鑽を続けていた景岳先生は、安政三年（一八五六）五月帰藩を命ぜられ、翌四年正月二十四歳にして、藩校明道館の学監同様心得に任ぜられ、一藩の教育改革に取り組みことなつた。

先生は、自藩の教育を激動の時代に即したものとするため、教官の旧弊を厳しく批判しつつ、新たに洋書習学所や数学科を新設し、文武一致の見地から、剣槍柔砲の諸術を総合した総武芸稽古所を館内に併設するなど、実用に主眼を置いた改革策を、次々と断行した。

ことに、洋書習学所新設に当って公示した洋学教育の方向、すなわち、洋学の先進性と優秀性に心を奪われ、安易な外国崇拜に陥ることを最も戒め、既に漢学等に習熟して、日本人としての自覚を確立した学生にしか、洋学学習を許可しないとした大方針など、この時期の先生ならではの主張には、見るべき点が少くない。

|    |       |     |   |
|----|-------|-----|---|
| 年代 | 西曆    | 年齢  | 事蹟  |
| 安政 | 三二八五六 | 一三三 | ○六月一四日、福井帰着。○七月、藩校明道館講師同様心得・蘭学掛、九月、明道館幹事兼側役支配に任ぜられる。○八月、ハリス下田着。○一〇月、景岳の説得により藩主松平春嶽・中根雪江ら開国の必要を自覚。これより、福井藩 |

|   |      |    |   |
|---|------|----|---|
| 四 | 一八五七 | 二四 | 論は開国に統一される。   |
|   |      |    | ○正月一五日、明道館学館同様心得に就任。○三月、村田氏寿、横井小楠招聘と諸国巡視を命ぜられ出發。○四月、建議して明道館内に洋書習学所を設け、文武一致を主張して、総武芸稽古所の付設を実現する。○五月、制産に関する意見書を起草。○閏五月一五日、明道館教官の弊風を厳しく批判し、文武学制を論じた意見書を家老松平主馬へ提出し、藩校教育の改革を主張する。○同一八日、明道館に新設の数学科は、実用を旨とするよう、家老より布達せしめる。 |
|   |      |    | ○同月、農政に関する意見書起草。  |
|   |      |    | ○六月一七日、阿部正弘歿。   |

⑤ 橋本景岳所用 桐製本箱

橋本景岳常用の本箱で、蓋の表裏に次のような景岳の墨書がある。

（表）急流中底の柱即ち是れ大丈夫の心  
『書経』に見える「中流底柱」の語から出たもので、「急流中之底柱」とあるべきを景岳が書き誤つたものと思われる。書風から見て少年時代のものと思定され

橋本左内先生遺徳顕彰会寄託 一箱

る。

(裏)君恩山よりも重く命は毛よりも軽し、主家を興復する是れ素情。已に大仇を斬り臣が願遂げたり、恨むらくは臣が輩をして忠名を得しめたるを。

右大石良雄を詠ず 景岳主人紀書

大石良雄を詠じた右の詩は、筆跡から見て安政四年頃のものと推定される。

⑤4 橋本景岳所用 桐製書物挾板

二点

福井市春嶽公記念文庫蔵  
橋本景岳常用の書物挾で、板面表裏に景岳自筆の墨書がある。

「集義」とは、『孟子』中の語であるが、宋子発文集序に「養氣之功在於集義。文章之能在於積理。」とあるのが、この出典であると推定される。各々の裏面に書かれている語については、出典が判然とせず、景岳自身の造語かとも考えられる。

⑤5 橋本景岳所用 桐製書見台

一点

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑤6 橋本景岳所用 大硯

一点

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑤7 橋本景岳筆 「館務私記」

一綴

福井市春嶽公記念文庫蔵  
橋本景岳は、安政三年(一八五六)七月十七日福井藩校明

道館講師同様心得・蘭学掛に任ぜられ、九月二十四日には明道館幹事兼側役支配、さらに翌四年正月十五日には明道館学監同様心得に登用されて藩内の教育改革を担当し、八月二十日に至り江戸に上つて侍読兼御内用掛を命ぜられた。

これはその間、安政四年正月十六日より六月十二日に至る明道館勤務の日誌で、職員の内免・器械の購入・布令通達など、館務の要が記されている。

⑤8 橋本景岳筆 「明道館諸役輩名簿」

一綴

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政三年(一八五六)六月十四日、藩命により江戸遊学から福井へ帰着した橋本景岳は、七月十七日に至り、明道館講師・蘭学科掛に任ぜられ、さらに九月二十四日、明道館幹事と御側役支配を兼務することとなった。以来、明道館の改革を推進しつつ、藩政の枢機に参画したが、安政四年一月十五日、明道館学監同様心得に昇任してからは、名実ともに明道館の中核となり、一藩の教育行政をつかさどって、縦横の活躍を見せた。

この景岳自筆の名簿は、藩校の体制が整った安政四年春頃に作成されたものと推定され、景岳自身は学監の項に「幹事局御用取扱御調御用掛り并洋学所掛り 橋本左内」とみえる。

⑤9 橋本景岳筆 学制に関する意見割子

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

藩校明道館学監に在職中の景岳が、安政四年(一八五七)

閏五月十五日、政治と教育の一致、文武不離一体という、福井藩の教育行政上の眼目を実現するため、とるべき方策について詳述したものである。藩校教官の無能力を辛辣な語調で叱責しつつ、人材育成の要点を説き、国家興隆の基盤となるべき教育の重要性について、論及している。

景岳自筆の『館務私記』安政四年閏五月十七日条に、この意見書を家老松平主馬に提出した旨、記録されているが、その原本は今日現存していない。

⑥0 橋本景岳筆 洋書習学所設立に関する布令草稿 安政四年四月頃 自筆筆記帳より 一点

福井市春嶽公記念文庫蔵  
安政四年（一八五七）四月、景岳の建議で藩校明道館に洋書習学所が付設されることとなった。これは、景岳が明道館学監として断行した教育改革の中で、第一に特筆すべき業績であったが、当時の洋学に対する一般の認識は、必ずしも好意的でなく、その運営には多くの障害をともなった。

この布令草稿は、そうした洋学不信を唱える明道館教官らに、洋学導入の意義と、その教育上の留意点を説いたものである。景岳は、つねづね「洋学は、分野によっては日本が遠く及ばぬほど進歩している。それを積極的に学びとって、わが国の短所を補わねばならない。ただし、洋学を安易に導入しては、そのあまりの先進性に心まであらばわれ、外国崇拜におちいる者が生じかねない。それゆえ、十分に儒学や日本の学問に精通し、日本人としての自覚を堅持した学生でなければ、洋学学習を許可してはならない。」と主張した。

この草稿からも、景岳のそうした深厚な姿勢の一端を知ることが出来る。

〔釈文〕

洋學御端立

洋學之義筋合正しく相開候時は、其利夥有<sup>レ</sup>之候得共、萬一杜撰に相成候時は、其害亦言ふへからず。此天地間有力俊偉之者皆然り。番洋學而已ならず、水火の如き亦然り。凡そ大に人を利スルものは、亦必ず大に人を害する弊なき事能はず。故に此學の開闢始に於て丁重用心可<sup>レ</sup>致也。

第一則

明道館教授助教授之内一人之が總裁たるべし。其故は此度御端立の御趣意は、兵法・器械術・物産・水利・耕織等の諸術を、彼ノ長に就て學び取、我義理純明之學を補助被<sup>レ</sup>遊候思召にて、決して明道館の學の外に洋學と申者一派御營建有<sup>レ</sup>之候趣意に候はず、行々は已上の科を學び候者迄も、學一經に通じ候者御撰ミ、其方の所長に隨ひ、夫々可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>一筈に候間、全く今日銃術・馬術等御引立被<sup>レ</sup>成候と同様の事に候故、別に教授を設け不<sup>レ</sup>申事。

第二則

會頭を立、講習不<sup>レ</sup>怠様に致し、其勤怠を詳にし、之を教授に訴ふ。

第三則

句讀師を立、素讀相授。

總 教

文武を始め、諸稽古之學政を統べ掌り、諸生の黜陟賞罰、

惣而學館細大之事、一切之を奉行す。

參 教

總教の遺欠を補綴し、其をして過不及の失なからしむ。

⑥1 橋本景岳筆 明道館中に算科局を設くべき意見書 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政四年（一八五七）、藩校明道館に算科局が設けられるにあたり、特に数学について、その教育の必要を述べた意見書である。景岳の「館務私記」同年五月十八日条には、この意見書が家老狛山城より藩主春嶽の許に提出されたことが見えている。

この中で景岳は、数学が諸学実践上の根本であるとし、あくまでも実用を旨とすべき学問・教育上、必須のものであることを力説している。景岳の数学に対する認識と、運用上の姿勢を知ることができる。

⑥2 橋本景岳筆 他国修行の者手当に関する意見書 安政四年五月 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

藩校明道館学監に在職中の景岳は、政教一致・文武不離という、藩の教育方針を実現するため、数々の改革を断行した。この意見書は、そうした中で人材育成の要点を示し、他国修行者の手当について見解を述べたものである。

例えば、努力して優秀な成果をおさめている修行者へは定額外の手当を給することなど、貧しい他国留学生でも十分に研鑽できるよう配慮しており、苦しい他国修行の経験をもつ、

景岳らしい主張がみられる。時代に即応できる人材を生み出すため、明道館の刷新に力を注いだ景岳の積極的姿勢を示すとともに、内外の情勢に通じた広範な識見が読みとれる。

⑥3 橋本景岳筆 制産に関する意見書 安政四年五月頃 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

橋本景岳の物産・器械等生産に関する意見書である。安政四年（一八五七）五月頃に書かれたものと思われ、景岳の対外政策や産業振興策の一端を知る上で貴重である。

当時、景岳は明道館学監同様心得として、明道館の中核となり、種々の改革をおし進めていたが、教育に関することはかりでなく、兵制の改革、殖産興業のことなど、さまざまな分野で意見書を起草し、藩首脳に建策した。この意見書もその一つで、藩内の諸産業を盛んにし、生産された物資は、外国へ売りさばくべきであるとする対外貿易促進論を展開している。

⑥4 「明道館書目」

五冊

福井市立図書館蔵

福井藩校明道館の蔵書目録である。経伝・和史・漢史・子類・律令格式書・字書・洋書などに分けた分類目録と、イロハ順の書名目録の二部からなる。「太政官日誌」「横浜新聞」など、維新後の追加書入れも見られるが、全体として明道館運営期の作成になり、その教育内容を知る上で貴重である。



## 第五 国事奔走時代

藩校明道館の改革に努力していた景岳先生は、安政四年（一八五七）八月、召命を受けて江戸へ上り、侍読兼御内用掛として、藩主松平春嶽に近侍することとなった。

当時わが国は、米国との条約問題をめぐり論議が沸騰していた。しかるに、時の將軍家定は病弱で世嗣もなく、將軍職の重責を果しえない状態にあった。そこで松平春嶽は、重立った諸侯と語らって、英明の譽高く人望あつた一橋慶喜を將軍後継者に決定し、この人を中心に幕政を刷新強化し、国力を充実させて諸外国の脅威に対抗し、多難な時局を乗切らねばならぬと考えた。

景岳先生は中根雪江と協力して、こうした主君春嶽の旨を体し、日露同盟論の書状に代表される世界的視野をもった国家体制の構想をひっさげ、幕府・諸藩の有志と親交を結びつつ、縦横の活動を開始した。景岳先生は、將軍継嗣決定を緊急の最重要課題とし、外交問題は朝意を尊奉して充分に公共の論を尽し、幕府の独断によるべきではないとして、翌五年正月には、京へも上って公卿間を遊説し周旋につとめた。

景岳先生の学殖と識見は、多くの人々を感動させたが、血統論を楯に幼少の紀伊慶福を擁立した井伊直弼等と激しく対立した。そして、直弼が大老に就任し、慶福の將軍継嗣決定を強行して、同年七月反対派諸侯を嚴罰に処すに及んで（春嶽は隠居急度慎）、一切の運動は失敗し挫折するに至った。

| 年代  | 西曆   | 年齢 | 事蹟   |
|-----|------|----|--|
| 安政四 | 一八五七 | 二四 | <p>○八月七日、江戸詰を命ぜられて福井発。○同二〇日、途中尾張の田宮弥太郎と会談して、この日江戸着、侍読兼御内用掛に任ぜらる。これより中根雪江と連繫して、將軍継嗣・対外条約問題解決のため、藩主春嶽を助け活動を開始。</p> <p>○一〇月七日、主君春嶽及び山内容堂ら諸大名の『大学』会読の侍講をつとめる。この間、諸藩の有志と会見して、国事を説き協力を要請する。○同一六日、春嶽継嗣問題につき幕府へ建白。○同二一日、ハリス、將軍に謁見。○一月二六日、春嶽、幕府の諮問に対し、外交意見を上申。</p> <p>○同二八日、在藩の村田氏寿に、日露同盟論・統一国家体制の構想を説いた書状を發す。○一二月九日、西郷隆盛と会談、大奥・老中堀田正睦周旋の秘策を練る。</p> <p>○同一三日、幕府、朝廷に対米条約締結の許可を乞う。○同一九日、幕府、諸大名に対米条約締結の可</p> |

|  |   |      |    |
|--|---|------|----|
| 安政   | 五 | 一八五八 | 二五 |
| <p>否を問う。</p> <p>○正月一四日、春嶽の命で幕臣川路聖謨を訪ね、將軍継嗣問題につき尽力を要請。聖謨、景岳の才識に感動し、半身を切取られたようだと述懐する。○同二一日、幕府、条約勅許要請のため堀田正睦を京都に派遣。</p> <p>○二月七日、命を帯び上京。桃井伊織と変名し活動を開始。○同九日、三條実萬に謁見、以後三國大学の協力を得て、青蓮院宮家をはじめ諸方へ出入、京都での活動を展開する。○二月一六日、春嶽・景岳の名、天皇の聴に入る。</p> <p>○同二二日、英傑・人望・年長の三要件をもって、継嗣決定せよとの勅旨、堀田正睦に伝えらる。しかし、二四日の再伝達に際し、九條関白その三要件を削除する。</p> <p>○四月七日、横井小楠福井赴任。</p> <p>○同二一日、京都での運動を終え江戸帰着。一八日、御側向頭取格御手許御用掛に就任。○同二三日、井伊直弼大老となる。○この頃、幕閣・大奥・諸藩に対し、必死の</p> |   |      |    |

|   |  |  |  |
|---|--|--|--|
| <p>運動を続ける。○六月一九日、日米通商条約調印。○同二四日、徳川齊昭・春嶽等、不時登城。○同二五日、紀伊慶福、將軍継嗣に決定のこと発表。</p> <p>○七月五日、春嶽、幕命により隠居急度慎に処せられ、松平茂昭福井一七代藩主に就任。この日、景岳、中根雪江と共に自刃を決意。春嶽親書を与えてこれを止む。</p> <p>○同六日、春嶽付御用兼を命ぜらる。この日、將軍家定歿。○九月七日、梅田雲浜逮捕。安政大獄のはじまり。○同九日、村田氏寿・長谷部甚平、井伊を討つべく蹶起をすすむ。○一〇月二二日、幕吏、藩邸に來り、景岳役宅を搜索、書類を押収し訊問を行う。○同二三日、町奉行所に召喚され、訊問の上、瀧勘蔵預け謹慎を命ぜらる。</p> <p>○同二五日、徳川家茂に將軍宣下。</p> |  |  |  |
|---|--|--|--|

⑥5 橋本景岳筆

「其意不在書云々」の詩幅

一副

福井市 加藤二一氏寄託

⑥6 橋本景岳筆

「孤月暗明云々」の書幅

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑥7 橋本景岳筆 「暗鳴則山岳崩頽云々」の書幅 一幅

東京都 佐々木賢一氏寄託

〔釈文〕

暗鳴すれば則ち山岳も崩頽し  
叱咤すれば則ち風雷も色を変ず

唐の駱賓王が、李敬業に代つて草した則天武后（唐の高宗の後）討伐の檄文中の一節である。武后の暴威を一掃し、唐室の中興を期する李敬業の気迫を示したもので、藩主松平春嶽を輔け、内外の困難な問題の解決に奔走していた景岳に、そのまま通ずるところがあつたのであろう。景岳二十四、五歳頃の揮毫と推定され、書風も雄健で豪爽である。

⑥8 橋本景岳筆 「半生落魄云々」の詩・頼三樹三郎筆 「掩門深坐云々」の詩貼交ぜの幅 一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

松平春嶽が、国事に奔走し、ともに安政大獄に倒れた二人の志士の遺墨を合装して、往時をしのぶよすがとしたものである。

⑥9 橋本景岳書状 安政四年十一月二十八日付 村田氏寿宛  
（いわゆる「日露同盟論」の書翰） 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政四年（一八五七）八月以降、江戸にあって主君松平春嶽を助け、対米条約勅許をめぐる外交問題と、内政充実のため

の將軍後継者決定という、内外二大案件解決のため、寢食を忘れて活動していた橋本景岳が、その抱懐する外交策と、国内体制改革策を、国許福井の同志村田氏寿に、余すところなく論じたものである。「日露同盟論の書翰」とも呼ばれ、現存する景岳の書状中、もっとも名高いものである。

洋学者としても、当時一級の学力を有していた景岳ならでの的確な世界情勢の分析や、幕府・親藩・外様といった個々の利害を超越して、日本国中を一家とみなし、世界の中の日本という立場を自覚した氣宇の壮大さには、驚歎感動せざるを得ない。

⑦0 橋本景岳筆 三條実万への呈書控 安政五年二月中旬 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政五年（一八五八）二月より四月にかけて、公卿間を周旋して將軍継嗣・対米条約問題の解決に奔走していた景岳は、「今天神」とその英明さを噂され、一橋派に好意的であつた三條実万に對面して、説得にあつた。景岳の議論に感動した実万は、その内容を書面にして提出しよう命じた。この史料は、その際景岳が実万に呈した書面の控（草稿）である。この中で景岳は、わが国の歴史・伝統と現状、そして西欧の歴史と現況について詳しく説明し、開国通商の必要と国内体制の改革が緊急の課題であることを、切々と論じている。京都において景岳が、いかなる論を展開して公卿間の説得に努力したかを示す、貴重な史料である。

⑦1 橋本景岳筆 上京往返の旅費・雑費覚 安政五年春 一通

橋本左内先生遺徳顕彰会寄託  
安政五年（一八五八）正月、將軍繼嗣・対米條約問題に関する活動を有利に展開するため、松平春嶽は橋本景岳を京都に派遣し、公卿間を説得周旋しよう命じた。

景岳は二月七日京都に到着した。そして、ただちに必死の活動を展開し、四月十一日江戸へ帰ったが、この覚書はその間の旅費や諸経費を上司中根雪江に報告したものである。書中上下四人とあるのは、景岳と随行した横山猶蔵・溝口辰五郎、及び景岳の従者幸吉の四人を指している。

⑦② 橋本景岳書状 安政五年五月二十七日付ほか 榊原幸八・伊藤友四郎宛 四通

久留米市 山口宗之氏蔵  
將軍繼嗣・対米條約という二大案件を解決し、難局を打開しようとした松平春嶽は、中根雪江・橋本景岳の補佐のもと、必死の活動を展開した。しかし、安政五年（一八五八）四月二十三日大老に就任した反対派の井伊直弼は、六月十九日日米通商條約の調印を強行し、同二十五日には紀伊慶福の將軍繼嗣決定を発表、さらに七月五日春嶽らを隠居急度慎という厳罰に処したから、一橋派の活動は完全に瓦解し去るに至った。

この書状は、情勢が右のごとく不利に展開する中で、福井にあつて藩校明道館の運営に努力していた榊原幸八・伊藤友四郎の二人へ宛てたものであるが、この時期の胸中をよく吐露して貴重である。書中、「衰世之習致し方なきは申すに及ばざる義に御座候へ共、如何相考候ても臣子之情痛嘆に堪兼、誠に血涙之至、（中略）誠に君子道墮、小人道長之秋

と深く慨嘆仕り候」（七月十五日付書状）などと、主君の嚴譴を深く憂憤し、「御枉冤之清弁祈り奉るの外なく」（同上）と、その無実を主張するなど、主君を思う熱誠があふれていて、大きな感動を禁じえない。

⑦③ 「三友遺墨」 橋本景岳・安島帶刀・茅ノ根伊予介書状、並に中根雪江筆跋文貼交ぜの幅 一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵  
中根雪江が、安政の大獄に斃れた二名の同志の書状を集め、文久元年（一八六一）九月藩儒矢島立軒に撰を依頼した跋文を自らの筆で書添え、一幅に仕立てて秘蔵したものである。雪江が「三友」と称したのは、水戸藩家老安島帶刀（弥次郎）・水戸藩士茅根伊予之介・橋本景岳の三名で、いずれも雪江と志を同じくして国事に奔走したが、安政の大獄で非命の最期をとげた。また、その三人を偲ぶため雪江がこの幅に合装した遺墨は、すべて安政五年（一八五八）五・六月頃の雪江宛書状である。当時、井伊直弼の大老就任によって、事態はこれら有志の努力に反する方向に動きつつあったが、將軍繼嗣・対米條約締結・幕政改革等の諸問題解決のため、最後の活動を展開していたことに関連する、重要な内容のものばかりである。

なお、春嶽筆の由緒書によれば、春嶽は雪江の歿後、その嫡男牛介に懇望してこの幅を譲り受け、第一の珍藏（珍は貴重之意）とした。また、蓋の表には雪江の筆で「三友遺墨」とあり、その下に春嶽の筆で「併テ四人ノ遺墨トナル、春嶽永哀観」と認められている。上記三名に跋文を添えた雪江を

あわせて、今や四友遺墨となったとの意味である。

〔橋本景岳書状安政五年五月二日  
中根雪江宛〕

内呈、一覽丙丁是祈。

私より可ニ申上ニ奉レ存居候處、未タ風邪尔、不レ仕、早朝  
ニハ出勤仕兼候故、奉ニ頼託ニ候義ニ御座候、不宣、

五月二日

酒力無レ功魂欲レ銷 雨窓燈暗夜肅々

還疑忽地満身快 夢到ニ平川第一橋一（酒力功無クシテ魂  
銷ント欲ス、雨窓燈暗ク夜肅々、還疑フ忽地満身ノ快、  
夢ニ平川第一橋ニ到ル）

五月朔夜即事

昨夜ハ頻ニ夢を看、建（橋本意）一ハ独梁公ニ定候事、歴々覚候ゆ  
へ一首賦申候、

〔矢島立軒撰中根雪江筆跋文〕

嗚乎三人者ノ事、今コレヲ忠ト云ハバ、罪ヲ幕府ニ得、  
コレヲ忠ニ非ズト云ハバ、譏ヲ志士ニ取ル、コレヲ上ヲ  
愛セザルニ非ズト謂ハバ、忠存セズ、亦三人ノ志ニ非ル  
也、然レバ其レコレヲ何トカ謂ハンヤ、夫ノ二人ハ一面  
識無シ、則チ其ノ志ス所行如を知らズ、一人ハ予ノ旧知  
也、年少氣鋭、天下多事ノ日ニ当リテ、慨然トシテ志国  
ニ報イルニ在リ、然レドモ其ノ為ス所、功名ニ急ナリ、  
是ヲ以テ此ノ若シ、豈他有ランヤ、然レバ則チ、三人ノ  
事、百世ノ下、公論自ラ定マル有ラン、雪江中根君ハ三  
人ト交ヲ同ジクスル者、深く其ノ死ヲ哀ミテコレガ手簡  
ヲ聚メ属者様装シテ軸ヲ成シ、皞ヲシテコレガ跋ヲ為ラ

シム、三人者、曰ク安嶋正立、茅根泰、皆水府ノ聞人、  
筆墨ニ就イテ其ノ人ヲ想フ可シ、而シテ其ノ一ハ橋本紀、  
予ガ旧知也、書キ畢リテ覚エズコレガ為ニ涙涓ツ、文久  
（元年）辛酉九月某日、島皞識ス、  
雪江中根師質書ス（印）

〔松平春嶽公筆箱書〕

三友遺墨トハ何ソ、雪江ノ三友トスルハ水戸藩ノ安島弥  
次郎後帶刀・同藩茅ノ根伊豫之介、及我藩橋本左内也、  
雪江歿後其子牛介ニ所望シテ譲受けたリ、予モ亦左内ハ  
師友トスル所也、安島・茅ノ根両士ハ余共ニ語りて素志  
を同ふする人ナリ、予ノ珍藏不レ過レ之ナリ、

明治十一年五月十六日 春嶽永

⑦④ 「三英遺墨」

佐久間象山・水野忠徳・岩瀬忠震書状、並に

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

中根雪江が愛蔵した佐久間象山・水野筑後守（忠徳）・岩瀬  
肥後守（忠震）の書状を、雪江の歿後、その子牛介から贈られ  
た松平春嶽が、自ら跋文を添えて一幅に合装したものである。

春嶽の筆で

三英 佐久間象山・水野筑後守忠徳  
岩瀬肥後守震 遺墨 春嶽永雅玩

と箱書があるように、三英遺墨とは春嶽の命名で、いずれも  
その名にふさわしい英才の筆跡である。

〔松平春嶽筆跋文〕

佐久間象山より中根雪江ニ贈りたる書翰、水野筑後守手

翰・岩瀬肥後守橋本左内へ贈りたる書状、こたひ雪江子牛介より呈す、余ハ此三通を以て追想往事して不レ已、距レ今十六七年以前也、今日これをミレハ、水野・岩瀬・雪江・左内ニ面晤スルノ心地せり、余之を跋とす、  
明治十四年十月 慶永(印)

⑦⑤ 橋本景岳所用 夏用肩衣

一着

福井市春嶽公記念文庫蔵  
安政五年(一八五八) 国事奔走期に着用のものと推定される。昭和十年、橋本家より春嶽公記念文庫に移管され今日に至ったが、黒染めの紗であるため、著しく損壊した。

⑦⑥ 橋本景岳拝領 葵紋付長上下・同半上下

二着

福井市春嶽公記念文庫蔵  
いずれも、景岳が松平春嶽より拝領の品である。下賜の日日は不詳であるが、春嶽の遺品としても貴重である。

⑦⑦ 松平春嶽筆 「我無才略云々」の詩幅

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵  
松平春嶽壮年期の書として、最も有名なものである。その詩句が、春嶽の人柄を伝えて余すところなく、座右の銘とする人も多い。

我に才略無く我に奇無し。常に衆言を聴きて宜しき所に従ふ。人事渾て天道の妙の如し。風雷晴雨豫め期し難し。 右偶作 春嶽

〔松平春嶽〕

文政十一年(一八二八)九月二日、徳川宗家の新族田安斉匡の八男として生まれた。

天保九年(一八三八)十一歳の時、越前松平家の養子となり、福井十六代藩主に就任した。当時藩は財政難にあえいでおり、慶永は若くして藩財政立直しに着手し、本多修理、中根雪江、鈴木主税、橋本左内等を登用し、熊本の横井小楠を招いて政治的手腕を発揮した。さらに若い藩士に洋学教育をすすめる、時代の動きを感じとらせ、王政復古に際し、それらの人々は重大な役割を果たした。

藩外では、日本が攘夷か開国かという重大問題に直面し、尊皇敬幕で開国論を唱えた慶永は老朽化した幕政を雄藩連合で改革、朝幕融和の立場をとり、同じ開国論者であったが譜代大名だけで幕権をさらに伸ばそうとする立場をとる井伊直弼と対立、ことに將軍継嗣問題をめぐって激突し、安政五年(一八五八)井伊直弼が大老となるや、慶永は謹慎の身となった。

しかし井伊大老の死後、政事総裁職に任ぜられ、朝幕の間に立つて維新回天の大業に貢献した。島津久光、伊達宗城、山内容堂と並び幕末の四賢公と称せられる。

明治二十三年(一八九〇)六十三歳で歿した。

⑦⑧ 松平春嶽筆 「時勢急務策」 安政五年五月二十二日徳川齊昭宛意見書 橋本景岳・中根雪江朱筆添削

一綴

福井市春嶽公記念文庫蔵  
安政五年(一八五八)五月二十一日、松平春嶽が一夜の内に、自ら書き上げた意見書で、中根雪江・橋本景岳の朱筆添

削を経て、翌二十二日朝、徳川齊昭のもとに届けられたものである。

当時、春嶽とこれを補佐する雪江・景岳らは、將軍継嗣問題の解決を、難局打開の根本策として、必死の活動を展開していたが、政敵の井伊直弼が、安政五年四月二十三日大老に就任することによって、重大な危機に直面した。これ以後、春嶽を中心とする一橋派有志の間では、直弼を幕閣中から排除する「除奸の策」が真剣に検討されはじめる。

この「時勢急務策」は、そうした状況の中で焦慮する春嶽が、直弼を排除する方策を考え、一気に書きつづつて齊昭に示し、その意見を問うたものである。しかし、水戸藩との間で今一度前後策を協議する必要を感じた雪江や景岳は、主君のはやる心を押えて、この意見書に朱筆をもって大幅な添削を加え、一挙に全体の四分の三を抹消した。

幕末期、自らこうした意見書を起草できる春嶽のような藩主は珍しかった。そうした賢明な主君が、夜を徹して書き上げた長文の意見書に、何の顧慮することもなく添削を加えた家臣も、その家臣の添削をそのままとして容認した主君もまた稀であった。この一通の意見書には、最高の信頼関係によって結ばれた君臣の清々しい態度があふれていて、見る者に深い感動を与える。

⑦⑨ 橋本景岳書状 安政四年十二月二十八日付 松平春嶽宛

(川路左衛門尉説得の使命を拝辞する書状)

福井市春嶽公記念文庫蔵 一通

⑧① 松平春嶽書状残片 安政五年正月十四日付 橋本景岳宛

(景岳の川路左衛門尉説得に際しての御書下)

福井市春嶽公記念文庫蔵 二紙

⑧② 橋本景岳筆 安政五年正月十四日、川路左衛門尉に初対面応答書

答書

福井市春嶽公記念文庫蔵 一通

(橋本景岳と川路左衛門尉の会見)

嘉永六年(一八五三)米使ペリーの来航を契機に、わが国の情勢は非常な紛糾を見た。これをなんとか打開せんとした松平春嶽は、積極的開国論を主唱しつつ、対米條約問題は幕府の専断によらず、よろしく衆議を尽すべきこと、また、幕政を刷新して国力を結集し、難局に対処するため、英明の聞え高い一橋慶喜を將軍後継者に決定し、これを中心に幕府政治の体制を大改革することといった、内政外交の新構想を抱き、その実現のため、懸命の努力を開始した。春嶽は、水戸・尾張・薩摩・土佐などの有力大名と連繫し、岩瀬忠震・永井尚志・土岐丹波など、優能な幕臣の賛成と協力を得て、活動を展開したが、当時幕臣中の傑物として知られ、幕府外交の主力であった川路左衛門尉(聖謨)だけは、容易にその態度を明らかにせず、春嶽を困らせた。運動の有利な展開に、どうしても川路の協力を必要とした春嶽は、召しにに応じて江戸へ上り、活動に参加した橋本景岳に、川路説得を命じた。景岳は、任務の重大さと、困難を思っ、いったんこれを拝辞したが、たび重なる懇命によって、決意を固め、安政五年(一八五八)正月十四日、春嶽の直書をたずさえて川路を訪



れ、その説得に当たることとなった。

川路を訪ねた景岳は、世界の現状とわが国の置かれた立場、今後の方策などについて、堂々と所信を披瀝し、ついに川路の説得に成功した。川路は、翌日江戸城中で、景岳と会談の感想を、「その弁説の鋭いこと、ほとんど、わが半身を断ち切られたようであった。年来、無数の来客に應對してきたが、あの橋本のような人物には、はじめて会った。」と、述べている。時に川路は五十八歳、景岳は二十五歳であった。

〔川路左衛門尉〕

名は聖謨、通称弥吉・左衛門尉、敬齋と号す。下級幕吏の子として生まれたが、努力をかさね、十八歳で勘定所の筆算吟味に合格し、支配勘定出役に採用された。以後、すぐれた才能を発揮して次第に昇進し、老中大久保忠真に見いだされて勘定吟味役となり、のち老中水野忠邦にも登用されて活躍した。水野の失脚後、一時左遷されたが、再び勘定奉行に栄転して、幕政の中核に復帰し、海防掛をも兼ねた。嘉永六年（一八五三）ロシア使節プチャーチンと日本側全権として会談、日露和親条約を締結したが、その堂々とした交渉ぶりでロシア使節を感動させたと伝えられる。将軍継嗣問題では、橋本景岳の説得によって一橋派に賛同した。このため安政の大獄に連坐し、退隠・蟄居を命ぜられた。文久三年（一八六三）外国奉行に挙用されたが、五ヶ月で辞職し、明治元年（一八六八）三月江戸開城の風説を聞いて、六十八歳で自決した。

橋本景岳は、安政五年正月、松平春嶽の命で川路と会見し、将軍継嗣問題について尽力を依頼した。川路はその際の景岳の鋭い議論ぶりを評して、「あたかもわが半身をたち切られ

たようであった。」と述べている。

⑧② 松平春嶽書状 万延元年九月四日付 松平茂昭宛

一通  
越葵文庫蔵

将軍継嗣問題をめぐる政争で、井伊直弼に敗れ、隠居急度謹慎という厳罰に処せられた松平春嶽は、万延元年九月四日、譴責処分の一部を宥免された。その日、春嶽は国元の新藩主松平茂昭にこの書状を認め、宥免を喜ぶとともに、非業の最期をとげた家臣橋本景岳の霊を慰めたい旨、心境を伝えた。当時はまだ、幕命によって処罰された橋本景岳を、藩として表立って回向することができず、それを心苦しく不憫に思った春嶽は、ひそかに近臣萩原金兵衛を通じて、茂昭付の桑山十兵衛へ金子を送り、内々景岳の霊前へ供物をそなえるよう、茂昭に依頼したのである。春嶽の家臣に対する思いやりの深さを示すとともに、景岳を失った愁傷が行間にあふれている。

⑧③ 頼 山陽筆 「橋北橋南云々」の詩幅

（橋本景岳より主君  
一幅  
福井市春嶽公記念文庫蔵

〔頼 山陽〕

広島藩儒頼春水の子として生まれ、幼名を久太郎、名を襄といった。幼年より学問を好み、柴野栗山や尾藤二洲に経学や歴史を学ぶ。

十九歳にして有名な「蒙古来」の詩を作って天分を発揮した。二十一歳の時、脱藩して罪を問われ、邸内に幽閉された。三十二歳の時、京都へ出て居を構え、篠崎小竹・梁川星巖・大

塩平八郎ら学者・文人と広く交友し、史論家・漢詩文家として次第に名声を得る。

ことに『日本外史』等、多数の著書は、幕末尊攘派の志士に愛読され、大きな影響を及ぼした。彦根藩に招かれ講義中、病にかかって帰京し、天保三年（一八三二）五十二歳で歿した。

景岳は、上京して活動中、山陽の詩幅二点を入手し、一幅を主君春嶽に献上した。また、山陽の書風を愛し、一時期山陽風の書法を好んで駆使している。

⑧4 躍鯉模様蒔絵硯箱

一具  
付、松平春嶽筆 橋本景岳に賜う書 安政五年七月五日

一通

橋本景岳筆 「龍門墜落云々」の詩稿 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

国家の前途を憂慮し、將軍継嗣・対米條約問題解決のため必死の活動を展開した松平春嶽は、井伊直弼との政争に敗れ、安政五年（一八五八）七月五日、幕命によって隠居急度慎の厳科に処せられた。

春嶽の近臣として左右に侍し、その手足となって活躍した中根雪江・橋本景岳の二人は、主君が厳罰に処せられた責任をとって、即日自刃の決意を固めた。しかし、その気配をきとつた春嶽は、二人に親書を与えて慰諭したので、痛く感激した雪江と左内は、自刃を思い止まり、主君の雪冤と再起のために一層の努力を誓いあつた。その日春嶽は、近侍の家臣五名に物を賜うて慰労と感謝の意を表したが、景岳の賜つた

のが、この硯箱である。引出し内には、春嶽がしのばせた小判二両が、当時のままに収められている。

「龍門墜落云々」の詩は、景岳がこの硯箱を拝領した感懐を詠じたもので、現在原本の所在は不詳である。

〔松平春嶽書状釈文〕

蒙嚴科候者 嚴科を蒙り候は

覚悟之處、 覚悟之處、

今更不驚駭 今更驚駭せず、

是迄之忠誠 是迄の忠誠

貫日月候ハ感 日月を貫き候は感

服萬々家臣 服、万々家臣

之蒙罪候ニ不及ハ 罪を蒙り候に及ばずは

国家之幸甚ニ候、 国家の幸甚に候、

我ニおるて所喜 我におるて喜ぶところ

尚弥任重候間後 尚いよいよ任重く候間、

来之所申談義も 後來のところ申し談ず

可有之 義も、これ有るべく

愕然之餘り卒 愕然のあまり卒

尔之義有レ之候而者 尔の義これ有り候ては

我を見捨候也 我を見捨て候也

中將 戊午七月五日夜 中將 〔春嶽〕 安政五年 戊午七月五日夜

左内 左内

〔橋本景岳詩稿釈文〕

戊午初秋五日、吾が春嶽公故ありて致仕の命を蒙る。

是の日、公物を親臣五人賜ひ、以て之を勞獎す。而し

て臣紀も亦た与る。感恩の余り、一絶を賦して以て謝し奉る。

龍門より墜落して龍に成らず。僅に藻間に伏して唵鳴を試む。この意蚤に明主に逢うて悟る。賜恩の躍鯉心の慵きを慰む。

⑧5 中根雪江筆 「虎兒初生気食牛云々」の詩幅 一幅

〔中根雪江〕 東京都 佐々木賢一氏寄託

福井藩士中根衆諧の長男として生まれ、名は師質、通称鞠負、雪江と号した。文武の修業を積む内、国学に志をいだき、天保九年（一八三八）江戸詰となった機会に平田篤胤の門人となり、その高弟として知られる。

弘化年間（一八四四～四七）松平春嶽に抜擢されて側用人となり、常に近侍して藩政改革を強力に推進した。嘉永六年（一八五三）ペリー来航を契機に、春嶽を助けて幕末の政局に参画し、福井藩を代表する重臣ともくされるに至った。橋本景岳の才能を見抜いて、その抜擢に努力し、景岳最大の理解者として、互いに協力しあいながら、対米外交問題解決のため必死の活動を展開した。就任後は、これを助けて幕政改革に努力し、諸藩の有志と交流しつつ、主として京都で朝幕間の周旋に努力した。王政復古後、新政府の参与となったが、間もなく辞任、福井に閑居した。

幕末における松平春嶽の事蹟を中心とする福井藩の活動を、公正な筆致で記録し、『昨夢紀事』『再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』などを著わした。いづれも幕末維新史の重要史料となっている。明治十年（一八七七）十月三日、七十一歳

で歿した。

⑧6 中根雪江所用 岩鷲蒔絵印籠（福井十四代藩主松平齊承より拝領） 一点

東京都 中根隆氏寄託

⑧7 松平春嶽手形並に惜別の和歌幅 一幅

東京都 中根隆氏寄託

將軍継嗣問題を中心とする内政外交策をめぐる政争に敗れた松平春嶽は、安政五年（一八五八）七月、隠居急度慎の処分を受けて江戸霊岸嶋邸に謹慎幽居の生活を送ることとなり、春嶽の手足となって活動した橋本景岳も、翌年十月七日斬刑に処せられた。こうした時態に、春嶽の帷幄の臣中根雪江は、責任を感じて春嶽の側近を離れ、国元福井へ帰らんとした。福井へ発程の前日（安政六年十月十日）、暇乞いに出向いた雪江に対し、春嶽が机上の手沢品とともに書き与えたのが、この手形と和歌の幅である。

朝夕にこれをなかめてわか前に居るか如くに汝し思へよ

⑧8 中根雪江書状 安政四年七月二十三日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸にあった雪江が、福井の景岳に宛てた書状である。書中、雪江は景岳の江戸詰が決定したことを知らせ、その到着を心待ちにしている。この手紙を受けて八月七日福井を出発した景岳は、二度と郷里へ帰ることがなかった。

また、雪江は明道館の運営は、村田氏寿に引継ぐよう述べ、

続いて江戸の困難な状況を説き、ひとえに景岳の赴任活動に期待している。末尾に近く、蘭書入手のことなど記してあるが、蘭字には門外漢の雪江が、洋字に深い理解を示し、景岳のため種々尽力していた様子をもの語るものである。

⑧村田氏寿筆 「当日繁華福井城云々」の詩幅 一幀

東京都 村田正典氏寄託

〔村田氏寿〕

氏寿は文政四年（一八二二）福井藩士村田氏英の長男として福井城下に生まれた。幼名を巳三郎という。

安政三年（一八五六）橋本景岳と共に藩校明道館に出仕し、のち幹事となる。翌四年藩主松平春嶽の命により横井小楠招へいの下交渉のため熊本へ赴く。元治元年（一八六四）七月、蛤御門の変が起った時、氏寿は藩兵を率いて堺町御門を警備したが、長州軍の砲弾によって重傷を負った。更に慶応四年（一八六八）六月、会津征伐に際しては藩兵を率いて越後に出陣し、若松城落城後は、同地方の民政安定に努力し、以後藩の参政職、版籍奉還後は藩知事松平茂昭を補佐し、福井藩権大参事心得・福井藩大参事となり、廃藩置県断行後、福井県参事、更に岐阜県権令に栄転、明治十年（一八七七）退官。同三十二年（一八九九）五月、七十九歳で歿した。

⑨村田氏寿書状 安政四年九月九日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸に赴任した景岳へ、藩校明道館の運営を引継いだ氏寿が発した書状である。国許の状況と明道館々務に関すること

を詳細に報告している。景岳が江戸へ去った後の明道館運営の様子が、最もよく記された史料として重要である。

⑩橋本景岳書状添書 安政五年正月八日付 村田氏寿宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑪村田氏寿編 「景岳君書翰録」第一・二冊

東京都 村田正典氏寄託

『続再夢紀事』の編纂など、修史活動にすぐれた業績をあげた村田氏寿が、維新後、自己所蔵のものを中心に、橋本景岳の書状類を収集し、年次順に編集したものである。氏寿の景岳に対する尊敬と顕彰の念が、よくあらわれている。

⑫佐々木長淳書状 安政五年正月三日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井から江戸の景岳に宛てた書状である。新春の賀詞を述べた上で、製造局頭取として自分が中心に建造をすすめている洋式船が、夏頃には完成すること、また福井志比口の藩製造所の現況等を報告している。製造所の動力として水力を利用する目算が立ったことを記していて、興味深い。

〔佐々木長淳〕

福井藩士佐々木長恭の長男として天保元年（一八三〇）に生まれる。通称は権六。嘉永六年（一八五三）家督を相続し、藩命によって洋式兵学を修業した。

福井藩製造局の頭取として、洋式銃砲の大量生産に成功し、「一番丸」と命名された洋式船を独力で建造、見事に進水さ

せた。親類にあたる橋本景岳とは、幼年期より友人関係にあり、蘭学研究等、互いに協力しあつた。慶応三年（一八六七）藩命で米国へ渡り、兵器や紡織機を研究、その購入交渉に當つた。明治三年（一八七〇）外人教師グリフィスの来福に當つては、英語力を駆使して万端の世話をしている。廢藩後は東京へ移住し、工部省へ出仕して紡績事業の興隆に努力するとともに、郷里福井の産業振興にも力を注ぎ、織維王国福井の基礎を築いた。大正五年（一九一六）八十七歳で歿す。長淳は絵画もよくし、維新後橋本家の依頼で「橋本景岳肖像画」を描いている。

⑨4 橋本景岳筆 「睡夜即事」の詩稿

福井市春嶽公記念文庫蔵 一紙  
安政二年（一八五五）頃、佐々木長淳に与えたものである。

⑨5 佐々木長淳手沢本 「THE ARMIES OF EUROPE」一冊

本館蔵  
洋式兵学を研究し、製造局頭取として、小銃・大砲や洋式船の建造を手がけ、慶応三年（一八六七）藩命によりアメリカへ渡り、武器購入の交渉などに當つた佐々木長淳の蔵書である。幕末より米商として横浜に來住し、のちハワイ政府の総領事等をつとめたヴァン・リードの献呈本で、両者の関係を考える上で、興味深い。

〔ヴァン・リード〕  
米国人。生歿年不詳。安政六年（一八五九）はじめて横浜に來航し、一度帰国したが、慶応二年（一八六六）以降、米

国商人の使用人として横浜に在任した。やがてハワイ政府の総領事に任命されたが、明治新政府は承認しなかつた。

戊辰戦争では、旧幕府側に同情的で、仙台藩の強硬な抗戦論者であつた星惇太郎に助言を与えたり、軍艦をひきいて函館にたてこもつた、旧幕府海軍副総督榎本武揚にハワイに來るようすすめたりしている。その後は、明治元年（一八六八）新聞事業の先駆者として知られる岸田吟香らと横浜新聞『もしほ草』を創刊し、同五年には、改めて日本駐在ハワイ総領事となつたが、翌六年一月病氣のため帰国した。

⑨6 橋本景岳筆 「一代儒宗云々」の詩・佐々木長淳筆 「油断大敵」の画貼交ぜの幅

一 幅  
東京都 佐々木賢一氏寄託

⑨7 近藤了介筆 和歌の幅

萩 本館蔵  
心ありてなかむる秋は宮城野の

はきの露にも袖やぬるらん

了介

〔近藤了介〕  
福井藩士。了介のほか、金五郎・小右衛門を通称した。安政五年（一八五八）正月、激化した將軍継嗣問題を有利に展開するため、藩主春嶽より、入京して公卿を説得すべき命を受けた橋本景岳は、入京後、自分の手足となつて活動する下役に不足し、在藩の村田氏寿にしかるべき人材を派遣す

るよう依頼した。この時、氏寿の目にとまり、一躍拔擢されたのが、了介である。

了介は、二月下旬京都に到着し、徒目付として京都の「時情探索調べ方」を拝命、景岳のもとで縦横の活躍をみせた。安政の大獄で景岳が倒れた後は、青山小三郎の下役として諸方の情報を収集するなど、主に「探索調べ方」として手腕を振るった。

維新後は、福井にとどまって足羽県大属などの公職を歴任、村田氏寿からの再三にわたる上京勧告を断わって、晩年は農耕に従事し、明治三十一年（一八九八）七十五歳で歿した。

⑨⑧ 近藤了介書状 安政五年四月十二日付 橋本景岳宛 一通

福井市春岳公記念文庫蔵

近藤了介は、福井藩士村田氏寿の推薦で橋本景岳の指揮下に属し、その片腕として京都で活躍した人物である。了介は、安政五年（一八五八）二月入京し、以来景岳の配下にあつて諸方の情況を探索するなど、よく景岳を助け、景岳が江戸へ帰った後も、京都に留って熱心に活動を続けていた。

この書状は、景岳の退京後、景岳よりしばらく音信がないのを不審に思った三國大学らから、江戸よりの書信の有無を尋ねられた了介が、その旨を景岳に書き送ったものである。

⑨⑨ 橋本景岳書状 安政五年五月二十三日付 近藤了介宛 一通

福井県三國町 近藤隆哉氏蔵

安政五年（一八五八）四月十二日付の近藤了介書状に対する返書である。景岳の退京後、京都に留って一橋慶喜擁立の

ため必死の活動を展開していた了介は、その後景岳よりなんの連絡もなく、三國大学からも書信の有無を尋ねられて、その旨を景岳に書き送った。これに対し、景岳が江戸の状況を報告してやったのが、この書状である。

書中景岳は、幕府の内情と一橋派の形勢が不利であることを述べているが、的確な情勢判断・人物の洞察力等を示すものとして、興味深い。

⑩ 西郷隆盛筆 「世上毀譽輕似塵云々」の詩幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔西郷隆盛〕

薩摩藩士。通称吉之助、南洲と号した。安政元年（一八五四）藩主島津斉彬に才能を見だされ、その近臣となる。当時、水戸・越前・薩摩・土佐などの諸藩主は、黒船来航以来、混乱する時局を打開するため、一橋慶喜を将軍後継者に擁立し、幕政改革をめざして結束した。隆盛は斉彬の命をうけ東奔西走したが、反対派の井伊直弼らに敗れ、その弾圧をさけて薩摩にのがれた。その後第一次長州征伐には征長派の有力な謀将として活躍したが、第二次征長戦に際し、土佐の坂本龍馬の斡旋により長州藩の桂小五郎らと、ひそかに薩長連合を結び、藩論を出兵拒否に定めて、以後討幕運動を推進した。

王政復古後、征東軍大総督参謀となつて東下、勝海舟と会談して江戸の無血開城に努力した。さらに政府首脳として陸軍大将などの要職をつとめたが、明治六年（一八七三）征韓論をめぐる、大久保利通・岩倉具視らと対立、明治十年（一八七七）に至つて西南戦争をおこしたが、政府軍に敗退し、

五十一歳で自刃した。

橋本景岳と隆盛は、安政二年（一八五五）十二月二十七日水戸藩土原田八兵衛宅で初めて対面し、以後親密に連繫した。初対面のとき隆盛は、二十二歳の小柄でやせぎすな景岳の容姿を見て、これを軽んじ、無礼な態度で応対したが、話す内に、その学力識見に感銘を受け、翌日改めて景岳を越前藩邸に訪ね前日の非礼を詫び、以後景岳に兄事する態度をつらぬいた。西南戦争で敗れ、城山で最期をとげた隆盛が、景岳の書状を肌身離さず保持していた逸話は有名である。

⑩西郷隆盛書状 安政五年正月十九日付 橋本景岳宛 一通

越葵文庫蔵

橋本景岳・西郷隆盛両者が、家定將軍夫人篤姫（島津齊彬養女）を動かして、將軍継嗣問題を有利に展開しようとしていた時期の書状である。

⑪三國幽眠筆 「橋上臨湖面云々」の詩幅 一幅

東京都 三國直福氏寄託

〔三國幽眠〕

儒学者。越前三國の豪商森与兵衛（三國氏を称す）の三男として生まれた。通称を与吉郎・大学といい、幽眠と号した。幼くして、彦根藩儒中川漁村（六郎）に師事し、さらに京都へ出て、摩島松南に学んだ。天保七年（一八三六）京都に塾を開き門弟を養成しながら、『古註孝経』を著し、光格上皇に奉ったのが縁となつて、同九年鷹司家の儒者となる。將軍継嗣問題起るや、一橋派に賛成し、橋本景岳を公卿間

に紹介するなど、奔走するところがあった。このため安政の大獄に連座し、安政六年（一八五九）追放に処せられた。文久二年（一八六二）許されて京都に帰り、再び鷹司家に仕える。明治二年（一八六九）議定鷹司輔熙の議事局扶に任ぜられ、同六年教部省が置かれた時、権大講義に補せられた。明治二十九年五月、八十九歳で歿した。

⑬三國幽眠筆 『笑草』原本並に刊本 二冊

東京都 三國直福氏寄託

安政大獄に連座した三國幽眠が、京都より江戸へ護送され、収監されるまでの経過を記録した獄中日記である。刊本は、幽眠の子三國一愨が、明治二十九年八月に発行した。

⑭三國幽眠書状 安政五年三月十三日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑮岩瀬忠震筆 「海航誰自任云々」の詩幅 一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

軸裏に、松平春嶽の筆で「岩瀬肥後守眞蹟 橋本左内所呈春嶽賞玩」と書き込みがある。

海航誰か自から任す。只許す碧翁の知るを。

五州何ぞ遠しと謂はん。吾亦一男兒。

蟾州岩瀬震

〔岩瀬忠震〕

名は忠震、修理・肥後守などと称し、蟾州・鷗処・岐雲と号した。幕末三俊才の一人に数えられる。老中阿部正弘に抜



擢されて目付となり、外交・海防事務に従事した。安政四年（一八五七）、日米通商条約交渉の全権となり、米使ハリスをしばしば閉口させて、ハリスをして、「かかる全権を得たりしは、日本の幸福」といわしめた。將軍継嗣問題では松平春嶽・橋本景岳らの主張に賛同し、一橋派として尽力した。井伊直弼の大老就任直後、新設の外国奉行に任ぜられたが、まもなく一橋慶喜を推したことから退けられ免職・蟄居の処分をうけ、文久元年（一八六一）四十四歳で歿した。

⑩6 岩瀬忠震書状 安政五年四月二十七日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

岩瀬は、安政四年（一八五七）十月以後、日米通商条約交渉の全権として、米使ハリスとの会談を軌道にのせ、ハリスをして「かかる全権を得たりしは日本の幸福」と言わしめるほど、国益を守るため、堂々の弁論を行った。

この書状は条約調印の二ヶ月前景岳に宛てたもので、ハリスとの応接次第や下関開港等の問題について、苦悩する心中を述べたものである。

⑩7 永井尚志書状 年不詳五月十日付 中根雪江宛 一通

越葵文庫蔵

〔永井尚志〕

名は尚志、通称玄蕃頭・主水正、介堂と号す。老中阿部正弘に抜擢され、安政元年（一八五四）長崎海軍伝習所の監理に任ぜられた。その後同四年勘定奉行、五年外国奉行、六年軍艦奉行と累進したが、將軍継嗣問題で一橋派を支持したた

め、安政の大獄に際して免職差控の処罰を受けた。やがて許されて大目付に任ぜられ、將軍徳川慶喜の信任を受けたが、あくまでも幕府擁護に徹し、鳥羽伏見の戦い後は、榎本武揚とともに箱館戦争で奮戦した。降伏後捕えられて東京に護送され、明治五年（一八七二）赦免されてのちは、開拓使御用掛・元老院権大書記官を歴任、明治二十四年（一八九一）七月、七十六歳で歿した。

⑩8 平岡円四郎書状 安政五年五月二十一日付 橋本景岳宛

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔平岡円四郎〕

名は方中。旗本の家に生まれ、初め幕府学問所寄宿中頭取となり、のち水戸の藤田東湖の推薦を受けて、一橋慶喜の近侍に採用された。將軍継嗣問題おこるや、安島帯刀・橋本景岳・中根雪江らとはかって慶喜擁立に奔走した。安政の大獄で左遷されたが、文久二年（一八六二）慶喜の將軍後見役就任とともに、再び側近となつて政務をたすけた。元治元年（一八六四）側用人番頭、ついで一橋家家老並にすすんだが、同年六月京都で水戸藩士の襲撃を受け四十二歳で斬殺された。

⑩9 田宮弥太郎書状 年不詳五月二十三日付 中根雪江宛 一通

越葵文庫蔵

〔田宮弥太郎〕

尾張藩士。名は篤輝、通称弥太郎、如雲・桂園などと号した。早くより才能を認められて藩政の中枢に参画し、人材登

用・儉約政策に力を注ぎ、藩内尊攘派の長老格として、藩主慶勝を補佐した。

將軍継嗣問題では、一橋慶喜を推す主君を助け、種々奔走したから、安政の大獄に連座し幽閉に処せられた。ゆるされて後、藩内の士気振興につとめ、元治元年（一八六四）慶勝が総督に任ぜられた第一次長州征討を指導した。維新後、新政府の参与に任ぜられ、さらに藩の大参事として諸政改革に手腕をふるい、明治四年六十四歳で歿した。

## 第六 幽囚時代及び最期

安政五年（一八五八）七月、主君春嶽の受譴後、景岳先生や中根雪江は一旦自刃を決意したが、春嶽に慰諭されて思い止まり、主君の雪冤と藩の再建のため、旧に倍して努力することを誓いあった。しかし、梅田雲浜逮捕以降、反井伊派勢力の一扫（安政大獄）をはかった幕府は、十月二十二日に至って、景岳先生にも弾圧の手を延ばし、藩邸内瀧勘藏預けの謹慎を命じたから、これより先生は時折町奉行所や評定所で訊問を受けつつ、幽囚の生活を送ることとなった。禁錮の身とはいえ、それより死に至る一年間は、先生にとって静かな学究の時期でもあった。

真に国家の将来を憂えた主君や自己の活動が、少しも間違っていないかったと確信する景岳先生は、度々の札問に対して堂々と論陣をはり、幕吏の中には、その正当性を認める者さえあった。しかし、幕権の維持に汲々として、先生に脅威を感じた井伊直弼が、その死罪を決定したから、翌安政六年（一八五九）十月七日二十六歳の先生は、江戸伝馬町の獄舎で斬首の刑に処せられ、悲劇的最期を遂げた。相前後して大獄の犠牲となった人々は、吉田松陰・頼三樹三郎・水戸藩家老安島帯刀・飯泉喜内ら広範にわたり、連坐百余人という未曾有の厳しい処罰であった。

景岳先生は、わずか二十六年の短い生涯を閉じたが、その間に示した世界の動静を把握した上での抜群の識見は、多くの人々に影響を与え、今も脈々と生き続けている。

| 年代   | 西曆   | 年齢 | 事蹟  |
|------|------|----|---|
| 安政 五 | 一八五八 | 二五 | <p>○一〇月三日、瀧勘藏預け謹慎を命ぜらる。○同二四日、間部詮勝参内、条約調印の事情を説明。</p> <p>○同二五日、徳川家茂に將軍宣下(第一四代)○二月八・一〇日、町奉行所に於て訊問を受ける。</p> <p>○同二六日、西郷隆盛、月照と自決をはかる。○同三〇日、堤五市郎、景岳は今年中に放免との情報を伝える。この日、頼三樹三郎逮捕さる。</p> <p>○正月八日・二月一日・三月四日・七月三日・九月一〇日、それぞれ評定所にて訊問を受ける。</p> <p>○二月一七日、青蓮院宮慎を命ぜらる。○四月二二日、鷹司・三條・近衛各公卿、落飾して慎を命ぜられる。○八月二七日、幕府、安島ら水戸藩士を死罪に処し、幕臣岩瀬・永井・川路を差控に処す。</p> <p>○一〇月二日、入獄を命ぜらる。</p> <p>○同七日、斬刑に処せらる。この日、頼三樹三郎・飯泉喜内も刑死。</p> <p>○同二七日、吉田松陰刑死。</p> |

⑩ 橋本景岳筆 「雪中松柏愈青々云々」の詩幅

一幅  
福井市春嶽公記念文庫蔵

この詩は、幕末の志士が座右に備えて心を磨き、景岳も常に懐中したと伝えられる浅見綱齋の「靖献遺言」の中に、宋の忠臣謝枋得の遺言として掲げられているものである。謝枋得は、宋が滅び元の天下となっても、決して節を変ずることなく、あくまで大義に殉じてその進退を律した人物であるが、元の都に護送されるに当り死を覚悟し、その決意をこの詩に詠じて、妻子・友人と離別した。

景岳がこの詩を書いたのは、安政五年(一八五八)十月、すなわち安政の大獄に連座して幕吏の追求を受け、幽囚生活を強いられた時であるから、謝枋得と同じ運命、同じ心境であることを示そうとして揮毫したものであろう。友人佐々木長淳のために筆をとったものである。

⑪ 橋本景岳筆 「常山之髮侍中之血云々」の詩幅

一幅  
景岳会寄託

安政五年(一八五八)秋、江戸にコレラが流行し、平本平学ら越前藩士もこれに罹って倒れた。景岳も七月中旬頃から病床に就き、一時重態まで陥ったが、やがて全快している。このとき同藩の上司長谷部甚平に贈ったのがこの詩である。

常山とは唐の常山の太守、顔杲卿のことで叛賊安禄山と交戦して敗れ囚えられたが、節義をまげず賊を罵って舌を抜かれた。景岳は「杲卿死して遺屍を収むる者なし、張湊なるものその髪を得て杲卿の妻を呼ぶ、妻之を疑ふ、髮生動するもののごとし」と別に述べているから「常山之舌」を意図的に

髪にかえたものと思われる。

侍中の血は、西晋の恵帝が八王の乱によって、成都王穎に討たれんとした時、帝の臣嵇紹が帝の御車に登って身をもつて守ろうとした。しかし謀叛人側の兵士は嵇紹を引き下ろしてこれを斬り、紹の血は帝の御衣にかかった。後この御衣を洗おうとしたところ帝は、「嵇侍中の血なり、浣うことなかれ」と止めたと伝えられる。これが侍中の血である。これらの古事を踏まえて詠まれたこの詩は、病後景岳が自らに悲壮な決意を示したものとして感慨深いものといえよう。

⑩ 橋本景岳筆 「青山断處塔層々云々」の詩幅 一幅

福井市 加藤二一氏寄託

安政五年（一八五八）冬頃、二十五歳時の筆とみられ、景岳の書としては最大のものである。

詩は、宋代の詩文家蘇東坡の「望海樓」より撰んだもので、書風は、景岳がこの頃その筆法を愛していた頼山陽の影響を受けているといわれる。

⑪ 橋本景岳筆 幕吏の審問に対する応答次第書 安政五年十月二十二日付 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政五年（一八五八）十月二十二日、江戸福井藩邸の役宅にいた景岳は、突然幕府役人の取調べを受けた。町奉行石谷因幡守配下の幕府役人は、景岳の役宅を搜索し書類を押収した上、その場で最初の訊問を行い、翌日町奉行所で審問の上、藩邸内瀧勘蔵預けの謹慎を命じた。以来景岳は、町奉行所や

評定所で、七回にわたる取調べを受け、翌六年十月二日入獄、同七日処刑されるに至った。

この史料は、安政五年十月二十二日夜、藩邸内において、幕吏から最初の訊問を受けた際の応答の次第を、景岳自ら筆録したものである。

⑫ 橋本景岳書状 安政六年九月二十八日付 母梅尾宛 一通

福井市 加藤二一氏寄託

⑬ 拝領 麝香包み

一包

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔橋本景岳書状（⑫）並に拝領麝香包み〕

安政六年（一八五九）九月二十八日、松平春嶽が禁錮幽閉中（刑死十日前）の橋本景岳を慰めるため、与えた麝香である。麝香は、ジャコウ鹿から取った薬品・香料で、非常に芳香が強く、古くより貴重薬として珍重されてきた。

拝領した景岳は、自分では用いず、書状を添えて福井の母（梅尾）へ送った。その添状にあるごとく、藍染めの水玉紙製畳紙は、松平春嶽が包装したもので、布製小袋は景岳の母が製したものである。

⑭ 橋本景岳獄中よりの密書（某氏写） 安政六年十月三・四日付 瀧勘蔵・石原甚十郎宛 二通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政六年（一八五九）十月二日、江戸伝馬町の獄舎に収監された景岳が、獄中から密かに発した書状である。四日付の

書中には、「元来一己の物数奇にて出来候事とは違ふ候間、これだけは国許にも少しく明らかめ呉候様仕度奉<sub>レ</sub>存候。」と述べて、自己の活動が私的な興味や名利への欲望からのものでは決してなく、深く国家の将来を憂えた故のものであったことを、郷里の母に説明するよう依頼するなど、悲壯観がただよっている。

景岳は、これより三日後の十月七日、斬刑に処せられた。

⑪ 橋本景岳筆 獄中で吉田松陰へ送る詩

二首

「越前橋本左内書」と上書のある紙片は、景岳の詩稿の包紙で、松陰の筆である。

〔吉田松陰〕

名は矩形、通称虎之助・大次郎・松次郎のち寅次郎、義卿・松陰などと号した。長州藩士杉百合之助の二男として、萩に生まれ、六歳で山鹿流兵学師範の叔父吉田大助の養子となる。幼少より秀才の誉れ高く、十一歳にして藩主毛利敬親の前

で『武教全書』戦法篇を講義した。弘化四年（一八四七）十八歳のとき、山鹿流軍学の免許皆伝を受け、翌年師範となった。嘉永二年（一八五〇）九州へ遊学し、肥後の宮部鼎蔵らと交わり、西欧の植民地主義に警戒を深めると共に幕府政治の矛盾を感じはじめた。以後、その関心は古式兵学の域を脱し、同五年には江戸へ遊学して、安積良斎に儒学を、佐久間象山には洋学を学んで、次第に思想家へと転進した。その年脱藩して東北を旅し、その罪によって土籍を削られた。

翌六年再び江戸へ出、安政元年（一八五四）金子重之輔と

来航中のペリー艦隊にひそみ、米国への密航を企てたが失敗、幕吏に捕えられて萩の野山獄につながれた。その獄中、もっぱら読書に耽り、『講孟余話』を著わして尊王論を説いた。翌年実家杉家に幽閉されたのを機会に、松下村塾を開き、高杉晋作・久坂玄瑞ら多くの俊英を訓育した。しかし、老中間部詮勝要撃策を企てたことから、再び野山獄につながれ、安政大獄に連座して江戸へ護送され、同六年（一八五九）三十歳で刑死した。

橋本景岳と松陰は、たがいにその才識を伝え聞かばかりで、生涯相会うことがなかった。しかし、景岳刑死直前の数日、棟こそ違つたが同じ伝馬町の獄舎に収監されたから、景岳はひそかに詩二首を松陰に贈って敬意を表した。松陰も獄中筆記の『留魂録』で、景岳を称讃し、相見ることの出来なかつたことを、残念がっている。

⑫ 橋本景岳筆 「適意偶抄」 「鈴籥雑録」ほか、幽囚中の詩文 筆記帳類

三冊

福井市春嶽公記念文庫蔵  
安政五・六年（一八五八・九）、幽囚中の景岳が座右に置いた筆記帳類である。『適意偶抄』は、唐宋詩醇中の蘇東坡を讀み、心に感じたものを選んで抜書したもの、『鈴籥雑録』は、兵事に関する書籍の抜萃などが中心となっている。なお、『鈴籥雑録』の終り近く、矢島立軒から借覧した書物の抜書があり、「三月念四 藜園」と署名がある。現存する史料中、景岳が別号の藜園を自ら用いている唯一の例である。

①⑨ 村田氏寿書状 陽月（十月）五日付

本館蔵

一通

景岳の刑死後、おそらく安政六年（一八五九）中か、翌万延元年中に、江戸から福井の同志（桑山十兵衛か）に宛てたもので、書中景岳の墓碑石につき、興味深い報告がなされている。

安政六年十月七日処刑された景岳の遺骸は、同十日朝になつて、長谷部弘連等福井藩士に引渡された。ようやく遺体を江戸小塚原回向院に埋葬した長谷部等は、最初「橋本左内墓」と題する墓石を建立したが、刑死者の墓を作ることには許されず幕吏に引倒された。そのため碑面をけずって、景岳がごく晩年用いた号をとって、「藜園墓」と三字のみ彫り付け、再びひそかに建立した。この書状には、そのいきさつが「秘中の秘」のこととして報告されている。

なお、この墓石と遺骸は、文久二年（一八六二）大獄関係者大赦の後、一度福井の菩提寺善慶寺に移されたが、のち墓石だけは再び回向院の旧葬地に建立され、今日に至っている。

①⑩ 松平春嶽筆 景岳祭祭文 明治十三年より明治二十二年

四通

福井市春嶽公記念文庫蔵

明治十三年十月七日、橋本家で挙行された景岳二十一年祭に当って、松平春嶽が榊や菓子とともに霊前に供えた告文、同十八年十一月二十二日、景岳建碑祭に於ける春嶽の弔詞などが、一卷に収められている。

①⑪ 『藜園遺草』 稿本 明治二年十一月、松平春嶽校閱本 二冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

橋本景岳の歿後十一年目にあたる明治三年（一八七〇）に、実弟綱維・綱常を中心として編集・刊行された景岳の漢詩文集である。藜園とは、景岳晩年の別号で、幽囚中の藩邸内居室の窓から、雑草の藜（あかさ）がむらがり延びているのを見て号したものである。

本書は、もともと綱維・綱常の手で編集され、橋本家に蔵されていたのを、有志の協力を得て、東京玉巖堂から出版したもので、松平春嶽の題字と引（序文）が載せられている他、中根雪江・矢島立軒・富田鷗波等の跋文が付されている。

①⑫ 松平春嶽筆 『藜園遺草』 引、並に題辞引渡通知書 明治二年十一月十三日香西成宛 一通

景岳会寄贈

①⑬ 『藜園遺草』 初版本 明治三年正冬刊 二冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

①⑭ 中根雪江筆 『夢物語』 一冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

橋本景岳の伝記として、最も早くなったもので、景岳最大の理解者としてあらゆる援助を惜しまず、手をたずさえて必死の活動を展開した中根雪江が、景岳刑死後二カ月を経た安政六年（一八六九）十二月著わしたものである。当時はまだ、事件の余燼がさめやらず、幕府の目をはばかる必要があった

ので、雪江はこれを自己の著述とはせず、同藩の石原甚十郎の筆録のように見せかけてある。

主君春嶽が幕譴を蒙った際、ともに自決を誓いあつた人の手になるだけに、筆致は迫真的で、深い哀惜の情と、景岳の無実を主張する激しい気迫にあふれている。

⑫⑤ 重野安繹撰・巖谷修筆 「橋本景岳之碑」碑文原本 一幅

景岳会寄贈

明治十八年、橋本景岳を偲ぶ旧福井藩士や関係有志の手で、東京千住回向院の景岳墓側に建立された「橋本景岳之碑」碑文原本である。文章は、明治十七年十月、漢学者で修史家として知られた重野安繹が起草し、書家としても知られた修史館監事巖谷修の筆になる。建立された碑には碑文の上に太政大臣三條実美の篆額がある。

重野安繹（号成齋）はもと薩摩藩士で、景岳の才学器識について、常に西郷隆盛から教えられるところがあった。碑文中の「器械芸術は彼に取り、仁義忠孝は我に存す。」という有名な景岳の言葉も、重野が西郷から聞かされたものである。

⑫⑥ 「橋本景岳之碑」石摺の額 一額

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑫⑦ 徳川慶喜筆 「鬼神泣壯烈」の書幅 一幅

福井市 加藤二一氏寄託

徳川慶喜が、壮烈な最期をとげた橋本景岳を追想し、維新後に景岳の実弟橋本綱常に書き与えたもの。

〔徳川慶喜〕

徳川十五代将軍。名は昭致のち慶喜、興山と号した。水戸藩主徳川齊昭の第七子。弘化四年（一八四七）三卿の一つ一橋家を継ぐ。幼少より英明の評高く、将軍継嗣として一橋派に擁立されたが、紀伊派の推す慶福（十四代将軍家茂）に敗れ、安政大獄に際して隠居謹慎を命ぜられた。井伊直弼が暗殺されてのち許されて、文久三年（一八六二）に将軍後見職となり、政事総裁職の松平春嶽と協力して幕政改革を推進した。慶応二年（一八六六）江戸幕府最後の将軍に就任し、仏公使ロツシユの援助を得て、幕府軍を洋式化するなど、強力な改革を断行し、幕政の刷新をはかった。しかし翌年十月、土佐の山内容堂の建白をいれて、大政を奉還し将軍職を辞した。大正二年（一九一三）七十七歳で歿す。

⑫⑧ 伊藤博文筆 「吊橋本景嶽先生墓」の詩幅 一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

骨を刑場に曝すは吾れ及ばず  
心を社稷に存するは君と同じ  
往事を追懐し感何ぞ限あらん  
落木秋風暮雨の中

橋本景嶽先生の墓を吊す

後学 伊藤博文

〔伊藤博文〕

天保十二年（一八四二）長州（山口県）の農家に生まれ、萩の下級藩士伊藤家の養子となる。若くして松下村塾に学び、吉田松陰の訓育を受けた。初め攘夷運動に奔走したが、文久



三年（一八六三）井上馨らとひそかに渡英して攘夷の非を悟り、以後維新政府樹立のため討幕運動に従事した。明治新政府では要職を歴任、大日本帝国憲法の制定、内閣制度の実施、皇室典範、枢密院の設置などに関与し、初代総理大臣、枢密院議長となる。

以後、総理大臣、枢密院議長を四度務め、明治三十三年には立憲政友会を組織したが、満州視察中、ハルピン駅頭で韓国人に狙撃され、六十九歳で歿した。

博文は、終生、橋本景岳を敬慕し、自ら景岳の後学（学問上の後輩）と称して、その立場を明らかにした。

⑫⑨ 橋本綱常書状 明治十年八月三十一日付 中根雪江宛 一通  
福井市春嶽公記念文庫蔵

〔橋本綱常〕

橋本景岳の末弟。弘化二年（一八四五）福井藩医橋本長綱の四男として生まれた。安政二年（一八五五）兄景岳が藩医を免ぜられて御書院番に列せられるや、十一歳で兄の後を継ぎ家職を守った。文久二年（一八六二）長崎に遊学して、オランダ人シントレルに学び、ついで江戸の蘭方医松本良順に入門、研鑽を深めた。帰藩後藩医として診療に従事したが、慶応元年（一八六五）再度長崎へ赴き、ポードインに師事した。翌年帰郷して、医学教授方を兼務し、福井藩医学所洛世館の改革に努力し、戊辰戦争の際、組織的な野戦診療を展開して注目をあつめた。

維新後、一〇年の間ドイツに留学、帰国後は文部省御用兼勤東京帝国大学医学部教授を命ぜられ、もと同藩医の岩佐純

とともに、わが国へドイツ医学を導入する主唱者となった。

のち、東京陸軍病院長・軍医総監・初代日赤病院長を歴任、若越医学会初代会頭をつとめて、郷土医学界の発展にも貢献した。明治二十八年（一八九五）功により華族（男爵）に列せられ、さらに子爵に陞爵して、貴族院議員・宮中顧問官を勤め同四十二年（一九〇九）六十五歳で歿した。

⑬⑩ 佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画、並に松平春嶽筆「橋本左内小伝」の幅  
福井市春嶽公記念文庫蔵

橋本景岳歿後十六年を経た明治八年に、橋本家からの依頼により、絵心のあつた佐々木長淳が記憶をもとに描いた肖像画と、同年五月二十一日付の春嶽筆「橋本左内小伝」とを一幅に仕立てたものである。

長淳（通称権六）は、景岳の縁戚にあたり、ともに蘭学を志した幼なじみであつた。また、春嶽の「橋本左内小伝」は、景岳の人となりを最もよく知る人の手になる点で、他のいかなる伝記も及ばぬ価値を有している。

⑬⑪ 島田墨仙筆 橋本景岳肖像画（複製）  
本館蔵

歴史人物画を得意とした島田墨仙が、明治の末年、福井の有志から依頼され、長年月をかけて描いたものである。景岳の肖像画としては、すでに明治八年、景岳の親戚で絵心のあつた佐々木長淳の描いたものがあつたが、その完成当初より、あまり似ていないとの評判があつた。そのため、景岳の門弟

であった堤正誼・加藤斌（溝口辰五郎）等が、自分達の記憶が鮮明の内に、後世に良い肖像画を残そうと、墨仙に揮毫を依頼したものである。

景岳に接することのなかった墨仙は、堤正誼等の助言を得て、今日のモンタージュ写真のように、何度も修正を加えつつ、大正三年に一応の下絵を完成したが、都合により一旦中止を申出、しばらくそのまま放置した。昭和十年に至って、たまに以前の下絵を発見し、さらに修正を加えて完成したのが、この画像である。のちに、国定教科書にも採用され、福井では誰にもなじみ深いのが、原本は戦災で焼失した。

〔島田墨仙〕

慶応三年（一八六七）十月九日、福井藩士島田雪谷の二男として生まれ、幼名を豊作といい、のち豊と改めた。少年期より非凡な画才を発揮し、はじめ父雪谷に学び、明治二十九年上京して橋本雅邦に入門、のち川崎千虎について学んだ。

明治三十六年に開催された第五回内国勸業博覧会展に出品した「大石主税刺鼠之図」で認められ、その後帝展に関係して、その委員となった。昭和十八年「山鹿素行先生」で帝國芸術院賞をうけたが、ことに歴史人物画をよくし、描く人物の精神面をも表出する重厚な筆致や、作品全体にあふれる気品の高さをたかく評価されている。

有名な「橋本景岳肖像」は、福井の有志から依頼され、銅像の下絵として描いたもので、のちに、国定教科書に採用された。墨仙は、当時のことを「まず（景岳）先生の人格についていろいろ研究したり、話を聞いたりして、幾度もこれを描き、堤男爵を始め加藤斌氏などに批評を請うたのである」

（景岳会報第三号）と回想しているが、歴史上の人物を描くに当たっては、こうした人物研究を怠らなかつたのである。昭和十八年七月九日、七十七歳で歿した。

⑬ 富岡永洗筆 橋本景岳肖像画（木版画）

一 幅  
東京都 村田正典氏蔵

この版画は、「越前人物志」の著者福田源三郎氏が、明治四十年頃東京の著名挿絵師富岡永洗師に依頼して作成頒布されたものである。

⑭ 橋本景岳座像

一 体  
本 館 蔵

昭和十一年十月の「橋本景岳先生誕生百年大祭」の折、福井の有志の発起で作成されたもので、原型は愛知県常滑市常滑焼陶工柴山清風氏の作である。

# 講演録

昭和五十九年十月七日、橋本景岳先生墓前祭の日、橋本左内先生奉賛会の主宰で、先生の御墓所近く福井市勤労青少年ホーム講堂に於て開催された「橋本景岳先生生誕一五〇年記念講演会」筆記録。

講師 皇学館大学 荒川久寿男氏  
皇学館大学 教授  
助教授 伴五十嗣郎氏

## 橋本景岳先生の生涯

伴 五十嗣郎

只今御紹介をいただきました伴でございます。先ほどからいろいろとお話ございましたやうに、本年は橋本景岳先生がお生れになりましたから、満一五〇年目といふ記念すべき年にあたります。その記念すべき年に、景岳先生のことを、しかも、御墓所のすぐ側でお話申し上げる機会をお与へいただきましたこと、非常な光栄に存じてをります。

本日私は、幕末近代史の権威でいらつしやいます荒川久寿男先生の、言はば前座を勤めるわけでありますから、万一間違つたことを申し上げても、後から荒川先生がちゃんと御訂正下さるだらうと存じまして、その点は誠に気が楽でございます。私の話は出来るだけ短くいたしまして、その分荒川先生に少しでも長く、じっくりお話しただかうと存じます。さて、少々私ごとにとわりまして恐縮でございますが、今から十五年前、私が未知の土地でありましたこの福井へ参りました時に、本日これからお話下さいます荒川先生をはじめとする恩師の諸先生が、口を揃へてかう言はれたものであります。

「さうか、福井へ行くのか。福井は、古くは白山の開山泰澄大師のお生れになつた土地柄である。そして新しくは松平春嶽公がをられ、幕末第一の俊秀橋本景岳先生が登場されたところである。一つ行つて、しつかり勉強して来なさい。」さう激励されて福井へ赴任いたしましたして、最初に目に触れま

したのは、当時福井のある高名な先生が、地元の新聞に連載した「逆説郷土史橋本左内」といふ一文であります。逆説とはどういふことかと思ひまして、目を通して見ましたところ、それまでの橋本左内に対する評価は、いさか過大である。左内といふのは、それほど偉大な人間ではない。実のところは、小心な能吏型の人物、つまり仕事は大過なくよくこなすけれども、気の小さい役人タイプの人間であつて、これまで言はれてきたやうな大人物ではないと結論付けたものであります。

はて、恩師の諸先生は、景岳先生のことを幕末第一の俊才であるとおつしやつたのに、地元で名ある人らしい研究者は、むしろ偉人の座から引きずり降ろさうとしてゐる。一体、どちらの評価が正しいのかと不思議に思つたことであります。

幸ひ、私が奉職いたしました福井市の歴史博物館は、本日も景岳会々長として、はるばる東京から御列席の松平永芳靖国神社宮司様が、福井市へ無償で御寄贈下さいました「春嶽公記念文庫」を収蔵してをりまして、景岳先生やその御主君の松平春嶽公のことを研究いたします上で、欠くべからざる、外では見ることの出来ない生の史料が、多数保存されてをりましたので、それらを通して、春嶽公や景岳先生の勉強を始めたのであります。そして今、福井の生んだ橋本景岳先生は、十五年前、荒川先生を初めとする恩師の諸先生が説いて聞かされた通り、まがふことなく幕末の第一の、福井が誇る第一級の人物であると確信いたしてをります。わが景岳先生は、誰がいかなる逆説めいた論を展開いたしましたしやうとも、微動だにしない、堂々たる偉人であります。

安政四年の閏五月といふ年、景岳先生は二十四歳でありまし

だが、藩校明道館の教育改革に関しまして、意見書を藩の上層部に提出されました。その中で、次のやうなことを述べてをられます。

およそ人を知るにも教へるにも、英雄ならば英雄を知り、聖賢ならば聖賢を知り申すべく、斗筭の人に、斗筭の人と言ふのは、器の小さい、規模の小さい人といふ意味であります。英雄聖賢を知り、これを仕立てあげ候ことは、勿論これ無きはずに御座候、

すなはち、自分自身に英雄としての見識であるとか、力を持つてゐるのでなくては、相手が真の英雄であるのかどうかを、見極めることは出来ないのである。器の小さい人には、自分の持ち合はせてゐる器の分量でしか、人を評価することが出来ない。規模の小さい人に、本当に優れた資質を持った人を見出し、しかも、その人を教育することなどは、とても出来はしないのだといふ意味であります。いかにも景岳先生らしい手厳しい論であります。同時に、確かにその通りであると感心させられる論であります。

私共は、昔から偉人として称賛されてきた人を、安易に軽々に批判することなど、差し控へるべきだと思ふのであります。それよりも、自分の器量で理解できる範囲でよいから、先人の優れた点を見付け、これに学ばんとすることの方が、大切であると思ふわけでありませう。

さて、はじめに申し上げましたやうに、橋本景岳先生は、天保五年といふ年、西暦で申しますと一八三四年、ちやうど本年から一五〇年前に、福井藩の奥外科医橋本長綱といふ人の長男としてお生れになりました。名を綱紀、通称を左内、景岳とか

容安、また藜園などと号されました。

景岳先生と手を携へて、主君春嶽公の左右の翼のやうになつて活躍した中根雪江翁は、景岳先生の刑死後まもなく、「橋本左内事蹟」と題する先生の伝記を記録してをられます。これは景岳先生の伝記として、最も古いものでありますけれども、それには、景岳先生が生涯を通じて最も愛用された景岳といふ号は、岳飛の人となりを景慕して、自ら号したと書かれてをります。つまり、岳飛といふ宋の時代の將軍を景仰し、岳飛將軍を慕ひ、これにならおうといふ意味を込めて、自ら景岳と号したといふのであります。

この岳飛といふ人、南宋の時代、日本で申しますと平安時代後期の若い將軍であります。当時宋の国は、満州に勃興いたしました金といふ国に攻め込まれまして、淮河以北、国土の大半を金に占領されてをました。岳飛は、三十歳を越えたばかりの若い將軍でありましたが、金に奪はれた国土を回復するため、軍を率ゐて西に東に大奪戦し、次第に金を圧倒して、金に取られたかつての都汴京の間近まで迫りました。もう少しでかつての都を奪回出来る。ところが、金のまはし者の秦檜といふ奸臣のため、無実の罪に陥れられ投獄されてをしまいます。しかし、岳飛將軍はいかなる拷問にも屈せず、牢から解放されるために悪人と妥協するやうなことを一切拒否し、ひたすら祖国と皇帝に対する忠誠のみを国にして、遂に獄中で殺されてをしまひます。

この岳飛將軍の日常は、きはめて清廉質素で、ある人がどのやうな時、天下は太平であらうかと質問しますと、「文臣錢を愛せず、武臣死を惜しまざれば、天下太平ならん。」つまり、政治家がお金を欲しがらず、軍人が国のためには死を恐れない時

が、世の中が平和で安泰な時であると答へたと伝へられ、その人柄が惚ばれるのであります。

わが景岳先生が、かうした岳飛將軍を景仰し、自分も岳飛のやうになろうと志されたことは、先生の生涯を考へる上で、非常に重要なことであります。

松平春嶽公も、「橋本左内小伝」といふ景岳先生の伝記を著はしてをられます。それには、「のちに鈴屋翁の和歌の意をとつて、自ら桜花晴暉楼と号した」とあります。鈴屋翁とは、江戸時代第一の国学者本居宣長先生のことです。この宣長先生の著述を読んで、その精神にいたく心を打たれ、山桜の花が朝日に光り輝く様子を、日本古来の精神にたとへた、

しきしまの大和心を人とは朝日ににほふ山桜花

といふ皆様よく御存じの宣長先生の和歌になぞらへて、自ら桜花晴暉楼と号されたといふのであります。

最近の学者の中には、景岳先生に国学的素養が深かつたとか、あるひは国学の精神に感化されたとかいつたことはなかつたと説く人がをります。しかし、決してそんなことはありません。景岳先生の学問の広さ、深さといふものは、今日の並の学者には、到底想像のつかないほどのものであります。たとへば、只今も福井市の歴史博物館に展示されてをります、景岳先生自筆の筆記帳で、「読書筆記」と呼ばれてゐるものがあります。自分で読まれた書物の要点を書き留めたり、その重要な部分を抜き書いたりされたノートの一冊であります。

これを見て、景岳先生が目を通された国学関係書を拾ひ上げてみますと、今申しました本居宣長先生の代表的な著述で、四十八巻の大部から成る『古事記伝』を通読されてをります。また、

同じく国学者として有名な平田篤胤先生の『玉だすき』を読み、あるひは江戸後期の国学者谷川士清の著した国語辞書『和訓栞』を所持し、常に参考にしてをられる。さらに、『日本書紀』『風土記』をはじめとする、わが国の古典を広く読破するなど、国学を学ぶ者が必ず目を通すべき書籍を、非常な勢で熱心に学ばれた様子がうかがへます。

そればかりでなく、伊勢神道書の『神名秘書』でありますとか、『御鎮座本紀』といった、同じ国学や神道に関する学問でも、よほど深く突つ込んで研究しなければ、手にすることのない書物まで読んでゐることが知られ、驚かされるのであります。わづか一冊のノートからだけでも、景岳先生が国学に関して、それほど多くの学問をしたといふことが知られるのでありますから、その方面でも相当の造詣を有してをられたであらうこと、歴然としてゐるのであります。

中根雪江翁は、先ほど御紹介申し上げました「橋本左内事蹟」の中で、景岳先生の印象を、次のやうに述べてをります。

生レテ穎敏、喜ビテ書ヲ読ム、為人軀幹稍ク五尺、白哲孱弱、ホトンド美婦人ノ如シ、

つまり、景岳先生の身長はやうやく五尺ほどであつた。色白、やせ型で、一見したところ弱々しく、まるで美しい女の人のやうであつたといふのであります。

雪江翁は、続けて次のやうにも述べてをります。

而シテ志氣慷慨沈毅英果ニシテ、膽略人ニ絶ス、(中略)

応答進止、老成人ニ異ナラス、  
見かけは小柄で婦女子のやうにひよわに見えたけれども、その心構、精神の働たるや、誠に落着があつて剛毅果断である。

いはゆる肝玉のすわつてをりますことは、他に比ぶべき者が  
ないほどで、人と話す時の受け答へでありますとか、立居振舞  
といふものは、老成人、多年の経験を積んで老熟した人のやう  
な風格があつたといふのであります。

中根雪江翁は、景岳先生最大の理解者であり協力者であり、  
時には共に切腹を言ひ交したほどの間柄でございましたから、  
その景岳先生の風貌描写といふものは、実に迫真力があり、先  
生は正に右のやうな方であつたと思ひます。

景岳先生が安政六年（一八五九）の十月七日、江戸伝馬町の  
獄舎で、二十六歳の若さで斬首の刑に処せられましたことは、  
御存じの通りであります。正確には、わづかに二十五年と七ヶ  
月の短い生涯でありました。しかも、藩主松平春嶽公や中根雪  
江をはじめとする藩の要路に見出され、大抜擢を受けたとはい  
へ、本当に混乱する政局の渦中にあつて活躍されたのは、  
ほんの一年ちよつとほどの間でありました。

従つて、先生はお医者さんとして、あるひは教育者として、  
あるひは政治家として、見るべき大業績があつた訳ではありま  
せん。学者として見ても、これといつて大部の著述があるとい  
ふ訳でもないのであります。にもかかはらず、当時から心ある  
人々の期待と尊敬をあつめ、亡くなつて二五年もたつ今日も、  
忘れ去られることなく高い評価を受け続けることが出来るのは、  
何故でしやうか。それは、実に景岳先生のまれにみる人物と、  
群を抜いて優れてゐた識見にあると言はねばなりません。そし  
て、志なかばで倒れましたために、実際の政治の上で充分に生  
かすことの出来なかつた、その優れた識見といふものは、先生  
が驚くべき学問の力で練り上げられたのであります。

先生の学問として注目すべきものに、少年時代吉田東篁先生  
の門で学んだ朱子学一派である崎門学があります。江戸時代  
初期の山崎闇齋先生を学祖とする崎門学では、単に文字の上で、  
知識としての学問をするのではなく、わが国の伝統に根ざした  
日本人としての精神を養ひ、一命をかけてそれを実践しなけれ  
ばならぬと教へるのであります。景岳先生は、その根本の精神  
をこの崎門学により鍛へ上げられました。

また、先生の広範な学問の中で、最も特色あるのは西洋の学  
問であります。はじめオランダ流の医学の学習より始つた先生  
の蘭学研究は、医学から広く西洋の歴史・地理・物理・化学・  
天文・機械等々、あらゆる方面に及びました。その天才的な語  
学力を生かして、非常なスピードで原書を読み漁り、吸収して  
ゆかれたのであります。さらに、その語学もオランダ語ばかり  
でなく、早くから英学に注目して英語を学び、あるひはまた、  
中根雪江の依頼でドイツの世界地図を翻訳するなど、ドイツ語  
にまで及んでゐます。

さうした広い洋学研究を通して、先生は西洋諸国の歴史と文  
化と現状を正しく認識し、世界の将来までを洞察する国際的な  
視野を身に付けられ、抜群の識見を持つに至りました。翻訳書  
に頼らず、自分自身の力で直接洋書を読みこなすことが出来た、  
さういふ力を持つてをられたといふことは、先生が並みぬる幕  
末の志士中、他の何人の追隨をも許さなかつた重要な点であり  
ます。

当時、景岳先生のやうに熱心に蘭学を学んだ人の中には、圧  
倒的に進んだ西洋の文明に心まで奪はれ、いはゆる外国かぶれ  
に陥つた人が多かつたのであります。景岳先生は、福井藩校明



道館の教育改革を進めるにあたり、この点を厳しく戒められました。先生の有名な言葉に

器械芸術は彼に取り 仁義忠孝は我に存す

といふのがあります。自然科学や機械技術の分野は、これを大いに西洋から学び取らなければならない。しかし、人として踏み行ふべき道徳的分野は、わが日本に誇る立派な伝統が存してをる。それを忘れてはならないといふ主張でありますけれども、景岳先生は祖国日本の歴史と伝統に大きな誇を持ち、日本人としての自覚を堅持してをられたのであります。

さて、福井藩医の重鎮半井仲庵は、友人の笠原白翁に宛てた手紙の中で、二十一歳の景岳先生に接した印象を

実に英才目をぬぐふべく、驚くべき後進の領袖、何をうけ

たまはり候ても、応答響くが如く、この人に年を貸し候はば、万天下の書生を引き付け申すべく存じ候、

景岳先生が、このまま大成されたならば、日本中の学徒を福井に引き付けることになるであらうと述べまして、その成長に大きな期待をかけました。

同じ頃、景岳先生に蘭学を教へた江戸の杉田成卿は、いちちはやく先生の才能を見抜いて、「わが学業を継ぐ者、必ずこの人ならん」と激賞しました。同じく、当時江戸第一級の蘭学者でありました坪井信良は、実のお兄さんに宛てた手紙の中で、やはり二十一歳の門人景岳先生を評して、

すこぶる沈才篤厚、誠にたのもしき人物、(中略) 小生も

年来会ふ人千百人、かくの如き人は初めて也、実に恐るべ

き、うらやむべき一俊才にござ候、

と記し、絶賛してをります。

さらに、「われ先輩に於ては藤田東湖氏に服し、同儕に於ては橋本左内を推す、二子の才学器識、わが輩の企て及ぶ所ならんや」と述べて、常に景岳先生に推服しましたのは、かの西郷南洲(隆盛)であります。

あるひはまた、幕臣中の傑物川路左衛門尉聖謨は、一夜景岳先生の憂国の弁舌に接しまして、越前藩の橋本左内は、なほ若年であるが、その議論の鋭く精細で、しかも優れてゐること、聞いてゐる内に、まるで自分の半身を断ち切られたやうに思つた。自分は、年来無数の客に應對して来たが、いまだこのやうな恐るべき人物に会つたことはなかつたと驚嘆しました。

福井の某先生が説かれたごとく、景岳先生が小心的な能吏型の人物でしかなかつたならば、どうしてこれほど多くの優れた人々から、最大級の賛辞をあつめることが出来たでありまじやうか。景岳先生はまがふことなく、幕末の日本を代表する最も偉大な人物だったのであります。

これほど多くの人々を驚嘆させた先生の識見が、いかなるものであつたか、只今から荒川先生に詳しくお話しいただくわけでありませう。私も荒川先生のお話をじっくり拝聴いたしました。生誕一五〇年といふ記念すべき年にあたり、景岳先生に対する尊敬と誇の念を再確認いたしまして、今後の活動の糧にしたいと考へてをります。御静聴ありがとうございました。

## 橋本景岳先生の思想と識見

荒川 久壽男

### 一、景岳先生の学問

只今過分の御紹介にあづかりました皇学館大学の荒川でございます。本日景岳先生の生誕百五十年祭、そしておなくなりになつて百二十五年忌の墓前祭にお招きにあづかりまして非常な感動に満ちてをる事であります。早朝から秋晴れでございますが、同時にいはば秋風啾々、恰も百二十五年前の安政六年十月七日を偲ばせるものがございました。百二十五年前のこの日、橋本景岳先生は斬られたのであります。越前の生んだ幕末第一の大英才、否、更に申しますならば、日本歴史の幾千年の精髓がここに凝つて生んだ救国の大英才橋本景岳先生、この偉大なる天才が百二十五年前のこの日、日本橋の伝馬町の牢獄において斬られ、その遺体は小塚原に投げ捨てられたのであります。まさに悲風啾々の一日でありました。その百二十五年前の悲風さながらに北国の秋風身をかすめまして、まことに深い感動に満ちたことございました。

さて只今は伴先生から橋本景岳先生の概略についてお話を戴いたのでありますが、私は更に景岳先生の偉大なる思想と識見についていくつかの観点から申し上げてみたいと存じます。何分先ほど申しましたやうに、景岳先生は日本の歴史三千年の精髓ここに凝つて現はれたかと思はれる大英才でありますから、

浅学なる私はその全貌を限られた時間の中で申し上げることはとうてい為し得ることではございませんけれども、せめてその一端をいくつかの観点にしぼつて申し上げたいと思ふのであります。

まづ第一には景岳先生の学問の筋であります。只今伴先生のお話にもありました様に、景岳先生の学問の筋は日本の学問の最も正しい筋を承けられ、同時に世界的展望を抱いてをられた事でありませぬ。

先程のお話の様に景岳先生は本居宣長先生の国学を深く学ばれました。更にまた西依成斎、鈴木遺音、吉田東篁と続いできます所の山崎闇斎先生の学問、いはゆる崎門義理の学を深く承けられたのであります。これは江戸時代に養はれた最も正しい日本の学問であります。しかも又景岳先生は水戸の藤田東湖を尊信崇拝され、これを通して水戸の学問をも承けられました。藤田東湖先生の「回天詩史」を景岳先生自から写して愛誦してをられます。これは只今歴史博物館に展示されてをりますからぜひご覧下さい。更には先生が越前藩校明道館、今でいふならば国立福井大学に当りませうか、その明道館創立に当つて建学の大神を記した「明道館の記」を書いてをられますが、それは全く水戸の「弘道館記」を模範とし参考として書かれたものであります。ご承知の様に水戸の学問は有名な水戸義公、水戸光圀公から始まり、大日本史の編纂を中心として発展してきたものであり、幕末においては尊皇攘夷の大本山となつた学問であります。景岳先生はこれをやはり承けられた。さうしますと先生は国学、崎門学、水戸学、即ち江戸時代において培はれ養はれてきた最も正しい日本の学問をすべて承けてをられるので

あります。ここに景岳先生のいはば哲学が養はれてゐるのであります。

これに加へて先生は大坂の緒方洪庵の塾、更に江戸の杉田成卿の塾において深く蘭学を修め、更に英学も研究し、ドイツ語にも手を伸ばされるといふ様に、西洋の学にも分け入られたのであります。まさに当時の蘭学界において第一等の英才だったのであります。私が前に先生の学問は世界的な展望と視野を含んでゐると申したのはこの事でありました。しかし注意すべきことはその世界的な視野展望の根底には国学や崎門学、水戸学によつて培はれた日本の哲学があつたといふ事でありました。それはまことに和魂洋才といふべきものであります。この和魂洋才の大英才景岳先生が、幕末非常の世に當つて、いかなる大識見を提示して決起されたか、これは次節以下に申し上げませう。

## 二、文明論の哲学者景岳先生

越前藩が藩校明道館の設立に着手したのは安政三年でありました。そして当時江戸の杉田成卿塾に学んでゐた景岳先生を国元呼び戻し、いへば明道館大学設立準備委員長に命じたのであります。先生時に二十三才、今風に満年齢でいふと二十才、今の大学生でいへば学部を卒業して大学院に進む年頃であります。それが明道館大学の設立の中心となる。非常な事でありました。勿論越前藩の大学でありますから学長、総長は藩主春嶽公であります。実際の中心は二十三才の青年景岳先生が当られる。大変なことでありました。

そして先生は前に申しました様に、その建学の精神を明らかにされる「明道館の記」を起草される。そのみならず明道館

の学科、科目を定め、いへばカリキュラムを設けられる。これが明道館ならではの大特色が発揮されます。これはみな先生の識見から出る。どういふことかといへば、西洋の学を専攻する科目を置くのであります。軍事学とか物産学や鉱山学、造船学とか洋学専攻の科目を設けるのであります。そのカリキュラム設定に當つて非凡なる大特色が発揮されるのであります。それは一口にいへば洋学専攻の学生には必ず東洋の哲学を先づ修めさせる。かうしなければいかんといふのであります。西洋の学問だけをやつてゐると知らず知らずの中に学生の頭はオランダにイギリスにアメリカにフランスに引きこまれてしまふ。日本の魂を忘れて西洋崇拜に流れる。この弊害を防ぐためには基本として日本の学問、東洋の学問を以て魂を養つておかなければならぬといふのであります。

これは先生の非常な大見識でありまして、これを忘れたために明治初年の文明開化の大弊害が生じ、それは明治初年のみならず、大正昭和とつづき、今に及んでゐるのであります。マルクスに溺れレーニンに流され、あるいはアメリカのデモクラシーに走るといふ今の弊風は基づく所ここにあるのであります。それをいち早く幕末に予見し察知し、明道館の洋学科に和魂洋才の学風を確立しようとした若き景岳先生の大見識は、実に時代をこえたすばらしいものと言はなければなりません。

先程もお話がありました。景岳先生の言葉に「器械芸術彼に取り、忠孝仁義我に存す」とございます。「芸術」とは技術のことでありまして、即ち西洋文明はよろしく採用すべし、しかし「仁義忠孝」——西洋の科学文明を駆使する心のはたらし、その根底をなす倫理道德の問題は日本の、東洋のものを失なつ

てはならぬ、換言すれば日本の、東洋の精神文化を以て西洋の科学技術の文明を駆使しなければならぬといふのであつて、これは堂々たる文明論の哲学であります。これが明道館における洋学科開設の基本精神なのであります。

私はこれは古今に卓越したすばらしい文明論の哲学であると思ひます。かくのごとき文明論の哲学を不幸にして明治以後の我国の知識人、文化人はもたなかつた。それ故に明治以後は文明開化の名のもとに滔々として欧米崇拜に流れ、社会主義、共產主義をよしとし、またはデモクラシーを礼讃し、東洋の哲学、日本の歴史と伝統を忘れ去つて国民思想の混乱といふ恐るべき弊害をもたらしたのであります。それは戦後の今もなほ甚しく、青少年に祖国の歴史と伝統とを見失はせ、国家の根本を揺がす恐るべき風潮となつて現はれてゐるのであります。しかしながら西洋の科学文明の進むところ、今や人間疎外と申しますか、貴い人間の道徳性は見失はれ、恐るべき文明の危機に臨みつつある事は皆様ご承知の通りであります。この時に東洋の、日本の伝統ある哲学が世界文明を救はなければならぬ。そして西洋の科学技術文明に欠けた所の、人間の靈性の文明を提示しなければならぬ。ここにおいて若き景岳先生が説かれました文明論の哲学は時代をこえて未来を指し示すすばらしい光りを放つてくるのであります。かやうな壮大にして深刻な文明論の哲学が、わづか二十代の前半の青年によつて百年前に説かれたといふ事は、何といふすばらしい事でありませうか。

### 三、空前の大政策家景岳先生

第二点は景岳先生が若き大政治家として内外の政策に破格雄

渾の大構想を立てられたことでもあります。

先生は幕末の世界情勢を何人よりも徹底して見通されました。今度歴史博物館にやはり展示されてゐますからご覧下さい。それは先生が恐らく安政三年の頃に書かれた「西洋事情書」といふのがあります。全集にも入つてゐますが短かい文章ではあるけれども、当時日本の洋学者でこれほど西洋の政治事情をつかんだものはございません。恐らく江戸の杉田成卿塾におられた頃記して福井藩当局に示したものと思はれますが、これはふしぎに其後安政四、五年の頃、福井藩に招聘されようとした横井小楠が村田氏寿あてに記した長文の意見書があります。その中に小楠が詳しく西洋事情、ことにロシアの事情について述べた所とほとんど一致することあります。この一致符合は一体どうして出来たか、これは幕末史の研究の中で興味ある問題であります。が、あまり特殊な話になりますので今は省略いたします。

さて景岳先生はかやうな西洋認識の上に立つて破天荒な日本の内政外交論を展開されました。これが有名な安政四年十一月二十八日、江戸から国元の村田氏寿にあてた長文の手紙の中に記されたものであります。先生時に二十四才、満でいへば二十才でありませうか。これも今回歴史博物館に展示されてをりますのでどうかよくご覧下さい。

それは巻紙に長さ二メートル近い長文であります。まづ第一に論ぜられてゐるのは日本の外交政策であります。それは実に透徹した世界情勢の洞察からはじまる。私は安政四年当時これほど透徹して世界情勢を把握した政治家を知りません。当時の政治家は大たいペリー来航とかハリスの江戸出府とか眼前のアメリカの問題にだけ振り廻されてゐて、世界の動きを奥底か

ら理解し把握するまでに至つてゐないのであります。その中で二十四才の青年政治家橋本景岳はいふ、今世界を動かしてゐるのは眼前のアメリカではない。それはイギリスとロシアだ、このイギリスとロシアといふ二つの超大国が国際世界を動かしてゐるのだ、この二つの超大国の力を両極として世界は旋回してゐるのだ、そして世界の国々は行く行くはこの二極を中心にして今の国際連合の様なものを形成するだらう、かう言はれるのであります。かやうに当時の国際世界が英露の世界支配といふ両極構造を中心としてゐる事を看破されたことは先生のすばらしい眼力であります。

さてその二極構造の中で幕末の日本はどう進んだらいいか。先生の考へはかうであります。理想としては日本はよろしく英露二大国の間に独立独歩して、今風にいへば第三世界の旗を掲げねばならない。そしてこれはこの手紙ではふれてをりませんが、欧米に侵略されたアジアを解放しなければならぬ。これは先生の詩の中に

数閩の嬌歌、緑醅をすすむ

綺羅、月を邀へて江台に坐す

誰か知らん、一片清輝の影

嘗て澳門の白骨を照らし来るを

意味は歌ひさざめき、着飾つて美酒を酌み、高殿に坐して月を眺める人々よ、その月光こそマカオにおいて欧米に虐げられたアジアの民の白骨を照らして来たのだぞといふのであります。即ち先生が欧米のアジア侵略を憤り、その解放救済を目指されたことは明らかであります。かやうに日本が英露の間に独立し、アジアを解放して第三世界の旗を振るためには日本はまづ

アジアに地歩を固め、アメリカを「何分一個の東藩と見」、太平洋の彼方のアメリカを日本の東の守り、同盟国として立たなければならぬ。即ち環太平洋圏の力を日本が結集する力を持たなければならぬ。これは実に雄大な理想であります。今日二十世紀に向けて環太平洋圏の文明と政治とが未来世界への展望として言はれてゐますが、景岳先生の外交理想はすでにそれを含んでゐたといつてもよいかと思はれます。

しかしそれは理想である。現実はどうかといへば残念ながら幕末の日本にはその力はない。そこで現実の外交策としてはどうするか。ここに先生の有名な日露提携論が出て参ります。即ち現実には英露二大国の何れかと手を結ぶがよからう。その際英露何れをえらぶか。先生はここに多年の国際情勢の研究を基にロシアとしばらく提携すべしとされたのであります。かやうに当分の間は世界の大国の何れかと結んで日本の活路を開くべしとする外交方針は明治以後日本の外交の大指針となつたのであります。

かやうに一時ロシアと結び、アメリカと友好関係をつないで日本は当面国力を充実しなければならぬが、そのためには国内において空前の大改革を行はなければならぬ。ここに先生は破天荒の国内大改革策を提示します。これは当時の政治家が何人も考へ及ばなかつた空前の大構想で、時代を一変させるものであります。それはまづ非常の難局に當つて英明なる將軍を立てるのであります。当時は十三代將軍家定でありましたが病弱なためその継嗣が問題で、越前藩はじめ薩摩藩その他天下有志の大名はこぞつて水戸烈公の第七子、一橋慶喜を推したのであります。景岳先生もそのため日夜奔走されました。一橋慶喜の

様な英明の人を次期將軍にしなければならぬ。そしてその下に国内事務宰相と外国事務宰相を置く。国内事務宰相には水戸の烈公即ち徳川齊昭、越前の春嶽公、薩摩の島津齊彬をあてる。外国事務宰相とは外務大臣、これに肥前の鍋島齊正を用ゐる。そしてこれらの部局には幕府の有司中俊英な川路聖謨、岩瀬忠震、永井尚志をはじめ、いやしくも天下に名ある人物は幕府の内外を問はず抜擢登用せよ。更には京都の守衛には尾張の徳川慶勝、鳥取の池田慶徳、これに彦根の井伊直弼、大垣の戸田氏を添へたらい。蝦夷地、今の北海道の開拓には土佐の山内豊信あたりをあてて内地の雲助乞食を移住させ、その往復に汽船を用ゐれば航海術修練の一助にもならう。かやうに言はれるのでありますが、これは破天荒の構想であります。なぜならこれら諸大名の人撰をみて下さい。薩摩も肥前も土佐もみな外様大名であります。ご承知の様に江戸幕府は徳川將軍の下に役職はすべて譜代大名で固めておりました。外様大名は一度も用ゐていません。今それを先生は譜代外様の垣根を取り払い、將軍の下に全国有志の大名をすべて結集せよといはれます。更に大名のみならず各部局に天下の人材をすゞつて結集せよ、蝦夷地開拓には内地の雲助乞食までも用ゐよといふのであります。先生の目からみれば天下いかなる人物でも捨ててはならぬ、「人間おのづから有用の士あり、天下何ぞ為すべきの時なからん」とはこの手紙の末尾の方にある先生の言であります。実に天空海澗といふか、数百年の因循積習を一洗して真に日本全国の力を結集しようとする空前の大革新論であります。

そして更に注意すべきは、この手紙にはみえませんが、後に安政五年上京後、中根雪江あての手紙には將軍は上京して

天皇の下において関白以下諸公卿と国政を議すべしとの意味の事を申されてゐますから、これによると將軍は天皇に直屬して天皇の大政を輔け奉る地位になります。即ち先生の構想は、天皇の下に英明なる將軍が大政を輔け奉り、その將軍の下には譜代外様を分けず、幕府の内外を問はず、真に天下の英才を登用し、日本国の総力をここに結集するといふのでありますから、もはやかうなると名は幕府であつても、従来の徳川氏が覇者として朝廷を抑制し、全国の大名を制圧して、以て徳川氏が私的に日本国を支配するといふ体制を根本的にくつがへす事になります。そして天皇統治の下に真に国民の総力を結集する政府を樹立することでありますから、これは実に明治維新の青写真を早くも安政四年に画いたといつても過言ではないのであります。これが当時二十四才の青年にして哲人政治家たる景岳先生の抱かれた大構想でありました。何といふすばらしい、未来を先取りした大政策ではありませんか。

こうして二十四才の青年ながら景岳先生は空前の文明論の哲学者、破格の大政策家であつたのであります。

#### 四、救国の志士景岳先生

先生の偉大なる第三点としては、救国の志士としての大活動をおあげたいと存じます。先に私は哲人として、更には優れたる政治家または政策家としての景岳先生を述べてきましたが、歴史を通観すると哲人にして政治家、政策家を兼ねた人は必しもないわけではない。しかしながら哲人にして理論的政策家であると同時に、志士としてその実践活動に挺身し、自からの生命を国家に捧げて国家の活路をきり開かうとその渦中にとびこみ、

つひに国家護持に鮮血をそそいで殉ぜられた人は少い。しかるに先生は幕末維新の人柱として国家に殉ぜられたのであります。哲人にして政治家、而して志士、この三位一体を一身に具現されたのが若き橋本景岳先生であつたのであります。

先生は前に述べた様に安政三年から明道館の設立に尽力されましたが、時勢の急転は先生を学究かつ教育に専念することを許さなくなりました。それは安政四年六月、老中阿部正弘が急死したため、將軍継嗣の重大問題が切迫したことであります。前にも申した様に当時の十三代將軍家定は虚弱で到底ペリー来航以来の難局を担当し得ませんでした。そこで早くから越前や薩摩その他有志の大名はその後嗣として賢明のほまれ高い一橋慶喜を擁立すべく懸命の努力を注いだのであります。そして首席老中阿部正弘もこの運動に好意を示してゐましたので慶喜擁立の運動はかなり明るい希望を持ち得たのであります。しかるにその正弘の急死は一橋派に暗雲を投げかけました。ここに越前藩主松平春嶽公は急遽国元から先生を江戸に召し、將軍継嗣及び外交問題に関する懐刀として起用されたのであります。

かうして先生は単なる学究また教育家だけではなく、決然としてすさまじい幕末史の急流の中にとびこみ、身を以て急流中底の柱と立ち、以て国家の命脈を打開しようとする志士となられたのであります。歴史博物館にも展示されてあります先生愛用の本箱を皆様よくご覧下さい。その蓋には「急流中底之柱即是大丈夫之心」と先生の筆で記されてあります。先生は今や急流中底の柱として国家を護持する志士の道を進まれたのであります。時に安政四年八月。

しかるに將軍継嗣問題も外交問題も前途困難をきはめます。

將軍継嗣問題から申しますと、当時一橋派の中心は越前、薩摩の両藩でありました。水戸は無論一橋派であります。慶喜公が水戸の出だけに直接表面には出られない。いへば陰の力となる外はないのであります。所が江戸城の大奥では水戸ぎらひで、反一橋派が主流を占め、これと結んだ井伊直弼一派は幼年の紀州家の徳川慶福を血統が將軍にちかひとして推します。いはゆる紀州派であります。両派の争ひは熾烈をきはめますが、ことに一橋派にとつては江戸城大奥の反対が最大のネックでありました。これを打開すべく薩摩藩主島津斉彬は將軍家定の夫人に薩摩の女性を入興させ、大奥への工作を致します。この人が後の天璋院であります。この工作も仲々進まない。かうした状況の中へ越前藩主松平春嶽公の懐刀として青年志士景岳先生が颯爽と政局に登場し来るのであります。

折から薩摩藩主島津斉彬のやはり懐刀として江戸に現はれたのが若き西郷吉兵衛、後の大西郷であります。ここに越前の橋本景岳と薩摩の西郷隆盛、維新回天史上の若き二大巨星が輝やく光りを発して相結ぶのであります。維新史の一大壯観でありました。

さて先生は西郷と連携しつつ一橋派の運動に奔走する一方、外交問題においても春嶽公の智囊として縦横の活動を展開します。丁度その頃は下田に來たアメリカ総領事ハリスが江戸に出府して將軍家定に謁見を求め、更に日米通商條約の締結を要求してきました。あわてた幕府は諸大名に意見を求めますが、春嶽公は先生の輔けにより堂々たる開国進取の策を呈出しました。それは我国から進んで国を開き、世界に雄飛すべしといふので、すでに世界の情勢に透徹した見識を抱いてをられた先生の眼中



にはもはや三百年來の鎖國政策などはなかつたのであります。前に申しました安政四年十一月二十八日の村田氏寿あての手紙に載せられた長文の、しかも破格雄渾の内政外交策はまさにこの頃のものであります。これが春嶽公の幕府への献策に大きく反映したのであります。

一方幕府は岩瀬忠震、井上清直を交渉委員としてハリスと條約案を談判させました。この中、岩瀬忠震は非常な豪傑で折衝中しばしばハリスをやりこめ、條約ができたなら我自から駐米公使としてアメリカに乗りこまうと言明したのであります。かくて條約草案が成るや、老中堀田正睦は川路聖謨、岩瀬忠震らをつれて上京し、朝廷に奏上して勅許を得ようとなりました。安政五年の三月であります。

これより早く先生は越前藩の密命を受けて上京致します。飛雪の中を桃井伊織と変名しての上京は一橋慶喜の擁立と外交問題解決のためであります。二十五才の青年志士が藩の密命をおびて入京し、これより若武者獅子奮迅の大活躍が京都政界の裏面において展開されました。

事は急を要する。「何分早急手詰の合戦」と先生自から中根雪江あての密書に書いてをります。上京するや密かに朝廷首脳部を歴訪いたします。内大臣三條実万、後の有名な三條実美のお父さんであります。それにはまづ三條家の家臣森寺因幡を動かす、やがて三條公に会ふ。席上一橋慶喜擁立を談ずるや三條実万おぼえず膝を進め、手をうつて讃意を表明しました。ただ外交問題になると、何分永い事幕府の禁中并公家諸法度で都に押し込め同様になつてゐたお公卿さんの事ですから、世界の情勢を全く悟らず、説得には難航した様であります。その外、

当時孝明天皇の最も信任厚かつた皇族で青蓮院宮様、後に中川宮と称され、明治には久迩宮朝彦親王と申して神宮祭主にもなられたお方がありますが、当時は志士景仰の的となり、今大塔宮とも言はれたお方でありました。その青蓮院宮には家臣伊丹藏人を通して建言の道をつけるなど、真に先生獅子奮迅の勢ひであつたのであります。それは日本国家の運命になつた崇高なる青年志士の姿でありました。

しかるにこの頃、京都政界の裏面で先生と全く正反對の暗躍を重ねた人物があります。それは彦根の井伊直弼の家臣長野主膳であります。彼は井伊の懐刀として一橋排斥、紀伊慶福擁立に暗躍します。井伊と関係ある九條閔白を動かします。まさに安政五年の春は京都政界の裏面で景岳先生と長野主膳火花を散らして相對しました。この長野主膳であります。ふしぎなことに先生は安政三年の備忘録に注目すべき人物として彼の名を記してゐます。これも今回歴史博物館の展示にありますのでご覧下さい。これはまだ先生江戸修業中に全国に目を注がれ、諸藩中の注意すべき人物の名を書きとめられたもので、その中に「彦根 長野主馬」とあります。一面識もなくただ注意すべき人として名を記されたのでありませうが、その長野主膳と二年後には京都政界の舞台裏で火花を散らして相争ふことになることは、さすがの先生も思ひもよらなかつたことでありませう。歴史の急流まことにすさまじいものといはなければなりません。ついでに申しますとこの備忘録には薩摩の所に茂野弘之丞、西郷吉兵衛の名が記されてゐます。茂野弘之丞は有名な明治の学者にして先生の伝をかけた重野成斎博士、西郷吉兵衛はいふまでもありますまい。先生は安政三年、未だ会はざる中にこの

二人に注目されてゐたのであります。

さて先生必死の活躍によつて朝廷も一橋擁立に傾き、九分九厘成功したかに見え、先生も江戸に帰られるのであります。しかしそれは土壇場で九條閔白によりくつがへされます。一方條約の勅許も得られぬまま堀田老中は江戸に戻り、かくて將軍継嗣問題も條約問題も何らの進展をみないまま、つひに井伊直弼が幕閣の大老として政界に登場して参りました。

大老井伊の登場によつて事態は急転直下致します。即ち井伊は安政五年六月、ハリスが折しも起つた英仏連合軍が清国を攻めるアロー号戦争が起るや、これを巧みに利用して軍艦を江戸湾に乗り入れ、幕府に條約締結を迫りますと、つひに屈伏して岩瀬忠震らを米艦に遣し、六月十九日、勅許なしに専断で調印させます。米艦ポーハタン号は條約調印に際して殷々たる祝砲を放ちますが、それは日本屈辱の砲声でありました。

大老井伊はそれと共に専断で將軍継嗣を紀州慶福と決定致します。あはれ越前、薩摩、水戸が一藩をあげて多年奔走し來つた皇國匡救の努力は一瞬にして水泡と歸しました。そのみならず大老井伊は全力をあげて一橋派に大弾圧を加へ、内政外交においてかかる専断を下した井伊に憤激する天下の志士を一網打尽に罪するのであります。いはゆる安政の大獄はかうして始まりました。

井伊直弼はあくまでも幕府至上主義であります。彼は国学古典を解し、朝廷を尊ばないわけではなかつた。しかしその政治的立場はあくまで幕府第一主義であり、朝廷を政治圏外に追放し、日本国の内治外交は三百年來の徳川幕府専断で行ふといふ、まさに超保守主義、超守旧の人であります。これを若き景岳先

生の先述した破格雄渾の内政外交大革新策とくらべてみるがい。先生は時勢を先取りして皇國日本の未來を開かうとする。井伊は時勢を断ち切つて徳川幕府治下に日本を押しこめようとする。歴史をひらくものと歴史を凍結させようとするものとの大いなる相違がここにあるのであります。

かうして春嶽公は隱居謹慎させられ、大獄の魔手はわが景岳先生にも伸びて参ります。先生は幕府に捕へられ、投獄され、つひに安政六年十月七日、大老井伊の命令によつて日本橋伝馬町の牢にて斬られ、その遺体は小塚原に幕府の罪人として投げ捨てられたのであります。武蔵野に悲風啾々たる一日でありました。

## 五、結び——先生と当時の英傑

さて先生が若き哲人政治家であり護國の志士であつたことは縷々申し述べた事でありますが、獄中の詩を通して更にその學問の深まりにふれたいと存じます。

獄中の詩に有名な三首があります。

苦冤洗ぎ難く、恨禁じ難し

俯すれば則ち悲痛し、仰げば則ち吟ず

昨夜、城中、霜始めて隕つ

誰か知らん、松柏後凋の心

「松柏後凋の心」とは冬になつて落葉樹おちつくし、満目荒涼の中にひとり松柏はいよいよ青々といふので、これは「論語」にもみえ、また「靖献遺言」に謝枋得の詩中に「雪中松柏愈青々」とみえます。思ふに先生は「靖献遺言」を想起されたのであります。「靖献遺言」とは崎門の先哲淺見綱齋先生の著で、

幕末の志士懷中して愛読やまなかつたものであります。これと先生が先述した様に西依成斎以来の越前崎門学を承けられたことを思へば、先生が獄中、死に直面しつつ崎門の学問によつていよいよその魂を深め、鍛へられていつたことが明瞭であります。次に、

二十六年、夢の如く過ぐ

平昔を顧思すれば、感、滋す多し

天祥の大節、嘗て心折す

土室、猶ほ吟ず、正氣の歌

二十六年のわが短かき生涯を回顧すれば感無量である。かつて宋の忠臣文天祥に非常なる感動をおぼえたが、今、獄中にあつてなほその「正氣歌」を愛誦するといふのであります。文天祥の正氣歌はその事蹟と共にこれまた「靖獻遺言」に特筆大書するところ、先生が獄中ますます崎門学によつて魂を深められたことは更に明瞭となります。

枕を欬てて、愁人、夜永を愁ふ

陰風、骨を刺して、析、三更

皇天、憶ふに、幽寂を憐れむなるべし

一点の星華、牖を照らして明らかなり

獄中の夜長、寒風は骨を刺す中に、天の神様はそれを憐れまれるか、星一つまばたいて獄窓を照らすといふのであります。獄中の姿と先生の心境が思はれる詩であります。

なほ先生の詩に、

常山の髪、侍中の血

日月光りを韜み、山河色を改む

生きては名臣と為り、死しては列星と為らん

これは安政五年八月、病床にあつて長谷部甚平に贈られたものであります。ここに「常山の髪」とは唐の忠臣顔真卿のこと、「侍中の血」とは普の忠臣嵇待中のこと、何れも文天祥正氣歌に歌はれ、「靖獻遺言」にも収められてをり、これを以ても先生がその晩年いよいよ崎門学に心を深められた事が分ります。先に先生の学問は国学、崎門学、水戸学を承けられたと申しましたが、思ふにその最も中軸をなしたのは山崎闇斎先生以来の崎門忠義の学であつたこと明らかであります。

かくのごとき先生は二十六年の短かい生涯ながら一世に卓越し、古今に絶した英才は、当時の俊傑こそつて珍重し推服した所でありました。およそその人物を量るはその人の交友をみるにしくはなしといはれます。そこで先生がいかなる傑人によつて敬服されたかを見ませう。

第一に西郷隆盛であります。人も知る維新回天の大豪傑大西郷は不幸にして明治十年九月、西南戦争の末尾に當つて鹿児島城山の露と消えましたが、官軍がその遺体をさがした所、遺体の側に手文庫がありました。開くと一通の手紙が出ました。大西郷が死ぬまで肌身放さず携行してゐたのであります。それは実に安政四年十二月十四日景岳先生からの手紙で、一橋慶喜に関する調査書を西郷吉兵衛に贈るものであります。前述の様に当時先生と西郷とは相結んで一橋派のため非常な奔走中だったのであります。しかしそれは明治十年より二十年前の事であります。しかも景岳先生は安政六年に刑死してをります。二十年前の亡友の手紙を二十年後の死期まで身に添へてゐたとは何たる美しい友情であるか。しかもそれは友情をこえて大西郷が先生を推重し敬服してゐたからに外なりません。大西郷の言葉

に「先輩としては水戸の藤田東湖を景仰し同輩としては越前の橋本景岳に推服する」とありますが、年をいへば大西郷の方が七つ年長であります。七つ年下の先生に心服した大西郷も偉いが、年長の大豪傑にかうまで兄事された先生もまた非常な大器であつたのであります。

先生と大西郷については面白い話があります。先生はすでに安政三年に西郷の名を知つてをられました。先述の安政三年の備忘録に薩藩の部に茂野弘之丞、西郷吉兵衛とあり、西郷の下に「燕趙悲歌の士なり」とあります。悲歌慷慨の壮士だといふのであります。また先生が薩藩の江戸屋敷に西郷を訪ねると、折柄若い者に角力とらせてみてゐた西郷は、小柄で楚々たる女にも似た先生を一瞥したままでしたが、やがて角力もすんで対座してみると、先生の風格見識に圧倒されて大兵の西郷いたく恐縮し、先程の無礼をわびたといひます。それより彼は若年の先生にむしろ兄事し、指導をうけ、その敬慕は終生変らなかつたのであります。

次に先生と吉田松陰であります。これはお二人とも幕末維新史に最も光り輝く巨星であります。ふしぎに生前この両巨星は互ひにその光芒を交へることはありませんでした。それがたまたま安政の大獄において伝馬町の牢に同囚だつたのであります。但し別棟でありまして、互ひにその存在を確認しあつただけで、つひにこの両巨星は生前相会する機を得なかつたのであります。それを残念に思つた先生は同じ獄中の松陰先生にせめてもと詩を贈りました。その中に、

曾て英壽を聴き、鄙情を慰さむ

君を要めること久しく、同盟を訂さんとす

かつて大兄のすぐれたお考へを耳にして喜こんだことであります。久しく大兄を求めて心交を結ぼうとしたのに、といふ意味であります。しかし両雄つひに会交することなく、先生は十月七日に斬られ、二十日後の十月二十七日に松陰先生もまた空しく武蔵野の露と消えました。その最期に當つて松陰先生が血涙を以て記された「留魂録」中に

越前ノ橋本左内、二十六才ニシテ誅セラル、実二十月七日ナリ……勝保(勝野保三郎)同居セリ、後勝保西奥ニ来リ予ト

同居ス、予勝保ノ談ヲ聞テ益々左内ト半面ナキヲ嘆ス……嗟夫

と嘆かれたのであります。もし越前の景岳、長州の松陰とこの二大英傑が早くより相会し、相携へて立ちましたならば歴史の壮観、維新史の展開は目をみはるものがありましたらうに、何とも残念なことであります。

次には幕府内の俊傑であります。まづ岩瀬肥後守忠震は前にも述べた様に日米交渉に當つてはハリスをしばしばやりこめた豪傑でしたが、安政五年六月十八日、急遽命をうけて江戸湾に出現した米艦ポーハタン号に乗りこみ、條約調印の大事を折衝するに當り、はるか年下の心友景岳先生に一書を飛ばし、その中で「天地間の四大強国(米英)を引きうけ候儀、亦愉快の一つに御座候」と胸懷を吐露しました。これは今アメリカを相手にするが、やがて英仏もロシアも押しよせるであらう、この世界の四大強国をわが一手に引きうけて談判する事は男児の本懐だといふのであります。岩瀬時に四十八才。先生二十五才。自分より倍ちかい年長の豪傑からかやうに胸奥を吐露し心契を結ばれたことは壯観といふべきでありませう。ちなみにこの岩瀬も

一橋派なる故にまもなく大老井伊に斥けられて、蟄居幽憤の中に歿したのであります。

更には勘定奉行川路聖謨であります。彼もまた非常の英傑、老練の外交家で、嘉永六年ロシアのプチャーチン提督が艦隊をひきゐて長崎に来るや、これと長崎また下田にて翌安政元年にかけ折衝し、一步も譲らなかつたのであります。その川路を先生は安政五年正月十四日、春嶽公の密命をうけて訪ねます。それは一橋派の工作のためでありましたらう。時に川路五十一才。訪れた二十五才の白面の青年に対し、傲々然として「何用にてお出でなされ候や」、何の用で来たかといふのであります。それより先生が主命を奉じて参つた事を告げ、春嶽公の親書を捧げ、そして先生の内政外交の大構想を述べるや、老練五十一才の川路あたくも白刃を以て半身を斬り落された心地したと嘆賞したのであります。年少の英才恐るべしと舌を巻き、これより先生を珍重推服措く能はなかつたのであります。

また後に外国奉行を勤めた俊才水野筑後守忠徳は安政の大獄によつて先生が斬られたことをふかく嘆き、「井伊大老が橋本景岳を殺したる一事、以て徳川氏を亡ぼすに足れり」と痛憤致しました。かやうに若き先生をめぐる人物は幕府の内外を問はず、何れも当代の卓越せる英傑ぞろひであり、それらの豪傑みな年少の先生を尊敬推重し、こぞつてその死を天下国家のために長嘆したのでありますから、いかに先生が時流をぬきん出て高くそびえたつ大英才であつたかが想察されるではありませんか。

景岳先生とはかやうな大偉人であります。それは初めに申しました様に、国史三千年の精髓、幕末の越前藩に凝集して現は

れたかと思はれるほどの大偉人、救国の大英才であります。その学問と大識見は時代をこえて二十一世紀の未来を開くものであります。かくのごとき大英傑を過去に生んだことは福井の誇りでありませう。しかしながら先生を過去の偉大なる英傑として景仰し讚美することのみに止まつてはならないと存じます。今や我国は戦後の荒廢より立ち直り、ことに経済大国として世界の目をみはらせてをりますが、しかし日本をめぐる内外世界の激動は容易ならぬものであります。しかも顧みれば経済面では世界の大国に列してゐるものの、戦後の日本人の心の荒廢はなほ深く、国家の前途を暗澹たるものにしてをります。この時、第二の景岳出でよ、救国の大才たる第二の景岳出でよ、これが本日早朝よりの景岳先生生誕百五十年の墓前祭に参列致しまして、秋風啾々たる中に立つての、私のわれ自からへの熱き祈りでございます。

これを以てお話を終ります。ご清聴ありがとうございました。

啓  
発  
録

〔解説〕

『啓発録』は、嘉永元年（一八四八）、橋本景岳先生が十五歳（満十四歳）の時、その所懐を記されたものである。偉人英傑の伝記を読み、古人の言行・節義を学んで、深く感奮興起された先生が、自己の規範として、また自らを鞭撻せんがために書かれたもので、先生の一生は、本書を出発点として、展開されたと言つて差支えない。

古来、十五歳の少年にして、かゝる大文章を草したものは、殆どその類例を見ず、景岳先生を考える上で、極めて重要な史料である。

ここに活字化したのは、景岳先生自筆の原本である。その跋文（あとがき）によると、先生二十四歳の時（安政四年<sup>一八五二</sup>五月）、たま〜<sup>きようてい</sup>筐底から発見した旧稿（原本）を自ら浄書され、門弟の溝口辰五郎（後の加藤斌<sup>みなかば</sup>。安政五年、先生江戸上府の際、同伴した門弟の一人）と、実弟琢磨（後の橋本綱常<sup>つなつね</sup>。軍医総監・日赤病院長・貴族院議員等を歴任）に与えられたのであるが、矢島立軒（先生と同時期の藩儒で、互に推重しあつた友人）がこれを見て感嘆し、これに叙文を加えた。先生はそれを喜び、自らその叙文を写して原本の首に加えると共に、その間の事情を記して、跋文を撰し、これを原本の奥に付加せられた。すなわち本書は、本文が先生十五歳の筆であつて、叙・跋が共に先生二十四歳の筆である。

その後、これが田中光顕伯（土佐藩士、宮内大臣）の手に移り、同氏より宮内省に献納され、御物として今日に至つている。もとは、縦二十三糎・横十四糎ほどの、十九丁からなる袋綴であつたが、現在は縦五列に配列貼付した一軸に表装されている。

なお、「啓発」の二字は、『論語』述而篇に見える孔子のことば「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず」より、とられたものである。（本書二一九頁注②参照）



## 凡例

一、御物「啓発録」原本の写真版をもとに、出来得る限り原文のまま活字化することに重点を置いた。  
一、但し、原文にはない句読点・送仮名・よみ仮名を、適宜施した。その場合、編者の加筆した文字は、すべて平仮名とし、片仮名交りの原文と区別出来るよう配慮した。

一、右、送仮名・よみ仮名は、原文の語調を損わぬよう、すべて旧仮名遣いとした。

一、原本通り、矢島立軒撰「啓発録叙」・景岳先生筆「啓発録」・同「跋文」の順に配列したが、「叙」及び「跋文」については、上段に原文（白文）を、下段にその書下し文を収めて、読解の便宜をはかった。

一、原文の中で、解しにくい語句には、簡単な語彩を加えることとし、すべて頭注の形でこれを施してある。

### 〔注〕

- ①十年ばかり前。
- ②橋本伯綱。伯綱は先生の字。号景岳、通称左内。
- ③吉田東篁。越前藩々儒。
- ④遊ぶは就学すること。
- ⑤志大きく、他人の束縛をうけぬこと。

### 〔原文〕

#### 啓発録叙

十許年前、余與橋伯綱、從東篁田翁遊焉。翁門下多雄辯倜儻之士、相聚抵掌與譚当世之事。座中或有感憤激昂、投袂、起舞者、蓋慨學問事業、殊其效、而不適

### 〔書下し文〕

#### 啓発録叙

十許年前<sup>①</sup>、余、橋伯綱<sup>②</sup>と東篁田翁<sup>③</sup>に従ひて遊ぶ。翁の門下、雄弁倜儻<sup>④</sup>の士多く相聚<sup>⑤</sup>まり、掌を抵ちて與に当世<sup>⑥</sup>の事を譚ず。座中或ひは感憤激昂<sup>⑦</sup>し、袂<sup>⑧</sup>を投じ、起ちて舞ふ者あり、蓋し學問・事業<sup>⑨</sup>、その效を殊<sup>⑩</sup>にし、世務<sup>⑪</sup>に適せざるを慨<sup>⑫</sup>するなり。

- ⑥ 談に同じ。
- ⑦ 感情は感動して心が奮い立つこと。激昂は心が激しく奮いあがること。
- ⑧ 想像するに。考えてみるのことに。
- ⑨ 社会に出てからの仕事。
- ⑩ 別にし、異にしに同じ。
- ⑪ 今の世において、すべきこと。
- ⑫ なげき、うれえる。
- ⑬ 容姿がすぐれていること。
- ⑭ やせていること。
- ⑮ うつむき、膝を正しくして座る。
- ⑯ 自分の学才を表面に出さない。
- ⑰ 京都・大阪に遊学。
- ⑱ 懸命に学ぶ。
- ⑲ 嘉永五年（一八五二）十九歳の時、父の病のため帰国。
- ⑳ 稿は確に同じ。
- ㉑ すじ道が明らかなさま。
- ㉒ 師承があつて、自分一人の思いつきでないこと。
- ㉓ 学業の進歩すること。
- ㉔ さきの時。往時。
- ㉕ したり止めたり。
- ㉖ 雲や煙の消去のように。
- ㉗ 見るかげ。かたかげ。
- ㉘ 安政元年（一八五四）二十一歳の時、江戸に遊学。
- ㉙ 音信がとだえがちになる。

於世務也。伯綱時年才十五六、  
 丰骨珊々、癯然一書生也。俯首  
 斂膝、含蓄不敢發一言。余窃怪  
 之。其後伯綱西游京撰、力学数  
 年、有故而歸。余乃訪伯綱、叩  
 其所学、精稿沈寔、其出於文與  
 言、鑿々乎皆有來處。余既驚其  
 長進、而自顧依然故吾。又回視  
 曩時相譚者、往々如余或作或輟、  
 甚者求前日意氣、雲消烟滅、寂  
 無隻影。於是、余始悟意氣之不  
 可恃、而疑伯綱之有本而然也。  
 居三年、伯綱又游江都、音問疎  
 濶、第聞其学殖弥進也。其後余  
 亦游都、初候伯綱僑寓。伯綱兀  
 然在学窓下、矻々勉励。見余來、  
 喜語其所得者。其学丕變觀、  
 一主實用、而經物濟世之才、縱  
 橫馳騁、其志將措諸事業。名下

伯綱時に年才かに十五六、  
 書生なり。首を俯し膝を斂め、  
 をも發せず。余、窃に之を怪しむ。その後、伯綱  
 西のかた京撰に遊び、力学すること数年、故あり  
 て歸る。余、乃ち伯綱を訪ひ、その学ぶ所を叩く  
 に、精稿沈寔、その文と言とを出せば、鑿々乎と  
 して、皆來る處あり。余、既にその長進せるに驚  
 き、而して自ら顧みれば、依然たる故の吾なり。  
 又、曩時相譚する者を回視すれば、往々余の如く  
 或ひは作し或ひは輟め、甚しき者は前日の意氣を  
 求むるも、雲消烟滅、寂として隻影なし。是に於  
 て、余、始めて意氣の恃むべからざるを悟り、而  
 して伯綱の本ありて然るを疑ひしなり。居ること  
 三年、伯綱又江都に遊び、音問疎濶、第その学殖  
 の弥々進むを聞くのみ。その後、余も亦都に遊び、  
 初めて伯綱の僑寓に候す。伯綱兀然として、学窓  
 の下に在り、矻々勉励す。余の來るを見、喜びて  
 その得る所のものを語る。その学丕に變じて觀  
 を改め、一に實用を主とし、而して經物濟世の才、

- ③⑩ 宿舎を訪ねる。  
 ③① 肩をそびやかして座っているさま。  
 ③② 勉めて休まぬさま。  
 ③③ 大いに。  
 ③④ 世の中をおさめ、すくうこと。  
 ③⑤ かけめぐる。  
 ③⑥ 著名の人物、名士。  
 ③⑦ 福井に帰る。轅は車のながえ。  
 ③⑧ 学問知識が進むことに、限りがない。  
 ③⑨ 安政三年（一八五六）藩校明道館幹事に任ぜられたことを指す。釐督は、おさめ監督する。  
 ④① 序文を頼まれる。  
 ④② 盛にわきおこるさま。  
 ④③ 流れあふれること。  
 ④④ おそれるさま。  
 ④⑤ 支干（干支）に同じ。えと。  
 ④⑥ 指をまげて。  
 ④⑦ 先に。  
 ④⑧ 吉田東寧の門。  
 ④⑨ もつともなことである。  
 ⑤⑩ 漫然。いたづら。  
 ⑤① われわれ。  
 ⑤② 深い学問素養の上に發揮する。  
 ⑤③ 恥じて顔を赤くする。  
 ⑤④ 恥じる心。

士争誉之。夫伯綱每見屢交、每  
 変愈見其涉有用之学。雖然、余  
 不能知其何以然也。既而余轅已  
 北、而伯綱留都又一年。則其所  
 学者、如海水湧而春潮進、其所  
 造殆不可涯矣。今擢列学監、釐  
 督贊政。属者伯綱出其少時所著  
 啓発録、見徴叙引。受而読之、  
 一語半句、莫非忠孝節義之言。  
 而感憤激励之氣、勃々流溢其間、  
 令人悚然興起。因睹冊尾枝幹、  
 僂指計之、則距今已十餘年。蓋  
 嚮在田門、各逞劇論之時也。夫  
 学問之本在忠孝、伯綱既有其本、  
 宜乎、其学之進也不徒然。于是、  
 余疑怪始积矣。嗚乎、余儕徒快  
 感憤於一時、伯綱蓄之於内、而  
 不見乎言貌、積歲累月、然後大  
 発之於学殖。而今又為学監、施

縦横に馳騁し、その志將に諸を事業に措かんとす。  
 名下の士、争ひて之を誉む。夫れ伯綱は見る毎に  
 屢々変じ、変ずる毎に愈々その有用の学に涉るを  
 見る。然りと雖ども、余その何を以て然るかを知  
 る能はざりき。既にして余が轅已に北し、而して  
 伯綱都に留まること又一年。則ちその学ぶ所のも  
 の、海水の湧きて春潮の進むが如く、その造る所  
 殆ど涯るべからず。今、擢んでられて学監に列し、  
 贊政を釐督す。属者伯綱その少時著す所の啓発録  
 を出して、叙引を徴せらる。受けて之を読めば、  
 一語半句も、忠孝節義の言に非ざる莫し。而して  
 感憤激励の氣、勃々としてその間に流溢し、人を  
 して悚然として興起せしむ。因りて冊尾の枝幹を  
 睹、指を僂して之を計れば、則ち今を距つること  
 已に十餘年なり。蓋し嚮に田門に在りて、各々劇  
 論を逞しうせるの時なり。夫れ学問の本は忠孝に  
 在り、伯綱既にその本あり、宜なるかな、その学  
 の進むや徒然ならざりしこと。是に于て余の疑怪  
 始めて积けたり。嗚乎、余儕は徒に感憤を一時に

⑤安政四年（一八五七）閏五月十日。

⑥矢嶋皞は、通称を恕介、立軒と号した福井藩の儒学者。皞はその名。はじめ吉田東寧に学び、のち江戸の安積良齋にも入門した。橋本景岳と相前後して藩校明道館の幹事・助教等をつとめ、たがいにその学才を重んじた友人である。明治四年（一八七二）四十六歳で歿す。撰は、文章を作ること。

諸事業。則所謂学問事業不殊其效者、伯綱黙而成之。較諸余侪快論於一時者、孰得孰失、有不及待言者。今觀此録、赧然者久之。因書愧心以為叙。

丁巳閏五十二

矢嶋 皞 撰

⑦快くす、伯綱は之を内に蓄へて、言貌に見はさず、歳を積み月を累ねて、然る後、大いに之を学殖に発す。⑧而して今又学監と為り、諸を事業に施す。則ち所謂学問・事業その效を殊にせざるもの、伯綱黙して之を成す。⑨諸を余侪の一時に快論する者に較ぶれば、孰か得孰か失、言を待たざるものあり。今、此の録を觀、赧然たること之を久しうす。困りて愧心を書して以て叙と為す。

丁巳閏五十二

矢嶋 皞 撰

〔本 文〕

啓發録

去稚心<sup>①</sup>

稚心トハ、ヲサナ心ト云事ニテ、俗ニイフワラビシキコト也。菓菜ノ類<sup>②</sup>ノイ  
 マダ熟セザルヲモ稚トイフ。稚トハスベテ水クサキ處アリテ、物ノ熟シテ旨  
 キ味ノナキヲ申也。何ニヨラズ、稚トイフコトヲ離レ又間ハ、物ノ成リ揚ル<sup>③</sup>  
 事ナキナリ。人ニ在テハ、竹馬・紙薦・打毬ノ遊ビヲ好ミ、或ハ石ヲ投ゲ虫  
 ヲ捕フヲ樂ミ、或ハ糖菓・蔬菜・甘旨ノ食物ヲ貪リ、怠惰安佚ニ耽リ、父母  
 ノ目ヲ竊ミ、藝業職務ヲ懈リ、或ハ父母ニヨシカ、ル心ヲ起シ、或ハ父兄ノ  
 嚴ヲ憚リテ、兎角母ノ膝下ニ近キ隠ル、事ヲ欲スル類ヒ、皆幼童ノ水クサキ  
 心ヨリ起ルコトニシテ、幼童ノ間ハ強テ責ルニ足ラネドモ、十三四ニモ成リ、  
 学問ニ志シ候上ニテ、此心毛ホドニテモ残り是有ル時ハ、何事モ上達致サズ、  
 迎モ天下ノ大豪傑ト成ル事ハ叶ハヌ物ニテ候。源平ノコロ、并二元龜・天正<sup>④</sup>  
 ノ間マデハ、随分十二三歳ニテ母ニ訣レ、父ニ暇乞シテ初陣ナド致シ、手柄<sup>⑤</sup>  
 功名ヲ顕シ候人物モ有之候。此等ハミナ稚心ナキ故ナリ。モシ稚心アラバ、  
 親ノ臂ノ下ヨリ一寸モ離レ候事ハ相成申間敷、マシテ手柄功名ノ立ベキヨシ  
 ハ、コレナキ義ナリ。且又稚心ノ害アル訳ハ、稚心除カヌ時ハ士氣ハ振ハヌ  
 モノニテ、イツマデモ腰拔士ニナリ居リ候モノニテ候。故ニ余稚心ヲ去ルヲ

〔注〕  
① 稚心を去る。

② 果物や野菜。

③ 出来あがる。完成する。

④ 蹴鞠（けまり）

⑤ 菓子や果物など、甘くておいしい食物。

⑥ なまけて、安楽なことばかり追求すること。

⑦ 勉強、けいごことや、父母を手伝うこと。

⑧ 父母をあてにして、なにもしないこと。

⑨ 父や兄にしかられるのを嫌って、母のかけにかくれ、甘えること。

⑩ ほんの少しでも。

⑪ 知勇すぐれ徳義にあつい大人物。

⑫ 源氏や平氏の活躍した時代。

⑬ 織田信長の時代。

⑭ 戦場で手柄をたて、名をあげることに。

⑮ 両親の庇護のもと。

⑯ 武士としての気概。

⑰ 私。自分。

⑬ 武士道を身につける。立派な武士の仲間  
いりをする。

① 気を振う。

② 気だて。心ばえ。

③ 心がくじけ弱ること。

④ 生命のあるもの。

⑤ 鳥やけもの。

⑥ 人間の場合は、なおさらである。

⑦ 大刀・小刀を腰にした武士をいう。

⑧ 礼をもって対応しないこと。無礼。

⑨ 無事平安な時代が長く続き。

⑩ 武士の気風が衰え、弱々しくなり、他人  
に媚びへつらうこと。

⑪ 武士の家筋。武家。

⑫ 官職を望む。出世したがる。

⑬ 呉服反物の包み。

⑭ 樽拾い。お得意先を回って、あきだるを  
集める。酒屋の小僧。

⑮ 退く。正しくは卻歩。

⑯ 藩侯の犯しがたい權威。

⑰ 耕作のこと。

⑱ つね日頃。絶えず。

モツテ、士ノ道ニ入ル始ト存候ナリ。

### 振気<sup>①</sup>

氣トハ、人ニ負ヌ心立アリテ、恥辱ノコトヲ無念ニ思フ處ヨリ起ル意氣張ノ  
事也。振トハ、折角自分ト心ヲトメテ、振立振起シ、心ノナマリ油断セヌ  
様ニ致ス義ナリ。此氣ハ生アル者ニハ、ミナル者ニテ、禽獸ニサヘコレア  
リテ、禽獸ニテモ甚シク氣ノ立タル時ハ、人ヲ害シ人ヲ苦シムルコトアリ、  
マシテ人ニ於テヤ。人ノ中ニテモ士ハ一番此氣強ク有之故、世俗ニコレヲ  
士氣ト唱ヘ、イカホド年若ナ者ニテモ、兩刀ヲ帶シタル者ニ不礼ヲ不致ハ、  
此士氣ニ畏レ候事ニテ、其人ノ武藝ヤ力量ヤ位職ノミニ畏候ニテハコレナシ。  
然ル處太平久敷打続、土風柔弱佞媚ニ陥リ、武門ニ生レナガラ武道ヲ忘却致  
シ、位ヲ望ミ、女色ヲ好ミ、利ニ走り勢ニ附事ノミニフケリ候處ヨリ、右ノ  
人ニ負ケヌ、恥辱ノコトハ堪ヘヌト申、英雄シキ丈夫ノ心クダケナマリテ、  
腰ニコソ兩刀ヲ帶スレ、太物包ヲカヅキタル商人、樽ヲ荷フタル樽ヒロヒヨ  
リモヲトリテ、纔ニ雷ノ声ヲ聞、犬ノ吠ユルヲ聞テモ卻歩スル事トハ成ニケ  
リ。諸君可嘆之至ニコソ。シカルニ今ノ世ニモ猶未ダ士ヲ貴ビ、町人百姓扨  
於侍様ト申唱ルハ、全ク士ノ士タル處ヲ貴ビ候ニテハ無之、我君ノ御威光ニ  
畏服致シ居候故、無據貌ノミヲ敬ヒ候コトナリ。其證據ハ、ムカシノ士ハ平  
生ハ鋤鋤持、土クジリ致シ居候得共、不断ニ恥辱ヲ知り、人ノ下ニ屈セヌ心

⑲ 思いがけぬ一大事が生じた時は。

⑳ 武具。よろいかぶと。

㉑ 軍勢

㉒ 自由自在に駆使する様子。

㉓ 成功すれば芳しき名前を歴史の上に残し、青史は歴史の意、昔は記録を、青竹の水気を除いたものに記した所から出た語。

㉔ 富や出世の誘惑があつても、生死にかかわる問題や、いかなる困難に直面しても、心や節義をかえない。

㉕ 自由自在。

㉖ 幕をはりめぐらした、大将の本営。

㉗ 作戦を練り、勝利の道を決める。『史記』高祖本紀に「籌作を帷幄のうちに運らし、勝を千里の外に決す」とある。

㉘ 暮し。よわたり。

㉙ 豊臣秀吉につかえ、賤ヶ岳七本槍に数えられる福島正則・片桐且元と、徳川家康につかえ、徳川四天王に数えられる井伊直政・本多忠勝。

㉚ 武士としての覚悟。

㉛ 主君の恩恵。

㉜ 覚悟の確かでない士、卑怯者。

㉝ 浴の誤記か。

㉞ つゆのしづく。ほんの少しの意。

㉟

逞シキ者ユヘ、マサカ事有ルトキハ、吾大御帝或ハ將軍家扨ヨリ、募リ召寄  
ラレ候ヘハ、忽チ鋤鋤打擲テ、物具ヲ帶シテ千百人ノ長トナリ、虎ノ如ク狼  
ノ如キ軍兵バラヲ指揮シテ、臂ノ指ヲ使フゴトク致シ、事成バ芳名ヲ青史ニ  
垂レ、事敗ハ屍ヲ原野ニ暴シ、富貴利達死生患難ヲ以テ、其心ヲカヘ申サヌ  
大勇猛大剛強ノ處有之ユヘ、人人其心ニ感ジ、其義勇ニ畏候ヘドモ、今ノ士  
ハ勇ハナシ、義ハ薄シ、謀略ハ足ラズ、逆モ千兵萬馬ノ中ニ切入、縦横無碍  
ニ駈廻ル事ハカナフマジ。况帷幄ノ内ニ在テ、運籌決勝之大勲ハ、望ベキ所  
ニアラズ。サスレバ、若腰ノ両刀ヲ奪ヒ取候ヘバ、其心立、其分別盡ク町人  
百姓ノ上ニハ出申マジ。百姓ハ平生骨折ヲ致シ居、町人ハ常ニ職業渡世ニ心  
ヲ用居候ユヘ、今若シ天下ニ事アラバ、手柄功名ハ却テ町人百姓ヨリ立テ、  
福島左衛門大夫・片桐助作・井伊直政・本多忠勝等ガゴトキ者ハ、士ヨリハ  
出申サザルベキカト思ワレ、誠ニ嘆カワシク存ル。ケ様ニ覚ノナキモノニ高  
祿重位ヲ被下、平生安樂ニ被成置候ハ、扱扱君恩ノホド申限ナキコト、辭ニ  
ハ盡シガタシ。其御高恩ヲ蒙リナガラ、不覚ノ士ノミニテ、マサカノトキニ  
我君ノ恥辱ヲサセマシ候テハ、返ス返ス恐入候次第ニテ、実ニ寢テモ目モ合  
ワズ、喰テモ食ノ咽ニ通ルベキ筈ニアラス。コトサラ我先祖ハ国家ヘ奉対、  
聊ノ功モ可有之候得ドモ、其後ノ代代ニ到リテハ、皆皆手柄ナシニ恩祿ニ沿  
シ居候義ニ候ヘバ、吾吾共聊ニテモ学問ノ筋心掛、中義ノ片端モ小耳ニ挾ミ  
候上ハ、何トゾ一生ノ中ニ粉骨碎身シテ、露滴ホドニテモ御恩ニ報ヒ度事ニ

③ちようどその時。

①志を立つ。

②君主に対する忠義、両親に対する孝行。

③了解することができたならば。

④大切にすること。

⑤何のなす所もなく、いたずらに一生を終ること。

⑥たしかに。相違なく。

⑦芽のもえ出ること。

⑧肥えた土。

⑨衆人に秀でた人。

テ候。此忠義ノ心ヲ撓マサズ引立、迹還リ致サヌ様ニ致候ハ、全ク右ノ士氣ヲ引立振起シ、人ノ下ニ安ゼヌト申事ヲ忘レヌコト肝要ニ候。乍去只此氣ノ振立候而已ニテ、志立ヌ時ハ、折節氷ノ解ケ醉ノサムル如ク、迹還リ致ス事有之者ニ候。故ニ氣一旦振候ヘバ、方ニ志ヲ立候事、甚大切ナリ。

### 立志<sup>①</sup>

志トハ心ノユク所ニシテ、我コヽロノ向ヒ趣キ候處ヲイフ。侍ニ生テ忠孝ノ心ナキ者ハナシ。忠孝ノ心有之候テ、我君ハ御大事ニテ我親ハ大切ナル者ト申事、聊ニテモ合点ユキ候ヘバ、必ズ我身ヲ愛重シテ、何トゾ我コソ弓馬文学ノ道ニ達シ、古代ノ聖賢君子、英雄豪傑ノ如ク相成、君ノ御為ヲ働キ、天下国家ノ御利益ニモ相成候大業ヲ起シ、親ノ名マデモ揚テ、醉生夢死ノ者ニハナルマジト、直ニ思付候者ニテ、此即志ノ発スル所也。志ヲ立ルトハ、此心ノ向フ所ヲ急度相定、一度右ノ如ク思詰候ヘバ、彌切ニ其向キヲ立テ、常常其心持ヲ失ワヌ様ニ持コタヘ候事ニテ候。凡志ト申ハ、書物ニテ大ニ發明致シ候カ、或ハ師友ノ講究ニ依リ候カ、或ハ自分患難憂苦ニ迫リ候カ、或ハ憤發激勵致シ候歟ノ處ヨリ立定リ候者ニテ、平生安樂無事ニ致シ居、心ノタルミ居候時ニ立事ハナシ。志ナキ者ハ、魂ナキ虫ニ同ジ。何時迄立候テモ、丈ノノブル事ナシ。志一度相立候ヘバ、其以後ハ日夜逐逐成長致シ行候者ニテ、萌芽ノ草ニ膏壤ヲアタヘタルガゴトシ。古ヨリ俊傑ノ士ト申候人トテ、



⑩役に立たぬこと。

⑪江戸へ旅立つこと。

⑫ここでは福井。

⑬今庄、福井県内。

⑭滋賀県内。今庄も木ノ本も福井より江戸に至る街道筋の宿場。

⑮才能が足らず、学識がとぼしいこと。

⑯道理。わけ。

⑰本来は仏語、「悟り」を開くこと。

⑱将来の目標と、その達成のための行動。

⑲学問の道が多端の為、本質を見失うことの喩え。列子に見える。

目四ツ口二ツ有之ニテハナシ。皆其志大ナルト、逞シキトニヨリ、遂ニ八天下ニ大名ヲ揚候也。世上ノ人、多ク碌碌ニテ相果候ハ、他ニ非ラズ。其志太ク逞シカラヌ故ナリ。志立タル者ハ、恰モ江戸立ヲ定メタル人ノ如シ。今朝一度御城下ヲ踏出シ候ヘハ、今晚ハ今庄、明夜ハ木ノ本ト申様ニ、逐々先ヘ先ヘト進ミ行申候者也。譬バ、聖賢豪傑ノ地位ハ江戸ノ如シ。今日聖賢豪傑ニ成ラン者ヲト志シ候ハ、明日明後日ト、段々ニ其聖賢豪傑ニ似合ザル處ヲ取去リ候ヘバ、如何程短才劣識ニテモ、遂ニハ聖賢豪傑ニ至ラヌト申理ハコレナシ。丁度足弱ナ者デモ、一度江戸行キ極メ候上ハ、竟ニハ江戸マデ到着スルト同ジキ事ナリ。扱右様志ヲ立候ニハ、物ノ筋多クナルコトヲ嫌候。我心ハ一道に取極メ置キ不申候半デハ、戸ジマリナキ家ノ番スルゴトク、盗ヤ犬カ方方ヨリ忍入、逆モ我一人ニテ番ハ出来ヌナリ。マダ家ノ番人ハ随分傭人モ出来候得共、心ノ番人ハ出来不申候。サスレバ自分ノ心ヲ一筋ニ致シ、守リヨクスベキ事ニコソ。兎角少年ノ中ハ、人人ノナス事、致ス事ニ目ガチリ、心ガ迷ヒ候テ、人ガ詩ヲ作レバ詩、文ヲ書カケバ文、武藝トテモ、朋友ニ鎗ヲ精出ス者アレバ、我今日マデ習居タル太刀業止テ、鎗ト申様ニ成リ度モノニテ、コレハ正覚取ラヌ第一ノ病根ナリ。故ニ先我知識聊ニテモ開候ハ、篤ト我心ニ計リ、吾所向所為ヲサダメ、其上ニテ師ニ就キ友ニ謀リ、吾及バズ足ラワヌ處ヲ補ヒ、其極メ置タル處ニ心ヲ定メテ、必多端ニ流レテ多岐亡羊ノ失ナカラコト、願ワシク候。凡テ心ノ迷フハ、心ノ幾筋

⑳ 経は永遠に変わらぬ道理の意、それより聖賢の述べた書物、たとえば四書・五經の如きものをいう。

㉑ 人の心を動かし誠が通ずる。

㉒ 自己を省みて、その是非を考えること。

㉓ ともすると。どうかすると。

㉔ 何事にもよく通じ知っていること。

① 階梯が正しい。梯段。

② 浅薄粗雑。あさはかで、雑な考え方。

③ よく治まった太平の世。

### 勉学

ニモ分レ候處ヨリ起リ候事ニテ、心ノ紛乱致シ候ハ、吾志未ダ一定セヌ故ナリ。志定マラズ、心収マラズシテハ、聖賢豪傑ニハ成ラレヌモノニテ候。何分志ヲ立ル近道ハ、経書又ハ歴史ノ中ニテ、吾心ニ大ニ感徹致シ候處ヲ書拔キ、壁ニ貼ジ置候カ、又ハ扇杯ニ認置、日夜朝暮夫ヲ認メ咏メ、吾身ヲ省察シテ其不及ヲ勉メ、其進ムヲ樂居候事肝要ニシテ、志既ニ立候時ハ、学ヲ勉ムル事ナケレバ、志彌フトク逞ク成ラズシテ、動モスレバ聰明ハ前時ヨリ減ジ、道德ハ初ノ心ニ慚ル様ニ成行モノニテ候。

学トハナラフト申事ニテ、総テヨキ人スグレタル人ノ、善キ行ヒ善キ事業ヲ迹付シテ習ヒ参ルヲイフ。故ニ忠義孝行ノ事ヲ見テハ、直ニ其人ノ忠義孝行ノ所為ヲ慕ヒ倣ヒ、吾モ急度其人ノ忠義孝行ニ負ケズ劣ラズ、勉行候事、学ノ第一義ナリ。然ルヲ後世ニ至リ、字義ヲ誤リ、詩文ヤ讀書ヲ学ト心得候ハ笑カシキ事ドモナリ。詩文ヤ讀書ハ、右学文ノ具ト申モノニテ、刀ノ櫛鞘ヤ、二階ノ階梯ノ如キモノナリ。詩文讀書ヲ学文ト心得候ハ、恰モ櫛鞘ヲ刀ト心得、階梯ヲ二階ト存候ト同ジ、浅鹵粗麤ノ至リニ候。学ト申ハ、忠孝ノ筋ト文武ノ業トヨリ外ニハ無之、君ニ忠ヲ竭シ親ニ孝ヲ盡スノ真心ヲ以テ、文武ノ事ヲ骨折勉強致シ、御治世ノ時ニハ、御側ニ被召使候ヘバ、君ノ御過ヲ補ヒ匡シ、御徳ヲ彌増ニ盛ニナシ奉リ、御役人ト成リ候時ハ、其役所役所ノ事

- ④ 不正な贈物をして、権威者に願ひ求めること。  
 ⑤ 廉の誤記か。  
 ⑥ 局は役所の事務を取扱う部屋、その部屋内の者が。  
 ⑦ 国の外から侵攻する敵。  
 ⑧ 世の乱れを平定する。  
 ⑨ 助けはかる。  
 ⑩ 馬に付ける荷物又は食糧。  
 ⑪ 上の命を奉じて事を行うこと。  
 ⑫ 日頃から。  
 ⑬ 天下の情勢と、それに臨機応変して対処するための計略。  
 ⑭ ずっと続けて、一つのことを修業することとを嫌う。  
 ⑮ かるがるしく、粗雑なこと。  
 ⑯ 世の中で実際に役立つこと。  
 ⑰ 威張る。  
 ⑱ 誇りに同じ。  
 ⑲ 戒め。  
 ⑳ 自分の仁を行うことの助けとする。論語に「君子ハ文ヲ以テ友ヲ会シ、友ヲ以テ仁ヲ輔ク」とある。

首尾能取修メ、依怙鼻負不致、賄賂請謁ヲ不受、公平謙直ニシテ、其一局何  
 モ其威ニ畏レ、其徳ニ懐キ候程ノ仕ワザヲナシ可申義ヲ、平生ニ心掛居、不  
 幸ニシテ乱世ニ逢候ハ、各各我居場所ノ任ヲ果シテ、寇賊ヲ討平ゲ、禍乱  
 ヲ克定メ可申、或太刀鎗ノ功名、組打ノ手柄致シ、或ハ陣屋ノ中ニアリテ謀  
 略ヲ賛画シテ、敵ヲ鏖ニシ、或ハ兵糧小荷駄ノ奉行トナリテ、万兵ノ飢渴不  
 致、兵力ノ不減様ニ心配致シ候事採、兼兼修練可致義ニ候。此等ノ事ヲ致シ  
 候ニハ、胸ニ古今ヲ包ミ、腹ニ形勢機略ヲ諳ジ蔵メ居ラズシテハ、叶ハ又事  
 共多ク候ヘバ、学問ヲ専務トシテ、勉メ行フベキハ、讀書シテ吾知識ヲ明ニ  
 致シ、吾心膽ヲ練リ候事肝要ニ候。然ル處年少ノ間ハ、兎角打続キ業ニ就キ  
 居候事ヲ厭ヒ、忽読忽廢、忽習文忽講武トイフ様ニ、暫ク宛ニテ倦怠致スモ  
 ノナリ。此甚ダ不宜。勉ト申ハ、力ヲ推究メ打続キ推遂候處ノ気味有之字ニ  
 テ、何分久ヲ積思ヲ詰不申候ハデハ、万事功ハ見ヘ不申候。マシテ学問ハ物  
 ノ理ヲ説、筋ヲ明ニスル義ニ候ヘバ、右ノ如ク輕忽粗麤ノ致シ方ニテ、真ノ  
 道義ハ見ヘ不申、中中有用実着ノ学問ニハナリ申サヌナリ。且又世間ニハ愚  
 俗多候故、学問ヲ致シ候ト、兎角驕謾ノ心起リ、浮調子ニ成テ、或ハ功名富  
 貴ニ念動キ、或ハ才氣聰明ニ伐り度病、折々出来候モノニテ候。コレヲ自ら  
 慎ミ可申ハ勿論ニ候ヘドモ、茲ニハ良友ノ規箴至テ肝要ニ候間、何分交友ヲ  
 扱ミ、吾仁ヲ輔ケ吾徳ヲ足候工夫可有之候。

- ① 交友を扱ふ。
- ② ともだち。友人。
- ③ 選び出す。
- ④ 同じ先生について学ぶ人。同郷の人。
- ⑤ ただし直す。匡正する。
- ⑥ いろいろと相談する。
- ⑦ 今日の意と異なり、少ない、珍しいの意。
- ⑧ よろこびたのしむ。歡樂。
- ⑨ 遊びに出掛けること。行樂。
- ⑩ 馴合い。互いに馴れ親しむ。
- ⑪ 自分の心をよく知る親友。
- ⑫ 心安くすること。
- ⑬ ナリの誤りか。
- ⑭ 考える。思索する。
- ⑮ 自分の良くない点を諫めてくれる友人が有ったならば、無道の人物でも、その友人の忠告の御陰で、良い名声を失うことは無い。孝経の語。
- ⑯ 戒め直す。
- ⑰ クレの誤記か。
- ⑱ 忠告。
- ⑲ 主君の不正を直言して諫める家臣。

## 扱交友<sup>①</sup>

交友ハ吾連朋友ノ事ニテ、扱トハスグリ出ス意ナリ。吾同門同里ノ人、同年輩ノ人、吾ト交クレ候ヘバ、何レモ大切ニスベシ。乍去其中ニ損友・益友アリ候ヘバ、則扱ト申ス事肝要ナリ。損友ハ、吾ニ得タル道ヲ以テ、其人ノ不正ノ事ヲ矯直シ可遣。益友ハ、吾ヨリ親ヲ求メ事ヲ詢リ、常ニ兄弟ノ如クスベシ。世ノ中ニ益友ホド難有難得者ハナク候間、一人ニテモ有之バ、何分大切ニスベシ。総テ友ニ交ルニハ、飲食歡娛ノ上ニテ附合、遊山・釣魚ニテ狎合候ハ不宜、学問ノ講究、武事ノ練習、侍タル志ノ研究、心合ノ吟味ヨリ交ヲ納レ可申事ニ候。飲食遊山ニテ狎合候朋友ハ、其平生ハ腕ヲ扼リ肩ヲ拍、互ニ知己知己ト称シ居候ヘドモ、無事ノ時吾徳ヲ補ニ足ラズ、有事ノ時、吾危難ヲ救ヒクレ候者ニテハナシ。コレハ成リ丈屢出会ハ不致、吾身ヲ嚴重ニ致シ附合候テ、必狎昵致シ吾道ヲ褻サヌ様ニシテ、何トカ工夫ヲ凝シテ、其者ヲ正道ニ導キ、武道学問ノ筋ニ勸メ込候事友道ナレ。扱益友ト申ハ、兎角氣遣ナ物ニテ、折々不面白事有之候。夫ヲ篤ト了簡致スベシ。益友ノ吾身ニ補アルハ、全ク其氣遣ナル處ニテ候。士有争友雖無道不失令名ト申コト經ニ有之候。争友トハ即益友也。吾過ヲ告知ラセ、我ヲ規彈致シクレ候テコソ、吾氣ノ附又處ノ落モ欠モ補ヒタシ候事相叶候ナリ。若右ノ益友ノ異見ヲ嫌候時ハ、天子諸侯ニシテ、諫臣ヲ御疎ミナサレ候同様ニテ、遂ニハ刑戮ニモ罹

- ⑳ 刑罰に処せられること。  
 ㉑ 厳格で、意志が強く正しいこと。  
 ㉒ 温和で人情にあつく、誠実なこと。  
 ㉓ 勢さかんで、果敢なこと。  
 ㉔ 逸邁は才智がずば抜けていること。俊邁と書くのが正しい。亮も明の意。  
 ㉕ 小さなことに拘泥せず度量の広いこと。  
 ㉖ いやがり、相手にしない。  
 ㉗ 詣い媚びる。  
 ㉘ 人の気にいるように努める。  
 ㉙ 落着き無く小利口。  
 ㉚ 軽々しくいい加減。  
 ㉛ 性質に同じ。  
 ㉜ 入柄。品性。  
 ㉝ 経書と史書。  
 ㉞ 氣質が弱く、なまけること。  
 ㉟ 寢床の中。  
 ㊱ 涙。  
 ㊲ 「吾身ヲ立テ」とは自分の人格を確立すること。孝経に「身ヲ立テ道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚ゲ、父母ヲ顯ハスハ孝ノ終リナリ」とある。  
 ㊳ 主君。殿様。  
 ㊴ 後世にのこる功績。  
 ㊵ 刀圭は薬を盛る匙、医者をいう。  
 ㊶ いやしい技。自分の技の謙称。ここでは医術をいう。  
 ㊷ かがまり、ちぢこまるさま。  
 ㊸ しごと。所為。

㉚、不測ノ禍ヲモ招ク事アルベキナリ。扱益友ノ見立方ハ、其人剛正毅直ナルカ、温良篤実ナルカ、豪壯英果ナルカ、俊邁明亮ナルカ、潤達大度ナルカノ五ツニ出ズ。此等ハ何レモ氣遣多キ人ニテ、世間ノ俗人ドモハ、甚シク厭棄致シ居候者ナリ。彼損友ハ、佞柔善媚阿諛逢迎ヲ旨トシテ、浮躁辨慧輕忽粗慢ノ生質アル者ナリ。此ハ何レモ心安ク成リ易キ人ニテ、世間ノ女子小人ドモ、其才智ヤ人品ヲ譽居候者ナレドモ、聖賢豪傑タラント思フ者ハ、其所扱自ラ在ル所アルベシ。

以上五目、少年学ニ入ル門戸トコ、口ヘ、書聯申候者也。

右余嚴父ノ教ヲ受、常ニ書史ニ涉リ候處、性質疎直ニシテ柔慢ナル故、遂ニ進学ノ期ナキ様ニ存ジ、毎夜臥衾中ニテ涕泗ニムセビ、何トゾシテ吾身ヲ立、父母ノ名ヲ顯シ、行々君ノ御用ニモ相立、祖先ノ遺烈ヲ世ニ耀シ度ト存居候折柄、逐々吾身ニ解得致シ候事ドモ有之候様覺申ニ付、聊書記シ、後日ノ遺忘ニ備フ。敢テ人ニ示ス處ニアラズ。嗚呼、如何セン、吾身刀圭ノ家ニ生レ、賤技ニ局局トシテ、吾初年ノ志ヲ遂ル事ヲ不得ヲ。然レドモ所業ハ此ニ在リテモ、所志ハ彼ニ在リ候ヘバ、後世必吾心ヲ知り、吾志ヲ憐ミ、吾道ヲ信ズル者アラン歟。

〔注〕

- ① 浅はかなこと。
- ② いきどおり、もたえること。
- ③ ふるい箱。
- ④ 親愛なる友人。
- ⑤ 門人溝口辰五郎。
- ⑥ 実弟橋本綱常。
- ⑦ 書物をひもとき、しらべること。
- ⑧ はじめて赤面すること。
- ⑨ 安政四年（一八五七）五月。臯月は陰暦五月の異名。さつき。
- ⑩ 先生の名「綱紀」の略。
- ⑪ 二十四歳。又は重ねて、その上への意。

〔原文〕

右啓発録、距今十許年前、余所  
手記也。其言雖浅近、顧當時憤  
悱之奮且厲、反非今日所及也。  
近頃偶檢旧篋獲之。因淨写一本、  
示愛友子乘及弟持卿、以為啓発  
地。嗚呼十年前、既如彼、而今  
日如此。則自今十年之後、其將  
何如乎。繙閱間、不覺赧然。  
丁巳臯月 景岳紀識

時年二十又四

〔書下し文〕

右啓発録は、今を距つること十許年前、余が手記  
する所なり。その言浅近なりと雖ども、當時を顧  
みるに憤悱の奮ひ且つ厲しき、反つて今日の及ぶ  
所にあらざるなり。近頃たまたま旧篋を檢して之  
を獲たり。因りて一本を淨写し、愛友子乘及び弟  
持卿に示し、以て啓発の地と為す。嗚呼十年前、  
既に彼の如し、而して今日此の如し。則ち今より  
して十年の後、それ將た何如ぞや。繙閱の間、覺  
えず赧然たり。

丁巳臯月 景岳紀識

時年二十又四

編集担当者

編集  
解説集

嘱託 伴 五十嗣郎

学芸員 西村英之

” 足立尚計

デザイン 主事 山本喜代美

庶務 副主幹 平弦月

主査 長谷川文枝

生誕一五〇年記念図録

橋本景岳先生の生涯

発行 昭和六十年三月

編集 福井市立郷土歴史博物館

〒910 福井市足羽一丁目八番一六号  
電話(〇七七六)三五二八四五

印刷 河和田屋印刷株式会社

昭和六十年三月  
福井市立郷土歴史博物館編



